相撲風雲児列伝

石井代蔵

相撲風雲児列伝
石井代蔵
© Daizo Ishii 1984

講談社文庫
定価420円

昭和59年1月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——株式会社東京印書館
印刷——株式会社東京印書館
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-183148-8 (0)

講談社文庫

相撲風雲児列伝

石井代蔵

目次

押しの一手　小説　若羽黒朋明　七
巨人　小説　出羽ヶ嶽文治郎　六一
馬じゃあるめえし　小説　男女ノ川登三　一三七
豪傑　小説　前田山英五郎　一八三
孤児　小説　東富士謹一　二六七

あとがき　三四三
解説　阿部宏　三四四

相撲風雲児列伝

押しの一手

小説　若羽黒朋明

草深朋明氏（元大関若羽黒）二日午前四時三十一分、脳そくせん症のため岡山市内山下の岡山赤十字病院で死去、三十四歳。告別式は三日午後三時から岡山市田町一丁目四ノ一二、蓮昌寺で。喪主は実弟の栄一氏。二十四年立浪部屋に入門、三十年春場所入幕、三十四年秋場所後大関へ昇進し、九州場所で初優勝、四十年三月に廃業した。

昭和四十四年三月三日付の新聞にのった死亡記事だった。

「押すに手なし」

と、いわれる。

1

極意という神通力めいた形容が、人間技として実際にあるとすれば、「押すに手なし」は文字通り相撲取り口の極意のひとつに違いない。近代相撲では、力士のだれもがいやがって、やらないからだ。

待ったなしで、パッと立った瞬間、相手にひと息入れる猶予を与えず、喉輪をきかして一直線に土俵外に突き進む相撲である。強烈な押っつけ一本を武器に、巨体を爆発的に相手にぶちかます単純明快な荒技だ。ぶちかまされた相手はひと息いれ、態勢を立て直すいとまもない。

極り手は典型的な押し出し。ただわずかに寄切り、巻落しなどのかたちになることがある。相手を瞬時に打ちのめす人間技として、これ以上の極意はない。しかし、所詮は人間技である。失敗したばあい、これほど見事に逆転敗けする取り口もまたない。相手にするりとかわされたとき、巨体が空を切ってぶざまにすっ飛ぶのだ。一番、一番そつなく勝負を取る近代相撲で、どの関取もいやがる所以がそこにあった。

大関若羽黒の相撲は、「押すに手なし」の極意ひとつに徹した貴重な記録だった。その取り口一本だけで、若羽黒は大関の座まで勝ち取ったのだ——。

後年大成した相撲取りは、その入門時のいわれや動機が、伝説めいて語られるのが常である。横綱、大関という何千人に一人という逸材の誕生は、その入門時ですでに大きな賭けであるからだ。

昭和二十四年のことである。

終戦まもない横浜は、派手な原色のアロハを着たアメリカ兵や彼らにまとう女たちの嬌声があ

ふれ、港街は昼夜わかたず人間臭い熱気で活気づいていた。

横浜市中区曙町は、歓楽街伊勢佐木町と平行して走る電車通りである。その往来に面したクリーニング屋から、のちの大関がでた。

横浜出身の力士は、過去にわずかに一人、二人いたが、大成した者は一人もいない。昭和十年代の横綱武蔵山武は、横浜とはいえ多摩川に面した当時の神奈川県橘樹郡日吉村の出である。「浜っ子」とはいえない。ミナト横浜独特の喧嘩早い、開放的な土地柄は、そもそも事大主義的な大相撲世界とは水があわないのかもしれなかった。

若羽黒は、まるで人さらいに似た強引なかたちで入門させられた。その年の夏休み、中学三年生のときである。発見者は立行司、十九代式守伊之助（二十六年九月襲名）。やがて「ひげの伊之助」の名で名行司とうたわれる老人である。

少年は、名門立浪部屋に連れられてきた。

「ほう、これは、これは……」

そのとき、少年の体軀を見て、そう感嘆した人物がいる。仁王に似た浅黒い顔のなかで、小さな両眼がぎらぎらと少年の体軀を睨めまわしていた。他でもない、名門立浪部屋の総帥、横綱羽黒山だった。協会取締の要職にある岳父、立浪弥右衛門が高齢で健在とはいえ、ほとんど隠居同然、事実上すでに次代立浪部屋を一身に背負う総帥であった。

当時、相撲部屋は、本場所、地方巡業の興行収益で部屋の経営いっさいをたてていた丼勘定の時代である。たった一人の横綱、あるいは人気関取数人をだすだけで、その関取に人気が殺到し、

後援会がつき、同時に部屋も栄える。その繁栄ぶりは、土俵上の関取一人の勝敗で大きく揺れ動くのだ。その一人の逸材を生みだすためにのみ、相撲部屋は多くの力士をごろごろと飼い育てているといえた。部屋持ち親方の優劣は、相撲の手も知らぬ丸裸の入門者について、直感的に将来を見通せる眼力いかんにかかっているのだ。

「これは、これは」

と、羽黒山はいったまま、あとは声がない。

稽古場に展開している猛烈な肉体のぶつかり合いに気圧されるふうもなく、少年は見学者のような顔つきで、けろりとあたりを眺めまわしている。いかにも負けん気が強そうだ。プリプリ太った浅黒い体は骨太で、相撲のために生れてきたような体つきなのだ。

それにしては、両親の付添いもない。伊之助一人が、同道しているだけである。稽古土俵にもろ肌ぬぎになってつっ立った羽黒山は、怒ったように少年の全身を睨めまわしながら、顎をしゃくった。

「坊主、どこからきた？」

「横浜ンです」

「横浜？」

「浜っ子です、親方」

伊之助はあわてて畳に手をついた。この年、伊之助はすでに六十二歳を数えた。名行司といわれ、きらびやかな装束を身にまとい、土俵上で見事な裁きをみせる伊之助が、いま小さな枯れた

体をさらに小さくして、もろ肌ぬぎでつっ立った親方の前に両手をついていた。
「親方、ひとつよろしくお願い申します。このとおり、当人は相撲ひとつ知りませんが、なにしろ大変な餓鬼大将で、中学校でも近所でも持てあましていますが、わっしゃこれはいける、とみたてたんです」
行司は大観客の目が集中する土俵上でこそ花形役者だが、大相撲世界の実生活では権威のかけらもない裏方にしかすぎないのだ。まともな人間なら、ばかばかしくて勤まらぬその行司一筋に、十三歳のとき小僧行司、金吾の名で初土俵を踏んでいらい、辛抱の二字に生涯を賭けてきた伊之助である。
尋常ではない意地がある。その男の意地を実らす夢がたったひとつ残されていた。
それは、天下に恥じない関取の生みの親になることだ。
伊之助は生涯たったひとつの意地のために、頭を畳に押しつけていた。
立浪の総帥、羽黒山は、その伊之助の姿に目もくれず、右手の竹刀を不気味に震わせながら、四股を踏むような動作で、
「どうだ、坊主！」
するどく割れるような太い声が飛んだ。
「相撲をやるかッ！」
「いやだよ」
「なにイ！」

ピシッ、と突き刺すような音が、稽古場の鉄砲柱に叩きつけられた。竹刀が、目の前で激しく打ちおろされたのだ。

「相撲はいやか。えッ？」

と、顎をしゃくって、伊之助をみた。

「めっそうもない」

伊之助の白い少年のような顔が震えた。

「親方、これこのとおりの餓鬼大将で、ホン坊同然です。ついさっきまでは、大関なんぞすぐなってやらあ、と大層なことをいってたと思うと、もうこのざまです。人間がどうもなまくらでいけません」

そのとき、奥の部屋から暖簾をくぐって背広姿の大男が出てきて、靴底のような厚い手で、ばんと少年の肩を叩いた。鳴戸親方（元大岩山）だった。

「なあ、兄さん。土俵のなかにはな、宝物がいっぱいころがってるぞ。相撲取りになれよ、な」

後年、若羽黒が部屋中からつまはじきにされたとき、立浪部屋の多くの居候年寄衆のなかで、この親方一人が最後まで若羽黒の面倒をみた。

羽黒山は竹刀をぶんぶん唸らせながら、少年のふてくされた面構えに視線を光らしていた。その目は狼のように輝いている。

「わかったな、坊主」

と、畳にあぐらをかきながら、鳴戸親方がつづけた。

「相撲取りになるんだなあ。……親方、これは、大物になりますぜ。さっそく今晩からわしが面倒をみましょう。わっしからも、あらためて親方にお願い申しときますぜ」

「それは有難い」

伊之助は驚いたように顔をあげ、畳に手をついたまま羽黒山の日にすきとおるような視線をあてた。

「師匠、どうかひとつ、存分に叩きあげてやってください」

その間、少年は頭ひとつさげず、大きな手でチューインガムの紙をむいている。稽古土俵では激しい申し合いが展開されている。羽黒山は充血したような目つきで、少年の面を凝視しつづけていた。息を殺し、口の中でガラスを噛み砕くような音をたて、上下の歯を噛み合わせながら、やがて極めつけるように伊之助の方を向いていった。

「よッし。引き取りましょう。やりますぜ」

その夜、少年は有無をいわさず部屋に寝かされた。

立浪部屋一行の北海道巡業が出発したのは、その数日後のことだった。逃げだす間もなく、少年はその大相撲一行の旅にまじっていた。

四股名は若羽黒。横綱羽黒山の羽黒の二字を人門そうそう与えられたこと自体、少年の将来は羽黒山自身によって、確実視されていたといえる。事実、二年後の二十七年十二月、七十四歳で逝く先代をついで名実ともに立浪部屋を継承する羽黒山にとっても、若羽黒は直弟子第一号であった。

2

この少年が本気で相撲に打ち込みはじめたのは、入門後四年目のことである。

すでにちょん髷姿が板につき、あさ黒い肌には脂肪のかわりにプリプリした筋肉がもりあがり、将来の大器という期待は、最初のみたてどおりに成長してきている。

押し、の一手――。

という稽古方針は、立浪親方の頭で不動のものになっていた。

相撲社会のきびしさは、他に類がない。私生活の自由を奪われた旧軍隊生活の方がまだ楽だ、といわれた戦後大相撲復興期の夜明け前であった。

幕下以下は人に使われる身、十両、幕内になれば人を使う身である。年齢に関係なく、十両に昇進すれば付人の二人や三人がつき、「タバコ買ってこい」「背中流せエ」と、縦のものを横にもせぬ生活が約束される。そのうえ、土俵上で強い相手から勝ち星をあげれば、人気が出、後援者がつき、「祝儀」という大金が「ごっつァんです」と頭ひとつさげるだけで転がり込んでくる。土俵には文字通り宝が転がっていた。

それを見せつけられながら、付人やふんどしかつぎの力士は、「この野郎！」と闘志を掻きたてられ、あらゆるきびしさに耐える。容赦なく飛んでくる親方の笞（むち）は、師匠として当然の責めであった。

そして親方にとっても、大関、横綱と大成したおのれの現役時代より以上の関取をつくりあげるのが、残された最後の意地である。相撲一筋に生きてきた親方が、ひとたび衣食住いっさいを預った愛弟子に向うとき、きびしい稽古を強制するのは勝負世界の約束なのだ。

過去、多くの名力士は、その徹底的な封建性のなかからつくりだされた。それが大相撲の歴史であった。

力士は師匠には頭もあがらない。ひたすら頭をさげ、従順で無口を押し通すのが、この世界に生活する限り、出世の道でもあった。

ところが、この少年だけはかわっていた。

初土俵から四年になるというのに、成長したその体のどこにも闘志さえみられない。相撲部屋の食事は、稽古後のおそい昼食と夜のニリキ（二食）である。その常食であるチャンコさえ、この男は食えない。幸い、入門直後から小岩に隠居中の先代立浪親方の家に預けられ、そこから両国駅前の部屋に通っていた。兄弟弟子同士ひざを突きあわして、魚くさいチャンコ鍋を突つかねばならない情況にない。トンカツを食った。街角の惣菜屋から三十円のトンカツ二枚を買ってきて、食べさしてもらうのが、なによりの好物であった。

この小岩の先代とは、戦前の相撲黄金時代、双葉山、羽黒山、名寄岩の「立浪三羽烏」を生みだし、名伯楽とうたわれた立浪部屋初代親方である。この時期その孫にあたる、立浪親方の長女、千恵子さんが、その小岩の家に住んでいた。

若羽黒はそこに身柄を預けられていたのである。

「ばかじゃないのか」

と、部屋の住寄衆も思ったほど、まるで欲がない。

自分が部屋の徹底的な英才教育の対象になっていることを知っているふうでもない。連日の激しい立ち合い稽古にもまれながら、すでに四年になるというのに、この世界特有の慣習になじんだ様子もないのだ。

「人間がばかじゃないのか」

と、だれもが思った。

ある日、稽古中の相撲部屋から、若羽黒の姿が消えていた。これも珍しいことではない。親方の目が光っていないとき、きまって若羽黒は稽古をサボっている。それが何回か続いていたのだ。

――立浪親方は、ふと気がついたように周囲を眺めまわして、

「若の野郎。どこに逃げよった！」

怒りを押し殺したような濁声だった。

雪国越後生れの寡黙なこの人が本気で怒りだすと、気の小さい者はちぢみあがって恐れる。ひと呼吸間をおいたあと、両眼が吊りあがって、竹刀が空を切り、どすのきいた罵声が破裂するように稽古場の天井にこだましたのだ。

「あの餓鬼ゃ、どこに行きよった！　えッ!?」

答を恐れて、だれも答えない。その間も稽古は怒声をあびながら、激しい申し合いが片時も休んでいない。

若い者が数人、ばらばらと玄関から外に駆けだしていった。立浪親方は怒る相手がいない。稽古場に面した座敷の方で見物につめかけた後援会の人たちのどこからか、乾いた咳が立っては消えた。

と、やがて玄関から年寄の一人に連れられて、若羽黒がにゅっと入ってきた。褌一本の裸体である。警戒しながら親方の前にくると、ぶっきら棒に頭をさげた。というより、連れられてきた年寄に、力ずくで頭をさげさせられたのだ。

「若！」

と、立浪親方は血を吐くようにいった。

「どこをうろつきまわっていた。え!?　ささま、どこをうろつきまわっていたんだ！」

「……」

返事がない。そのぶっきら棒にとりすました態度が、親方の憤りに火をつけた。いきなり、割れるような響きが、爆発した。

「若ッ。ささまは、それでも相撲取りかッ！　この稽古中にどこのどいつがケツ抜かして、遊んでいる。えッ、見ろ！　申し合いはな、死ぬ気でかからにゃ強くならん。若ッ。てめえは、どこをほざいてまわっていた。え!?　いえッ！　いわんかッ！　この野郎！」

「……」

と、若羽黒は頭を低くしている。竹刀がその体に打ちおろされる瞬間はいつか、と若羽黒も緊張し、稽古場にひしめく兄弟弟子すべてが息をとめ、待っている。大勢のなかで、若羽黒一人が

激しく罵られているのだ。

「親方、紙芝居でさあ」

と、さきの年寄がへつらい笑いした。

「両国駅ン所へ例の紙芝居がきて、近所の餓鬼がいっぺいたかってやン。餓鬼といっしょに、若はそいつを見ていたンでさあ」

立浪親方は気合いを抜かれたように、一瞬棒立ちである。神妙に構えている若羽黒の図体を、ぎらぎらと舌でなめるように見まわすと、痰を激しく土間に吐いて、竹刀を投げだし、座敷にあがった。同時に稽古場に張りつめていた緊張が一度に吐きだされ、ざわざわと人声が揺れた。

立浪親方は、大きな火鉢の横に尻をおとすと、口のあたりをくしゃくしゃに曲げて、

「まったく憎めねエ野郎です」

ぶっきら棒に吐き捨てていた。

後援会の面々はお茶をすすりながら、興醒めしたような顔つきで、にこにこと笑いあった。

しかし、このとき、大勢のなかで叱り飛ばされた若羽黒のなかに、地鳴りのような反抗心が動きはじめたのだ。

(あの野郎。あの野郎のせいだ!)

と、若羽黒は稽古場にむらがる中に、一人の弟弟子を睨みすえた。

安念山である。のちに改め羽黒山、そして引退後は年寄追手風となり、さらに三代立浪親方を継承する。

安念山は、若羽黒が連れていかれた巡業先から帰ったときに、立浪部屋に入門した。相撲取りの産地、北海道の上川郡下川村の農家の出身。この少年は都会育ちの若羽黒にくらべ、口数が少なく、くそまじめな男である。その牛のような愛すべき素直さが買われ、部屋中の年寄衆から可愛がられている。若羽黒とは、人間が正反対に違った。

北海道の僻地農家の男ばかり総計九人兄弟の五番目で、両親の命令で文句ひとついわず、こどものころから荒作業や農耕馬を扱い育ってきた。その六六キロという筋肉質の体を見込まれ、立浪部屋に入門したときは中学三年、十五歳であった。

若羽黒は昭和九年十一月の生れ、安念山は昭和九年二月の生れ。安念山の方がわずかに早く生まれたが若羽黒にとっては一場所違いの弟弟子である。

「よッ。俺の方が先輩だぞ！」

と、若羽黒は新弟子時代に、さんざん安念山をなぶってきた。

入門時、師匠立浪親方は、四股名「羽黒錦」を与えようとしたが、親戚、知人一同が頭をそろえてことわり、本名安念治の三字をたった一字違えて、安念山として新弟子になった。

初土俵の前相撲で八番取ったが全敗。本来ならば序ノ口へも突きだされないところを、協会異例のはからいで、二番出世に仲間入りした。最初からの幸運児であった。その場所、新弟子の頭数はたった十数人、一人だけ残すのは北海道のはるか遠くから大相撲を夢見てきた者としてかわいそうだ、と翌場所どん尻に名前がのったのだ。

その安念山が、四年目のいま二十八年夏場所（五月）、西幕下五枚目におどり出てきている。若

羽黒は西幕下九枚目とわずか四枚だが、差をつけられているのだ。

すでに親方の感情は歴然と直弟子二号、安念山に傾斜していた。まずその稽古好きが気にいられた。鼻のとんがった童顔のハンサムボーイ、おそろしくはにかみ屋だが、梃子でも動かぬ芯が一本通っている。黙々としたなかに闘志があった。

この少年は初土俵から一枚、一枚着実に番付があがり、これまで一度も後退したことがないのだ。ただ二場所同じ地位に、わずかに足踏みしたことがあるだけだった。

もはや師匠、立浪親方にとっては、ふるい形容がそのまま当てはまる、目に入れても痛くない秘蔵っ子になっていた。頼りない若羽黒にくらべて、そのソツのなさと闘志は、文句なく優等生といえた。

自然に、若羽黒、安念山の二人に対する親方の扱いは違ってきた。若羽黒がしょっちゅう大勢のなかで頭ごなしに怒られるのにくらべ、安念山はかつて怒られたこともないのだ。

ことごとく比較された。

「あれじゃ、若もくさるぜ」

と、かげでいう年寄も出てきていたのだ。

その夏場所である。

兄弟弟子、若羽黒と安念山は、六勝一敗の好成績で最後の土俵を迎えた。

まず若羽黒が勝って七勝一敗になった。

次に安念山が土俵にのぼった。安念山がその一番に勝てば、若羽黒と勝星は同じであっても、番付が四枚上の安念山だけが十両に名乗りをあげる。

夏場所本興行とはいえ、幕下土俵のこのころは、国技館の広大な館内にはよほどの物好きしかいない。数えられる程度の客数だ。

土俵下に、師匠立浪親方がどっかと坐って目を光らせていた。勝負が終った若羽黒以下の幕下力士も、みな花道あたりにかたまって、土俵上を見ている。

やがて、安念山、パッと土を蹴った。

相手と四つに組んだ。と、次の瞬間足だけがムカデのように動いてそのまま、二つの体がするすると横に移動したかと思うと、相手はあっさりと俵の外に両足で立っていた。

数秒あるかないか、のあっけない一番だった。

そのときわずかに、立浪親方の目が、ほッと安堵したのを若羽黒は見た。

（野郎……！）と、ひょっと思った。

その感覚は悪知恵というものを知らない人間だけに、信仰に近い。このとき、若羽黒十八歳、安念山十九歳である。

この一瞬の感覚が、若羽黒の頭にこびりついた。

「あの野郎！」と歯軋りするとともに、はじめておのれの敵を眼前にどっかと突きだされたのだ。

はたして翌場所安念山は十両入りし、若羽黒はそのまま幕下に取り残されていた。

むき出しの闘志が、そのあさ黒い体に脂ぎって出てきたのはそれからである。チャンコも食え

ず、師匠の笞の前でひとごとのように構えていた若羽黒が、その日から人変りしたのだ。

これほど単純素朴で強烈な敵愾心(てきがいしん)はない。

しかも、「部屋別総当り制」の後世でも、同部屋の兄弟弟子同士は土俵上で対戦することは決してない。大観客に見守られ、直接真剣勝負をいどむ機会がないのだ。それだけに、競争心はただ、燃焼する一方である。

しかし、たったひとつ目に見える勝負があった。番付である。――野郎が一枚あがれば、俺は二枚飛ぶ。野郎が幕内になれば、俺は小結になる。野郎が小結になれば、俺は関脇、さらには大関を極める。直接勝負をいどめないだけに、はてしのない競争といえた。しかもおのれの実力だけでその出世をかち取ることは、安念山を中心になびく部屋中の空気に挑戦状を叩きつけることだ。親方の鼻をあかすことだ。

若羽黒は歯軋(はぎし)りした。

その激越な反発心が、若羽黒の闘志に火をつけた。

師匠羽黒山は、この年秋場所前、横綱在位十二年三十場所の最長記録をたて現役引退、名実ともに立浪親方におさまっている。

3

翌二十九年春場所（三月）、若羽黒は十両に昇進した。次の夏場所、安念山は幕内に入幕。彼が

やっと安念山に追いついて幕内入りしたのは、翌三十年春場所、安念山に遅れること二場所であった。

その年秋場所、安念山は前頭筆頭におどり出た。相撲史上初の弱冠二十一歳の前頭筆頭として、安念山人気は沸騰した。入幕三場所目の若羽黒も、その場所十一勝という快記録をたてたのである。

いかに有望とはいえ、所詮は「株」にすぎなかった二人の直弟子が、足かけ七年目にして立浪部屋の看板関取として前面に出てきたのだ。当時立浪一門は、時津山、北ノ洋等の人気力士を抱えていたが、次代がこの二人の双肩に、いよいよかかってきたのである。

稽古場では連日、血の出るような申し合いがつづけられた。

若羽黒の相撲は、押し一本に徹した。

親方の竹刀が容赦なく飛ぶ。鍛える方も鍛えられる方も必死である。

稽古場で、ぱっと踏み込んで若羽黒が相手のまわしを取る。と、「ばか野郎！」という声とともに、竹がすっ飛ぶ。

「若。お前はな、弱いんだ。えッ、いいかッ。お前のようなけつ抜かしモンは、組んだら勝てねえんだよう!!」

立浪親方の両眼は血走っている。

裸の肉体に所かまわず竹刀が食い込むたびに、若羽黒はまともに親方の目を睨み返し、

「親方、痛えよ」

ありえない言葉である。

痛いのを我慢し、親方に絶対服従する徹底的なボス社会にいて、痛いのを「痛い」ということ自体が、常軌を逸していた。そのひとことは、もはや鼻っ柱の強さという枠を越えていた。竹刀はそのひねくれた態度を叩きのめすように、さらに強く飛んだ。しかし、それで弱音を吐く男ではない。もともと衣食住いっさいの身柄を親方に預け、出世させてもらうというこの世界の発想が、最初から欠けていた男だった。

みるみる強靭になった。桁はずれの無法者になった。

三十一年春場所、東前頭十五枚目の若羽黒は、千秋楽を終って十二勝三敗の好成績。若ノ花、朝潮とともに優勝決定戦に進出、優勝こそ逃がしたが、初の敢闘賞を手中に握った。

待望の三役入り、小結に昇進したのは翌三十二年初場所だった。

夏場所、一気に関脇に昇進。

破竹の勢いの出世ぶりである。

身長一メートル七五センチ、体重一二三キロ。

骨太の足腰には笞と稽古で鍛えあげられた筋肉がどす黒くうねり、丸々と太ったゴムまりのような体は、押しも押されもせぬ堂々とした実力と畏怖感をそなえていた。

「押すに手なし」

という言葉がうたわれだしたのは、このころであった。その豪快な押しは、ファンの目をさらった。太った弾丸に似た体に飛び込まれると、相手はそのまわしを取る猶予さえない。

ライバル安念山を完全に抜いていた。

一方、三十年秋場所（九月）史上初の二十一歳の前頭筆頭と騒がれた安念山は、その後若羽黒が敢闘賞、技能賞を次々と手にするのにくらべ、五場所のうち四場所を負け越し、一進一退の足踏み状態。

しかし、一度わいた人気は容易には消えない。むしろ、この男の場合、土俵上で負けることが不思議な人気を呼んだ。

どこまでも生真面目そうな顔面を緊張で紅潮させて、一回、二回、あくまでも地道に四股を踏む。一メートル七九センチ、一〇一キロと八頭身型に成長したその体には、いつもどこかに絆創膏をはり、包帯をまき、痛々しくさえみえる。その静かな燃えるような闘志のすけてみえる取り口が、それだけで他に類のない安念山の魅力なのだ。

負けるたびに、大入り満員の館内から子供たちの割れるような歓声が起きた。

「ざんねんやま――」

連日の稽古場では、若羽黒とともに、立浪親方のつきっきりである。黙々と稽古土俵にのぼった。

先輩の時津山、北ノ洋に鍛えられ、ときには高島部屋の人気大関、三根山も安念山には胸をかした。堅い土俵の上に叩きのめされ、這いつくばり、転がされても、立ちあがっては、また先輩に挨拶する。その異常なまでの稽古への執念が、親方の愛情を掻き立てた。

「稽古好きは、一門の最右翼」

という評判が、それだけで愛憎の激しい親方のなかで、文字通り目に入れても痛くない秘蔵っ子になっていた。

師匠は、竹刀のかわりに手をとって教えた。

「いいか、安念。まわしにこだわるな。もっと前へ出ろ。そうだ。それだ」

親方の目は燃えている。ときには、土俵にのぼり、自身で取り口の型を演出してみせた。

羽黒山立浪は、現役時代、粘り強く堅実で重厚な相撲を身上とした。その過去の栄光の思い出が、安念山の体質と溶けあって、ひとつの夢にふくらみつつある。食客の年寄衆さえ不審に思うほど、安念山一人に惚れ込んでいた。

教える方も教わる方も、自然のみこみが早い。

「左差し、右上手と四つになる相撲はだめだ。消極的な取り口だよ。お前にはだめだ。いいか、安念。右をしぼって前へ出ろ。右をしぼって前へ出る。わかったな。それだけでいけ。必ず三役になれる」

事実、足踏み状態がつづいた安念山は、この過程を経て、三十二年夏場所（五月）、ついに小結に昇進、二十三歳であった。このとき身長一メートル八一センチ、体重一〇八キロ。鋼鉄のような筋肉の固まりが、首筋から肩に盛りあがり、女性ファンのしびれるような男前ぶりだった。

この場所は若羽黒が破竹の勢いで関脇に昇進した場所でもある。安念山にとっては、入幕争いこそ勝ったが、その後水をあけられ、三役入りでも先を譲った若羽黒に、たった番付一枚の射程距離内に追いついたのだ。

立浪部屋の全盛時代が幕開けした。

夏場所を迎え、時津山、若羽黒の関脇昇進、安念山の小結昇進と、一挙に立浪一門は三人の役力士を新番付につらねた。

「立浪部屋三羽烏」

と、世評はわいた。

先代立浪時代の双葉山、羽黒山、名寄岩の第一期「三羽烏」につぐ二代にわたる快挙である。

若羽黒、安念山の二人に賭けた立浪親方の夢が、苦節八年目にして実ってきた。

それに追い打ちをかけるように、予想もしなかった次の夢が現実になって転がり込んできた。

初日、新小結安念山は、東横綱栃錦を破るスタートを切った。三日目大関松登、五日目小結琴ケ浜に黒星を喫したあと、六日目から白星街道を驀進（ばくしん）した。十四日目、西大関朝潮を破って十二勝二敗。若ノ花、朝潮の二大関、栃錦、吉葉山の二横綱を下す快進撃。

十四日目の土俵が終って、十二勝二敗は安念山ただ一人。十一勝三敗に四人が並ぶ。西前頭二十枚目の新入幕房錦、西関脇時津山、琴ケ浜、栃錦である。時津風一立浪一門の怪物大内山が東前頭筆頭にいて、それぞれ優勝候補の栃錦、若ノ花を破ってくれたのだ。

千秋楽を迎え、安念山が優勝候補の一番手に躍り出た。

千秋楽の相手は、一点の差でつづく新鋭房錦。その一番に勝った瞬間、安念山の優勝が決定する。だれもが予期しなかった新小結の優勝である。

注目の安念山、房錦が土俵上にのぼったとき、大観衆は総立ちになった。待ったなしで、立ちあがったとたん、新鋭房錦は果敢な寄りで、一気に安念山を土俵ぎわに追いつめた。安念山の足が俵にかかった。次の一瞬、俵に棒立ちの安念、強烈な上手投げをきめていた。

丸い房錦の体がころころと土俵を転がった。

その瞬間、八年前の初土俵で負けてばかりいた男が、初の殊勲賞と優勝を勝ち取ったのだ。

その夜、東両国の立浪部屋は久しく味わわなかった優勝の熱気と昂奮にもみくちゃになった。部屋中が人波で埋まり、その周辺をなお群衆が取り巻いて、午後六時三十分、警視庁音楽隊を先頭に英雄安念山のオープンカーが到着。

地元本所署から三十人の警察官が繰りだして整理にあたったが、沿道を埋めたファンの群れは、もみくちゃの大歓迎で、

「安念山、顔をみせろ！」

「笑ってくれーい！」

部屋では、突然の優勝に祝宴の準備が整わず、若い力士たちがつんつるてんの浴衣姿で蟻のように駆けまわり、稽古場に板を張り、女中がわりに銚子を運びまわる。大ダイ十尾、マグロ十五貫、カツオ十八貫、清酒四斗、酒樽三本、ビール三十ダース、赤飯三斗が次々と威勢よく持ち込まれ、一時にさばききれない祝儀、祝儀の山。

やがて、群衆から解放された安念山が、立浪親方に連れられ、安念山後援会、立浪部屋後援会

の面々五百人がつめかけた中を泳ぐように床の間にたどりついた。

「万歳、万歳！」

「安念山、万歳！」

そのとき、床の間の安念山は顔を真赤にひきつらせ、あくまでも生真面目な姿勢を失わず、「ありがとうございます」と、頭をさげるだけであった。

部屋をあげて飲めや歌えの乱舞に似た祝宴がつづいた。むりもない。立浪部屋の優勝は二十八年いらい十六場所目。それも小結の優勝は大相撲史上過去に三回（昭和六年五月武蔵山、七年三月沖ツ海、十九年一月佐賀ノ花）の記録があるだけで、戦後はじめての偉業である。

立浪親方は可愛い愛弟子を横において、涙の流れでるのを拭おうともせず、満面笑みを浮かべて、安念山に酒を注いだ。次から次へと、後援会の面々が酒を注ぎにくる。それを差されるまま、安念山は嬉しそうに盃をほす。酔っ払うということを天性知らないかのような見事な飲みっぷりだった。

そのそばで、所在なげに酒の肴ばかりつついて押し黙っている巨漢がいた。

若羽黒である。

この男は酒が飲めないのだ。そのことが、若羽黒の不幸のひとつであったかもしれない。部屋中酒をあおり狂喜しているまっただなかで、たった一人若羽黒は酒の肴を口に放り込み、ジュースを飲んだ。この場所、西張出関脇で七勝八敗の負越しだった。

ジュースは、だれも注ごうとはしない。酒の飲めない関脇陥落の男に、さすがに後援会の人た

ちも盃を押しつけようとはしない。

若羽黒は、一人オレンジジュースを飲んだ。自暴自棄ともみえる態度で、浴びるようにジュースを飲んでいた。

「羽黒山の四股名を、わしゃ、安念山に、つがせたいと思うがな、どうだろう」

師匠立浪親方が目を細めてそう切りだしたのは、その数日後のことであった。

優勝の夜の無礼講が一段落し、やっと後援会まわりの挨拶もすみ、はやくも次の稽古土俵がはじまろうとしていた。二階の大座敷に居合わせた数人の年寄衆は、だれ一人異を挟む者はいない。

立浪親方はさらにひとわたり車座の年寄衆の顔を窺った。現役時代の取り口からは想像もつかない猫のように小心な目だった。

「羽黒山の四股名は、このわしの現役時代の名だ。二代目羽黒山だあな。どうだろう、安念山にゃ、もうおかしかないのう」

「そりゃ親方、安念関は次の秋場所番付じゃ関脇にあがンのは、間違いありゃせんです。おかしかありゃしませんぜ」

と、木戸主任のある年寄が、さも当然のことのように太い両腕を組んだ。この年寄は、親方の言葉にすぐ合いの手を入れる才が買われて、木戸主任という協会役員の末席に名をつらねている。弟子養成という年寄の権利を放棄して、身ぐるみを立浪部屋に預け、天下泰平に暮している年寄である。

この年寄だけではない。みな立浪部屋という大部屋に所属し、そのことによって相撲を取れなくなった身を、死ぬまで安泰に守っているのだ。その年寄株の頭数の多少によって、部屋の勢力も左右される世界だ。

それにしても、部屋に君臨する独裁者が、年寄衆の意向を伺ったのも妙な話であった。

やがて、一人の年寄が稽古土俵から、安念山を連れてあがってきた。

このとき、黙々と生真面目な男が、師匠の意にはじめて逆らったのだ。尋常なことではない。

安念山、丁寧に頭を畳につけ、静かにきっぱりといいきった。

「親方、それだけは、私などにはまだまだもったいない四股名です」

ちょん髷が畳の上で、かすかに震えている。

〈できた奴だ〉

と、立浪親方は腹のなかで感嘆しながら、胸をなでおろしていた。

その後も、安念山の態度は以前と少しも変わらない。三役入りをはたし、一気に優勝まで勝ち取った身でありながら、そのすべてが親方はじめ部屋中の年寄衆、後援会の方々のおかげといわんばかりの腰の低さなのだ。事実、支度部屋ではいつも下座に明荷をおいて、決して上座につかない。

「あのくらいの歳で、少し勝ちだすと、大抵は天狗になるもんだが、安念関にはそれがないんだなあ」

と、年寄衆は自慢げにそういって歩いた。その噂が安念山の人気を、さらに掻き立てた。

秋場所（九月）、新番付発表にあたって新聞は、一斉に、

「立浪四天王、そろって三役」

と、うたいあげた。

時津山、若羽黒、安念山、北ノ洋の四力士が東西の関脇小結の地位を占めたのだ。安念山は、もちろん関脇に昇進している。立浪部屋のわが世の春である。しかし若羽黒は西小結。安念山と地位が逆転していた。

このときの横綱陣は、夏場所十二勝三敗の栃錦が東横綱、十勝五敗の鏡里が西横綱、五勝六敗四休の吉葉山が東張出横綱、休場の千代の山が西張出。翌年から、「栃若時代」と通称される大相撲全盛時を築きあげた若乃花も、大関にいた。

4

若羽黒の桁はずれの無法ぶりは、相撲世界のしきたりを逸脱して、さらに我儘を極めはじめた。安念山が部屋中から、文字通り手とり足とり可愛いがられれば可愛いがられるほど、若羽黒の行動は加速度を増して傍若無人ぶりを露骨にみせはじめた。

「鳴戸部屋」

と、仇名がつけられた。

立浪部屋にありながら、自分勝手に部屋住まいを飛びだし、たった一人鳴戸親方だけが若羽黒

の面倒をみている。部屋の年寄衆は、もうだれも若羽黒を相手にしなくなったのだ。

「あいつのことはな、わしは知らんよ」

と、立浪親方は吐き捨てるようにいうのだ。そして、次の極り文句は、

「なんかあったら、鳴戸親方に聞いてくれ」

居候の年寄衆も、かつてのようなかげ口を口にさえしなくなった。本場所の土俵上では、関脇昇進後ますます体が大きくなり、三役力士として安定した相撲をみせる若羽黒でありながら、その部屋中からのつまはじきぶりに、同情のひとことでも口にすることは、年寄衆にとってただちに立浪親方の逆鱗に触れることを意味したのだ。

まず、若羽黒は流行のアロハシャツを着た。相撲社会の最先端をいくモダンボーイである。原色のあざやかなアロハを着て、タクシーを乗りまわし、好きな映画館通いを繰りかえし、子分のふんどしかつぎを引きつれ、箱根へ泊りがけで散財に出かけたり、鵜飼い見物に岐阜までひとっ飛びする。

金は、その豪快な荒技に惚れた後援会の面々から音をたてて入ってくる。

「ハガミ」

という言葉がこの世界にある。

力士が、「ごっつぁん」と親方から渡される前借金のことだ。同じ兄弟弟子でありながら、安念山が十万円のハガミ、若羽黒は三万円のハガミしかもらえず、歯軋りした時代は、はやくもひと昔前の思い出になっていた。

「最近の下手に社交ずれした力士にくらべりゃ、はるかに気持ちがいい。昔の相撲取り気質(かたぎ)そのままだ」

というオールドファンまで出てきた。

どんな場に出ても、この男はお世辞ひとついえない。祝儀袋をポンと弾んでくれる後援会のお歴々にも、ぶっ切ら棒に「ごっつァんです」としか挨拶ができない。あとは黙っている。それがまた、力士という男芸者に惚れ抜いたタニマチ気質の人たちには、こたえられないきっぷのよさなのだ。

三十二年小結昇進直後に、部屋を飛びだし、本郷元町のアパートで惚れた女と同棲をはじめた。相手は浅草小島町の開業医の娘。相撲好きなその父は、生一本(きいっぽん)な若羽黒の土俵に惚れ、家族同様に面倒みているうち、派手好きな娘が若羽黒を唆(そそのか)したのだ。若くて前後の見境いもない娘には、最初は火遊びの気分だったが、若羽黒にしてみればその同棲生活さえも得意満面の思いだった。

しかし、この同棲生活を、立浪部屋ではひた隠しにした。箸にも棒にもかからぬやくざ男でありながら、土俵上では堂々と「押しの一手」を貫ぬき通す、貴重な看板力士である。財産である。それだけではない。

あるいは、大関という期待さえあった。

私生活まであばき立てることを部屋は嫌った。好むと好まざるとにかかわらず若羽黒はすでに押しも押されもせぬ部屋の看板力士になっていたのだ。

このころ——。

本場所千秋楽の昼すぎ、立浪一門のある年寄が後楽園遊園地のそばを通りがかった。競馬の場外馬券買いの帰りだった。

ひとっ走り向うの蔵前国技館では千秋楽「満員御礼」の垂幕がかかり、熱気の立ち込めた土俵上では歓声をあびながら勝負が繰りひろげられている最中である。その国技館から馬券買いに抜けでてきたこの年寄も相当なサムライである。

ところが、ふと空を見あげたとき、彼は呆然とした。

相撲取りがジェット・コースターに乗って子供のように楽しがっているのだ。若羽黒だった。小さなジェット・コースターの先頭の箱に跨がるように巨体を預け、急転直下地響きを立てて、レールを滑り落ちると、また天空に舞いあがり、野獣のような異様な声をあげていた。そのちょん髷が空に飛ぶように、風に舞っている。

馬券買いの年寄は、口をあけたまま、ジェット・コースターの上の怪物を目で追っていた。身内がまるで高所恐怖症にかかったようにぞくぞくと寒気がした。

昼すぎとはいえ、すでに場所入りの時間が近い。やがて、年寄は逃げるように道端のタクシーに声をかけ、あわてて中に乗り込んだ。

安念山にも不運があった。

怪我である。

しかもこの優等生にとっては、初優勝を握り関脇の地位をかためて、いよいよ出世街道を驀進(ばくしん)

しようとした直後に、それがきた。

翌九州場所（十一月）中、腰部故障で九大病院に入院したのだ。あっさりと平幕に落ちた。翌三十三年には、地方巡業先で盲腸手術のため再度の入院をした。

翌三十四年初場所（一月）、病気回復した安念山は再び小結に返り咲いた。

このときを待っていたかのように、安念山と立浪親方の長女、小林千恵子さんの婚約が発表された。安念山二十五歳、千恵子さん十八歳である。

皮肉なめぐりあわせだった。かつては師匠立浪親方の燃えるような期待で、新弟子の若羽黒は千恵子さんの住む先代立浪の家に身柄を預けられた。それがいまや逆転して、宿敵安念山がその人を娶るのだ。

若羽黒、安念山のはてしない競争は、このとき「勝負あった」のかもしれない。

安念山は部屋につめかけた大勢の相撲記者団を前に、顔を赤く染めながら、談話を発表した。

「夢のような話です。名門立浪部屋の名を汚さないよう、一所懸命やるつもりです」

「安念関、おめでとう」という声が、記者団から飛んだ。安念山は照れながら、きれいに結んだ髷を右手でさわり、顔を一層赤くさせた。

「幸い、千恵子さんも私を理解してくれ、二人で部屋のためにやろうといってくれるので、私も生きがいを感じます」

カメラのフラッシュが打ちあげ花火のように競って音をたてた。そのたびに、まわりの記者団の昂奮ぶりが、スクリーンのように明るく照らしだされた。

北海道のはてで、男ばかり九人兄弟の五番目という農家の伜が、いまや角界名門の一つ、立浪部屋の後継者という将来を確約されたのである。

だれよりもその婚約を喜んだのは、師匠立浪親方だった。育ての親は、さながら大仕事をしあげたかのように、取り巻きにいって歩いた。

「なあ。千恵子はまだ若えんだ。あれにゃ、十分花嫁修業をつましてから、安念に嫁がせたいね」

若羽黒は荒れた。

ついにバクチに手を染めはじめたのだ。

同時に、その相撲は幕内くらべる者ない存在といわれるほど強烈な押しに徹した。

もはや土俵上の相撲こそが、若羽黒に残された唯一の反逆である。しかも、ただ関脇の地位にいる限りは、宿敵安念山をはじめ親方を筆頭とする部屋中をあッといわせることはできない。食うか食われるかの瀬戸際なのだ。安念山は親方の娘を手中にした。——俺は安念のできない大関の座を、なにがなんでもこの手に握ってみせる。若羽黒はぎらぎらと殺気立った。

秋場所、西張出関脇若羽黒は十二勝三敗の準優勝。雷電賞、技能賞を獲得。三敗は二日目取りこぼした東前頭三枚目柏戸戦、横綱若乃花戦、横綱栃錦戦で、千秋楽関脇同士の栃光戦には圧勝した。

その前の名古屋場所（七月）では、若羽黒の立ち合いに物言いがついていた。

「待った」が多すぎるという理由で、十一勝四敗のその名古屋場所、殊勲賞をみすみすふいにしたのだ。

「おりゃな、くれねえもんは、殊勲賞でもなんでも、ほしかねえよう」

と、そのとき若羽黒は喧嘩を売るように記者団に笑ったものだ。

「おりゃな、文句ひとつつけられねえようにして、取ってみせるぜ」

事実、そのとおりこの秋場所で「待った」ひとつせず、堂々と準優勝を記録したのだ。

この男の旺盛な反逆精神は、立浪部屋という一部屋だけではなく、大相撲世界そのものに向けられはじめた。

秋場所後の番付編成会議は、満場一致で若羽黒の東大関昇進を決定した。若羽黒二十四歳、身長一メートル七六センチ、体重一三五キロ。

天下の正大関である。

そのとき、宿敵安念山はなん回目かの小結に返り咲き、八勝七敗の勝ち越しをきめていた。

やがて、九州場所の幕があいた。

新大関若羽黒は初日から猛烈な押しが極り、勝ちっぱなした。千秋楽、大関同士の琴ケ浜戦を迎えるまでの十四日間は、栃光、栃錦に土をつけられただけの破竹の勢い。

○若秩　押出し
○若三　打棄り
○若海　寄倒し

○大晃　送出し
○玉海　押出し
○愛宕　突出し
○鶴嶺　寄切り
○三根　押出し
○出錦　叩込み
○房錦　押出し
●栃光　押出し
○柏戸　押出し
●栃錦　寄切り
○若花　寄切り

押して押して押しまくった。

この場所、横綱陣は栃錦、若乃花、朝汐の三人。大関陣は若羽黒と内掛けの名手琴ケ浜の二人、すぐ下の関脇、小結陣には北葉山、安念山、カムバック組の出羽錦、鶴ケ嶺、新鋭柏戸がずらりと控えていた。のちの大横綱大鵬は、まだ幕内にさえいない。

千秋楽十一月二十二日の土俵の焦点は、優勝を目前にした弾丸新大関若羽黒の対琴ケ浜戦に集中した。若羽黒十二勝二敗、その一番に勝てば優勝が決定する。

それは全盛を誇る栃錦、若乃花の横綱陣に切り込む最初の足場でもある。

相撲はあっさりときまった。

若羽黒の豪快な突っぱりに、琴ケ浜の神技内掛けが通ずる瞬間さえなかった。若羽黒の一方的な押しが極っていた。

そのとき、勝名乗りを高らかに授けたのが立行司式守伊之助だった。伊之助は、金色に家紋をあしらった一生一代の晴れ装束を身にまとい、軍配を若羽黒にあげたのだ。

福岡スポーツセンターに起きた耳をつんざくような大歓声と拍手の嵐は、優勝若羽黒とともに、その伊之助の姿へも向けられていた。

伊之助の長い白鬚に、一筋の涙がこぼれ落ちた。相撲協会の組織大改革による定年制が翌年から実施されるのだ。

七十二歳の伊之助は、この場所を限りに六十年の土俵生活から去る。その最後の一番に、式守伊之助の、男の最後の夢を託した若羽黒が、自分の勝名乗りをうけて初優勝を遂げたのだ。

伊之助は東西から拍手を浴びながら花道を通って、行司部屋に帰ってきた。そこには、大勢の報道陣が去りゆく名行司の最後の感慨を聞こうとつめかけていた。

骨と皮だけの小さな伊之助の体が、いまにも嬉しさのあまり倒れるのではないかと思われるほど震えた。問われるまま、放心したように、

「私は、果報者です」

つぶやいていた。

「私は、私は、……果報者です」

伊之助の若羽黒に賭けた夢は、ただ男の意地一本の純粋さで貫き通されていた。若羽黒が金のとれる力士になることなど眼中になかった。自分の発見した男が日本一の強い力士に成長することだけに尽きた。やがて、若羽黒が部屋中からつまはじきされはじめると、

「人門させたこの私が、あの男を不幸にさせたのだ」と身をよじるような自責の念に駆り立てられさえした。しかし、行司は発言する権利さえない。ただひたすら、こう繰りかえしてきた。

「若よ。出世して、俺の勝名乗りを受けてみろ」

それがたった今、おのれの目の前で、おのれの軍配で、おのれの最後の土俵で実現したのだ。

やがて、長い長い表彰式が終って、若羽黒が行司部屋に駆け入ってきた。師匠立浪親方への挨拶を後まわしにして、一番に伊之助のもとに来た若羽黒の行動は、昂奮の最中とはいえ、異常であった。

あさ黒い巨体が小さな老人の前で両手をついて崩れた。

「――親方。勝ちました」

伊之助は右手で樹の根のようなごつい若羽黒の手を握った。なんべんも、なんべんも、その握った手を振りながら、

「よかったな、朋明（ともあき）。よかった。よかった」

震える声だった。

ふいに、若羽黒はあいた左手で目頭を押えた。次にタオルをぶっつけるようにして、顔をごしごし拭いている。

泣いているのだ。一三五キロの大男が、少年のように周囲の目も忘れ、激しく泣いている。涙が、汗にまみれて、その顔から溢れでていた。

5

この九州場所は、一時代を画した立浪部屋にとって最後の花であった。

大関若羽黒の優勝とともに、四度目の関脇に返り咲いた安念山も、栃錦、若乃花の両横綱を破る殊勲賞とともに、十二勝三敗の好成績をあげたのだ。準優勝である。安念山は兄弟弟子若羽黒の猪突ぶりに励まされ、対琴ケ浜戦で捻挫(ねんざ)した痛々しい足をかばいながら、連日ただ勝星をあげることだけに専念した結果、十二勝三敗の予想外の星を残していた。その血みどろの頑張りは、優勝した若羽黒以上の人気を呼んだ。

安念山をそこまで引っぱった闘志には、もうひとつの理由があった。

盛大な結婚式である。

場所前の十月六日、安念山は晴れて親方の長女千恵子さんと夫婦になり、名門立浪部屋の次の後継者の地位を築きあげたのだ。

その結婚披露の丸の内、東京会館には媒酌人、大谷米太郎（大谷重工業社長）夫妻、松村謙三代議士のほか、時津風理事長を筆頭に天下の名士約三百人がつめかけた。御手洗辰雄、永田雅一、池田勇人、浅沼稲次郎、市川右太衛門、古川緑波、三木のり平等々であった。もちろん新大関若

羽黒もその宴席につらなっていた。

そして場所後の十二月二十六日、こんどは若羽黒の結婚の披露宴が、大関昇進披露もかねて日比谷、帝国ホテルで盛大に行なわれた。新婦はいままで同棲生活をつづけていた綏子（やすこ）さん。

「若、てめえ女房がいるなら、隠さず連れてこい」

という立浪親方の鶴の一声で、大関、優勝の二つの看板を手にした直後、急遽はなやかな挙式となったのだ。媒酌人は楢橋渡（運輸大臣）夫妻と川又貞次郎（相模鉄道社長）夫妻。時津風理事長、三横綱をはじめ約三百五十人の名士が宴につらなった。

大関若羽黒はこのとき絶頂期。重量を利してのはず押しは、角界を背負って立つ実力十分で、文字通り飛ぶ鳥を落とす勢いだった。翌三十五年初場所に連続優勝すれば横綱文句なし、と声がかかった。この場所、新鋭大鵬、新人幕である。

若羽黒にとって、こわいものはなにひとつなくなっていた。宿敵安念山は完全に蹴散らした。この男が、たったそのことだけのために賭けた意地は、いま完全に目的を達したのだ。

その出世の頂点に登りつめたとき、若羽黒の後半生は宿命づけられたともいえる。その無法さは立浪部屋だけではなく、相撲協会でさえ手に負えないものになっていた。しっぺ返しとして、「稽古嫌い」という黒いレッテルがすぐはられた。

「稽古嫌い」――。

この言葉ほど力士の生命をおびやかすものはない。力士失格を意味するのだ。このあと「大関若羽黒」の土俵は、約二年間しめて十三場所つづく。その大関の座にあぐらをかいている以上

は、いかに稽古嫌いで、いかに無法者であろうとも、だれも文句がいえない。しかし、大関の座から転落して、平幕になりさがったとき、積り積った部屋中の怒りが爆発して、若羽黒という人間を袋叩きに叩きのめしたのだ。それは大相撲を廃業して一介の青年になったときまで、思わぬ陥穽を用意していた。

二十五年正月、若羽黒は浅草向柳原町の鉄筋四階だてアパートの最上階全部を借り切って新居にした。

モダンボーイの肩書きは、このころドライボーイに変っていた。正月五日、松飾りのある立浪部屋稽古場に、週刊誌の連載対談のために、漫画家近藤日出造がやってきた。

若羽黒は満座のなかで、ぺらぺらと喋った。

「そりゃな、ドライボーイってはじめて書かれたときは、俺ゃ本気で腹が立ったぜ。ドライってのはな、乾燥してるってこったろう？　俺ンちは横浜でドライクリーニング屋さ。しかしな、ドライってのは、血も涙もねえ奴ということじゃねえか。怒ったよう。まあな、それでも、ちかごろは、人からなんといわれようと、やっとこさ腹を立てなくなったよ。俺ゃ、ちゃんとした人間さ」

近藤日出造は目を丸くして感心しながら、

「ところで大関。稽古嫌いという評判は？」

ときいた。

「稽古？　やりますよ」

と、若羽黒は聞こえよがしに、立浪親方の方を向いていった。

「稽古はな、一生懸命やらにゃいかん。稽古ってのはな、やりすぎてまずいってことはないんだから」

親方の権威を歯牙にもかけぬ極道ぶりだ。

アパートの最上階の新居では、毎晩チャンコでなく厚いビフテキを平げる。巨体が大あぐらをかき、サイダーを飲みながら、ペンチと電気ごてを持ち、ハイファイ電蓄（ステレオ）の組立て作業をつづけている。配線図が読め、こまかい組立て仕事が大好きだ。横浜にいた餓鬼大将のころは、鶏の目玉をくりぬき、金魚にアルコール注射するのが大好きだった。それがステレオの組立てに変っただけの話だ。

相撲しか知らない人間になりきっていた。

その相撲しか知らない相撲取りが、この世界で生きていく限り、口にしてはいけないタブーを、若羽黒は臆面もなくいってのけた。

稽古場で、ふだんサボっている若羽黒を見るに見かねて、平年寄が冗談めいて話しかける。

「おい若。ちっとは稽古やらんかい」

「なんだ親方。番付どこだい？」

と、若羽黒は目を剝いてみせるのだ。

「俺の体はな、俺が一番よく知ってんだよう」毒々しくつづけた。

平年寄はむっと口をつぐんで声さえない。本来なら思いざま張手がその横面に飛ぶところ、相手は大関である。平年寄は指一本出せないのだ。

「お前、番付どこだ」というひとことは、相撲世界の絶大な極り手なのだ。年寄になり、年寄社会で出世しても、死ぬまで現役時代の「お前、番付どこだ」精神が、その人間の格としてついてまわる世界なのだ。

これほど相手に憎悪を植えつけるせりふはない。部屋中の年寄にとって、大関若羽黒は手におえぬ無法者の域を越えて、殺しても殺したりない存在になってきた。

期待された三十五年初場所、若羽黒は七勝八敗と負け越した。場所後、高血圧と内臓疾患のため信濃町の慶応病院に入院。その後はくる場所、くる場所、やる気のない取口で負け越し、あるいはやっと勝ち越し、あるいは休場の繰りかえしがつづいた。

人気は、潮の満ち干きに似ている。強いとき、それは大きなうねりをあげて押し寄せてくる。よほどのしっかり者でない限り、うねりに巻き込まれて溺死寸前になる。しかし、ひとたび負けがこみだすと、音もなく潮がひいていき、その人気の正体さえつかめない。「ごっつぁん」の祝儀が目に見えて減るのだ。もう後援会のお座敷もかからない。

相撲取りは、その日に備えて、強いとき金をためこむ。その金で、あるいは後援会のお歴々のお情けで、生涯安泰をきめこめる年寄株を買うのだ。株は相撲しか知らぬ男たちの現役引退後の生活を、ただそれを持っているだけで死ぬまで保証してくれるパスポートである。

突然病気で倒れて相撲が取れなくなった力士は、株がなければ現役引退と同時に、大相撲廃業になるのだ。廃業は、大相撲世界といっさいの縁が切れ、俗世間に一人投げだされることだ。相撲しか知らぬ、縦のものを横にもせぬ習慣のしみついた男が、世間の荒波に一人でぶつかったとき、例外なく悲惨な生活に転げ落ちるのは目に見えているのだ。チャンコ料理屋、一杯飲み屋、そば屋を開店し、あるいは巡業先で知りあった旅館の養子におさまる元力士たちは、よほどの幸運児でしかない。多くは異常に肥大した体を持てあまし、その体が命取りになって、忘れ去られて寂しく死んでいくのだ。年寄株を持つ持たぬは、天国と地獄ほどの差があった。

若羽黒は最初からその年寄株など眼中になかった。また株を持たせたいという熱心な後援者が出る間もなく、自分でころころと負けだした。

後援者の一人、楢橋渡代議士が、その後武州鉄道汚職事件という疑獄に連座して、政界から失脚したのも、若羽黒の不運のひとつになった。

デラックスなアパートの最上階借り切りという豪華な生活は、二年もたたぬ三十六年秋には、市谷田町の住宅街にある喫茶店の二階住まいの境遇に変りはてていた。同年九州場所後、ついに大関の座から転落。

大相撲はすでに大鵬、柏戸の両横綱全盛の時代が幕あけしている。

新陳代謝のめまぐるしい勝負の世界だ。

三十七年秋場所（九月）、平幕に陥落。同時に愛想をつかした女房綏子さんが別居した。その後、帝王切開の難産のすえ生まれた長男（二歳）を連れ別居していた綏子さんは翌三十八年暮れ、東

京家庭裁判所に離婚の調停を申し入れた。

三十九年夏場所（五月）、幕尻の西前頭十四枚目の若羽黒は十日目でついに七敗。

「若羽黒、引退か？」

の記事が、あおるように一斉に各新聞にのった。

このギリギリのどん詰りで、若羽黒に残っていた反逆精神の滓（おり）が、最後の力をみせた。翌十一日目の土俵から五連勝を記録し、やっと八勝七敗の成績で十両落ちを踏みとどまったのである。

「ほんとにな、毎日あせりの土俵だったぜ。番付は待ってくれんものなあ」

若羽黒は大きな溜息をつきながら、記者団に話した。その顔は放蕩生活とバクチ場の出入り、離婚騒動で疲れはて、横綱の声までかかった元大関の面影さえなかった。

一方、安念山も若羽黒を真似するかのように、場所ごとに黒星を重ねはじめた。親方の娘を射とめ、関脇まで登りつめた長い間の緊張が、ライバルの凋落を見ながら、一気にとけたのだ。持ち前の静かな闘志をどこかへ落したかのような土俵がつづいた。

三十六年夏場所、西前頭二枚目で狂い咲きのように十勝五敗の成績をあげ、名古屋場所西張出関脇に返り咲くと同時に、ついに「羽黒山」の四股名に改名した。立浪親方がその機会を待っていたような、あわただしさだった。

安念山改め二代目羽黒山は、土機嫌で取り巻きの年寄衆を相手にいったものである。

「調子はいいんだ。名前負けしないよう、この地位を守らなくちゃな。来年あたりは、親方の名前、政司ももらいますよ」

若い者は後援会送りの新番付の数で大騒ぎ。

「おい。羽黒山の下に、かっこして安念山といれとけよ。まだわからん人が多いからな」

と、羽黒山は底ぬけに明るい。

部屋中から祝福された新婚生活は、師匠が目を細めて眺めている。

しかし、羽黒山はまた負け越した。くる場所、くる場所、負け越しか休場がつづいた。若羽黒に気勢を削がれたかのように、着実に負けた。

負けるたびに、土俵上で負傷した。首を痛め、足を打ち、全身傷だらけで土俵を勤める。その最後まで相撲を捨てない姿をみて、

「偉い男だ」

と、ファンは痛々しさに耐えられず、不思議な人気だけはつづいた。

羽黒山が土俵生活、持てる最後の力を振りしぼって、異常な闘志をみせたのは、四十年初場所である。生き物が息絶える直前の痙攣に似ていた。

この場所、羽黒山、東前頭五枚目。

五日目の土俵から休場した。

前日の対荒波戦で痛めた右膝が悪化、全治二ヵ月の診断で、入院したのだ。

剣ケ峰である。まだ一勝しかしていない。このまま休場した場合、十両転落の危険がある。関脇十四場所を勤め、優勝経験もあるかつてのホープ安念山、立浪後継者たる羽黒山が、十両まで転落して相撲は取れない。由緒ある羽黒山の四股名に傷がつく。

このとき、全治二ヵ月傷だらけの男が、病院のベッドから立ちあがってきたのだ。

十日目の土俵、再出場した。

故障の右膝の上下を絆創膏でぎりぎりと締め、包帯を巻き、その上にチューブを巻きつけ、ぞっとするような青い顔で土俵にのぼった。

対戦相手になった大関北葉山は、支度部屋でその話を聞いて、

「俺は、怪我人とやるのはいやだぜ」

と、いいだした。

しかし、羽黒山は「痛みはないんだ。なんとか相撲は取れますから、最後までやってみます」と、いいきって出てきたのだ。

国技館内は、その一番、台風の目に入ったように静まりかえった。

羽黒山、ぱっと立った。押し合い、はたき、引きと連続技を繰りかえしたが、押し込まれ、逃げ、最後には、左足一本で、こらえたところを、北葉山にどんと容赦なく突き落とされていた。

土俵上、転がった羽黒山は、しばらく立ってこなかった——。

相撲協会診療所長岩崎一平博士が、時津風理事長、協会健康保険組合理事長出羽海取締に進退伺いを提出したのは、その直後だった。このとき、立浪部屋にかわり全盛の出羽海部屋親方、出羽海取締はいった。

「いいじゃないか。医者として信念をもって二ヵ月の診断を下したのなら、それでいいじゃないか。出ない方がいい、といったところで、力士は土俵に命を賭けているんだ。だれも押さえられ

やしないよ」

翌春場所（三月）が、奇しくも若羽黒、安念山改め羽黒山の最後の場所になった。入門以来、追いつ追われつ命がけの競争を繰りかえしてきた兄弟弟子が、時を同じくして土俵を去ったのだ。

春場所初日の取組編成会議の席上、西前頭十三枚目若羽黒の引退が師匠立浪取締から届け出られた。若羽黒三十歳。前日から行方はわからず、破門同然の大相撲廃業だった。

東前頭十四枚目羽黒山は、春場所を全休し、場所後の大阪府立体育館記者クラブで、正式引退を発表、同時に年寄「追手風」を襲名した。その会見中、羽黒山の顔からは終始笑いがこぼれ出ていた。三十一歳だった。

6

若羽黒の大相撲生活は、完結した。

五月一日には国電田端駅近くにおにぎり屋「若」を開店し、ささやかながらも元大関は人生の再スタートを切ろうとしていた。引退相撲はまだ行なわれず、断髪式を控え髷こそ切ってはいなかったが、元若羽黒はだれの世話にもならず、世間に乗りだそうとしていた。

五月六日、突然、警視庁保安課に逮捕された。

銃砲刀剣類等所持取締法違反の容疑である。

このとき、警視庁は芸能人や三文文士、暴力団のピストル密輸不法所持事件を次々と摘発していた。その捜査の網のなかに、偶然若羽黒の名が引っかかってきたのだ。

旧聞である。

大阪に暴力団「一力会」があった。その親分、鍋島力夫会長は大阪、堺の料理屋「一力」の主人。絶頂期の若羽黒のファンで、大阪場所のたび若羽黒を「一力」に招待し、可愛がっていた仲だ。

その後三十九年十月、九州へと向う途中、若羽黒はふらふらと「一力」に立ち寄った。

「俺や、ピストル持ってんだ。どうだい、買ってくんねえか」

と、居合わせた番頭格の若い衆に話を持ちかけた。番付が落ちるところまで落ちて、やっと幕内にとどまっている若羽黒は、すでに遊ぶ金がなかった。

ピストル一丁と実弾四十九発を差しだし、七万円の小遣銭をもらった。若羽黒としては、無用のオモチャを手放し、現金をただで手にした気持ちだった。

しかし、相手が悪かった。

歴とした暴力団である。

それが皮肉なことに、大相撲と縁が切れた直後に、事件となって摘発されたのだ。

警視庁保安課の追及は急である。身柄逮捕された若羽黒は、ふてくされた態度でピストルの出所、「一力会」との関係などいっさいをぺらぺらと自供しはじめた。

「ピストルを買ったのはよ、俺だけじゃねえぜ。横綱の大鵬も柏戸も、みんないっしょに買った

んだよう」

事件は、そのひとことで、現役横綱二人に波及しはじめたのである。新聞紙面は、ことの重大さに連日書きたてた。

三十九年二月、大相撲一行は高砂取締団長以下五十一人の大世帯で、ハワイ、ロサンゼルス巡業の旅に出た。このとき、若羽黒のほか、大鵬、柏戸の両横綱もピストルを買い、持ち帰って部屋に転がしておいた。

ピストル密輸不法所持は、ピストルを暴力団に流さなくとも、所持するだけで犯罪を構成する。当然、現役横綱二人がその容疑で摘発される恐れが出てきた。

おりしも大相撲は夏場所の最中である。

五月九日が初日ではじまっていた。

横綱二人が本場所の土俵から警視庁地下の取調べ室に直行する事態になれば、国技といわれる大相撲にとって、史上かつてない不祥事である。

それだけではない。大鵬、柏戸の両横綱は大相撲の時の表看板なのだ。それにくらべれば、元若羽黒は、いまや日本相撲協会とは完全に縁の切れた、たった一人の屑のような存在でしかない。

元大関という栄光は、一枚の鼻紙にも似て、とうの昔に掃き捨てられていた。

日本相撲協会が、この事態に震えあがった。

横綱大鵬に至っては、二日目から土俵に這いつくばり、八日目で四勝四敗。夏場所は、若羽黒のまいた種で大荒れの様相をみせはじめてきた。

このとき、警視庁はなぜか捜査に〝待った〟をかけたのだ。

その間、日本相撲協会は独自の調べをはじめ、その結果をいち早く天下に公表した。

夏場所五日目、十三日。

時津風理事長が自ら東京、蔵前署に出頭、協会調べの結果を届け出た。

大勢の記者が蜜に集まる蜂のように、理事長のまわりを取り巻いた。ふだん気心の知れた相撲記者とは育ちが違う社会部記者である。

天下の名士は、もみくちゃにされながら、〈談話〉をぼそぼそと読みあげた。

「報告書を提出したが、現役力士のなかに、ピストルを持っていた者が出てきたことは、まことに残念であり、世間に対して申し訳ないと思っている」

柏戸はその年二月、持っていたピストルが急にこわくなり、付人の白岩山に頼んで、新大橋の上から、ピストルを隅田川に投げ捨てた。大鵬も五月になって、あわててこんどは両国橋から同じ隅田川にピストルを投げ込んだ、というのだ。

警視庁は、時津風理事長の届け出を受けて、さっそく二丁のピストルを捜し求めて、隅田川の川底浚(さら)いをはじめた。

しかし、ピストルはついに隅田川の川底からは出てこなかった。ベテランの潜水夫が潜っても、濁りに濁った川底だったからだ。

「隅田川が濁っていた」――。

若羽黒の供述を裏付ける物的証拠は、もはやどこにもなかった。

ただ、時津風理事長の自発的な「協会調べ」があるのみである。

横綱大鵬は夏場所十四日目、対栃ノ海戦で土俵下に転がり落ち、左足首骨折の全治一ヵ月の重傷を負って、千秋楽、休場した。

横綱二人のピストル不法所持事件は、その後見事に忘れ去られた。経済専門紙だけが小さく報じていた。

同事件は八月、「好奇心から手に入れたもので、悪質な事犯とは認められない」という東京地検の判断で、墨田区検に移送され、八月二十三日、墨田簡易裁判所は、横綱二人にそれぞれ罰金三万円の略式命令をだした。

そのころ、大相撲一行は、遠くモスクワに飛んでいた。国立サーカス場は、日ソ友好親善を反映して、連日超満員。なかでも大鵬には、その生いたちの関心から、人気が殺到し、取り組終了後は、居並ぶ政府高官のなかから、ミコヤンソ連最高会議幹部会議長が大鵬に握手を求め、

「あなたは、裸の大使だ」

と、独特のちょび髭を上下に動かして笑いながら、誉めあげた。

巨漢大鵬はてれながら、にこにこ笑っている——その一枚の電送写真が、新聞紙上を明るく飾っていた。

元若羽黒に判決が下ったのは、翌四十一年四月二十三日のことだった。

「小遣銭に困り、暴力団にピストルを売ったことは、社会、一般市民に与える不安は大きく、きわめて悪質である。そのうえ被告には反省の色がまったくない」

という理由で、東京地裁刑事十九部は懲役一年六ヵ月（求刑懲役二年）の実刑を言い渡したのだ。

元若羽黒には、もう保釈金にする金さえなかった。横浜でクリーニング屋をやっていた父は、四十年暮れに死亡していた。田端のおにぎり屋「若」は、開店直後の事件いらい、商売がほとんど成り立っていなかった。

「土俵のなかには宝が転がっているぞ」

という少年時代に聞いた言葉は、いまとなっては夢のようだ。土俵のなかには、確かに宝は転がっていた。しかし、若羽黒はその宝さえ憎いかのように、蹴散らした。いまは、文字通りの裸一貫。あるのは、一三四キロという巨体だけである。最高一五七キロを記録した巨体が、減りに減ったが、一三四キロでぴたりと止まった。これほど余計な存在はない。しかも、その巨体でいる限りは、腹の底から憎み通した大相撲世界の記憶が、容赦なくよみがえってくるのだ。

「俺の肉は、いくらでもやるぜ」

と、元若羽黒はいって歩いた。

「痩せて、肉の欲しい奴は、くれてやるぜ」

――若羽黒は六人きょうだいの長男だった。

その弟や妹たちが金をだし合い、保釈金十万円、追徴金五万円をやっと揃えて、同時に控訴し、刑務所に入れられる境涯からは、あやうく解放された。

若羽黒は、浦島太郎に似た思いで、横浜の実家に帰った。むし暑く、狭い家では、弟、妹たち

が打ちそろって迎えてくれた。若羽黒はシャツ一枚、パンツ一枚の裸になり、なまぬるくなったコカコーラをひと口ラッパ飲みしてから、呟くようにいった。

「俺ゃなあ、ばか者だよ。だけどな、えこ贔屓だけには、黙っちゃおれなかったんだ。みんな、許してくれよな」

その目のまわりは、どす黒いあざに彩られていた。

ちょん髷は、もうない。

その後、元若羽黒は横浜でアパートを経営しているとの風説だった。彼がいつ、どうして岡山に落ちのびていたかは、日本相撲協会の関知しないことだった。

巨人

小説　出羽ヶ嶽文治郎

1

明治三十六年五月、常陸山谷右衛門三十歳、第十九代横綱、梅ケ谷藤太郎二十六歳、第二十代横綱を二人同時に張った。明治の一世を画した「梅常陸」黄金時代の誕生であり、同時に大相撲そのものの事実上の夜明けとなった。

この年、日本列島の南と北で、四人の怪童が生れた。四人そろってこの同じ年に生れたという偶然は、偶然とはいえ興味ある因縁としかいいようがない。

いずれも長じて、昭和初期、大相撲史に大きな亀裂、爪痕を刻む怪物たちである。

一人は四国、土佐の高知で生れた。のちの第三十二代横綱玉錦三右衛門。大横綱双葉山が登場する直前まで玉錦時代を築きあげ、エポックを画した。急性盲腸炎のため現役横綱のまま三十六

歳で急逝、最期の瞬間まで強情無類な生涯だった。

遠州（静岡県）浜松の在では、昭和七年大相撲の存在を根元から揺さぶる大騒動の主役、のちの関脇天龍三郎が生れた。

三番目は茨城県・筑波山麓で産声をあげ、二十二歳にふらりと山から出て来て、三十四歳で第三十四代横綱にのぼった男女ノ川、奇人横綱である。

そして東北の、蔵王山麓・山形県の一寒村に生れたのが、古今未曾有の巨人、関脇出羽ケ嶽文治郎であった。

これほどの巨人はかつていない。

昭和も半世紀をすぎた現代にもいない。

全盛時、公式の記録では、身長二〇四センチ（六尺七寸五分）、体重二〇三キロ（五十四貫）。相撲博物館の資料から過去の巨人を拾いあげてみると、江戸寛永年間栃木から出た初代横綱明石志賀之助は身長二五一センチ（八尺三寸）、また寛永時代の力士鬼勝象之助は二二一センチ（七尺三寸）、さらに天保・弘化年間長崎出身の生月鯨太左衛門は二二七センチ（七尺五寸）。いずれも七尺を越える文字どおりの巨人だが、たとえ実在はしたにせよ、その巨人ぶりを示す身の丈は伝説のかなたにある。

明治の「巨鯨」といわれた常陸山の前の第十八代横綱大砲万右衛門は、顔が馬のように長かった。毛深いうえに骨がごつごつしているので、「うっかり頭をつけようものなら、こっちは頭の毛どころか、皮まですりむけます」と相手を嘆息させるほどの巨鯨ぶりだったが、それでも身長一

九五センチ、体重一三五キロだった。

その大砲万右衛門の血をひく先代九重親方の第四十一代横綱千代の山は一九一センチ、一三〇キロが全盛だった。彼と同時代の大関大内山は戦後の無類の巨漢としてならしたが、それでも身長二〇一センチ、体重一五〇キロ。出羽ケ嶽の二〇四センチ、二〇三キロには、はるかに及ばないのだ。（余談だが、大砲―千代の山に血縁関係がない事実が、相撲史跡研究家小西盛一氏により発見された。それは四股名を「大砲」と名乗った草相撲力士にすぎない）

昭和四十九年一月場所調べという相撲博物館の幕内力士平均数値がある。日本全国にスカウトの網の目を張りめぐらし、巨童を拾い集めてきては育てあげる日本人最大の巨人集団が大相撲である。その現代の幕内平均が身長一八一・八センチ、体重一二三・九キロ。

このなかでの屈指の巨漢、ハワイ生れのジェシー高見山が一九二センチ、一七〇キロ（昭和五十八年秋で一九九キロ）。横綱北の湖が一八一センチ、一五〇キロ（同一七〇キロ）。

出羽ケ嶽文治郎がいかに古今未曾有の巨人であったか。死後この巨人の骨格は、いや抜け殻の巨体そのものが、解剖に附されたあと、いまも東大病理学教室の地下室に保存されているのだ。

この妖怪さながらの巨人が、褌一本の裸体で土俵にのぼったとき、国技館の大鉄傘下の観衆は、負けても勝っても、ウワッーと唸るような大喝采に沸いた。

馬のような長い顔、その下についた分厚い鱈子のような二つの唇、まるで河馬のような馬鹿でかい巨軀、それを支える異様に細い二本の足。全体にバランスを欠いた不均衡そのものの巨人が、十三尺（現在は十五尺）の小さな土俵上にのっそりと仁王立ちに歩を進め、よいしょと四股を踏

む。仕切って腰を落とすや、巨大なお尻を突きだして、子供のような小さな相手の呼吸を茫洋と窺い、呼吸合わず、ブルブルンと巨体を震わせ、再び悠揚せまらず水をつけ、水を口に含み、さながら鯨の潮吹き同様、鱈子のような唇から水を吹きあげる。

巨人の上俵上の仕切り直しのどこかよたよたしたユーモラスな動作に、大観衆は何回見ても見あきぬ滑稽感から、爆発的などよめきがそのたびにあがった。

仕切り直し最高一時間の記録がある。

小さな相手にみじめにも転がされると、上俵に手をついて、象のような細い二つの眼を一層細めてニコニコと一人笑った。

「文ちゃん」

大人も子供も巨人をそんな愛称で呼んだ。

そして巡業先では、大勢の人たちがこの巨人の一挙一動を細大もらさず見逃すまいと、そのあとをゾロゾロと行列を作ってついて歩いた。はじめて巨人を目の当りに見る者は自然と感嘆詞が口をついて出た。

「わあ。でっかいなあ」

その文句を聞くたびに、文ちゃんはいっそ死にたいといつも心から思った。

事実だれよりも、この見世物同然の巨体を出羽ケ嶽本人が死ぬ寸前まで持てあました。天の人間に与えるもののなかで、生身の人間一人を徹底的に実験台同様、なぶり者扱いした例は「文ちゃん」をもってとどめをさすといえた。

そのうえ、さらにもう一つの皮肉が交錯する。

相撲に身を投じて気がついたときには、巨人の義理の兄として、すでに歌壇「アララギ」の重鎮として名声かくれもなかった歌人斎藤茂吉がいたのだ。茂吉の死後、その戸籍上の曰くは正されたが、同じ蔵王山麓の隣り村から、一方は古今未曾有の巨人、一方は不朽の歌人を生み、その二人を斎藤姓という義兄弟に結びつけたところに、浮世のいたずらがあるともいえた。

それは、明治も四十五年の終末をとじ、やがて「今日は帝劇、明日は三越」のはなやかな有閑富裕階級全盛の幕があく大正五年だった。

巨人の記録は、この年からはじまる。

2

百本杭に近い本所・相生町の出羽海部屋は、その日、朝早くから常陸山会のお歴々が一斉につめかけ、御殿風のお屋敷も戦場のような賑いをみせていた。

稽古場に面した一階大広間には、九段のお屋敷から駆けつけた常陸山会会長秋元興朝（元館林藩主）子爵、八代六郎海軍中将（日露戦争時「浅間」艦長）、それに日本橋久松町の整形外科の大家宮田哲雄博士などの顔々が見え、ずらりと大広間に居並ぶお歴々のどの顔も、いつになく興奮気味にみえる。

その満座の中央、床の間を背に羽織袴の正装姿で太鼓腹を波打たせどっかと正座した御大出羽

海谷右衛門が、だれよりも満面喜色をたたえ、いまや遅しとこの日の主賓の到着を待ちかね、酒杯を重ねていた。

夏場所もめでたく千秋楽、六月もはや夏至の日である。

ときに、横綱引退直後の常陸山率いる出羽海部屋は、門下に力士百余人。すでに大関大錦卯一郎、一九〇センチ（六尺三寸）の巨漢関脇対馬洋、日の出の勢いで昇進の小結栃木山守也を抱え、まさに出羽海黄金時代到来の寸前だった。大横綱の常陸山現役時代から、その名声をしたい、こ本所区相生町三丁目十八番地、相生警察署の裏にそびえる出羽海部屋には、有望力士の志願者が門前市をなす賑いをみせ、一方常陸山という人物の疑いを知らぬ開放的な器の大きさに、各界の相撲好きの著名人が贔屓として群れ、後援会「常陸山会」にふくれあがっている。

「力士は読んで字のごとく、サムライである。断じて道楽商売と思うな」

これが出羽海部屋、第一の戒律である。

明治の御一新まで、水戸藩徳川斉昭公自慢の弓道指南役、市毛谷右衛門を曽祖父に持つ水戸士族出身の市毛谷・常陸山は、自ら谷右衛門を名のり、その武士道精神を、愛弟子に叩き込んできた。

事実後援会で、大正三年の大隈内閣海軍大臣も歴任した海軍中将をつかまえ、「おい八代君」と君呼びする年寄出羽海、大相撲の筆頭取締である。贔屓筋にこびる姿勢はみじんもみられない。またその姿勢がだれの眼にも傲慢無礼とは映らない堂々たる大師匠ぶりだった。

――相撲の社会的地位を向上させる。

大相撲の屋台骨を、おのれ一人の双肩で築きあげる気概に燃えている筆頭取締出羽海谷右衛門だった。

しかし、この常陸山の出羽をもってしてもどうにも扱いかねた怪童が、東北、山形の蔵王山麓からとれてきた。とってきた主は、東京市の郊外青山に「帝国脳病院」の看板をかかげる青山脳病院院長、ドクトル・メジチーネ斎藤紀一という、これまたスケールの大きい怪紳士だった。

パリ大学、ベルリン大学とまわり、明治三十六年帰朝するや世間の眼がまだ「キチガイ病院」と白眼視する時代に、江戸ッ子の度肝を抜くローマ建築づくりの「帝国脳病院」を青山に建てた。カイゼル髭をピンと生やしたドクトル・メジチーネ斎藤院長は、患者を診察するのに、聴診器をなんと患者の頭にあてた。

「ふむ、頭の中が相当くさっとる」

おごそかにドクトル・メジチーネがそう宣告すると、大概の神経性患者はその途端に脳病が直った。そういう人物だった。

すでに山形の神童茂吉を養子にもらいうけ、ついでこの年の二年前自分の長女と結婚させ、斎藤茂吉を生みだしている。

無類の常陸山好きの整形外科、宮田博士と同じく相撲好きの斎藤ドクトル・メジチーネは、三年前茂吉の郷里、山形県南村山郡堀田村の隣り村、中川村の農家兼屋根屋から怪童文治郎少年を茂吉と同じようにもらいうけ、やはり養子にして青山・青南小学校五年生に編入させた。青山学院中学部をこのとし卒業させたばかりだった。

十三歳のこの年、すでに身長は一八二センチ、体重一一三キロ、青山学院では机も椅子も全部特別誂えだった。

「ボク、お相撲さんはいやだよ。絶対いやだ」

頑として天下にこわいもののないドクトル・メジチーネにそう駄々をこねていた斎藤文治郎少年が、どうした風の吹きまわしか、やっと首をたてに振ったのだ。

斎藤ドクトル・メジチーネから日本橋久松町の宮田博士に知らせが飛び、宮田博士から出羽海部屋に吉報が届いた。部屋の総帥出羽海谷右衛門にとって、これこそは首を長くして待ちに待っていた吉報だった。

今日はその怪童が、本所・相生町の出羽海部屋大広間で後援会のお歴々に初めて正式に披露されるのだ。

大相撲は、いつの世も巨人を必要とした。

世がどんなに不況でも、また好取組のないどんなに不人気な時代がきても、ただ巨人の出る土俵さえあれば大衆はやんやの喝采を送る。

それにしてもである。

やがて一同満座の中にあらわれるであろう怪童は、並みの巨人ではない。十三歳ですでに一八二センチ。この時代身の丈は尺で称した。日本人の大人の平均が五尺のこの時代に、怪童はすでに六尺余、長ずれば七尺は間違いなし、と宮田博士が太鼓判を押したのである。

すでに掃き清められた稽古場を正面に、大広間いっぱいUの字型に居並んだお歴々の前では、

チャンコ鍋がいくつもいくつも、グツグツ、グツグツと鼻をくすぐるいい匂いを一杯に沸き立たせている。鍋のそばには稽古があがり、羽織袴に威儀を正した関取衆が坐り、うまそうに煮あがったチャンコの料理をそばのお歴々の丼に盛っている。

チャンコの名人片福面が、材料を山盛りにした大きな笊を持って鍋と鍋の間を飛びまわっては、ネタを無造作にあけていく。

そのとき、向うの大玄関から師匠の女将おのぶさんの明るい声が聞こえてきた。

「まあまあ、よくいらっしゃいました、斎藤センセ……」

大広間から、ひときわどよめきがあがった。

床柱の前の御大出羽海谷右衛門、そのとき片手の酒杯を置いて、この人独特のねばりのある声で大きく呼びかけた。

「やあやあ、斎藤ドクトル。お待ち申しあげていた。ちイと人をいらいらさせ申したぞ。青山にはまだ狸が出るかな？」

「いや、御大ならびに御一同、実に失礼つかまつった。本日は我輩ちと考えるところがあって、人力で参ったのじゃ」

満座の一角がくずれ、小柄な、ドクトル・メジチーネ斎藤紀一院長が、カイゼル髭も凛々しく、大広間に出てきた。そのうしろに、さながらドクトル・メジチーネに覆いかぶさるかのように、雲をつくような怪童が全身ちぢこまって、のっしのっしとあらわれ出たのだ。

大広間に一瞬、嘆声が流れた。

出羽海の両眼が輝いた。

大広間を一直線に歩き、斎藤紀一院長と斎藤文治郎少年が御大出羽海谷右衛門の眼前に、正座した。

生れてはじめて大勢の人びとの注視を浴びる満座の中にいきなり連れだされた怪童は、まるで貰い犬がはじめて見る家族の前に引きだされたときに見せる表情さながら、コチコチにおびえきって巨体を妙に小さくさせ、真赤になって震えていた。

常陸山の出羽は、席を立つと、うしろの床の間に飾ってあった二つの三方を、両手に持ちながら、少年の前に二つ並べて置いたのである。

見ると左側の三方には、ピカピカの五十銭銀貨が山と盛られている。右側の三方はマシマロ、バナナなどこの時代には珍しい西洋菓子、果物の山である。

席に戻った出羽海谷右衛門、一瞬するどく眼光を輝かせて、赤児に呼びかけるかのような親しみをこめていった。

「さあ文治。どっちか、好きな方を、取れよ」

大広間の〝観衆〟は、その瞬間息をのんで怪童の両手もとを見つめた。

少年は、もうおびえも忘れて、面喰っていた。こんなに沢山、ただもらっていいのだろうか——と。

きょろきょろとあたりを盗見するや、「こっちをもらいます」と、さっと手をだした。

右側の三方だった。

山盛りのマシマロ、バナナが、まるで羽団扇のような大きな手の掌の上に、ごっそり掬い取られていた。

大広間は、どっと沸いた。

（これだ!!）

と、常陸山の出羽は内心手を叩いて、おのれのテストの結果の見事さを喜びながら、怪童の嬉しそうな笑顔を、さながら寵愛するかのような眼差しで見ているのだった。

この日、怪童は出羽海部屋に入門したのである。

四股名は郷里出羽（山形県）三山にちなみ、即座に「出羽ケ嶽」と決まった。

身柄はこの日から青山脳病院には帰されず、そのまま出羽海部屋に預けられた。その夜からまる三日間、二階の十両、幕内の関取衆が寝る二十畳の押入れに逃げ込み、だれが何といおうと物もいわず、おびえきったように出てこなかった。

名門出羽海部屋に入門したとはいえ、まだ十三歳の少年にすぎない。常陸山の出羽海親方が一体何者なのか、相撲とはそもそも何なのか、なにも知らぬ赤児同様の少年である。

出羽海は機が熟するのを、ただ辛抱強くじいっと待った。

春場所（一月）、夏場所（五月）の一年二回の本場所がすむと、地方巡業の旅に出る。

巡業には着物を着せたまま、連れて歩いた。

ところが巡業に出ると、興行を打つ先々で難題が持ちあがった。

銭湯である。

少年文ちゃんの行くところ、ゾロゾロまるでウンカの大群にも似て、同い歳ぐらいの子供たちが物珍しそうにたかってくるのだ。銭湯に入れば、銭湯の中にまでついてくる。なによりも自分の裸を見られるのが大嫌いな文ちゃんだった。

ついに巡業先で風呂に入らなくなった。

常陸山の出羽海より先に現役を引退、年寄入間川となって出羽海親方の片腕として大所帯の面倒をみている両国梶之助さえもこの巨人少年をもてあました。大師匠お気に入りの怪童である。しかも近い将来、間違いなく一出羽海部屋だけではなく、大相撲全体の「ドル箱」になる宿命は目にみえている。他の新弟子のように手荒く粗末には扱えない。

年寄入間川は自ら文ちゃんをなだめすかして、群がる子供たちを追っ払い、銭湯に連れて行き、背中まで流してやった。

こうしたある巡業先のこと——。

そのときは、小屋がけの興行だった。文ちゃんは、看板がわりに木戸に坐った。

地方の人びとは大人も子供も、本物の大相撲興行に沸き立ち、木戸には連日大行列ができる。まだラジオさえない時代である。

木戸のまわりは、ただ文ちゃんを見るだけの子供たちがいっぱいに群れていた。ときどき化物のような図体の馬鹿でかい少年の反応をためそうと、餓鬼大将たちが無賃でさっと木戸をくぐり抜ける。その途端、まるでレコードのような大きな声が起きるのだ。

「こおらあーあッ」

と、そのとき文ちゃんは片手を振った。

ところが運悪く、その手の掌が餓鬼大将の肩にもろに触れたのである。巨人の手の掌にもろにはたかれた子供は、泣きながら痛さをこらえて家に帰ったが、実は肩が抜けていた。

その子供の親からの訴えで、土地の警察官が総出で傷害犯人文ちゃんの逮捕に駆けつけたのは、それから間もなくだった。

地方巡業が無事打ちあげとなり、東京に帰ると、文ちゃんはいつも心底ほッと胸をなでおろすのだった。

何が起こるか予測もできないだけに、大勢の弟子たちと一緒に二人一つ蒲団で大広間に雑魚寝する団体生活からは切りはなされた。玄関脇の、出羽海師匠夫妻の寝室に通じる部屋に、一人寝かされた。

廊下伝いに、奥へ行くと、女中部屋がある。

女中とはいえ、贔屓筋や常陸山の郷里水戸の縁者などから行儀見習いにきている、良家の令嬢ぞろいだ。表の男くさい相撲部屋から離れて、きれいな五、六人の女の子たちが女学生みたいに賑やかに住んでいた。

あるとき——。

「ねえ、今日は、ソラマメ食べましょ。うでてね、冷えたのがおいしいのヨ」

キャーキャー、ママゴトのように騒ぎながら、一升ほどうでて塩を振ると、笊に入れて部屋の

高い棚に置いた。

すると、そこへ文ちゃんが、廊下をノッシノッシとやってきたのだ。

「まア、大変、大変!!　文ちゃんだあッ!!」

「早く、ソラマメ、隠してエ!!」

きれいな女の子たち、みんな目の色を変えて立ち騒ぐ。

着物の裾をパッとめくって、白い脛を露にした一人を、日頃の行儀作法はどこへやら、もう一人が肩ぐるま。ところがあわてるあまり、ぐらぐら揺れるばかり。のばした手が棚の笊にとどかない。

もうそのときには、文ちゃん、廊下からニュッと顔を突きだすと、高い棚の上のソラマメを見つけている。鴨居はおろか、天井に手のとどく文ちゃんだ。

部屋に、ノソノソと足を踏み入れるや、

「あれーッ!!　助けてえーッ!!」

「それ、あたしたちのソラマメ!!」

黄色い悲鳴をあげながら女の子たちは、ばらばら両方から文ちゃんの腕にぶらさがっている。

文ちゃん、腕をひと振りして、ちいちゃな令嬢たちを畳にばらまくのは簡単だ。しかし、その手にでれば、騒ぎが廊下の先の女将さんの耳までとどく。

やむなく、両足をばたつかせて暴れる女の子たちを、こちらに二人、向うに三人と腕にぶらさげたまま、棚の笊に手をのばしていた。

笊から手の掌にあける。あけて、こんどはソラマメをごっそり、浴衣のふところへ入れてしまったのだ。

奥部屋での内緒のソラマメは、こうして文ちゃんの胃袋におさまっていた。

やがて出羽海は大広間のかなたに一人ポツンとうずくまって稽古土俵を眺めている文ちゃんを、こう攻めはじめた。

「文治!!　こっちに来て裸になれッ。文治、裸になれば十円くれてやるぞッ」

東京本郷周辺の大学生下宿代が三食つきで月十円なりの時代である。風呂銭は大人が四銭だった。

しかし師匠のその誘惑は抜きにしても、もう足かけ三年、ただ飯を好きなだけ食いながら目の当りに相撲の豪気な雰囲気になれ親しんできた怪童は、褌をしめてみる気になっていた。この世界では、だれ一人相手の裸を気にもとめないのだ。裸一貫で天下に名をなす単純明快な世界――。

文ちゃんは、やっとそれが体でわかった。

こうして、怪童がついに土俵にのぼる日がきたのである。

大正七年五月場所、初土俵。それは大正六年の十一月、菊人形大会千秋楽の深夜、国技館が相撲茶屋の火の不始末から全焼したため、靖国神社境内で挙行された本場所であった。ときに十五歳に成長していた。

翌八年一月場所、出羽ケ嶽文治郎の名が、はじめて番付の序ノ口についた。

3

大正九年一月、東京名物の国技館が、旧の円屋根よりさらに大鉄傘の規模をふくらませて見事再建された。この場所、天龍三郎が初土俵を踏んだ。

出羽海部屋は文字どおり黄金時代、この世の春を謳歌していた。

九年五月場所は幕内西方番付二十二名のうち、わずか五人を除いて実に十七名もの出羽一門力士がずらりと並び番付をほとんど独占する全盛であった。

稽古場では師匠出羽海の鞭が唸りをたてて愛弟子の上に飛んだ。

「常陸山のステッキ」といわれたそれは、細い支那竹の先に長い革をつけた馭者の持つそれに似た特製の鞭である。それでなくとも、この大師匠が正面の稽古座敷に鎮座するだけで、稽古場の空気はピリピリと張りつめるのだ。

「負けても堂々と取れ!!　出世や栄達が遅れても、正面から堂々と攻める相撲の真骨頂を自分であみ出せ」

常陸山の出羽海は、常にそう訓育した。

その精神が見事に開花し、いまや第二十六代横綱大錦卯一郎、第二十七代横綱栃木山守也、大関常ノ花寛市、関脇対馬洋以下、幕内に釈迦ケ嶽、元大関九州山、宇都宮、福柳、大ノ里など、いずれも一騎当千の有望力士、曲者力士たちで稽古土俵は激しさにみなぎっているのだ。その土

俵の隅々にまで君臨する大師匠出羽海のおそろしい眼光が光っている。

「文治!!　横綱にぶつかれッ!!」

出羽海のするどい叱咤だ。

十七歳の文ちゃんは、横綱大錦卯一郎にぶつかっていった。身の丈二メートルもある出羽ケ嶽文治郎が自分の胸ほどの高さの横綱にもろにぶつかっても、ころころと転がされるのだ。大錦の太鼓腹がわずかに波打つだけ、どんなに正面から当たっても、固い稽古土俵に思いざま転がされる。

文ちゃんはしまいに眼から大粒の涙を汗といっしょに流しはじめた。

「文治よ、どうした!!」

師匠出羽海の声が耳に響いてくる。

文ちゃんは涙をポロポロこぼしながら、横綱にぶつかっていった。そのたびに、巨人はさながら数字の3そっくりの格好で土俵に転がるのだ。

その出羽ケ嶽の稽古土俵を見る出羽海の眼は、他の力士には決して見せない愛情にも似た親しみにみちていた。寵愛とさえいえた。

しかしこの常陸山の寵愛ぶりが、後年この巨人の後半生を一層残酷にするもとになるとはさすがの常陸山さえ見抜けなかったのだ。

出羽ケ嶽はこの大師匠に見守られながら、一歩一歩着実に相撲取りらしく成人してきた。そして腹いっぱいチャンコを食った。まだそれでも足りず、一日に一箱のリンゴを平らげた。

余談だが、チャンコは正しくは、「爺こ」と書く。

文ちゃんは、ついに回向院の「爺こ料理」は口にすることなく終った。

そのころ――。一月と五月、年二回の東京本場所の期間中、回向院の広場には力士の共同炊事場があった。金でなく、幕下以下の力士には食事の現物給付という時代だった。

夜の明ける早朝五時六時から、どの部屋の力士も協会がつくったその共同炊事場に群がる。壮観だった。

長い板を渡してテーブルがずらりと並び、大勢の力士たちが、言葉もかわさず黙々丼飯にくらいついているのだ。

テーブルのあちこちに七つ八つ置かれた大きな御櫃――。そのそばに坐った者は、階級が上であれ下であれ、「おッ、おかわり」と声がかかれば、まわりの者に飯をよそってやるならわしだ。自分が食うためには、だから丼にてんこ盛りに飯を盛りあげるのだ。

ところが、目の前のおかずはといえば、古漬けのアメ色になったしょっぱい沢庵が各自三切れ。それと大きな瓶に入ったトンガラシ味噌――。南蛮味噌にカラシをすり込んだ、箸の先についた奴をなめるだけで、「ウワーッ!!」と舌が焼けるほどからいトンガラシ味噌だ。それを小皿にとって、なめる。

それっきり。沢庵三切れとトンガラシ味噌をなめるだけで、あとは米の飯さえ食えればいいという時代である。

貧乏部屋のあまり、スイトンしか食えないという部屋の力士もいた。ある者はスイトンだけを

食って三役までいった。

その回向院の共同炊事場に、大勢の食事をたばねる相撲取りあがりの親父がいた。

「馬鹿野郎!!　そんなにおかず、取っちゃいけねえ」

ブツブツ文句をいいながら、みんなの食事を見張っている。

腹がすいたあまり、おかずのトンガラシ味噌をたっぷり皿に盛りつけた新入りを見つけようものなら、親父はそばにすっ飛んでくる。

「この野郎、ひっぱたくぞーッ。そいつを残すと、ひっぱたくぞーッ!!」

いきなり呶鳴りちらされた新弟子は、トンガラシ味噌の固まりに飛びあがりながらも、親父こわさで、汗を吹きだしながら飯をかっこむのだ。舌も腹の中も、焼けつくみたいに熱くなっていた。

「爺(ちゃん)」――。

東北出身が多い力士たちは、炊事場の親父をそういった。そのうえ、ぜねこ、べこと、言葉の尻に「こ」をつける習慣で、「爺(ちゃん)こ」と呼んだ。

一年に一月と五月のたった二回、わずかな期間だけ東京に帰り、ありつく回向院の炊事場だけに、「爺(ちゃん)こ」もトンガラシ味噌も、長い苦しい巡業先では懐しい思いだった。

それが、回向院の爺(ちゃん)こ番であり、爺(ちゃん)こ場であり、いつしか力士の共同炊事が「チャンコ料理」になっていた。

食事を終って座を立つと、大きなバケツが待っている。前日の残り飯をおかゆにして、大きな

バケツにいくつも詰めてある。

「おう、お前エところは、二つだな。みんな、気をつけて、いけや」

部屋の力士の頭数に応じて二つ、三つと割りあてたおかゆのバケツを、ふんどしかつぎ衆は両手にもって部屋に帰っていく。

すると、もう夜の明けたそのころには、相撲部屋の前に、町のおかみさんたちの長い行列ができている。

「お相撲さんの食べる物をいただくと、体が丈夫になる」

と、みんな丼やお鍋を持って集まるが、実はその日の生活にも困る両国界隈の人たちだった。

相撲取りと貧しい下町の人々が、生活の中で一つに溶けあっている時代でもあった。

この回向院の共同炊事場は、明治四十二年東京名物となった「国技館」の開館とともに表むき廃止されたが、その後も大正初期まで場所ごとつづけられた。

文ちゃんは、そういう時期に相撲に入ったのだ。

ところが、出羽海部屋では常陸山によって、すでに豪勢な料理がはじまっていた。

粗食のチャンコが、常陸山によって美食のチャンコ料理にかわっていたのだった。

お座敷には、見物につめかけた大勢の御贔屓衆——。そこへ稽古があがった関取衆が、羽織袴の正装で出てきて、お客にサービスをしながら豪勢なチャンコ料理を一緒に食べる常陸山の出羽海部屋ならではの風景だった。

やがて力士出羽ケ嶽文治郎の番付は、虫眼鏡といわれる序ノ口、序二段から、三段目、さらに幕下へと昇進を重ねてきた。

大正十年、十八歳である。

しかし、文ちゃんの土俵は、国技館の大鉄傘下もまだ枡席の閑散とした午前中に、はやくも終ってしまう。それでも、二階席、三階席の天井桟敷にすず鳴りの大衆ファンが、文ちゃんの土俵に、もう割れるような唸りいっぱい、ウワーッと沸きあがるのだ。

午前中のこの頃、国技館詰めの相撲記者連はまだ手がすいている。国民新聞の平福百穂、あるいは都新聞の新井芳宗、朝日新聞の鰭崎英朋といった相撲挿絵画家たちにとっても、前代未聞の巨人文ちゃんは絶好の材料だった。

その文ちゃんが小さな相手に、見るも不細工な格好でドデンと音たてて転がされたときなど、暇を持てあましている記者や挿絵画家は、ありとあらゆる形容詞を駆使して腕をきそって原稿をかいた。

「怪物、またもや土俵上に落ちてもがく」

「負けても、馬のいななきのように笑う文ちゃん」

「鯨の潮吹きもあわれ。怪物、土俵にはう」

しかし、マスコミのさまざまな形容をよそに、相撲に欲が出てきている文ちゃん自身は必死の土俵なのだ。悔しい心を一人じっと嚙みしめ、土俵がもうすんだのにもかかわらず、大好物のリンゴを平らげながら、部屋にも引きあげない。国技館内の控えの部屋や廊下を一人、うろうろ、

うろうろ、動物園の檻のなかの熊のように、行ったり来たりぶらついている。

夕刊を待っているのだ。

午前中、記者連や挿絵画家が争ってかいた記事が、今日はどんな形容になって夕刊に出るか、だれよりも気がかりな文ちゃんだった。

やがて国技館の前に、「チリンチリン、チリンチリン」と鈴を鳴らしながら、夕刊売りがやって来る。

もうその頃は、記者席の一同腰を浮かしている。

「おい、鉄ッつぁん、今日は一発ぶっぱなしたから、ウチが一番あぶねえ。頼むよ」

「へッ、ひきうけやした、先生」

と、呼出し奴小鉄、愛嬌笑いもうまく、低腰で小柄な体をするすると花道を抜け出て、国技館表玄関へと見張りに走り去る。

と、一息つくかつかないうちに、小鉄が人波掻きわけて、花道をすっ飛んできた。

「先生!!　来ましたヨッ!!」

その声が聞こえるや、記者席の一同、まるで火がついたような勢いで、ぱっと飛び散り、逃げだすのだ。勝手知った一騎当千のベテランぞろい、広い国技館内いくらでもある隠れ家めがけて、身も軽くドロンをきめる。

「怪物、土俵にはう!!」

の都新聞はもとより各紙をわし摑みにした文ちゃん、長い顔を真ッ赤に怒らせ、分厚い唇を上

に下にと開閉させながら、

「都新聞の新聞屋はあ、どこだあッ!!　すっぱたくぞおッ」

八ツ手の葉さながらの巨大な手の掌を振りあげ、どたどたと記者席に走り込んでくるのだ。負けた悔しさのうえに「怪物、土俵にはう!!」と、絵入りで二重にやっつけられ、まだ十八歳の少年文ちゃんは心底泣きたかった。

こうして大正十一年がやってくる。

一月春場所、巨人はついに待望の十両入りを果たした。しかし五月の夏場所には幕下に陥落であった。

夏場所を打ちあげ、出羽海部屋一行は日本海を渡り、朝鮮、満州巡業の旅にでた。この長期巡業出羽海部屋一行の総帥は、一門長老格入間川親方だった。

出発直前、御大出羽海谷右衛門が原因不明の四十度という高熱を出し、左足首が痛む突発事になった。驚いて整形外科の大家宮田哲雄博士が駆けつけ、患部を切開すると、ビールビン一本ほどもの膿が出た。そのあと痛みがうすらぎ、熱もさがり、出羽海は予定どおり巡業に発つ愛弟子たちに、力強くいった。

「わしのことは心配するな。みんな元気で行ってこい」

ところが――。

釜山から次の興行地群山に滞在中の六月十九日、巡業団の一行は大師匠出羽海谷右衛門急逝の訃報に接したのだ。

関節炎から膿毒症を併発したのが死因だった。四十九年の多彩な絢爛豪華を極めた生涯だった。

六月二十一日、世紀の大力士の遺骸は本所・相生町の常陸山邸を出発、国技館での告別式にのぞんだ。葬儀委員長八代六郎海軍大将（大正七年昇進）。政界、財界、学者、文壇人、ありとあらゆる階層の常陸山ファンが見送るなか、郷里水戸の墓地へと出発するその霊柩車が上野駅へと着いたとき、葬列の後尾はまだ両国橋を渡っていなかった。午前11時50分上野駅発で遺骸をのせた列車は郷里水戸へ向った。翌二十二日、遺骸は水戸藩士酒門共有墓地の市毛家墓所に葬られた。

常陸山の直き弟子たちは、遠く朝鮮の巡業先にいてついに師匠の遺骸に告別することさえかなわなかったのだ。出羽ケ嶽文治郎を含む彼ら一行が日本に帰り着いたときには、師匠の髷があるばかりだった。本人自身さえ予期もしなかった突然の心臓麻痺は、一片の遺言すら残すこともなく、その生を奪っていた。

このことが巨人出羽ケ嶽文治郎の後半生を決定づけた。常陸山という世紀の大人物があってこそすくすくと甘やかされ育てあげられた巨人である。一人立ちするには、あまりにも人間離れしすぎた孤独な巨人である。

文ちゃんは、しかしそういう自分の宿命に気がつきもしなかった。

まだ十九歳の少年にすぎなかった。

その年十二月二十五日、出羽海谷右衛門葬が相撲界初の協会葬として国技館で挙行された。祭壇には故人の髷が祀られていた。そして、暮れも押しつまり、地方巡業先の東海道、岡崎の宿でやっと出羽海後継者が一門年寄、「常陸山会」の合議の末、決定した。

長老入間川親方、もとの両国梶之助だった。

長崎・諫早の産。最初九州相撲に入り、本名古川九八の一字九をとって「いちじく」という珍四股名で、大阪相撲で修業し、のち常陸山の名声をしたって上京、やっと両国梶之助を名乗ったという苦労人である。年寄入間川として出羽海と肝胆相照らした片腕だった。

この梶之助の新出羽海親方のもと、大相撲は新時代へと脱皮し、前進する。

4

大正十四年一月春場所、出羽ケ嶽文治郎二十二歳で、ついに入幕。

「文ちゃん時代」――。

と、時のマスコミがそう名づけた巨人全盛時代の幕開けである。

すでに横綱大錦卯一郎なく、またこの場所、相手にまわしにさえ手を触れさせなかった稀代の名横綱栃木山守也、九回目の優勝を果たしながら引退を声明、年寄春日野を襲名した。出羽海一門の横綱は前年五月第三十一代横綱を張った常ノ花寛市の時代になっている。

あけて大正十五年一月春場所、出羽ケ嶽文治郎、一躍関脇に躍り出た。二十三歳である。

もはや土俵上の巨人のその裸身は、鬼神同然にみえた。身長二〇四センチ、体重二〇三キロ、胴まわり一三七センチ。生涯の絶頂期である。

幕内くらべる者のない雲をつくような身の丈と常識はずれの重量。まさに昇天の勢いの巨人の

前途は天下無敵かにみえた。

直径十三尺の土俵上、仕切って構え、馬のような長い顔に難しい形相を浮かべ、立ちあがると長い両腕で起重機同然、相手をガシッと摑まえていた。そのままぐいと宙に吊りあげるや、相手を引きつけ、のそのそと土俵を歩いて、外に運びだした。

ある時は、立つなり、諸手で一発、どすんと突くと、相手は土俵の外に吹っ飛んだ。

深く差されれば、相手のまわしをひょいと摑み、引きずるように振った。小さな相手に小五月蠅く寄られれば、逆に二〇三キロの巨体を上から預けて押しつぶした。

これは相撲の技というより、土俵上に現れ出たフランケンシュタインそのものだった。

その圧倒的な怪力の巨人の土俵に、国技館の大鉄傘下は、狂気のように沸きに沸いた。巨人が何回仕切り直しをやっても、大観衆は喜ぶのだった。

翌五月場所。出羽ケ嶽、小結――。

対する面々は、西方横綱西ノ海、大関太刀光、関脇能代潟、張出関脇若葉山、小結小野川、前頭筆頭清瀬川、二枚目吉野山、三枚目三杉磯、四枚目清水川――各部屋一騎当千の連合陣だった。

この夏場所四日目の土俵、巨人は大関太刀光電右衛門と対した。太刀光、上背が出羽ケ嶽の胸あたりまでしかない。

立った瞬間、太刀光、さっと飛び込んで二本差しの体勢になっていた。一方二本差しを許した出羽ケ嶽、やむなく長い両腕を伸ばすや、太刀光のまわしを上から取り、怪力で思いざま引きつけたのである。

巨人の圧力をこらえるため、腰に全力を集中していた太刀光は、その瞬間棒の折れるように鯖折りに決められていたのだ。

四本柱の年寄には、明らかに骨の折れる音が聞こえ、太刀光は土俵にぐらぐらと倒れ落ちた。人事不省だった。

大鉄傘下、満員の観客はぞおっと総毛立ったかのように息をつめ総立ちになった。

力士の生命、腰骨に致命的な怪我をした太刀光電右衛門は、再起不能のまま現役引退、年寄鳴戸親方となった。「協会スポークスマンは鳴戸親方をおいて他にない」といわれた応対ぶりをみせたが、後年、相撲界とは縁を切り、札幌に喫茶店を出して、市井の人として生を終えた。

この一番に、だれよりも驚いたのは、他ならぬ文ちゃんだった。

「相撲は真正面から、正々堂々と攻める真骨頂で取れ!!」

いまは亡い常陸山大師匠の精神そのまま、文ちゃんは必死に取った。それが自然と鯖折りになったにすぎない。鯖折りは相撲四十八手のなかの一手である。

もはや協会としても、巨人の人間離れしたこの荒技を野放しにできなくなった。すでに多くの名力士が出羽ケ嶽に摑まり、鯖折りの一手で負傷者続出している。

「出羽ケ嶽に限り鯖折りを封ず」

前代未聞の禁手である。

いまや筆頭取締、梶之助の出羽海親方もついに協会全体の動きに首を縦に振らざるを得なかったのだ。出羽ケ嶽の怪力は、すでに人間の域を脱していた。この禁手を命じない限り、あたら有

為の人材がばたばたと廃人にされかねない怪力ぶりだったのだ。

しかし出羽ケ嶽にとって、この禁手は真剣勝負を取るなといわれたに等しかった。相手がみな小さいために自然抱え込むようにかぶさり、上からまわしを取れば、そのまま鯖折りの体勢になってしまうのだ。

文ちゃんは、なにか土俵上のおのれの巨体が、こわくなった。まさか、人の命を縮めるとまでは思いもよらなかったからだ。

まさに巨人の小心さのその間隙につけ入るかのような土俵が、六日目に来たのである。関脇能代潟との一戦だった。

この土俵、前々日、太刀光を人事不省の大事故に陥れた出羽ケ嶽文治郎、すでに仕切りにあがったときから、その醜怪そのものの巨軀に、およそ不似合な神経の動揺ぶりをみせていた。

勝負はあっけなかった。

巨体が能代潟の外掛けをくい、土俵上に地響きを立ててぶっ倒れた。一瞬右膝関節をねじっていたのだ。

大事にこそ至らなかったが、これが、巨人出羽ケ嶽の最初の故障になった。

あけて時代は昭和に改元された。

昭和二年のその一月春場所は、東西大相撲が大同合併し財団法人大日本相撲協会が正式発足した最初の番付である。このときから本場所は年四回の興行になる。春（一月）夏（五月）の東京場所の他に、三月と十月、関西本場所が行われる。三月の関西本場所は、東京の一月番付をその

まま使い、成績も次の夏番付には関係なしとされた。十月も同様である。大同合併と称して事実上大阪相撲を吸収合併した苦肉の代償である関西本場所は、のち昭和八年に廃止される。のちの大横綱双葉山は、昭和二年三月の初の関西本場所に初土俵を踏む。

翌夏場所、小結出羽ケ嶽文治郎、六勝三敗二休の好成績で、昭和三年春場所再び関脇の地位に返り咲いた。男女ノ川の入幕はこの場所である。つづいて、天龍三郎も翌夏場所、やっと入幕してきた。

大正末期からこの昭和初期にかけ、大相撲の人気はドン底の不況にあえいでいた。横綱常ノ花寛市一人の時代、好取組のない国技館に大衆ファンは完全に横を向いていた。神宮の森では、六大学野球の早慶戦が、いまや手に汗握る熱戦を繰りひろげていたのだ。

大鉄傘下を一人支える文字どおりの「ドル箱」は、巨人文ちゃんだった。

昭和三年――。

文ちゃんはもう二十五歳になっていた。

いまや一出羽海だけでなく、大相撲全体の看板文ちゃんである。

部屋では二階十二畳の個室に一人寝た。

夜どんなに遅く部屋に帰り着いても、表大玄関にパッと電気がつき、梶之助の出羽海親方の女将さんがいそいそと出迎えに出て、文ちゃんの特大の下駄までそろえてくれるのだ。

「文ちゃん。おそくまで御苦労さん。さあ、さあ」

それこそ下にも置かぬもてなしぶりである。

稽古が終ると、常陸山の先代出羽海が遺した玉突き屋に出かける。部屋の向いの別棟の二階に、先代出羽海谷右衛門はその全盛時代の大正中期、愛弟子たちの娯楽としてのビリヤード場をつくっていた。すでに、相撲取りの野球チームもある出羽海部屋だった。玉突きといい、野球といい、いずれも相撲界はじめて、常陸山ならではの破天荒なアイデアだった。

常陸山在世の黄金時代、横綱大錦、横綱栃木山以下の関取衆が、二台の玉突き台で腕をきそいあった。文ちゃんはその頃から、玉突きにかけては横綱さえ足もとにも及ばない見事な腕前をみせた。

なんと、大きな台の一角に立つや、その同じ場所に立ったままなのだ。紅白の象牙の玉を見事に撞きわけ、競技が進むにつれて、他の者が台のまわりを移動するのに、文ちゃんただ一人、同じ位置に立ったまま、台の上に上体をおっかぶせて、ポンと撞くのだ。

とりわけ「マッセ」が、文ちゃんの得意技だった。

「マッセ」とは、ビロードの上の丸い玉の端を、キュー（撞棒）で真上からトンと撞く。すると野球のカーブ同様に、丸い玉がくるくると円を描いて曲がりながら、台の角に当たらず、そのまま次の玉に命中するという高度なテクニックである。

小さな玉が思いどおり見事命中した刹那、文ちゃん、長い顔いっぱいでニタッと笑う。小さな、こまかいことにかけては、この巨人は信じられないような器用さを発揮するのだった。

地方巡業先では、どんな遠路でも、文ちゃんは人力車御免だった。

なにしろ人力車に文ちゃんが乗るとなると、車夫は二人がかりでまず前の心棒を押さえつける騒ぎ。

「よいしゃ」

文ちゃん無事乗って、車夫が一人うしろから押しながら、いざ出発となった途端、前の車夫が心棒といっしょにフワッーと宙に浮きあがり、両足をバタバタと空にもがいている始末。そのまま前の車夫もろとも人力車がうしろに、どすんと引っくりかえってしまうのだ。

九州の興行先では、途中二台の人力車を乗りつぶした。

ついには荷馬車が持ち出された。

すると荷馬車で運ばれて、場所入りする巨人見たさに、その田舎道に見物人がつらなり、

「馬力は、真平御免だい」

文ちゃん、とうとう本気に怒りだして、いらい地方巡業のたび、巨人一人は人力車で颯爽と場所入りする関取衆を横眼に、ついには歩きと相場がきまった。

時の人気力士出羽ケ嶽文治郎の付け人は、増毛海と稲佐山の二人である。

増毛海は真面目一本の男で、のち幕下で廃業のあと、京都で消防署へ勤め、相当な地位まで出世し故人になった。一方稲佐山は長崎出身、剽軽な小男で、同じく幕下で廃業した。

地方巡業先、稽古があがると、文ちゃんから二人に声がかかる。まるでトランペットがぶっ壊れたような声音だ。

「おうい。増毛と稲佐、風呂へ行くぞおい」

増毛海は巨人の山のような着物を両手でかかえ、稲佐山は剽軽者の愛嬌をふりまいて、巨人の四キロ（一貫目）近い長さ三三センチという馬鹿でかい下駄に縄をくくりつけ、肩から引きずって、ゴロゴロとあとからついて歩くのだ。

下駄は、まるで俎板のような大きさだった。

高さ二メートルを越え、重量も二〇〇キロと普通の秤量では壊れるような巨人のあとを、二人の小男が飼い犬のチンにも似た小刻みな足取りでくっついて歩く。その遠くうしろに縄でしばった俎板同然の下駄が二つ、ガラガラ、ゴロゴロと小石をはね飛ばして、ついてくるのだ。

この二人の付け人のなによりの楽しみは、巨人がチャンコ鍋の前に両足を横に投げだし、坐るときだった。

関脇文ちゃんのチャンコのネタは小魚ばかりだった。ハヤ、ハゼ、キス——白身の針のような小骨がいっぱいある小魚である。

ぶつ切りのマグロやカツオといった大味の魚より、文ちゃんは小骨がいっぱいある小魚が大好きだった。

やがて鍋がいい匂いを漂わせて、グツグツ煮えはじめるや、文ちゃんは一升ビンの酒をぐいとラッパ飲みしながら、器用に鍋を突つきはじめる。すると——

「おい、見てろよ、見てろよ。文ちゃんの腎。……腎を見てろよ」

稲佐山が、そっと増毛海を突つきながら、そう囁くのだ。

はたして、大きな鱈子そっくりの分厚い腎が二つ、おそろしく長い顔のなかで、奇妙にキュ

キュとイソギンチャクの開閉さながら動くや、なんともいえない巧みさで、小骨が一つ二つとこぼれ出てくるのだった。

そのときの文ちゃんの顔つきは幸福そのものだった。次から次へと、小魚を大きな口へ放り込んでは、長い顔じゅういっぱい神経を働かせ、小骨をポロッポロッと出しては、チャンコの鍋を突つく。

二人の付け人は、もう吹き出しそうなおかしさに耐えられず、遠くへ転げ走るや、腹をなでまわすのだった。

5

この年（昭和二年）、夏場所前の四月二日——。

出羽海一門は巡業先、大阪・堺の大浜で夏場所を直前に控えた最後の興行を打った。大阪湾の潮風が吹く海岸ぞいの砂原である。

稽古土俵は巡業打ちあげ最後とあって、自然と熱気をはらんでいた。一門の山科親方のしかける声が潮風とともに、大きく飛んだ。

「さあ、文ちゃん、あがった、あがった。新海、思いきりぶちかまして行け！」

新海幸蔵、秋田県出身のひどく鼻っ柱の強い男である。昭和二年夏場所入幕、右四つ外掛けを得意技とした足くせの人気力士。足腰が不安定な巨人力士が最もにがてとする相手だった。

このとき、新海、出羽ケ嶽にぶちかますや、とっさに足くせ巧者の威力を見事に披露してみせた。なんと河津掛け――。片手を巨人の首にまいた瞬間、左外掛けを放って怪力を封じるや、体を思いざま預けて土俵に折り重なって倒れたのだ。地響きが起きた。

この河津掛けは落ち方が一歩間違えば、宙に浮いた体が二人分の重量となって土俵下に転落するため、学生相撲では禁手になっている。素人では後頭部を打つなどの怪我が必至の技であるからだ。

「ウーンッ!!」

自らの巨体と新海の体が折り重なって、激しく稽古土俵に転落したとき、出羽ケ嶽の左足膝関節がねじ曲がっていた。骨にヒビの入る激痛だった。

「どうした、どうした!!　捻挫ぐらいがなんだッ」

山科親方の叱咤がまだ飛んでいた。

文ちゃんは、馬のような顔を青ざめて引攣るような骨の痛みに、荒い鼻息を吐きながら、立ちあがれなかった。

増毛海と稲佐山の二人の付け人はもちろん、若い衆五、六人がかりで、その巨体をリヤカーに担ぎあげた。ところがまたリヤカーの両輪が海岸の砂原に埋まって動かない。

リヤカーの上の巨人は、体の底からつきあげて来る激痛に、ポロポロと涙をこぼした。

さらに若い衆を動員し、砂にめり込んだ両輪の下に板切れを差し込んで、やっとリヤカーを運びだした。近くの接骨医に大騒動の末、かつぎ込んだのである。

この負傷が力士出羽ケ嶽文治郎の運命を決定づけた。目の前にぶらさがっていた大関、横綱への夢は一瞬のうちに飛散したのはいうまでもない。

悲劇の第一歩が、このときはじまった。

五月夏場所、全休した。

巨人であるがゆえに骨折の全快には常人の倍もの時を要した。これ以後左膝関節の持病が終生ついてまわる。

日本橋久松町の整形外科宮田医院は、先代哲雄博士が隠居し、実弟進博士の二代目になっている。その二代目宮田医院に入院し、同時に痛くもかゆくもないが力士の命取りになる盲腸を切り取ってしまった。

回復を一日でも早くするため、麻酔なしの切開手術だった。

翌日には、文ちゃんはすっかりさっぱりした気分になった。しかし宮田博士さえ予期しなかった厄介きわまる難題が持ちあがってきたのだ。

腹部の皮下脂肪の厚さが、なんと七センチもあった。その人間離れした厚い脂肪膜のため、手術後の傷あとが癒着しないのだ。抜糸すれば、切開口がパカッと割れて口をあける。やむなくその七センチもある厚い脂肪膜を丹念に縫合しなおした。

むろん身柄は宮田外科医院の特設室に入院したままである。しかし文ちゃん本人は、ようやく骨折した膝関節の痛みもとれ、全身旧にもどったかのような爽快な気分で暇をもてあましている。ただ、盲腸手術後の傷口がつかないだけのことだ。

文ちゃんは宮田先生の勧めもあって、好きな釣りにでかけた。釣り堀である。

この頃羽田に、海から海水を取り入れ、クロダイ、イナ、ボラ、セイゴなどの海の魚を入れてある釣り堀があった。

文ちゃんは、その釣り堀の縁にでんと坐るや、もう得意満面の顔つきになった。太いごぼうのような指先でひょいと小さなゴカイをつまんで、縮れ毛のような細い小さな針の先に、なんとも器用な手つきで餌をつける。

やがて竿さばきも鮮やかに、思う所にさっと糸を垂れると、ニヤッと一人笑うのだ。

なにしろ釣り具屋で、普通、針のついたテグスを買ってくるのに、文ちゃんは釣り針だけを買ってくる。その小さな針に自分でテグス糸を器用にキュッとつけ、糸切り歯でパチンと切るや、釣り糸に結びつけるのだ。素人の域を脱して、専門家に近かった。

やがて釣り堀のあちこちに糸を垂れている釣り師たちの、魚を釣りあげる声がにぎやかにあがる。

すると文ちゃん、長い顔を心底おもしろい顔つきにねじって、ゲラゲラ笑いだすのだった。

「あの野郎、あんな小さいのを釣りあげては喜んでいやがるわ」

みると、文ちゃん自身釣りあげる魚こそ、そのままカパッと口の中に入ってしまうような小さな魚ばかり。なにしろ普通人が釣りあげ、魚の胴体半分が手から見えているくらいでも、文ちゃんが釣りあげて手の掌に持つや中に隠れてしまうのだ。

また鮮やかな竿さばきで、スーッと釣り糸を垂れるや、こんどは、釣り堀の親父を呼んで物言いをつける。

「親父さんや、どうも今日の客は柄の悪いもンぞろいだなあ」

人をひやかし、あるいは物言いをつけながら、終日好きな釣りを楽しむのだった。

その頃、遠く地方巡業中の出羽海一行から部屋へ、「出羽ケ嶽はどうした」と、矢のような督促が舞いこんでいる。

梶之助の出羽海女将さんは、たまらず日本橋久松町の宮田医院に駆けつけた。

すると、——

「文ちゃんは羽田へ釣りに行って留守です」

巡業先の一門年寄衆は、「釣りに行ける者がどうして巡業に出られない。文公の野郎はなまくらになった」と歯軋り噛んで、わめき散らすのだった。

十月、再び本場所の土俵に巨人の姿はなかった。

昭和三年十一月、巨人にとってはかけがえのない人物がこの世を去った。

青山脳病院の創立者、斎藤紀一博士だった。トルコ風呂が大の気に入りで、熱海・福島屋旅館に一人保養中、だれ一人にも見とられず旅館の一室で淋しく死んでいた。六十八歳だった。明治、大正の「日本一等国」の時代をそのカイゼル髭で濶歩したドクトル・メジチーネは、歌人茂吉と巨人出羽ケ嶽をこの世へ遺して、その生涯をあっけなく閉じたのだ。

同じくこの年、先代常陸山の出羽海の熱烈な後援者だった宮田哲雄博士も、また死んだ。

このとき完全に、先代常陸山の匂いは、新興出羽海部屋の隅ずみから、払拭されたといえる。もう梶之助の出羽海親方は、だれの眼も遠慮することない立場になったのだ。

文ちゃんは、しかし何にも気づかなかった。

うまそうにいつまでもチャンコの小魚を突ついていた。

昭和四年――。

一月春場所、全休。三場所つづけての休場だ。

三月の関西本場所、ようやく出場した。三勝八敗、惨敗であった。

昭和五年一月春場所、出羽ケ嶽文治郎、前頭十五枚目、一挙に幕内ドン尻に陥落した。

五月夏場所、前頭六枚目にカムバック。

このとき、三場所後輩の天龍三郎が、ついに関脇として新登場。同時に先代常陸山をまったく知らぬ大正十四年出羽海入門の武蔵山武が、新小結にのしあがってきた。

この場所八日目、第三十一代横綱常ノ花寛市、朝潮（のち改め男女ノ川）に負けた土俵を最後に引退を声明、年寄藤島を襲名した。

あけて昭和六年一月春場所後、大阪相撲出の第二十九代横綱宮城山福松も引退した。ここに大相撲史上たえてなかった横綱空位という相撲界最悪の時代が訪れたのだ。

世はエロ・グロ・ナンセンス大流行の世相だった。エノケンのカジノ・フォーリーが大衆ファンの大喝采に沸き、モダン一色に塗りつぶされた銀座街頭を力士が歩くと、通行人は時代錯誤の

標本を見るような眼つきで、ちょん髷頭の怪物の姿に立ちどまった。

その年の五月夏場所、出羽ケ嶽は再び前頭二枚目にまで返り咲いた。協会はまだかつての大鉄傘下を沸かせた「文ちゃん」に、人気回復の極め手として期待をかけていた。しかも対戦する幕内上位に、高砂一門の一九〇センチ、一五〇キロの朝潮が、いまや豪快な実力でのしあがってきている。

文ちゃんにつぐ巨人だった。

この巨人対巨人が真向からぶつかる土俵に熱戦が展開されれば、再び大衆ファンは国技館の大鉄傘下に帰ってくるに違いない。協会幹部はそう考えた。

出羽ケ嶽が前頭上位まで持ちなおしたその夏場所から、土俵は直径十三尺から十五尺に広げられたのだ。

しかし協会幹部の期待は、すでにあまりにも安易すぎた。

年があけ、昭和七年の正月がきた。

松の内の五日、春場所新番付が発行された。

西方幕内は完全に出羽海一門の独占である。

大関武蔵山、張出大関大ノ里、関脇天龍、小結綾桜、前頭筆頭出羽ケ嶽、以下信夫山、和歌島、山錦、藤ノ里、大和錦、新海、高ノ花、錦華山、肥州山、大島、常盤野、常陸島、伊勢ノ浜、玉碇、外ケ浜。

一方東方は各部屋の連合軍である。

大関玉錦、張出大関能代潟、関脇清水川、小結幡瀬川、前頭筆頭沖ツ海、以下鏡岩、朝潮、高登、錦洋、太郎山、雷ノ峰、吉野山、若葉山、古賀ノ浦、宝川、大潮、綾浪、若瀬川、海光山、剣岳。

この春場所新番付を見て、だれもが不審に思う一枚があった。前年五月夏場所、十勝一敗の好成績で初優勝を飾った小結武蔵山が、関脇の地位を飛びこえ、一気に正大関を極めたことである。その武蔵山につぐ好成績を残した関脇天龍も同時に大関か、とみられたが、天龍はそのまますえ置かれていた。

すでに名門の出羽海一門には、常陸山の先代出羽海遺愛の弟子である出羽ケ嶽を筆頭に、天龍、山錦、常陸島らの「旧出羽系」と、両国の現出羽海親方直きじきの弟子、武蔵山、新海、和歌島などの「新出羽系」の新旧二派閥が歴然とわかれていたのだ。「旧出羽系」の偉材天龍三郎は、明らかにこの派閥争いの犠牲者といえた。

後年の話になるが、相談役におさまった梶之助の出羽海親方は、このときの番付についてつくづく述懐をもらしたことがある。

「あのときは武蔵山と天龍の二人を大関にすえることもできたんだ。だけんどなあ、それでなくとも出羽横暴、出羽横暴の声がうるさすぎて仕方がなかったんだよ」

武蔵山こそが梶之助の出羽にとっては「新出羽系」のホープであった。自ら手塩にかけた弟子たちを溺愛するあまり、自然「旧出羽系」力士が疎じられたのは、人間の情としてやむをえない

ことだった。

翌六日の昼すぎだった。

出羽海部屋表大玄関から十両以上の関取衆が二、三人ずつ、三々五々連れ立って、どこかへ姿を消しはじめた。場所前の稽古ぶりを見ようとお屠蘇の相伴もかねて部屋につめていたお歴々は、そのひっそり閑ぶりに拍子ぬけの体だった。

「みんな揃ってお呼ばれとは凄いなあ。あんまりどっさり飲んじゃいけないぜ」

奥から一門の年寄が、表玄関を出る最後の一組にそう声をかけた。

「いやあ親方、大井町の春秋園で支那料理の御馳走になるんでさあ」

そう答えた関取も、一体だれの招待なのかは知らなかった。

往来をのっしのっし歩く巨人文ちゃんの姿も、その一団のなかにみられた。文ちゃんはただ仲間に誘われるまま、何も知らず支那料理にありつけるものとばかり思って、ぶらぶらと歩いていった。

これが、大相撲の屋台骨を根もとから、ぐらぐらと揺さぶる大騒動「天龍事件」の発端だった。

大井町・春秋園で出羽海部屋関取衆一同が通された部屋は、二階八十畳「勤王の間」だった。関脇天龍三郎の後援者、茂木久平の手ですべての用意万端が整えられていた。作家尾崎士郎の親友茂木久平は、「人生劇場」に高見剛平の名で登場する怪人物である。

この「勤王の間」で一同席につくや、天龍の大演説が滔々とはじまった。すでに大関大ノ里万助という大先輩と結束をかためていた〝政治家〟天龍のじゅんじゅんと説く協会批判、協会腐敗

ぶり、革新の演説は、聞く関取衆のだれもが身にしみて常日頃味わっている大相撲社会の理不尽ぶりを見事についていた。

その根本は次の一語につきた。

「贔屓に〝ごおっつぁんです〟とお世辞をつかわなければ生活がなりたたない天下の関取が、いま自ら改革に立ちあがらなければ、相撲そのものまでやがては衰微する。だれよりも一番みじめなのは力士自身ではないか!!」

やがて出羽海一門の関取全員が連判状に誓約をかためたのだ。その連判状とさまざまな協会改革案を盛り込んだ奉書を協会に叩きつけ、調停に立った関東国粋会百余名が三台のトラックで殴り込みをかけるという情報のなか、一月十六日未明全員紋服姿に改まって、お互いに白紙にちょん髷を切りあった。

全員が決死の覚悟で力士の象徴、髷を切るなかで、たった一人、記念碑的扱いを受け、髷を切らない力士がいた。

文ちゃんだった。

大井町の料亭春秋園から移った「新興力士団」の本拠、本郷駒込神明町の旧木戸侯爵邸の一室だった。

仲間が全員白紙に髷を切る緊迫した空気のなか、たった一人髷を切らずに残された文ちゃんは、さながら河馬のような巨体を震わせながら、馬がいななくように大きく、ウォーンウォーンと泣いていた。

巨人の見るからに無邪気で無細工なその格好は、全員青ざめ緊迫しきった一座の空気をやわらげるなによりの材料だった。

協会は一同の連名脱退状に対して、全員の除名破門で体面をたもった。新大関武蔵山が一人すきを見て力士団から脱走し、協会に帰ってきたのも、わずかの救いになった。

やがて騒動は東方にも波及した。朝潮を大将とする東方幕内関取も「革新力士団」を結成、協会を脱退したのである。

事ここに至って、協会では、ついに梶之助の出羽海筆頭取締が辞任。あとを横綱引退直後の弱冠三十五歳新鋭年寄藤島（常ノ花）が筆頭取締となって登場した。藤島取締の英断で、急遽下位力士を片っ端から幕内に抜擢（ばってき）、番付を再発行して二月二十二日初日、八日間興行という異例の春場所を強行した。しかし連日不入りつづきで、八日間の総収入がかつての一日の売上げにも満たない惨澹（さんたん）たるありさまだった。

一方、川の向う下谷・根岸――。

知恵者天龍が編みだしたトーナメント相撲という新形式の旗上げ興行が、同じく二月四日の初日で、記録的な人気を連日呼んでいた。

なにしろ入場料が大人一人九十銭の安さ。四本柱もなければ呼出しもない。場内アナウンサーがマイクの声も高く出場力士を紹介、はては「ただ今のは寄切って大和錦の勝ち」と、観衆に極り手を解説するまったくの新形式。ジンタ音楽の楽隊を先頭に力士が入場、東西にわかれて土俵の両側に整列というのも斬新だった。

上野の森近く、カラスの群れる静かな根岸の里に突如現れた高価な国技館大鉄傘下でしか見られぬ力士団が、安い九十銭の切符で目の当りに見られると、大衆ファンは連日つめかけた。

なかでも一際人目について、子供たちが群れをなしたのは巨人出羽ケ嶽文治郎だった。力士専用の通用門、正木戸のある国技館にくらべ、根岸のこの興行は巨人にはまるで野ざらし同然だった。いつも子供を追いちらす付け人もいなければ、呼出し奴もいない。さながら蠅のように直接まとわりついては、次々と嘆声があがった。

「わあッ、でっけえなあ」

文ちゃんは、一人元気がなかった。

六日間の旗上げ興行、全員新生の意気に燃え、トーナメント土俵の熱戦を展開するなか、文ちゃん一人まるで鎖につながれた飼い犬のように寂しげに元気なく、とうとうトーナメント戦一勝八敗の最低の成績に終った。

「わあッ、でっけえなあ」

という声の群れをじかに見たとき、文ちゃんは、常陸山大師匠の愛弟子同士である天龍にまで、ついに利用されたことを知ったのだ。

一方、ドン底の不人気にあえいでいる協会も、たった一人髷を切っていない巨人だけはなんとしても欲しかった。ついに義兄弟、歌人斎藤茂吉が協会の頼みを入れて、巨人を引き取りに登場してきたのだ。茂吉七十年の生涯で、書斎からおよそ場違いな〝力士もらいさげ役〟という場に出たのは、破天荒な一事だった。

こうして五月七日、夏場所直前、文ちゃんはたった一人「新興力士団」を脱退、協会に帰参した。夏場所番付幕尻に、出羽ケ嶽文治郎の名が、しょんぼりと付け出されていた。

もう二十九歳だった。

6

悲劇は、巨人をもてあそぶように、その復帰の直後にきた。

翌昭和八年五月夏場所である。

九日目の土俵、因縁のいまや実力ゆるぎない前頭筆頭能代潟と対した。大正末期の「文ちゃん」全盛期にはじめて巨人に負傷を与えたのがこの能代潟だった。

仕切って立った瞬間、差された出羽ケ嶽が相手を小手投げに振ろうとしたその出鼻、能代潟の鮮かな外掛けがきまっていた。巨体が地震で崩れ落ちるビルのように、ゆっくりと、あおむけのまま東の土俵下めがけて落ちた。地響きが起きたとき、東の徳俵とまわしの結び目が激突していた。

腰骨一面に、錆びた五寸釘をぶち込まれたような激痛が走った。脳の底までもガリガリと噛むような、巨体の心臓部から衝きあげてくる痛さだった。かつて出羽ケ嶽の鯖折りの一手をくい、土俵上の命を縮めた多くの〝亡者〟たちの怨念が、いまや巨人自身を責めさいなむかのような執拗さで巨体にくいついたのだ。

やがて骨の痛みは、五年前、後輩新海の河津掛けで負傷していらい持病になっていた左膝関節にも波及した。

宮田外科医院に通った。場所後はさらに慶応病院外科にも行った。鍼灸をやっても痛みはとれなかった。

夜、蒲団の上で少しでも寝返りをうつや、全身に激痛が突きささるのだ。

不眠がつづいた。

夏場所後の地方巡業出発前日の朝、ついに文ちゃんは憔悴しきった青ざめた巨体を、大広間の真ん中につくねんと坐っている小柄な梶之助の出羽海親方のそばに運んで、正座した。協会の筆頭取締こそ辞任したとはいえ、依然部屋に君臨する出羽海親方である。

目の前に坐った山のような巨人に、ちらっと目をやった。

長い顔が、ゆがんでいる。

「親方、もーう相撲はあ、取れませんわあ。やめさしてもらいてえ」

巨人の決心の一語が終るか終らないうちに、それを聞きつけた大広間の向うから一平年寄の激しい罵声がはね飛んできた。

「馬鹿野郎!!　なまくら野郎が何をぶつぶつほざいているかッ。さあ、稽古だ、稽古だ!!」

梶之助の出羽海親方は両腕を組んで、目をつぶり、ツンと顔を上に向けたままの姿勢である。

やがて、ぽつりといった。

「文公。お前の気持ちもようくわかる。まあ、いまのうちに年寄株だけは買っておくことだなあ。

しかし文公、相撲はもうチと頑張れ」

そういうや、梶之助はツと立ちあがって、煙草盆を片手に、身についたすり足そのままツツーと奥の間に消えてしまった。

出羽ケ嶽の申し出が入れられる道理がなかった。

協会が天下の歌人茂吉という名士を唯一の手蔓に、天龍一派から巨人出羽ケ嶽を取り戻したとはいっても、それはあくまでも裏工作。協会を脱走して破門されたという事実は天下にまがいない。そのうえなお、いまや部屋の総帥梶之助の出羽海親方を頂点とする「新出羽系」年寄衆が完全に羽振をきかす大所帯のなかで、出羽ケ嶽文治郎はたった一人残る「旧出羽系」の遺物にすぎないのだ。

この年一月春場所直前、「新興力士団」、「革新力士団」から多くの関取が三々五々、協会に復帰してきた。しかし、騒動の首謀者天龍三郎、大ノ里万助以下、昭和五年に夏場所で十一日間全勝の平幕優勝をあげた山錦善治郎、さらには常陸島朝吉、玉碇佐太郎などのかつての「旧出羽系」関取は、すべて天龍三郎と運命をともにして、ついに帰ってこなかった。

先代常陸山の出羽海師匠愛弟子たちは、完全に一掃されていた。元大関大ノ里万助は、このあと昭和十三年一月、遠く大連の赤十字病院で非運のうちに四十七歳の生涯を淋しくとじる。

いまや、文ちゃんたった一人が、新時代の出羽海部屋に遺る先代の遺物だったのだ。

その遺物のたわごとは、一蹴された。

医者の診断書さえ、はねのけられた。

懐かしいカイゼル髭のドクトル・メジチーネもいなければ、付け人さえいない。「文ちゃん、頑張れよ」と声をかけてくれる仲間さえいないのだ。

この年、山形蔵王山麓のふるさとでは、実の父親も死んでいった。

気がついてみると、巨人は、文字どおり一人ぼっちだった。

夏場所後の出羽海部屋一行の地方巡業に引きずり出されるように、否応もなく連れていかれた。行く先々の稽古土俵、一門年寄衆の怒声が、牛馬を酷使するかのような口調で、次々と飛ぶのだった。

「そら、文公!!　馬鹿みたいに突っ立ってないで、さっさと土俵にあがれえ。そら、あがった、あがったあ」

出羽ケ嶽は歯をくいしばって、稽古土俵にのぼった。能代潟との一戦で負傷した腰骨の故障は、ほとんど満足な治療さえ受けていない。

左膝関節の持病も再発している。

稽古相手は出羽ケ嶽のその骨の傷など目に入らないかのように、容赦なくぶちかましてくるのだ。そのたびに、全身を貫ぬくような痛みの激震が巨体をさいなんだ。

茫洋とした文ちゃんのなかで、やっとどろどろとした憤怒の塊に火がついたのは、そのときからだった。医者の診断書さえ掃き捨てられた。咳払い一つしても気が狂うような痛みに不眠がつづく血走った赤い眼を、だれもが見て見ぬふりをする。こうまでして、人をなぶり者扱いにするならしてみるがいい。継子いじめをしてみるがいい。わしは相撲を取ってみせる。国技館の大鉄

傘下、観衆総立ちの土俵上で見事死ぬまで相撲を取ってみせてやる。――出羽ケ嶽文治郎、常陸山たった一人の生き残りの愛弟子「文治」は、そう覚悟をきめたのである。

文ちゃんの脳裡には、常陸山のステッキだけが見えていた。こわい大師匠の眼が一瞬なごむかのように、キラリと光るのが見えた。

「文治。力士というものは立派なサムライなんだ。その武士道精神で相撲を貫ぬいていけ」

頭の芯が痺れるような痛みに、巨体全体がぐらぐらと揺れ動くような喘ぎのなかで、大師匠常陸山のそう説き聞かす声が聞こえるような思いだった。

出羽ケ嶽文治郎は、その地方巡業を無理に無理を重ねて見事勤めあげたのである。

その年の暮れ、宮田進博士の勧めもあって、文ちゃんは足腰の回復のため、散歩用に土佐犬を飼うことが許された。部屋住みの身でありながら土佐犬を飼うことに、一門年寄衆から猛反対の声が起きたが、梶之助の女将さんのお声がかりで許されたことだった。

昭和十年一月春場所である。

前頭十六枚目の出羽ケ嶽は七日目の土俵にのぼった。対戦相手は十両三枚目金湊。身長わずかに一六二センチ、体重八二キロしかない小兵である。一方文ちゃん、病魔にさいなまれ、痩せたとはいえ、体重一七四キロ（四十六貫五百）。

新聞は巨人対小兵の見るも滑稽な土俵の一戦をこう報じた。

「文ちゃんこと出羽ケ嶽文治郎クン、相撲復興時代の潮にのって、人気はいぜん国技館第一です。花道から現れると、大鉄傘下総立ちです。それでも文ちゃん流し目一つくれず、のっそりのっそ

りと巨体をゆるがせながら土俵にのぼりました。

文ちゃん、なかなか立ちあがりません。細い鯨のような目で相手を見くだしながら仕切りますが、すぐいやになるとみえて、柱に行って鼻をかみ、水を飲み、それを鯨が潮を吹くように天空に吹きあげて、拭い紙で体といわず顔といわず、無茶苦茶にふきます。

大鉄傘下は物凄いウナリを立ててこの巨人に声援をつづけています。なかなか立ちません。これで七回目の土俵をおりて、水を吹きあげました。ついに制限時間がきました。

立ちました！　立ちました！　文ちゃん、しきりに相手の首を攻めています。まるで相手は絞め殺されるように、文ちゃんの大きな指先に咽喉輪を攻められています。

アッ！　組みました。相手は腹の下にかくれて、土俵の上に文ちゃんが一人しか見えません。

アッ！　大変！　文ちゃん手をつきました！　極り手は突き落しです。文ちゃん土俵でチョッと笑っています。観衆は負けた出羽ケ嶽の名を連呼しています。負けて声援を受ける力士は、目下開山出羽ケ嶽一人です。勝った金湊は小さくなって勝名乗りをうけました。

出羽ケ嶽は国技館つづく限り人気力士です。文ちゃんが幕内ドン尻につながっていようがいまいが、文ちゃんの人気に障りがないことを、国技館春場所から皆さんにお伝えしました」

協会は、まだこの巨人が必要であった。なんといっても、古今未曾有の巨人である。大正末期から昭和初頭にかけてのあの大相撲の人気の火が消えた時代、国技館の大鉄傘下を一人沸きあがるような人気で支えていた「文ちゃん」である。兄弟子の第三十一代横綱常ノ花寛市、いまや協会筆頭取締の藤島親方が、なによりもそれを知っている。

昭和九年一月春場所、協会復帰後、小結さらに関脇と昇進を重ねていた男女ノ川登三、九勝二敗の好成績で二回目の優勝。場所後大関にのぼった。出羽ケ嶽につぐ巨漢、男女ノ川は出羽ケ嶽とは逆に、一年間の「革新力士団」の生活で、天龍のトーナメント相撲という新形式の土俵稽古を積み重ねた末、巨漢力士特有の足腰のもろさを是正していた。男女ノ川にとっては、協会脱走の結果が吉と出たのだった。

すでに天龍事件後の昭和八年一月春場所、脱走一派に加わらなかった玉錦三右衛門が第三十二代横綱として登場していた。その横綱玉錦黄金時代のもと、続々と帰参してきた古強者が協会幹部すら予想しなかった熱戦を土俵に展開し、ようやく国技館の大鉄傘下に大衆ファンの人気がよみがえりはじめていた。

いまや新大関男女ノ川と名門出羽海の正大関武蔵山二人の横綱先陣争いに、ファンは沸きたった。昭和十一年一月春場所、武蔵山武第三十三代横綱に昇進。この場所横綱玉錦三右衛門、十一日間全勝で九回目の優勝を飾った。

五月夏場所、男女ノ川登三第三十四代横綱を張った。このとき、十一日間全勝で初優勝を遂げた新関脇双葉山定兵衛が、場所後大関に昇進。そのあと、「やっぱり定兵衛てえガラじゃねえ」と翌場所から本名定次にもどった。

双葉山は先の一月春場所、前頭三枚目の地位で、七日目の土俵から連勝記録をのばしはじめていた。かつての「うっちゃり双葉」の土俵はどこかへ姿を消し、仕切って立つや前に出る堂々たる取口で、大鉄傘下は花形力士双葉山の連勝に歓喜絶讃の嵐がまきおこっていた。

その夏場所初優勝のときは、初日新海、二日目両国と、ともに上手投げ、三日目駒ノ里、四日目笠置山、五日目出羽湊、六日目綾昇、七日目玉ノ海、八日目大関候補の猛牛鏡岩の寄りを大きく打っ棄り、その破竹の土俵に大鉄傘下固唾をのみはじめた。九日目横綱玉錦を堂々の浴せ倒し。十日目は新横綱男女ノ川を掬い投げ、十一日千秋楽大関清水川との一番、国技館大鉄傘下は両者仕切りに入ったときから、もう大歓声の渦になった。

「清水川、負けてやれえッ、負けてやれえッ」

国技館から両者の仕切り直しを刻々と伝えるラジオの前では、国民こぞって白熱したアナウンサーの声と、バックに聞こえる大鉄傘下の大歓声に、手に汗をにぎりしめた。みんな祈るような気持ちで思った。

「清水川、武士の情けだ。負けてやれえッ」

そのとき、「仙台のはやて風」の異名をとる古武士然とした風格の大関清水川、大観衆総立ちの興奮の中、花形関脇双葉山をもろに土俵際に寄り立てた。次の一瞬、双葉山独特の二枚腰を利した打っ棄りが鮮かにきまっていた。

土俵上、負けた清水川は顔面真赤にさせ、歯軋りをして、憤然と気色ばんでいた。しかし、国技館の大観衆はもとより、ラジオの前の国民だれもが、「清水川、よくぞやった。さすが武士の情けだ」と感嘆したのだった。

国技館のまわりは初優勝の英雄双葉山を一目見ようと、熱狂した群集に取りまかれた。

その翌日、十一日間全勝の双葉山は番付編成会議の席上満場一致で大関昇進が決まった。猛牛

鏡岩も九勝二敗の好成績で同時に大関に昇進した。

その後も新大関双葉山の連勝がつづく。

あけて十二年一月春場所、大関双葉山、十一日間全勝で二回目の優勝。

同五月夏場所、大関双葉山、十三日間全勝優勝。場所後、天下あげての大歓迎のうちに、双葉山定次、第三十五代横綱を張ったのである。

大相撲は「天龍事件」のどん底時代からわずか数年のうちに、勝利の神に魅入られたかのような大横綱双葉山の出現で、十二年夏場所から十三日制に本場所を延長して、大観衆を受け入れる異常な人気に沸騰していた。

それは明治の「梅常陸」黄金時代をもしのぐ、「玉双葉」対立の全盛期だった。新横綱双葉山の連勝土俵はさらにつづく。

昭和十三年一月春場所、新横綱双葉山、十三日間全勝。

五月夏場所、十三日間全勝。五回目の優勝。

文ちゃんは、すでに完全に忘れ去られていた。協会も、もう巨人には用がなかった。

出羽ケ嶽文治郎は、双葉山が鬼神の勢いで昇進を重ねるのとは対照的に、見事に陥落していった。幕内から十両に、そして昭和十一年五月夏場所、幕下に落ちた。

人間が人間の手によって、まるで牛馬同然の扱いで酷使された結果、この巨人にとうとう骨軟化症が巣喰いはじめたのである。

腰骨から背中にかけての痛みが、最初は脊椎カリエスとなってあらわれ、やがてそれは医学上も珍しい骨軟化症という厄病に発展したのだ。

もはや文ちゃんに残っているのは、意地だけである。見栄も外聞も体裁も一切をかなぐり捨てていた。捨ててみると、気持ちがすっと晴れわたった。

出羽ケ嶽は、幕下の土俵にのぼった。すると出羽ケ嶽の姿を見て、午前中の国技館四階席は、もう鈴生りの小学生で、まるで野球の応援さながら、「フレーフレー、デワガタケー」と、大騒ぎになるのだった。

大鉄傘下、天井桟敷につらなる子供たちや一般大衆ファンは文ちゃんの無様にも惨めな格好に大喜びだった。文ちゃん自身も新聞に書かれたとおり、勝っても負けても相撲が取れる、相撲を取ってみせる、その国技館本場所の土俵にのぼれるだけで嬉しかったのだ。

しかし、ついにその土俵にさえのぼれない日がきた。

畸形脊髄、骨軟化症が本格的に悪化したのである。発熱、食欲不振、そして不眠。まるで馬のように長い顔が青ざめ、さらには変色して、黄ばんできた。

昭和十一年春場所、全休。
同夏場所、全休。
昭和十二年春場所、全休。
同夏場所、全休。

巨人の運命を狂わせた因縁の元大関能代潟は、前年の十一年五月場所限りで引退、年寄立田山

を襲名していた。

六月、兄斎藤茂吉は、帝国芸術院会員を拝命した。

文ちゃんにとっては、ドクトル・メジチーネ紀一院長健在の子供の時代、あの壮大なローマ建築青山脳病院の一角で、茂吉が二階書斎で暮らし、文ちゃんがその階下の部屋で寝起きした日々は、いまとなっては夢のような思いでしかなかった。

アララギ派の巨匠茂吉は、いま完全に遠い遠い人物になっていた。

力士出羽ケ嶽文治郎は、この昭和十二年五月夏場所、ついに幕下最下位までに凋落していたのだ。くる場所くる場所休場を重ね、休場すなわち黒星となり、番付が落ちるのは当然のことだった。かつての関脇出羽ケ嶽、その名前を番付上に見つけるのに、事実虫眼鏡がなければ不可能になった。

文ちゃんは、悪化した腰椎骨軟化症という難病の治療に、東京帝大病院指定の整形外科器店特製の鉄筋七・五キロ（二貫目）入りのテント布張りコルセットを背から腰にかけてはめこんでいた。その姿はもう人間ではなかった。さながら猛り狂う動物園の熊を粗い鎖で不動金縛りにした様にも似ていた。

そのうえ薬瓶を六つも大事そうにそばに置いていた。ビタミンDのオリーゼ、ハリーバ、酵母わかもと、心臓強化剤、骨を固める石灰水。それらを一日三回も飲んだ。食欲のない体力不足をおぎなうため八ツ目うなぎの肝も飲んだ。

その巨体で、隔日に部屋から医者通いの毎日だった。

昭和十三年夏場所には、ついに三段目まで陥落した。褌かつぎの地位だ。これほど厄介きわまりない存在はない。部屋はもとより、協会自身も持てあました。関脇の給金をもらっての三段目力士。

大相撲史上、前例がなかった。

月給制でないその時代、最高位の地位の給金が基本給として、その力士の現役引退までついてまわる仕組みなのだ。その最高位関脇の給金に、白星一つ二十五銭を単位として加算される給金割りの時代だった。

もはや協会が、相撲部屋にごろごろ転がっている多くの褌かつぎ三段目力士の手前上、この「関脇給金の三段目力士」文ちゃんを持てあました。

しかし文ちゃんは、相撲をやめない。いや、なお土俵に復帰する気持ちでいっぱいだった。

名門出羽海部屋では、年寄衆がよってたかってこの巨人を廃人同然に扱った。

稽古場に面した大広間には、座敷の真ん中に、梶之助の出羽海親方が一人つくねんと鎮座している。相撲記者は、このやかましい親方のそばは敬遠して、稽古土俵際の年寄衆の近くにいつも集まった。

すると向うの控部屋に一人うずくまっていた文ちゃんが、かつての顔見知りの懐しい相撲記者を見つけるや、薬瓶を片手にのっそりとそばにくるのだ。象のような細い両眼を嬉しそうに細めて、文ちゃんは声をかけるのだった。

「おうッ、先生。元気かあい」

背後にその声を聞いた途端、年寄竹縄は、一歩いざりのいていうのだった。

「貴様。向うへ行ってろッ!!」

まるで、汚ない乞食でも見るかのような眼つきで、そう吐き捨てるのだ。年寄竹縄、元常陸嶽である。すでに一緒に相撲を取った者が、みな年寄になっている。

たった一人、文ちゃんだけが意地一つで力士引退をしない。もう三十五歳になっていた。ムウッと大きな口をつぐんだまま、向うへ行く惨めな巨人の背に、年寄竹縄は追いかけるように一矢を放った。

「文公、待てエ。貴様、みぐるしいから、早くやめちまえよ」

「おらあ、やめねえよ。なあ、先生」

壊われたラッパみたいな声でそういうと、文ちゃんは自嘲めいたうすら笑いを長い顔いっぱいに浮かべて、親しい相撲記者の方を見るのだ。それは文ちゃんが駆けだしの子供の頃、国技館の表玄関で夕刊のくるのをいまかいまかと待って、新聞をわし摑みにするや、「ぶっ叩くぞおッ」と広い国技館内を追っ駆けっこをした仲間なのだ。

だれ一人友達さえいない文ちゃんには、いまや新聞記者が味方だった。

昭和十三年夏場所——。

出羽海部屋は横綱武蔵山を筆頭に、小結綾昇以下、幕内に大邱山、五ツ島、両国、和歌島、笠置山、九州山、駒ノ里、出羽ノ花、出羽湊、安芸ノ海などの役者がそろい、かつての栄華をとり

もどしていた。稽古場は場所を直前に、活気がみなぎっている。戦争景気が重なり、稽古場は早朝から火の出るようなすさまじい掛声が、大広間いっぱいをビリビリと震撼させていた。

「日曜談話室」「春遠し、嘆きの文ちゃん」「巨人のその後の消息」——さまざまなタイトルのコラムを引っさげて、その稽古場わきの控部屋で一人薬瓶を持ってうずくまっている巨人に、若い新聞記者が会いにきた。

そのたびに、文ちゃんはもう居直りの姿勢で理屈を並べたてる。

「わしも駄目になったよ。前は負けても土俵に立ちさえすれば、あとは気が晴れ晴れしたもんだ。いまを時めく男女ノ川、武蔵山、あれなんか、わしの半分も場を踏んでいないんだい。わしはな、いま現役に残るたった一人の先代常陸山の愛弟子なんだあ。先代の時代はまったくよかった。世が世ならばなあ。わしはいま継子なんだい。わかるかい？　わしの元気なときは、横綱になれると思ったよ。わしはいまの親方の商業政策のあわれな犠牲者さ。足を折ったとき、骨を折ったときでさえ、わしは休むことが許されなかったんだ。土俵に追いあげられた。それでいまこんな様だい。まったく文ちゃんが泣くなあ。だけどなあ、わしはどうして、こんな体に生れてきたんだろう」

「文ちゃん、いっそのこと、引退すれば一番楽じゃないですか」

若い新聞記者は、文ちゃんの口からあまりにも明らさまに出てくる現親方批判に驚きながら、そう誘い水をかけた。すると、かさかさに渇いた分厚い二枚の唇が、大きく開閉するのだった。

「それがなあ、わしの体はまるで娼妓のようなものなのさア。病気のたびに借金がふえていくん

だあ。いまだって、やめれば協会から養老金の五千円はもらえるんだが、借金がつもりつもって、あげくのはて棒引きされて半分にもならないんだよ」

文ちゃんは話しているうちに、自分でたまらなく可哀相になった。細い眼尻から、われ知らず涙がこぼれ落ちていた。

三十五歳の無邪気な子供だった。相撲世界に身を置いて生きる限り口にしてはいけないタブーを、ついに語ってしまったのだ。

その一部始終が、「文ちゃんは泣いている!!　日本一大きな感傷」などの大見出しで新聞にでかでかと報じられたのである。

そのしっぺ返しが見事にきた。

まず二階関取衆の部屋から追いだされた。

傷ついた廃人、部屋の居候の次の寝場所は一階大広間、取的たちの寝るさらにその奥のうす暗い小部屋だった。

「この便所、出羽ケ嶽の使用を禁ず!!」

便所にまで張り紙が、そう張られた。

出羽海夫人の命令で、奥の女中たちまでが結託した。なんと稽古場におりない病人用の食事として、残飯がだされたのである。すえた匂いのするどろどろの黄色いかゆだった。

かつては全盛時代、「文ちゃん、お帰りなさい」と、うたうように夜玄関に出迎えて、雪駄までそろえてくれた女将さんの、手の掌をかえしたような変身ぶりだった。

制裁は、残酷なまでに加速度をました。

もはや部屋にとって、一片の用もない厄介者なのだ。その厄介者が、先代の話を持ちだし、こともあろうに出羽海親方の悪口を恥しげもなく口にしたのだ。

その数日後のある夜、うす暗い小部屋に閉じ込められている出羽ケ嶽に奥からの呼出しがかかった。巨人はその部屋の障子の前に立って、おそるおそる声をかけるのだった。

「今晩でごあんす」

「文治かえ？」

居間の中から、親方女将さんの甲高い一声が起きた。

文ちゃんは、のっそりと部屋に入った。

巨人の太股一本ほどの小柄な女将が居間の中ほど、火鉢のそばにぽつりと坐っていた。丸い金縁眼鏡の奥で、いかにも癇性な気質をむきだしに、眼が一時も落着かないでキラキラ動きまわっている。背筋をしゃんと伸ばして、出羽海夫人は小山のような巨人にピシャリといった。

「文治、お坐りなさい!!　お前は、なんという恩知らずだねえ」

文ちゃんは、もっそりと坐った。もう鉄筋二貫目入りのコルセットは外している。

「お前のことは、先代お師匠さんから、頼むぞといわれていたからこそ、親方も今日まで特別の目をかけていたんじゃないのかえ？　それをまあよくも恩知らずに……。親方がなんといおうと、このあたしは、もう許しませんよ。文治、土佐犬は明日にでも、どっかへ始末しちゃいなさいッ」

大所帯出羽海の台所を切りまわす筋金入りの女将である。さすがにその言葉は、突き刺さるような威光をそなえていた。

「あらあ、俺の犬だあ、女将さん。始末なんてエ、俺アそんなことできやしねえ」

文ちゃんは、哀願するように、やっと喋った。必死の思いだった。もう五歳にまでなっている土佐犬、あれは最初女将さん自身が承知してくれたからこそ、飼った犬じゃないか——。それがいまになって邪魔だとは、おれが部屋の厄介者になってみると、犬までも邪魔者扱いにする。いくらなんでも殺生じゃないか。むらむらと燃える怒りが、文ちゃんのなかで、必死に叫んでいた。

それからまだ半時ほども、出羽海夫人のきついお叱りがつづいたのだった。

巨人は、その頃から一人分厚い唇のなかで、もぐもぐと物をいうようになった。すぐそばで耳をそばだてても、ぶつぶつぶつぶつと一人喋っている巨人のその一人言は聞きとれなかった。

もう出羽海部屋は、この人間離れした敗残者の安住の地ではなかった。いや、日本中どこにもそれはなくなっていた。

たった一つ、釣り堀だけが文ちゃんの心の拠所だった。

すっきりと澄んだ波一つない水面に竿を垂れると、文ちゃんは、別世界にいるかのような、カラリと晴れた気持ちになった。胸の底によどんでいたどろどろの溶岩みたいないやーな塊が、嘘のように溶けた。

小さな雑魚を相手に終日、幸福感をいっぱいに吸い込むのだった。

昭和十三年五月夏場所――。

出羽ケ嶽文治郎、三段目東十一枚目。

もうあとがない。あとは序二段、序ノ口である。

落ちるところまで落ちていた。

この場所、やっと文ちゃんは待望の土俵に復帰したのだ。もう勝負への未練も捨てていれば、見世物のピエロだと見られる冷笑にも、すっかり無頓着だった。

初日の土俵、子供のような相手は、文ちゃんのぶっぱなした一発に、土俵の外に吹っ飛んだ。大鉄傘下は、やはり巨人の土俵に沸きに沸いた。

褌かつぎの三段目力士が、往年の大関脇出羽ケ嶽にかなう道理がない。摑まれば、巨人の片腕でひねり潰されるのがおちだ。

八日目の土俵、前代未聞の珍取組が展開された。

行司がさっと軍配を引いた。途端に、相手の小田ノ山（神奈川県出身）は「さあ、大変!!」とばかり、血相を変えて、あろうことかなんとまるでマラソン競走さながら、タッタッタッと直径十五尺の円型の土俵のなかを走りはじめたのだ。

その間、土俵中央の文ちゃん、相手を見失なうまいと、必死。ぐるぐるぐるぐる、目がまわりそうに巨体を動かしながら、ひょいと長い腕でマラソンをする小田ノ山を摑まえようとする。ところが相手は、もう二、三歩必死に走り去っている。そのうち、文ちゃんのうしろめがけて、ドンと一発体当り。巨体は褌かつぎの類の力ではビクともしない。飛び去り、また土俵のまわりを

タッタッタッタッ、マラソンである。

大鉄傘下の観衆は、土俵上の珍無類な相撲に笑い転げ、その大爆笑が大鉄傘をゆるがした。七回り目でやっと長い腕の先に摑まえた相手をひねり潰した文ちゃん、目がまわったのか、フラフラと土俵上坐り込んでしまった。

細い眼が、ニイッと笑っている。

このとき、出羽ケ嶽の土俵だけは見逃すまいと二階席のうしろ、協会入口にかたまっていた協会幹部のなかで、一人あけっぴろげに大笑いする人がいた。筆頭取締藤島だった。四角な顔をくしゃくしゃにして、黒縁眼鏡をはずすや、まだ笑いさめぬ面持ちで、眼鏡の汗をふいた。

「いやあ、いままでいろんな相撲を見たが、こんな相撲ははじめてだよ」

同じ先代常陸山の愛弟子藤島である。出羽ケ嶽文治郎、かつての「文治」が、三段目まで陥落して、まだ土俵にのぼっているその意地は、痛いほどわかっていた。藤島取締は、湧きでてくる涙を、大笑いのうちに、まぎらわせたのだった。

昭和十四年春場所、出羽ケ嶽は二十九枚も飛んで、幕下二十五枚目。

この場所四日目、「不敗の横綱」双葉山に出羽海部屋の前頭三枚目安芸ノ海がはじめて土をつけた。六十九連勝のストップである。満天下は、信じられないニュースで、争って号外に飛びついた。

しかし、文ちゃんには、まるで縁のない話だった。

翌夏場所、西幕下十枚目。

その千秋楽の前日、巨人はついに引退を声明した。一勝五敗、名もない幕下力士に負けたのが、波瀾と屈辱に満ちた二十四年の土俵人生最後の一番だった。

その場所前の新番付、改正された付人表がついに出羽ケ嶽文治郎の鉄のような意地に最後の楔を打ち込んだのだった。

「出羽湊の付人、出羽ケ嶽文治郎」

かつて巨人が若い者として指導をし、面倒もみたその後輩の付人に自分がなる。

相撲世界に生きる者として、これほどの侮辱はない。その一句を見たときに、ありとあらゆる虐待、罵倒、冷笑をも目に入れず、巨人を支えていたたった一つの意地が、脆くもくだけた。

年寄田子ノ浦を襲名した。三十六歳だった。

文ちゃんは引退声明に集まってきた新聞記者に、むっと押し黙った末、やっと一言ぶっきら棒にいった。

「体が馬鹿でかいことが、俺にとっちゃア一番有難くないことだったよ。だけどなあ、これだけは、郷里の人たちにようっく伝えてほしいもンだな。なまじっか好きだからって、相撲なんかになるな——この一言だあ」

7

年寄田子ノ浦の晩年は野垂死だったとみる人もいる。往年の関脇「文ちゃん」という大ドル箱

を、たとえ現役をやめたとはいえ、平年寄として協会一員であった以上、協会はもう少しこの巨人の晩年に目をかけるべきであった、とみる人もいる。「巡業御免」のレッテルを張り、朝鮮満州国への長期巡業にはお荷物扱いにして、同行もさせず協会は年寄田子ノ浦をあまりにもつき放しすぎた、という論である。

しかし文ちゃんは、最後の瞬間まで、しっぽりと小さな幸福につつまれていたのである。

引退直後の昭和十五年夏場所のあと、文ちゃんは結婚したのだ。それは六月十二日、出羽海部屋でのささやかな結婚式だった。

新婦は立浪部屋の元十両力士桐ノ花の義妹登代さん、二十七歳だった。文ちゃんこそ知らなかったが、出羽海部屋の大広間奥のうす暗い小部屋に閉じ込められ、残飯のかゆを食わされ、関取衆便所の使用を禁止され、女将さんから「土佐犬を始末しなさい」と叱責されていたその頃、登代さんは「女中見習い」という名目で、親方夫妻の奥居間に起居していたのだ。巨人文ちゃんと結婚するために、「相撲社会を知ることが先決」と、すでに梶之助の出羽海親方夫妻が、登代さんの身柄を嫁入り前の箱入り娘を愛でるように、大事に大事に遇していたのだった。

千葉県君津郡、木更津の先の内房に面した小さな漁村で、「金谷の鋸山」の石を切りだす石問屋の娘だった。

その頃横綱双葉山を擁し、この世の春を謳歌する立浪部屋に、米、味噌、塩などの食料一切を仕入れる業を京橋・大根河岸で営んでいた姉の夫、義兄元桐ノ花を通して、ふと巨人の話を聞かされた。

「可哀相だなあ。いい人なのに……」

そう思った。

同情ではなかった。もとより前代未聞の巨人に恋をしたのでもない。

「あんな化物と結婚する？　血迷ったのかッ!!　わしらの眼の黒いうちは、もう金輪際お前とは縁を切る」

家族はもちろん、代々土地で三等郵便局長を勤めあげている伯父方の反対も押し切って、娘はたった一人、義兄桐ノ花に連れられ、出羽海親方夫妻の許に預けられたのだった。

部屋はそのとき、「不敗双葉」を破った英雄安芸ノ海の出現で、賑やかに沸きたっていた。横綱武蔵山は元気なく引退したが、昭和十五年一月、英雄安芸ノ海は新関脇に昇進。夜ごと、後援会のお座敷がかかり、お登代さんの部屋はもらい物の折詰料理、お寿司の折、ケーキなどの山だった。

すると夜な夜な、腹をすかした新弟子たちが、廊下をそっとしのび歩いて、部屋の障子の前にかしこまり、

「お登代さん、お登代さん」

「だあれ？」

「杉村ですが、何かひとつ、ごおっつぁンです」

そのたびに、お登代は寿司や、折詰料理などを喧嘩のないように分けてやるのだった。

杉村、後年の第四十一代横綱千代の山雅信、さらに引退後出羽海の「戒律」を破り、一国一城

の主におさまった先代九重親方である。

そんな盆と正月が年中きているような賑やかな部屋の空気のなかで、お登代はじいっと自分の夫と心に決めた巨人の姿を、およそ一年半見ていたのだ。

「俺にも嫁がくるんだあ。なあ、先生。俺ンとこへもきてエてえのがいるんだからなあ」

現役引退直後のある日、年寄田子ノ浦の文ちゃんは、ぶっこわれそうな顔つきで、会いにきた昔なじみの新聞記者にそうニヤニヤしていた。

新居は、荒川を東へ越えた江戸川区小岩の借家、裏手にすぐ小岩警察があった。二畳の玄関口、三畳のお勝手、そして六畳の居間兼寝室、一階はそれきりの部屋数で、二階に八畳一間があったが、足の不自由な文ちゃんはほとんど二階にあがらず、物置同様だった。

小さな借家だったが、南側に四十坪ほどの庭がある。その庭は、園芸店さながら、あちこちに長い板を渡して四段に組んだ棚いっぱいに、大小二百鉢以上のサツキの盆栽が春秋見事な花を咲かせるのだった。

新婚旅行もなければ、盛大な結婚披露宴もないごく内輪の結婚式だったが、三十七歳の文ちゃんと二十七歳のお登代さんの新郎新婦を中に、二人の親代り梶之助の出羽海親方夫妻、仲人役の藤島筆頭取締、そして文ちゃんの義兄茂吉がモーニング姿で駆けつけ、一同記念写真におさまった。そしてその日から、文ちゃんは何十年ぶりに出羽海部屋住みの身から、小さいながらも下町小岩のその家に移り住んだのだった。

「首投げ」――。

という。この世界独特の通用語である。大きな太鼓腹の相撲取りが、小さな女の体を丸ごと抱えるようになる体位から、そのことをそういう。あるいは、

「四手を張る」

ともいう。小川で寝かしたまま雑魚を掬いあげる四手の網からきた隠語で、両手と両膝で畳につくと、四本の手が畳に立つ格好になる。厳密な意味では四手で這っていく「夜這い」をさすが、この四本の〝手〟で畳につく限り、いかに巨大漢でも下の女性はつぶれる心配はない。しかし、普通多くは、ちいちゃな女性を上にのっけて、股割れさして、それをすますものだ。

文ちゃんは、三十七歳のその夜まで童貞だった。

かつて、「文ちゃん」時代、満州、奉天の近くの長期巡業先の宿舎、料理屋兼用の旅館で、一夜その旅館付きの内芸者と命じられて一部屋に一枚の蒲団しか与えられないことがあった。そのとき、巨人の前代未聞の濡れ場を語り草にしようと、襖をそっと開けて、必死に中の様子に息をこらした呼出し奴がいた。翌朝仲寄に聞かれて、その呼出しは「ええ、文ちゃん、うまくやってましたよ」といったが、実は嘘だった。

まったくその気がない文ちゃんは、夜を徹して部屋の片隅にうずくまり、ただあの手この手で誘いをかける芸者の露わな白い肢体だけをおそるおそる、じいーっと見ていただけだったのだ。

時代はすでに戦時色一色になっていた。

前年の十月二十日実施された「九・一八令」の物価統制令で、街々の電柱には「ぜいたくは敵

だ!!」の看板が氾濫し、やがて砂糖、マッチを皮切りに、食塩、味噌、衣料、米、ありとあらゆる生活必需品は切符通帳制になった。防空団、隣り組制度が施かれ、新婚早々のお登代さんも、もんぺ姿で小岩二丁目町会の防空班長になった。

文ちゃんは、好きな釣り堀にもう行けなかった。

そのかわりに、結婚して間もなく手にした一番のローラカナリヤを育てあげ、次々と鳥籠の数をふやしていった。やがて、ローラカナリヤの鳥籠は、六畳の居間のまわりいっぱいに積みあげられるほどまでになった。

この世で一番好きな釣り道楽に出られないとあって、こんどは小さな可愛いカナリヤに、文ちゃんは終日飽きもせず、稗、粟の餌をやっては、眼を細めるのだった。

夫婦には子供ができなかった。

いや文ちゃんもお登代さんも知らなかったが、実は結婚の翌昭和十六年お登代さんは妊娠していたのだった。

その頃すでに米軍の空襲にそなえて、町々では防空訓練が繰りかえされた。そのとき、穀物や石炭を入れる藁の叺のはじを踏んで、前に伏せる訓練の最中、お登代さんは足を踏みはずして横に転倒した。

その夜、流産したのだった。

それっきり、ついに二人の間には、子供ができずに終った。

文ちゃん夫婦は、その淋しさをまぎらわそうとでもするかのように、犬と猫を飼った。部屋住

みの時代飼って散歩に連れ歩いた土佐犬は老衰で死んで、いなかった。

犬三匹、猫七匹も飼った。

犬はムツ（秋田犬）と、マリ、くま。

猫は、ふじ、ぴい子、みえ子、かま、などなどだった。みんな文ちゃんの命名だった。

年寄田子ノ浦はほとんど協会に顔をださなかった。ただ給金の分配がある日だけは、うしろにリヤカーのついた特製の自転車をこいで、小岩から両国の協会まで走った。リヤカーの荷台には、リンゴ箱一つがいつも置かれて、その中は小さなリンゴやアンパン、食パンでいっぱいだった。どれもこれも、小さなものだらけだった。

協会や部屋に顔をみせると、年寄田子ノ浦に向って、後輩の平年寄が、

「文ちゃん、どうだい、体の具合は？」

と、いった。

「田子ノ浦親方」

この世界の常識として、そう呼ぶのが当然の礼儀だった。依然として、三段目まで陥落して相撲を取った巨人に対して、その蔑視（べっし）の眼は年寄になってまで、ついてまわったのだ。

昭和十八年、十九年、日本人全部が食料難にあえぐ頃、東京にはとうとう「国民酒場」、「ぞうすい食堂」が現れた。「国民酒場」は各区に何軒と営業時間も決められ、アルコールにうえた人びとが行列をつくった。「ぞうすい食堂」の方も、野菜と魚がちょっぴり入った一人一杯二十銭の玄米のかゆに、人びとは争って行列をつくるのだった。

「おい、でるとまけの出羽ケ嶽が国民酒場の人員整理をやってるぞッ」
「そんなバカな話があるか。腐ってもタイだ、文ちゃんだぜ」
「それが本当なんだ。腰が曲がっちゃってな、木刀みたいな杖をついている」
両国駅で貨物の積みおろしの勤労奉仕をしていた下町の中学生たちは、その翌日両国の「国民酒場」に駈けつけた。
はたして、「国民酒場」の前に群れた行列の中に、文ちゃんの胸から上が見えた。腰が完全に前に曲がり、太い木刀のような杖で「おうッ!!　ちゃんと、並べエ、並べエ」と、行列に横から割り込もうとする連中を見つけては、ぶっ壊れた中古のラッパみたいな声で、列を整理しているのだ。
落ちぶれ、痛々しいまでに曲がった腰、その姿をみて、「これがあの文ちゃんか?」とみんな信じられない思いで、列を正すのだった。
荒川から東の小岩は、昭和二十年三月十日の下町一帯を一夜に焼け野原と化した大空襲から被害を逃れた。その夜、文ちゃんの恩人、日本橋久松町の宮田進博士は、空襲のなか焼死体になっていた。
やがて戦後二十五年六月九日、ついに脳出血が、この古今未曾有の巨人の命を奪う日がきた。
その二日前の七日午後、知らせもしなかったのに、お登代さんのたった一人の実兄がふらりと千葉から駆けつけた。「吸わせろ。吸わしてくれえ」と騒いでいた病床の文ちゃんが、最後の煙草

ひかりを一息で吸い込んだ直後だった。急激に意識が混濁しはじめているなか、あと数日で結婚満十年というそのとき、はじめて小岩の家にきた実兄を、その枕元に坐らせたお登代さんは、その耳のそばでいってみた。

「あなた、新ちゃんがね、新ちゃんがね、きてくれましたよ」

「そうかあ、新ちゃんがか？　とうとう、おれたち勝ったなあ。だけど、ちょっと遅かったなあ」

そのとき、うっすらと細い両眼をはっきり開けて、文ちゃんはお登代さんに嬉しそうにそういったのだった。

そのあと、三回目の発作が襲ってきた。

脳内出血の頭を抱え、発作の興奮が、小山のような巨体を部屋中ごろごろと転げまわらせた。医師も駆けつけた人も、その巨軀をどうすることもできず、ただ見ているばかりだった。

息を引きとる寸前、文ちゃんはお登代さんに最期の一言をぽっつりといった。

「犬、猫、頼むよな」

そして目を閉じた。

享年四十七歳だった。

遺骨はない。ただ、ひと切れの毛髪と爪だけが、両国の回向院、力塚に葬られた。

告別式は半年たったその年の瀬十二月二十五日、出羽海部屋の手で両国・回向院で行われた。

出羽海親方は筆頭取締藤島の代になっていた。梶之助の出羽海は、前年一月七十四歳の長寿を終

えていた。

その忘れられたような淋しい告別式のなかで、大関千代の山の貫禄ぶりがひときわ人目を引いていた。

お登代さんが未亡人になったその年、昭和二十五年一月元旦から、年齢は満で数えるようになった。お登代さんは、数えでは三十七歳になっていたが、満で数えてみると、まだ三十五歳の若さだった。

その後、斎藤姓から結婚前の石井姓にかえり、自宅二階を学生下宿にして生計をたてていた。いまその家は取り壊され、庭も跡形もなく、まったく別人の経営するアパートが建てられている。

風聞では、新宿・成子坂へんで一人ひっそりと老後を送っている由である。

馬じゃあるめえし

小説　男女ノ川登三

坂田供二郎氏（元横綱男女ノ川）二十日午後二時二十五分、脳出血のため世話になっていた東京都武蔵村山市三ツ木二八八、料理屋「村山砦」で死去、六十七歳。告別式は二十五日午後一時から同市馬場の長円寺で。喪主は長男和夫氏。

大正十三年初土俵、一九〇センチの巨体の豪快な取口で親しまれ、昭和十一年横綱となり、十七年に引退、協会理事になったが間もなく廃業。その後サラリーマン、私立探偵、料理屋、保険の外交員などをやったが、いずれもうまくいかず、後半生は不遇だった。

昭和四十六年一月二十一日付朝刊にのった右の死亡広告を見たとき、少なくとも四十代以上の戦前戦中派日本人のなかには、次のような感慨を抱いた人たちが間違いなくいたはずである。

「ほう、まだ生きていたのか」

「やっかいな怪物が、やっと往生したわ。哀れな奴よな」

「これで双葉山、羽黒山、男女ノ川、戦前活躍した往年の横綱はみな死んだことになる。昭和も遠くなったものだ」

「葬式には行ったもンだろうか。いや、村山くんだりまでわざわざ行ったところで、ホトケは知らぬ。弔電はどうだな。実際まったくのところ、死んでまで気をもませる奴だわ」

その種々の感慨がいずこの人たちのそれにせよ、このとき日本人のなかで最も大男の部類に属する稀代の怪物が、まさに一人死に絶えたことは記録に値する。その全盛時、身長一九〇センチ、体重一五〇キロ。棺の大きさは実に長さ二二〇センチ、幅八五センチ、高さ五五センチ。東京ではどこの火葬場の窯もこの巨人を収容できず、杉並・堀ノ内火葬場で、棺をはがし、蒲団を引きずって中にいれ、やっと昇天したのだ。昇天しながら、この生きすぎた第三十四代横綱男女ノ川、得意の台詞をニタニタと吐いたはずである。

「馬じゃあるめえし……」

1

人の運命とは、後になって考えてみればおもしろい点と線の交錯だといえる。

〝白狐〟の異名をとった大正の名力士、阿久津川が、もし巡業先の北海道・札幌で、ジョニー・ウォーカーを半ダースも飲んだ酔いざましに、サッポロビールをバケツ一杯飲みほす滅茶滅茶なことをしでかした末、脳溢血でぶっ倒れなかったならと仮定した場合、おそらく札幌とは縁もゆ

かりもない茨城県、筑波山の山ふところの農家の伜が、相撲取り男女ノ川になっていた道理がない。なぜならば、この農家の次男は、大正十二年九月、すでに二十二歳の青年。相撲取り新弟子の常識年齢をはるかにこえていた。もし発見があと一年おくれていれば、肉のかたまりかけた青年は、あるいはその途方もない大きな図体にはおよそ似つかわしくない茅葺屋根の職人として、一生をつつがなく終えていたはずである。

津軽海峡は二度と渡れない、と本人自身覚悟していた阿久津川が北大病院のベッドで息を吹きかえした。無事東京に引き揚げ、すぐその足で相撲茶屋「竪川」の女将の勧めで、阿久津川は、夫人りう女に付添われて筑波山麓の鉱泉宿、北条温泉に乗り込んだのだ。

「ようッ、お相撲さんがきたぜ」

ラジオもテレビもないこの時代、筑波山麓の小さな鉱泉宿に現れた現役力士に、村の衆は物珍しげに見物につめかけた。ちょん髷姿も話の種なら、柳橋芸者出身りう夫人のあでやかな美しさが、「へエ、相撲取りつうもンは、大エしたもンだ」と評判に輪をかけた。

二、三日後の八月二十八日の昼すぎ、菅間村（現茨城県筑波郡）の豆腐屋だと名乗る小男が、恐る恐る宿の玄関口にやってきた。

「えーと。お願エにあがりました」

応対に出たりう夫人を見るや、さながら高貴な方のお姿を盗見したかのようにびくりと縮こまった。

「ぜひ、今晩の盆踊りにきて頂きたいんでエ。親方に、ぜひ見て頂きてえもンがありやす」

「なにかおもしろい山車でも出ますの」

りう女は明るく笑った。

「それが、ぜひ見て頂きてえもんでエ……」

豆腐屋はそれだけいうと、御辞儀ひとつするなり、玄関口から飛んで逃げた。

その夜、真っ暗な山道をぐるぐるまわり、豆腐屋の案内で盆踊りの提灯広場にでた阿久津川は、にぎやかに踊りまわる群衆を見て驚いた。胸から上だけが見える大男が一人、子供をひょいと肩口に乗せ、踊っているのだ。この瞬間、相撲取り男女ノ川が誕生したといえる。

その翌日、村の衆に連れられた前夜の大男が鉱泉宿にあらわれた。改めて体を見ると、図体こそ大きいが、両脚が力士に最も不適格なX字型に、膝を軸にして左右に弓なりに脚が開いている。しかしその欠陥をも補う身長一九〇センチ近い大男なのだ。

このとき阿久津川、消滅した名門錣山部屋の力士で、同系の大部屋高砂一門に客分として所属していた。後年の佐渡ケ嶽高一郎、日本体育学会の初代会長大谷武一氏（昭和四十一年歿）をして、「柔道に嘉納治五郎あり、相撲に永井高一郎あり」といわしめ、個人的業績で相撲界出身ではじめての藍綬褒章受章者となった人である。その個人的業績とは学生相撲への貢献をさす。埼玉県川口市の自宅に本部を構える全日本相撲研修会（財団法人）会長として、のち二十九年廃業したあと、国技館の大相撲を睥睨していた。昭和三十二年五月、大相撲の屋台骨を揺がし、時の出羽海理事長を割腹自殺（未遂）事件にまで追いつめた騒動のとき、天龍こと和久田三郎氏とともに参考人として国会に登壇、相撲協会を糾弾したのがこの人である。

その現役の阿久津川が、「四股を十分踏みこなせば、脚の欠陥は補える」と将来を見込んだのだ。

ところがこのとき、思いがけないことに、二十二歳の大男は、こんなことをいいだした。

「ようくはわかんねえが、おらあ、相撲は御免こうむります」

「どうしてだな、また」

「おらあ、親孝行しなきゃなンないだ。親父が旅順のとき、乃木大将の命令で戦死してから、お袋一人なんだ。それによ、兄貴がいま兵隊にいってる。お袋一人になるつうわけよ」

「そりゃ結構だ。しかし、親孝行してえなら、相撲が一番の早道だ」

「親方。それ、ホントかな」

と、いうなり急に大男が身を乗りだしてきたのである。後年人目も構わず発揮されるこの男の金への異常なまでの執心が、この瞬間ちらりと最初の片鱗をみせた。

「筑波嶺の峰より落つるみなの川、恋ぞつもりて淵となりぬる」

最近の正月遊戯からは殆ど姿を消したが、戦時中まで日本中の家庭で正月三ヶ日読み上げられた百人一首の一つである。筑波山中からは、しかしいまも男女ノ川はゆるやかに流れ落ちている。

四股名は阿久津川の命名で男女ノ川。

この三日後の九月一日、関東大震災。

興行物はすべて都落ちした。大相撲もまた例外ではなかった。東京在住の後援者ファンたちのごうごうたる非難をよそに、大相撲は名古屋に逃げ、大正十三年変則一月場所を名古屋で開催した。

その生涯の異端ぶりを暗示するかのように、この変則場所が男女ノ川の初土俵になった。

2

大正末期から昭和初期にかけ、不況風吹きまくる世相そのままに、国技館もまた閑古鳥が鳴いていた。昭和二年、大阪相撲、東京相撲が大合併し、「大日本大角力協会」、さらに「日本大角力協会」、昭和三年一月場所また改名「大日本相撲協会」と落着き、会長に福田雅太郎陸軍大将、理事長に広瀬正徳中将（陸軍主計総監）を迎え、「大相撲は国技なり」の鉄壁の組織完備を終えたが、悲しいかな肝心の人気力士がいなかった。

その場所、老境の横綱西ノ海の引退のあと、横綱は第三十一代常ノ花と、大阪相撲出身で〝炭団横綱〟と悪評嘖々の宮城山の二人のみ。配する脇役さえいなかった。幕内の一方は横綱常ノ花を筆頭に出羽海部屋一門力士がずらりと番付面を飾り全盛を誇ったが、片一方は小部屋連合軍の力士ばかり。

昭和三年一月、ラジオの中継放送がスタート。松内則三アナがマイクを通じて名調子を張り上げて、大相撲復興への苦心をはかった。

まさにそのラジオの名調子に呼応するかのように翌五月場所出羽海部屋天龍、充実しきった堂々たる気魄で入幕。明けて昭和四年一月場所、新興二所ノ関部屋の関脇玉錦三右衛門、十勝一敗の好成績で初優勝。

次の五月場所、横綱常ノ花十勝一敗で八回目の優勝を飾った場所に、兄弟子天龍をしのぐ勢いで弱冠二十一歳、身長一八九センチ、体重一一〇キロの新鋭武蔵山が、大年増の芸者衆をさえ身震いさせしゃがみ込ませるような男前ぶりで、颯爽と幕内に登場してきた。しかも天龍、武蔵山と相対峙する番付上に、大衆ファンの目を見張らせるような大型力士が幕内上位にどっかと奇体な四股名であらわれた。

男女ノ川である。

「だんじょの川いうの？」

「あほゆうちゃあかんで。おめのがわやで」

「ほんまか！　ものごっつい名や。おめこのかわ。ヘエヘエヘエヘエッ」

「ちがう、ちがう。なんにょのかわ、や」

関西地方の大衆ファンは、あちこちでそんな駄洒落を飛ばしては喜んだ。

ときに昭和四年五月場所、身長一九〇センチ、体重一五〇キロ（四十貫）。常人の三、四倍はある顔面はあくまで魁偉、への字型の赤い口は、頬のあたりまで裂け、両眼は耳のあたりまで逆様に吊り上がって、まさしく鬼神の形相。めっぽう大きな上体にはごつごつした樫の丸太のような筋肉が勃起し、それを支える二本の脚は膝のあたりで、ぎくしゃくと妙に左右に曲がっている。しかも大きな上体にくらべてもまだ長い両腕の先についた手の平といったら、巨大な八手の葉っぱさながら。

ファンは、山の中からぬっと娑婆に降りてでてきた、さながら雪男にも似た男女ノ川が、土俵

土に立ちはだかった様を見るや、それだけで割れんばかりの喚声をあげた。

大相撲は天龍、武蔵山、玉錦、男女ノ川の役者をそろえ、このとき久しく続いた低調から息を吹きかえした。

昭和五年、天長節（現在の天皇誕生日）、宮中平河御門内の馬場で天覧相撲を挙行。翌六年の同日再び天覧相撲を開催。大相撲人気は沸騰した。

「力の覇王男女ノ川」と松内アナが名文句を謳い、その実力が明らかになった昭和四年五月場所直前のことである。

その年の一月場所を最後に師匠阿久津川は現役引退、年寄佐渡ケ嶽を名乗って高砂部屋から独立、川口に「佐渡ケ嶽部屋」を創設していた。このときから、年寄佐渡ケ嶽の直弟子第一号男女ノ川は、番付上「佐渡ケ嶽部屋」所属を名乗った。しかし後々まで尾を引く不幸の一要因として、この師匠と直弟子は、わずかに六歳しかその年齢が違わなかった。

腹の虫がおさまらないのが、ときの高砂部屋親方、高砂浦五郎（元大関二代目朝潮太郎）である。この大親方は、明治の常陸山対梅ケ谷の全盛時代、〝シャコの天ぷら〟の異名をとった禿げあがった額を看板に、片門相撲の大型大関を勤めた初代朝汐太郎から愛され、朝嵐から二代目朝潮を継ぎ、大正九年引退後大所帯の高砂部屋親方になった人物。竹を割ったような性格の豪傑肌の大親分だ。

なにしろ阿久津川ともども高砂部屋に転がり込んできた男女ノ川が、客分として遇していた阿久津川が年寄佐渡ケ嶽となるや、高砂一門とはいえ「佐渡ケ嶽部屋」力士と表看板を塗り変えた

のだ。しかも男女ノ川はいまや高砂一門の誇る〝ドル箱〟である。

高砂浦五郎、年寄佐渡ケ嶽を出し抜く一計を案じた。男女ノ川を釣ったのだ。

ある日稽古が終り、大座敷でのチャンコも食い終り、男女ノ川が部屋の若い衆に命じて煎餅蒲団を積み上げ、ごろりと昼寝に入りかかった所を見計らい、高砂親方自ら「男女ノ川、ちょっとわしの部屋にこい」と、奥の座敷に男女ノ川を連れて入った。

座敷のこたつに正面向きあって、男女ノ川を坐らせるや、高砂浦五郎キセルの煙草に火をつけ、

「お前エ、物は相談だがなよ」

と、ニタリと笑った。四国・愛媛なまりが消えていない。

「改めて聞くようだがなよ、歳はいくつになったぞな、モシ」

「二十七」

男女ノ川、グロテスクな両眼をパシパシしばたいた。

「ふむ、男子三十にして筋骨定まるか。もうあとひと踏んばりだぞな。ところでお前エ、朝潮を名乗る気は、どんなもンよな。三代目朝潮太郎だぞな」

「御免こうむりやす。おらの親方がうるせえ」

「阿久津川がなんだ!!」

高砂浦五郎、いきなり怒声をあげるや、火の消えたキセルを思いざま床の間の水盤めがけて投げつけた。生花が根元で折れ、水盤が飛沫をあげて揺れた。

「佐渡なんぞについてたところでだ、お前エ、一文の得にもならあしねえんだ！　この高砂にく

りゃ、お前エ、この縁の下の蜘蛛の巣までだ、お前エのモンてなわけだぞな」
「蜘蛛の巣？」
「おうよ。朝潮をお前エが名乗りゃだ、お前エがだぞな、高砂を継ぐってわけだよ」
「そりゃ、ごッつぁんです」
男女ノ川、頬まで裂けたへの字の口をあけ、酒臭いチャンコの滓を歯茎のあたりで舌なめずりしながら、ニヤリと下を向いて笑った。新弟子いらい給金や祝儀を手にすると、大きな図体を折りまげ、一人座敷の隅の方で皺の入った札の皺を、その八手の葉ッぱのような手を、まるでアイロンのようにして一枚一枚伸ばしていた男である。いつの間に誂らえたか、外国製のトランクにその札束を詰め、ひょいと浴衣姿で部屋の裏口から飛び出すや、小一時間もしないうちに妖怪じみた顔つきをニヤつかせながら、舞い戻ってくる。
一度、部屋のある平年寄が、この大男が大座敷の隅で紙切れを眺め眺め、一人ニヤニヤしているのを見とがめ、そっと背後から覗き込んだ。男女ノ川、びっくりして飛びすさっていた。
「なんだい。郵便局の貯金通帳じゃねえか」
「へッへッへッへェ」
大男はこそこそと雲隠れした。
高砂浦五郎、豪儀に大笑いしていった。
「川口は、わしが始末してやるぞなモシ。エ、朝潮」
五月場所番付が発表された。はたして、番付は次のように変わっていた。

「男女ノ川改め朝潮」

年寄佐渡ケ嶽が川口の部屋から、単身短刀を呑んで、高砂部屋大玄関にあらわれたのは、その日の夕刻だった。佐渡ケ嶽、このとき三十二歳。当時帝国ホテルを常宿にしていた政友会の黒幕、杉山茂丸（作家夢野久作の実父）に可愛がられ、さらにはこの数年後の昭和十二年、頭山満に「千住回向院の維新志士の墓が荒れている。阿久津、お前の腕で何とかならぬか」と話を持ちかけられ、一肌脱いだ志士肌の男である。他ならぬ頭山先生の頼みだと、すでに協会理事長補佐にのし上がっていた佐渡ケ嶽は、一日寄進相撲を打ち、その基金で元の千住、小塚原の維新志士の墓を自ら現場監督までして改修を終えた。

その佐渡ケ嶽、「男女ノ川改め朝潮」の一句を見るや、烈火の如くいきり立ち、「野郎、片腕、たたっ切るぞ!!」と立ちあがったのだ。高砂部屋に乗り込むや、右手にきらりと光る抜身の短刀を握り、

「男女ノ川はおるかッ!!」

騒ぎを聞きつけ、奥から羽織袴姿の高砂浦五郎、のそりと出てきた。その背後に急を聞いて手に手に八角棒を持った部屋の力士たちが、ばらばらと駈けよった。高砂親分、両手をひろげ、血相変える若い衆たちを制し、平然といった。

「青二才のくせに、偉そうな面してお見えなすったがな、一体エその短刀は何ぞなモシ」

「男女ノ川はおるかッ!!」

ときの協会取締という大親分を前に、佐渡ケ嶽、一歩も位負けしていない。

「そんな男は、知らんぞな。手妻使いじゃあるめえし、わしがそんなもンでこわがるとでもな、思っているんですかな、佐渡君！」

「他人の弟子を横領するとは、国技にあるまじき行ないだぞ。恥を知れ、浦五郎！」

「ワッハッハハハ!!」

高砂浦五郎、さすがに大所帯を抱える豪儀な性格を明けっぴろげに、腹の底から笑い上げながら騒ぎを煙に巻いた。

この頃、肝心の男女ノ川は相撲茶屋「竪川」の奥座敷に雲隠れして、コップ酒をうまそうにすすっていた。

事件の解決は意外な方向から押し寄せてきた。昭和七年春場所番付発表の一月六日、突如関脇天龍率いる西方出羽海部屋力士一同が、大井町春秋園に籠城して、「新興力士団」を結成したのである。

世にいう「天龍事件」の勃発である。巨漢出羽ケ嶽文治郎（斎藤茂吉の義弟）一人を除き全員打ちそろって髷を切った。一方、番付東方の朝潮を大将とする「革新力士団」も駒込神明町に立て籠ったのだ。

国技館の相撲協会は幕内力士がほとんどカラになった。大関玉錦だけは、この労働争議ともいえる天龍一派になびかず、また新大関武蔵山も籠城直後一人抜けだし部屋に舞い戻った。幕内力士のほとんどすべてを失った協会は、急遽下位力士を上位に昇進させ、番付の体裁をつくろった。このときに十両から一躍前頭四枚目に引きあげられたのが、後年の横綱双葉山だった。

3

それから一年――。

協会脱退力士たちは疲れきった顔つきで三々五々、両国・国技館に舞い戻ってきた。

新興力士団、革新力士団は天龍三郎の発案になる大相撲としては史上はじめてのトーナメント試合という興行を打ち、物珍しさで一時は人気を博したが、やがて飽きられ、力士自身さんざんに疲れきってしまった。国技館の大伽藍がやはり恋しくなった。

帰参力士のなかには、朝潮の姿も見えた。

昭和八年、春場所の幕が開いた。

玉錦三右衛門、第三十二代横綱を張って登場。帰参力士朝潮は、協会脱退の廉をもって朝潮の名を剝奪され、本来の男女ノ川に戻って、幕内格別席で番付に名をつらねた。

初日以来国技館の観衆は、連日男女ノ川の土俵を「あれがあの無骨な朝潮か」と目を見張った。無理もない。

天龍事件前までの男女ノ川の仕切りは、滑稽なほど無骨さを極めていたのだ。一九〇センチ、一五〇キロの大男が土俵上、二字口にしゃがんで塵手水を切る格好は、見ていてまだ我慢ができた。

ところがいったん四股を終え、やおら仕切りの構えに入るや、枡席に陣取ったきれいどころの

芸者衆は、吹きだすどころか、こらえ切れず小水を漏らすまいと尻のあたりを、やたらもじもじさせたものだ。

大男は仕切るのに、土俵に両手をついて、なんと二段に降りた。持って生まれたX字型の両脚、その軸になる膝がいびつに開いた体型上やむをえないのだ。

まず土俵に両手をつき、高い腰を一回ゴキンと曲げる。普通の関取はそれで十分の仕切りの構えだ。ところが男女ノ川、曲げて降ろした腰をもう一回、こんどはガクリと二段に降ろして、やっと面を上げ、相手をそのグロテスクな形相で真赤に睨みつけはじめる。

当然のことながら、なかなか立たない。そこを小さな相手につけ狙われ、飛び込まれざま、蹴手繰られた拍子に、大男が見るも不格好な様でひっくり返るのだ。

この仕切りの欠陥が男女ノ川最大の弱点だった。

ところがである。革新力士団の御大になって、一年間さんざんトーナメント相撲を経験した末、嘘のようにこの欠陥が是正されていたのだ。腰が一回で降りた。人間の運命、何が幸いするかわかったものでない。

鬼に金棒といえた。

春場所、初日以来男女ノ川の豪快な突っぱりの前に敵なしの土俵。土俵中央に仁王立ちにに立ちはだかるや、飛び込んでくる相手には太い樫の棒のような腕をぐいと伸ばして、ドンと一発。小さな相手は、さながら雷の直撃を喰ったような勢いで砂かぶりに吹っ飛んだ。ドにもぐって、くらいつきにくる相手には、がっぷりその肩口に大きな掌を当て、猛烈な突っぱり。やがて相手の

腕をかかえてきめ、豪快無双の割り出し。あるいは往年の太刀山よろしく、仏壇返し。ある相手には、上手投げを打ちながら寄り進み、「うおッ」と一声吼えるや、その馬鹿でかい上体もろとも、相手の上にのしかかって潰した。

十一日間全勝である。

別席幕内格で初優勝を遂げた。専門家はもとよりみな、文字通り阿修羅同然のその力に息をのんだ。

「どうだ、男女ノ川の優勝、驚いたかッ」

相撲史上はじめてのトーナメント試合を編みだした天龍が、協会上下あげての驚きように遠くから自慢したのもこのときだった。

翌夏場所、晴れて小結に復帰。

あけて昭和九年春場所、関脇男女ノ川、九勝二敗で二度目の優勝。

次の夏場所に大関に昇進。

やがて世評は、一足先に大関に昇進していた武蔵山と男女ノ川のどちらが先に、次の横綱を張るかに焦点が集まった。

観衆総立ちの注目の決戦が、昭和十年夏場所、九日目の土俵にきた。東大関武蔵山、その日まで八勝の勝ちっ放し。かたや西大関男女ノ川、七勝一敗。黒星一つがある。男女ノ川、武蔵山に勝てば同点になる。

このとき横綱は玉錦ただ一人。

正味二年間二所ノ関部屋の総帥、玉錦の全盛が続き、協会自身なんとしても、もう一人、二人の横綱が興行政策上からも欲しかった。その願ってもない好取組の一番である。

武蔵山、男女ノ川、土俵だまりに東西に相対して坐った。武蔵山、身長一八九センチ。男女ノ川、身長一九〇センチ。体重の方は武蔵の一一〇キロにくらべ、男女ノ川は一五〇キロ。男女ノ川の見るからに人類の祖先、類人猿を彷彿とさせる妖怪な様に対して、武蔵は目の覚めるような男前。

東の控えの武蔵山、神経質な性格そのままに、叩けば金属音が出るほどまでにコチンコチンに堅くなり、一刻一刻迫りくる決戦を前に、目をつぶったり、組んだ腕をほどいたり落着かない。ところが、西の控えの男女ノ川、への字の口あたりにうすら笑いを浮かべ、腕をのそッと組んだまま悠然と土俵向うの武蔵を見ている。目をパチパチさせ、さも「子供のくせに、偉そうな面しやがってるぜ」といわんばかりの落着きようだ。

やがて館内耳をろうするような喚声の中、両者土俵にのぼった。

立った瞬間左四ツ。いきなり武蔵山、得意の上手投げを打ったが通じず、逆に男女ノ川、出ると同時に投げをうちながら寄りたて、土俵上音たててもつれた直後、武蔵を突き倒していた。

負けた武蔵、一挙に緊張が溶けたに違いない。とっさに大関にあるまじき仕草を放っていた。尻餅をつくなり、土俵の砂を一握り摑むや、「畜生！」と声にだして、握った砂を土俵に叩きつけたのだ。

勝った男女ノ川、武蔵には手も貸さず、平然と式守伊之助の勝ち名乗りを受けていた。

この場所の優勝は横綱玉錦、八回目、十勝一敗だった。千秋楽九勝一敗同士、前日男女ノ川に負けた武蔵山と争っての優勝である。

男女ノ川は千秋楽、清水川に負け八勝三敗だった。

場所後、九勝二敗の大関武蔵山、第三十三代横綱を許された。男女ノ川が第三十四代横綱を張ったのは翌昭和十一年五月場所。

ときに三十四歳。

普通、現役力士の引退する歳ごろに、怪物は横綱の最高位にのぼったのである。

4

男女ノ川の哀れにも無残な後半生は、煎じ詰めれば、結局は横綱になったが故だといえる。この男の生来持って生まれた守銭奴に近い金への愛着、それに加えて茨城県産特有の依怙地なまでの反発心が、横綱という角界最高峰の王者にのし上がったこの怪物の中で交互に混ざり合い、師匠佐渡ケ嶽でさえ手におえない勢いで露呈してきたのである。

それは封建的な大相撲世界で、すべてにわたって異端へ異端へと向けられた。

横綱男女ノ川は、いまや傘下に多くの小部屋を従がえる大部屋高砂一門に君臨する堂々たる英雄である。

横綱昇進後も番付面でこそ、依然として佐渡ケ嶽部屋所属横綱として登録されてはいるが、世

間一般は〝高砂の横綱〟として遇した。事実横綱男女ノ川は両国からはほど遠い川口の佐渡ケ嶽部屋には寝起きせず、本家高砂部屋に住み、高砂の稽古場に君臨している。

一方、師匠佐渡ケ嶽親方も志士的な論客肌が出羽海相談役（元の両国梶之助）に愛され、いまや藤島理事長（元横綱常ノ花、昭和五年引退）補佐という協会幹部になっている。のちの話になるが、相談役出羽海梶之助は七十四歳の長寿を生き、戦後の昭和二十四年に歿した。そのあとを継いで出羽海親方、出羽海理事長になったのが、この藤島親方であり、昭和三十二年割腹自殺をはかり、のち六十四歳で歿したのは前述のとおりである。

横綱男女ノ川の異端ぶりはまず自転車にはじまった。

高砂部屋での稽古が一段落するや、相撲社会恒例の連合稽古がはじまる。両国界隈（かいわい）に点々と散らばる出羽海部屋、二所ノ関部屋へと稽古にまわるのだ。

この稽古に大男の横綱が、自転車に乗って部屋をまわりはじめたのだ。相撲界で稽古まわりに、足腰をきたえる自転車に乗ったのは、男女ノ川をもって史上最初とする。

「わしは足腰をきたえろ、それがあいつの一番のかなめだとはいった。しかし、自転車に乗れと教えたわけではない」

師匠佐渡ケ嶽は、相撲記者たちの質問にそう答えた。記者たちは最後までいぶかったが、まさに自転車は男女ノ川一人の知恵だった。この大男の知恵袋から出る発想の妙味のこれが最初であった。

砂だらけの乱れた髷に、浴衣（ゆかた）をひっかけ、帯しろ裸の格好で、高砂部屋から大股な足取りで大

道に飛びだすや、集まる見物衆の中から声がかかる。
「横綱、サイン頼んます」
「そんなもン、わしはいやだぞ」
大きな口の中で、お経を読みあげるような調子でモグモグといって、頬まで裂けた口でニタリと笑いながら、見物衆の中に一人抱っこされた赤ン坊を見つけるや、
「子供さんかエ？」
妖怪に直接声をかけられた赤ン坊は、主婦の腕の中で火のついたように泣きだす。
そんな光景をニタリニタリと見ながら、大道に両脚をひろげて突っ立つのだ。と、その股間に部屋の若い衆が特製の自転車をするすると滑り込ませ、男女ノ川ひょいとサドルを股に当てるや、巧みに自転車をこいで、姿を消していった。
「横綱男女ノ川登三。年齢三十五歳。身長六尺二寸九分、体重四十三貫」
昭和十二年の協会発表である。
この日、高砂部屋で稽古を見ていたある新聞記者が、正面座敷でチャンコ鍋の前にあぐらを組み、コップ酒をぐいぐい飲みはじめた男女ノ川をつかまえ、話しかけた。この時代、相撲記者は社会部記者が兼ねていた。相撲記事は社会面種だったのである。
「横綱、大きくなったなあ。本当は四十五貫ぐらい、あるんじゃないの」
すると男女ノ川、逆さに吊りあがった目を剝いて怒りだした。その途端、新聞記者は一歩後ろに飛びのいたものだ。

珍しくも吃りながら、男女ノ川わめいた。

「馬じゃあるめえし。……そんな馬鹿な目方があるけえ!!」

「じゃ一体いくらだい」

「四十三貫五百だ。本当はな!!」

「なんだ。たった一貫五百匁の違いじゃないの」

「そこが大切なところよ。記者さんたちにゃわかんねえの」

あとでこのエピソードが高砂部屋後援会のお歴々に紹介された。一同、その話を聞くやドッと笑った。以後、横綱の目の前で、体重の話を持ちだすのはタブーになった。なにしろ相手は一門の英雄なのだ。臍を曲げられ、例えばの話だが、稽古土俵で部屋の小さな力士をつかみ、本気で放り投げるような事にでもなれば、骨の一本や二本折られるだけではすまない。力士という、部屋の財産が御破算になるのだ。

やがて、男女ノ川は高砂部屋を飛びだした。両国界隈はおろか、師匠佐渡ケ嶽の川口をも遠く離れ、甲州街道を延々と西に走る武蔵野のかなた、三鷹の在（現在の三鷹市下連雀）に、三百坪の土地を買い込み、道に面した一角に石垣造りの門を構えたゆうに五十坪はある屋敷を建てたのである。

すると間もなく、第二の奇行がはじまった。

いつの間にどこで免許を取ったのか、天下の横綱が小型自動車を一人で運転、乗りまわしはじめたのだ。ダットサンだった。

ダットサンの運転席を特別に体一つ入れるよう改造し、横綱男女ノ川はダットサンの尻から煙を吐きながら、本場所の国技館に颯爽と乗りつけてきたのである。いまでこそ大相撲社会で高級車を持つマイカー年寄や関取は珍しい話ではないが、昭和の戦前、一般人の間でさえ自動車運転人口は限られていたのだ。

稽古まわりの自転車の愛用には、「ほほう。男女ノ川も横綱になると人間が賢くなったか」と、佐渡ケ嶽理事を筆頭に高砂親方、年寄衆も感心したが、さすがにこんどは、一同あいた口がふさがらなかった。

しかし、男女ノ川は大得意だった。

連日、三鷹から両国の高砂部屋まで、ダットサンで往復しては、一人悦に入っている。後部座席には、三鷹に実家があるという縁で自分で褌かつぎに採用した三段目力士千寿錦を乗っけた。

そんなある日、一人の新聞記者が川口の佐渡ケ嶽部屋を取材に訪れた。この頃佐渡ケ嶽部屋は自宅の庭先に稽古土俵をつくりあげている。玄関先に見なれたダットサンを見かけた記者は、玄関横の潜戸（くぐりど）を通って庭先の稽古土俵へと行きかけた足を何の気もなしにとめ、踵（きびす）を返して、人気（ひとけ）のない玄関口に立った。

たたきに、十五文半の特大の靴があった。

黙って靴を脱ぐと、玄関座敷の戸を開け、奥の居間に入り、さらにその奥にある親方夫妻の居室の襖をそっと開けた。

「どなた？」

昼寝を覚まされたようなりう夫人の、なまめかしい声だった。

足を踏み入れ、声のした縁側の方を見た。他人の密事の現場を見せつけられたようなショックだった。

陽射しの当たる縁側を背に、洋服姿の横綱男女ノ川がこちらを向いて正座していた。その前に床がのべられ、横になったりう夫人の肩を、怪物がその八手の葉のような掌で揉んでいたのだ。

「あら河合さん」と夫人は、横になった顔のまま、片目をつぶってウインクした。河合政。当時朝日新聞の誇ったベテラン相撲記者である。現在同社社友、悠々自適の生涯をおくっている。

「ずい分しばらくじゃありませんの。まあ、お坐りなさいな。いま、男女ノ川関に肩を揉んでもらっていますのよ」

「そうですか。それはいいですな」

「河合君。今日は何の記事ですかな。あんまりウソッパチのインチキは書くもんではないぞ」

男女ノ川は師匠夫人の肩を揉む掌を休めず、例によってお経をうなるような口調だ。逆光になって、その表情は見えない。

男女ノ川という男を知悉していると自認していたベテラン相撲記者の胸の中で、何か熱い塊が針のようにチクリチクリとこみあげては刺した。それにしても信じられないような光景だった。偶然のはずみで黙って佐渡ケ嶽部屋の奥の間に侵入しなかったなら、おそらくこんな情況に遭遇しなかったに違いないのだ。あとで男女ノ川自身、それを吹聴することはあり得ず、同時にりう夫人もそれを他人にいう女ではないのだ。

彼は怪物のそんなこぼれ話を書かなかった。自分一人の胸にしまった。

しかし男女ノ川のダットサン運転にはついに横槍が入った。高砂浦五郎親方だった。高砂部屋前に車をつけた横綱に、ある朝、

「男女ノ川。お前エ、ダットサンはええが、人様をはねたらだな、横綱がお縄もンだぞな」

「わしの運転は、親方、そりゃうめえもンだ」

そのとき、男女ノ川は笑ったが、数日後運転だけはあきらめていた。代って子分の千寿錦がハンドルを握った。

やがて本場所がはじまると、横綱男女ノ川は国技館近く、両国橋のたもと、ホテル両国会館の一室を借り切り場所中の宿泊所にした。明治の文明開化はなやかな時代、隅田川に面して西洋人専用の「リバーサイドホテル」といった赤いレンガ造りのこの建物は、男女ノ川の時代にホテル両国会館となり、いまは幽霊屋敷めいて、頭の上を高速道路が走る貸ビルになっている。

ダットサンを取り上げられ、自分で颯爽と国技館に乗りつけられなくなった以上、男女ノ川としては場所中、ホテル泊りはやむをえない事情だった。三鷹に豪勢な屋敷を構える天下の横綱が、いまさら高砂部屋にごろ寝するわけにいかないのだ。

彼特有の合理精神が、かつては「リバーサイドホテル」と呼ばれて下町江戸ッ子の羨望の的だったこの赤いレンガ造りの瀟洒なホテルに格好のねぐらを見いだした。

相撲記者たちがホテルの部屋を訪れてみると、玄関の下駄箱の上に一つ、奥座敷の床の間に一つ、大きな水盤が置かれ、見事な生花が飾りつけられてある。

「ほう、横綱。これはまた結構な生花ですね」
「そりゃそうだぞ」
「一体どなたが活けるんです？」
「知んねえのか？　こりゃ、わしが活けたのよ」
怪物が嬉しそうに、そう自慢してみせた。
「へエッー」
と、相撲記者たちはみな驚いて、改めて生花を眺めたものである。
「生花ちゅうもンはな、心気を静めるためには一番ええもんよ」
男女ノ川は誰に教わったのか、横綱に昇進して以来、九段の池坊の師匠のもとに通いはじめ、立派に免許皆伝の腕前を身につけていた。千寿錦運転のダットサンに送られ、ホテルの自室に落着くや、近所の花屋から花を取り寄せ、一人静かに水盤を前に蹲踞の構えに入る。その八手の葉っパのような掌に花を取ると、器用に鋏を操り、生花を活けるのだ。
仕切りの立合い一瞬の妙味を「阿吽の呼吸」という。梵語の音調で、阿は開声であり、吽は合声の意である。音声の初発と終韻。それが両者ピッタリ合った瞬間、相撲の立合いは両者とも絶妙の呼吸でがっぷり四ツに対戦している。相撲はその立合いの瞬間に、すでに勝負が決しているものなのだ。
ところが、かつての男女ノ川の立合いは、腰が二段に降りたとおり、さながら犬の喧嘩にも似た無骨な様だった。天下の横綱になるや、男女ノ川はその欠陥を是正するために、生花にその道

を求めたのである。

それにしても、怪物としかいいようのない大男がホテルの一室で、生花を一人なよなよといじくっている姿を想像して、記者たちは微苦笑を禁じえなかった。

横綱男女ノ川は黒色の背広に、きちんとネクタイをしめた姿でホテルから国技館に場所入りした。この姿もまた時代の先端を行く破天荒なものだった。昭和も六十年が近い現在、関取の洋服姿は普段は珍しくもおかしくもないが、それでもサラリーマン並みにネクタイに背広姿で場所入りする関取はいない。すべて紋付が慣例だ。

男女ノ川は、そんな慣例など眼中になかった。

5

双葉山全盛の幕が開いていた。

昭和十三年一月場所、第三十五代横綱を張った双葉山は、男女ノ川横綱昇進の昭和十一年五月場所の七日目、前頭三枚目の位置で勝ちはじめてから、関脇、大関と昇進を続けながら完全に全勝を続けていた。

この間、昭和十二年夏場所から、土俵は十三日制に延長されている。

昭和十四年春場所四日目。連続七十勝目に当たる土俵、横綱双葉山は前頭三枚目の安芸ノ海に敗れた。この一瞬、国技館内は割れるような大騒ぎに包まれた。

号外が満都に飛んだ。

「不敗双葉、陥落す！」

日本軍による南京陥落のニュース以上の興奮で、人びとの話題をさらった。

結びの一番、男女ノ川対鹿島洋の土俵など見る観衆さえいなかった。

その後双葉山は再び勢いを盛り返し、昭和十五年夏場所を除き、横綱双葉山全盛時代が延々と続く。七十連勝がストップした十四年春場所の翌夏場所から、本場所土俵はさらに十五日間に延長された。

その年十四年の十二月、横綱武蔵山が引退、年寄出来山を襲名した。三十一歳の若さだった。このときから横綱陣は、全盛の双葉山と男女ノ川の二人だけになった。

一年前の昭和十三年十二月、横綱玉錦三右衛門は巡業中の瀬戸内海上の客船で急性盲腸炎に見舞われ、大阪の病院に運び込まれながら悶死していた。

昭和十四年夏場所、横綱双葉山定次、十五日間全勝。

十五年春、横綱双葉山、十四勝一敗。

同夏、関脇安芸ノ海節男、十四勝一敗。

十六年春、横綱双葉山、十四勝一敗。

この場所、大関羽黒山政司に続いて、やっと安芸ノ海、五ツ島がそろって大関に名をつらねてきた。

この年、横綱男女ノ川、すでに三十九歳である。武蔵山と横綱昇進を争い、天下を沸かせた全

盛の華は、とうに過ぎ去ってしまっている。それ以後は双葉山全盛の陰に完全に隠れ、いまや老残の巨体を、くる場所くる場所、さながら〝見せ物〟同然、土俵上に晒すのみである。

だけではない。持病の膝を痛め、しかもその痛む両脚の上に依然として大きな上体がのっかっている特有の変形体軀が、本人でさえ手におえず、だれの目にももう相撲が取れる体ではなくなっていた。

師匠佐渡ケ嶽は男女ノ川の土俵を、直視するに耐えられなかった。

「どうだろう。男女ノ川は、もうやめさせてやってもらえんだろうか」

理事長補佐役という協会大幹部の佐渡ケ嶽が、折りをみては協会理事会に何回もそう相談を持ちかけた。しかし、いかに佐渡ケ嶽の頼みとはいえ、協会にとっては折り合えない相談だった。

「佐渡君。君の気持ちもわかるが、せめて羽黒山、安芸ノ海あたりが、目鼻がつくまで、もう一場所、男女ノ川関に勤めてもらえんだろうか」

出羽海相談役の言葉である。

協会としては興行政策上、本場所の他に地方巡業という大きな収入源を抱えている。双葉山を抱え立浪系統の地方巡業は全国どこの地に行っても大入り満員の盛況。しかし他の組合の地方巡業に横綱土俵入りなしでは、地方興行が売れないのだ。「いくら負けてもいい。なんとか横綱を勤めてもらいたい」――それが協会の正直な本音だった。

しかし本来は、佐渡ケ嶽個人がいかに心を痛めても、また協会が横綱男女ノ川に執着しても、天下の横綱を無理にやめさせる権限はだれも持っていなかった。横綱本人と師匠連判の引退届け

が出されない限り、横綱は極言すれば未来永劫に横綱なのである。男女ノ川が「おりゃもうやめる」と自分から言いださない限り、いかに師匠佐渡ケ嶽といえども、「お前もうやめろ」と直談判はできない相談だった。

ここに至って、打算に長けた怪物は、居直った。

師匠佐渡ケ嶽の言動を知るや、

「なんでえ、師匠面しやがって。このわしに相談もなしに、一体エなんでえ、あの野郎！」

男女ノ川、腸が煮えくり返った。

こうと知れば恐い者なしである。文字通り土俵の帝王、横綱だ。風呂につかれば、ただ体を湯の中に沈めるだけ、あとは部屋の若い者三、四人に寄ってたかって、一物までをも洗わせる境遇である。

怪物はその名のとおり、持てる本領を誰に気を使うことなく発揮しはじめた。第一に着手したのは、いかにも男女ノ川らしく蓄財だった。

それもかつて一枚一枚札の皺を伸ばしてはトランクの底に詰めていた可愛らしさにくらべ、いまやスケールが違った。

地方巡業に出ると、相撲協会から横綱の配当金として金五百円也が後払いされる。三鷹に買った三百坪にのぼる土地の地価が、坪当り十四、五円だった時代の金五百円である。それだけの莫大な金が一回の地方巡業だけで黙っていて転がり込んでくるのだ。ところが男女ノ川、

「後払いは、わし、嫌エなんだ。先も後もくれるちゅうもンは、同じことじゃねえか」

と、金五百円也の現金を前借した。

その莫大な現金を手にするや、その足で銀行預金に駆けつけたのである。利息で稼ごうというアコギなまでの吝嗇さ。

もともと男女ノ川には、双葉山や後の横綱羽黒山、照国、あるいは最近の横綱大鵬に見られるような豪奢極まりない後援会ができなかった。人気の質が違ったのだ。

巨人である。それはまだいい。なんといっても、妖怪じみたグロテスクきわまりない怪物。それが独特の分厚い蒲団の衿のような口を、への字に曲げて、祝儀をつつまれても相手を馬鹿にしたような調子で、ぼそりと「ごっつぁん」。それだけである。いかに景気のいいタニマチ気質の旦那衆といえども、そんな反対給付のない男女ノ川には、後援会をつくってやろうという気は持てなかったのだ。

当然のことながら、男女ノ川はまったくおのれ一人の才覚で金を溜めなければならなかった。しかしそれにしても、異常な執着ぶりだった。

ある地方巡業先でのこと――。

野天での稽古が終って、若い衆がチャンコを突つきはじめたころ、天幕を張りめぐらした中に陣取って、横綱男女ノ川は大関の安芸ノ海を相手に将棋を指しはじめた。

昭和十六年のことだ。この巡業には高砂一門の御大男女ノ川は出羽海部屋一行をも引きつれていた。その出羽海部屋の新鋭大関を相手に、「いっちょ、将棋を指すべえか」と、上機嫌だった。

ところがこのとき、将棋に強い男女ノ川がたて続けに二番負けた。顔面が引き攣り気色ばんだ。

「おうッ。もう一番だい!!」

やがて、折り畳み式の将棋盤の上に、駒を音たて戦陣を組むや、三番勝負に入った。天幕を張りめぐらした出口のすぐそばの野天には、チャンコ料理に使った焚火がまだ燻ぶっている。

三番勝負も駒が進むにつれ、安芸ノ海俄然有利な展開をみせ、またたく間に男女ノ川を窮地に追いつめた。男女ノ川は飛車角全部取られ、しかも持ち駒なく、まさに投了寸前。

このときである。

天下の横綱、地方巡業一行の総御大、いきなり、立ちあがるや、

「おりゃ、もう将棋なんざ、指さねえ!!」

そう吼えた瞬間、将棋盤を鷲摑みにして、思いざま焚火めがけて、駒をばらばらと撒き散らした。灰がパッと飛んだ。その舞上がる灰の煙幕のなかで、やがて赤い火がめらめらとつくや、明荷に入れ、後生大事に巡業先を持ち歩いていた男女ノ川の将棋盤は、見る見るうちに燃えた。

安芸ノ海は文句ひとつ挟まず、その光景を眺めていた。怪物の思いあがったワンマン振りは、すでに将棋でさえ勝たしてくれる相手でなければ我慢がならなかったのだ。

同じその巡業中、次のような事件も起きた。

その日の興行は、土地の成金が勧進元になり、寺の本堂大広間に、鶏の丸焼が次から次へと膳に乗って、運び込まれた。

男女ノ川をはじめ、幕内、十両力士から付け人の若い者にいたるまで、巡業の時間節約の都合上、みな争って鶏の丸焼にかじりつきはじめた。

久し振りにありつく馳走である。欲の深い者ほど、肉のついた部分を引きちぎっては、膳の上にかがみこんでいる姿が、大広間のあちこちに見られた。

もう大概食い散らしたと思われたころ、広間の一角に陣取っていた富士ケ嶽が、大きな声でまわりの弟子たちにいっていた。

「おい、てめえら。肉ばっかり食わんで、ちっとは骨も食わにゃいかんぞ」

「なにイッ！」

と、吼えて仁王立ちに立ち上がったのが男女ノ川だった。一同、呆気に取られた。

男女ノ川、大股に歩いて、坐っている富士ケ嶽の真ん前に突っ立つや、呆然としている広間の一同をぐるりと睨めまわして号令をかけた。

「そいじゃ、みんな。肉とって、骨だけここへ持って来い！」

乱心としかいいようがない。このとき、富士ケ嶽、幕内関取、高砂一門である。

怒りきった横綱の命令一下、ばらばらと骨の山が、富士ケ嶽の眼前に積み上げられた。富士ケ嶽は、すでに顔面蒼白。喧嘩ずくでかかったとしても、怪物に勝てる見込みは万に一つもない。

「てめえ、このおれの見ている前で、そいじゃ、骨を食ってもらおうか！」

大広間の一同、固唾をのんで、富士ケ嶽を見た。誰一人、とめに入る者もいない。

男女ノ川は仁王立ちのまま、腕組みするや、半泣き同然の顔つきを睨みつけ、

「どうしたい、富士！　偉そうなこと、抜かしやがったじゃねえかよ。早く、食ってもらおうかい！」

富士ケ嶽は助けを求めるすべもない。
バリバリといやーな音をたてながら、富士ケ嶽は一同注視の中で、骨の山を食いつくした。
男女ノ川は平然としていた。
もはやその横暴さ、無法振りには、協会自体が手をやいた。

昭和十六年春場所。三十九歳。
たった六年前の昭和十年に初土俵を踏んだ照国が日の出の勢いで関脇にのし上がってきていた。
横綱男女ノ川、この新鋭関脇照国の小生意気な面をみて、十三日目の土俵に最後の怪力を見せた。

照国、身長一七三センチ、体重一六〇キロの小男。男女ノ川にくらべ、身長で一七センチも差がある。「叩いても前に落ちない照国」といわれた。

この一番、両者立つなり、男女ノ川は予想通り長い両腕を振りまわし、照国を叩きはじめた。なにしろ、相手は自分の胸までの高さもない。その相手が低く、くるくるとつけ込んでくる。男女ノ川としては、叩く以外に手がないのだ。

このとき、正面桟敷の砂かぶりから四段目の枡席にあぐらを組んで熱燗を酌みかわしている二人の大の相撲好きがいた。一人は刀剣鑑定の大家、本間順二刀剣博物館館長、一人は東京府立四中教諭の佐藤寒山同博物館副館長である。

「どうだな佐藤君。男女ノ川の奴、叩いて、照国につけ込まれ、寄り切りの負けだろ」

といいながら、本間館長が猪口に熱燗をついでもらっているそのとき、土俵上を見ていた寒山先生、ワアーッと吹きだした。仰天した本間氏も、あわてて土俵を振り返った勢いで、熱燗がこぼれ、寒山先生あやうく火傷をするところだった。

なんと土俵上、四ツン這いに這いつくばった照国の上に、勢い余った男女ノ川、尻で踏みつけ腰かけていた。「叩いても落ちない」照国を、男女ノ川見事叩き落としたのである。叩かれた照国、男女ノ川の股間に這いつくばり、腰かけた男女ノ川はその上で馬のような鼻息を吐いていた。

相撲史上に残る珍無類な格好だった。

国技館内、大笑いに包まれていた。男女ノ川、晩年最後の華だった。

その場所の千秋楽、貴賓席に〝相撲御一家〟賀陽宮殿下の若宮様がお見えになった。学習院幼稚舎に通う若宮様である。

御説明役に春日野取締（元横綱栃木山）が立った。いきなり、若宮様、子供特有の甲高い声で元の名横綱にたずねた。

「男女ノ川は、いつやめるの？」

「いえ、もうすぐやめることになっております」

春日野取締は恐縮しきって、御下問にそう答えた。

幼稚園児の〝鶴の一声〟が、横綱男女ノ川引退の極め手になった。

横綱男女ノ川、最後の場所はその翌昭和十七年一月場所だった。ときに四十歳を数えた。

6

昭和四十九年のいまに続く「横綱一代年寄」という制度がある。その適用第一号になったのが男女ノ川であった。

由来はこうだ。

男女ノ川には後援会がなかった。

当然のことながら、男女ノ川に年寄株を買ってやろうというタニマチ気質の旦那もいない。そこで、横綱晩年時代、先を案じた師匠佐渡ケ嶽は男女ノ川を呼んでいったものだ。

「男女ノ川、お前、年寄株だけは買っておくものだぞ」

「馬鹿いっちゃいけねえ、そんな金のかかるもン、おらあ、真平御免ですぜ」

「まあ待て。男女ノ川よ。お前、株がなきゃ、引退すれば廃業だぞ」

「金はよ、せっかくわしが一人で溜めたもンよ。そんなもンに、だれがへいこら、金を使う馬鹿がいるかっていうわけよ。それとも、誰か、買ってくれるちゅう人でもいるてなもんかな？　年寄の株なんかよ、自分で買うのは、もったいねえ、もったいねえ」

協会を営めきって、協会の権威など屁とも思わぬ男女ノ川にとって年寄株などまさに鼻紙同然だった。

しかし、師匠佐渡ケ嶽はそれでは我慢がならなかった。扱いきれない怪物には違いないが、現

役時代、前頭筆頭で終った佐渡ケ嶽にとっては、横綱男女ノ川をつくりあげた一事は、他の何物にも替え難い生涯の大事業であった。

佐渡ケ嶽は、男女ノ川引退直前の緊急理事会で次のような提案を持ちだした。

「どうだろう。横綱一代年寄制というものをつくりたいのだ。今後、横綱を勤めた者は、誰でもその功績を認めて、引退後は四股名のまま、一代限りの年寄になるという制度だ。異議はありますまいな」

理事長補佐役の緊急提案である。

佐渡ケ嶽の腹は読めていたが、理事一同互いに視線をかわし合うだけの間が続いた。

「異議ありだ、佐渡君」

といったのは、他ならぬ藤島理事長だった。

「佐渡君は自分の弟子だけを優遇する気か」

「新しい制度を私心で提案するわけではありませんぞ」

「いや、待て待て」

出羽海相談役が仲に立った。

「佐渡君のいうとおり、今後も長く、横綱の功績を認めての一代限りの年寄だ。結構じゃないか、考えてみれば……」

出羽海のその発言で、佐渡ケ嶽の提案は無事に認められた。相談役出羽海は、一朝事があるや、詰め寄る記者団に、

「佐渡君と相談して決めたことだが……」

「佐渡君もこういうから」を口ぐせにし、絶大な信頼を佐渡ケ嶽理事によせていた。

もとより一般理事たちも、一銭の金もかからず腹を痛めない「横綱一代年寄」制には、反対する理由がなかった。佐渡ケ嶽の筋論が勝ちを制したのである。

一方一度は異議を挟んだ理事長藤島親方にしても、佐渡ケ嶽には借りがあった。映画フィルム横領事件で陸軍省に喚問される所を、陸軍省嘱託をしていた佐渡ケ嶽に、もみ消してもらった縁である。一人強く、佐渡ケ嶽の腹のうちを追及できる義理でもなかった。

年寄男女ノ川は、こうして誕生した。

時に太平洋戦争はますます熾烈化し、大相撲も相撲協会勤労報国隊を結成、食糧増産の掛声が日本全土に吹きはじめた。

年寄男女ノ川は、やがて出羽海相談役の特別の推薦で、平年寄から一躍理事に昇進した。ところが変なことが起きた。

理事に昇進した以上、理事会に出席すべき理事男女ノ川が、三鷹の自宅に通知を発送しても、どうしたことか姿を見せないのだ。たまりかねた佐渡ケ嶽が、ある年寄を車に乗せ、三鷹の男女ノ川屋敷に迎えをだした。

両国、国技館内の会議室に、出羽海相談役、藤島理事長以下、理事が勢ぞろいしている最中、出入口のドアが風とともにすっと開いた。

男女ノ川が背をこごめ、ぬっと入ってきた。例によって黒色のりゅうとした背広姿だった。

佐渡ケ嶽が席を蹴って立つや、きっとなって、大勢の中で、出入口の所に突っ立っている男女ノ川を詰問した。

「男女ノ川、どうした。理事が、理事会に出席しないとは一体どうしたことだ!?　日日を忘れたとでもいうのか!?」

すると、男女ノ川はへの字の口を、例によって蒲団の衿さながらムーッと突きだすや、一体大事件がどこに起きたかとでもいうような口調で、こんなことをいった。

「いまジャガイモ作りで忙しいンですな」

居並ぶ理事一同、あまりの正直な話に呆然とした。誰も二の句がつげなかった。

理事男女ノ川は、頬まで裂けた口と逆さに吊り上がった目で、やがてニタニタと笑顔をつくると、

「それじゃみなさん。おりゃ、食糧増産に忙しいもンで、ひと足お先に失礼しますわ」

巨体を不自由な両脚のために、まるで酔っぱらったように左右に揺すぶりながら、ひょいと首を器用に引っ込めたかと思うと、出入口から出ていった。ドアが音たてて閉まった。

男女ノ川は国技館正面玄関にとめていた愛用のダットサンに乗ると、三鷹めざして一目散に運転をはじめた。実際彼は大忙しの最中だった。

屋敷の裏に広がる広大な敷地をジャガイモ畑につくりかえていた。作業衣姿で鋤鍬を持ち、土を掘り起こす作業に毎日明け暮れていた。協会の会議などにつぶす暇などありはしなかった。

理事男女ノ川は、ついに理事会に一回も出席せずじまいだった。

「なんだエ一体、佐渡は。テメエの弟子かも知れんが、あんな馬鹿の相手をしていても仕様がねえじゃねえか」

在京理事として、本家高砂部屋の地方巡業にもついてまわらず、出羽海相談役べったりの佐渡ケ嶽に敵意を持つ高砂一門年寄衆はもちろん、佐渡と気脈を通じた年寄の中からさえ、佐渡ケ嶽個人に対するごうごうたる非難の声が出てきた。

理事長室の隅で、出羽海相談役が佐渡ケ嶽につくづくともらした。

「佐渡君。男女ノ川、ありゃもう仕方ありませんな」

「ふむ、もう仕方ありません」

長い長い溜息のあと、そうつぶやいたとき、佐渡ケ嶽の脳裡に、ふいに遠い昔の筑波嶺の麓、菅間村の盆踊りの夜の光景が、古びたスクリーンのように甦ってきた。

子供を肩車した大男が、村の衆の中で胸から上だけを見せて、陽気に踊っている。その大きな顔は、奇怪な形相をしているが、村の衆を上から眺めおろしながら心底楽しそうに踊りまわっている。——佐渡ケ嶽は、おのれの中の、何か正体が摑めない塊のようなものが脱落したかのような感懐に憑かれながら、歳月を数えるともなく数えていた。

あの日から、実に二十一年がたっている。

しかし、この大男は結局、子供がそっくりそのまま怪物に姿を変えていただけに過ぎなかったのだ。一体、この俺は二十一年間も何の夢を見つづけていたのだろうか——。佐渡ケ嶽は、川口の自宅にいる妻のりう女の嬉しそうな明るい声を、耳の奥に聞いた。

「男女ノ川関が入れるお風呂をつくりましたのよ」
「はあ、これまたすごいですね」
河合記者の声だった。
りうも俺も、特大の風呂をつくるほどまでに、この怪物をいつくしみ、育ててきた。それらがいますべて無残に裏切られたのだ。
佐渡ケ嶽はついに、男女ノ川をあきらめた。そして捨てた。
男女ノ川の廃業、昭和十九年十月である。
四十一歳だった。
東京空襲の直前のことだった。

7

大相撲を去った男女ノ川こと坂田供二郎は大金を持っていた。本人でさえ、ときとして忘れかねないほど、その莫大な大金はいくつもの銀行預金通帳という形で、彼の手にあった。
その大金が、大相撲廃業直後から、まるで羽がはえた鳥にも似たすさまじい勢いで、飛び立ち、みるみるうちに一切が水泡に帰してしまった。十年とかからなかった。
古い封建的な相撲社会で育ち、ついには横綱をきわめ、我がまま一杯傍若無人な振るまいを繰り返し、誰からも文句いわれなかった男である。その世間知らずが、「俺は元男女ノ川」という看

板を振りかざして、横綱の精神そのままで、一人社会に出た。そこは、他人様が衣食住いっさいの金をだしてくれるかつての境遇とは逆さまで、自分が金を振りまかなければ何事もできない世界だった。

元男女ノ川は、一枚一枚札を数えては溜めあげた横綱稼業一代の大金を、大盤振るまいした。金に執着するあまり、不慣れな事業に手を染めることは結局一文なしに陥る道だ——という知恵を、相撲社会で学んでいなかった。「人の裏面を探る私立探偵は、金になるボロイ商売だ」と、耳元に吹き込まれると、すぐ私立探偵社をつくった。

「男女ノ川さん。選挙に出るのが一番だ。横綱までやった人だ。ひょっとしたら当選して政治家だ。当選しなくても、男女ノ川さん、選挙はいい金もうけにですよ」と、別の声がその耳元にささやき込む。

早速、総選挙に出馬した。

「親方、ひとつ融資しませんか。金が転がり込んできますぜ」と、金融業のセールスマンが、売り込みを吹き込んだ。

すぐ大金を用意して融資するや、自ら宣伝カーに乗ってまわった。

戦後史に記録される保全経済会事件の二の舞いで、就職した西村金融も、やがて破産した。

生命保険セールスマンにもなった。

建設会社、料理屋、私立探偵、代書屋、金融会社社員、生命保険セールスマン——それらの転々と変わった職業は、すべて元横綱の思惑をはずれ、結果が裏目裏目と出た。

三十八年十月、六十一歳のとき、脳出血で倒れた。翌年四月、裸同然の身で養老院に収容された。一度その養老院を出たかと思うと、半年後に再度行路病者となって別の養老院に引き取られた。

最後の落ち着き場所、「村山砦」にきたのは、四十三年三月、六十五歳になっていた。

「こりゃ静かな、いい空気の所だ。どうでえ、社長。おれの骨を拾ってくれるかい」

元横綱は「村山砦」に大喜びで迎えられた。

死ぬおよそ三月前の晩秋の昼さがり、一人の週刊誌記者がウイスキー一本を手土産に会いにきた。久し振りのアルコールに、すっかり機嫌をよくした元男女ノ川は、若い記者に聞かれるまま、突然「おうめ」のことを思いだした。

それは彼自身でさえ、気の遠くなるような思いのする大昔、横綱に昇進した直後の話だった。

高砂部屋後援会のお歴々からお座敷がかかり、英雄男女ノ川は、浅草観音雷門近くの料理屋「藤なわ」の座敷に出た。大勢の芸者衆が広い座敷一杯に、にぎやかに群れていた。おうめはその中の一人だった。

浅草花柳界でも一番の売れっ子芸者だった。

横綱男女ノ川はおうめに一目惚れした。体が小柄で、一目見て壊われそうなひよわな体の感じが、えもいわれず気に入った。

その晩、男女ノ川はおうめを抱いた。

高砂後援会の贔屓客の一人が、英雄の執心を知って、金にモノをいわせ、男女ノ川の床に芸者

おうめをはべらせたのだ。当時の相撲界、花柳界のなれあいごとである。

おうめは怪物のような男の、巨大な体に包まれ、わなわなと震え続けていた。

男女ノ川はその一晩きりの床で、おうめのことなど忘れてしまったが、おうめは忘れなかった。

「おうめちゃんは、男女ノ川関と一晩を過ごしたんだってよ」——そういう囁きが花柳界の仲間うちの間に、感嘆をともないながら口うつしに流れた。

おうめは男女ノ川のもとへ転がり込んできた。懐妊していたのだ。間もなく男女ノ川そっくりの男児が生まれた。師匠の佐渡ケ嶽さえ知らず、高砂部屋関係者も誰一人その事実を知らなかった。ただ一人、相撲茶屋「竪川」の女将だけがおうめの世話を焼いていた。

男児が二歳になったとき、横綱男女ノ川は巡業先から帰ってくるなり、「竪川」に立ち寄り怒りだした。おうめをつかまえた。

「おうめ。てめえは、おれの女房にもならねえうちから、おれの金を使い込んでやがるな。どうも前から、おかしいおかしいと思っていたんだ。今日限り出て行きやがれ。悪い虫でもついたんだろう、この野郎！」

事実は、しかし男女ノ川の疑いとはまるで違っていた。座敷には出られず、といって吝嗇な男女ノ川は金もくれず、困り果てていたおうめを、見るに見かねて、「竪川」の女将が、預っていた男女ノ川の給金の一部を、自分で立替え、おうめにそっとまわしていたのだ。

おうめはそれから間もなく、バセドー氏病を患い、最後まで面倒を見た佐渡ケ嶽夫妻に見守られながら哀れな短い一生を終えた。男女ノ川は、わずかな金を惜しむあまり、一人の薄倖な女性

をおのれの子供もろとも、棄て去っていたのだ。

その三十年も以上の昔の記憶を、死ぬ三ヵ月前になって突如想いだしたのである。

「男女ノ川さん。その子供がいまどう成長しているか知っていますか？」

若い週刊誌記者は聞いた。

「そんなもン知るけえ。おりゃね、子供は何人ぐらいつくったもンか、自分でも分かンねえくらいだもンねえ。潮来に巡業したときは、芸者と寝て一回で子供ができちゃったの。すると子供のない土地の農家がな、〝男女ノ川さん、有難うごぜエやす〟てな、親子とも引きとってな、そのお礼に〝男女ノ川〟と名を入れた酒一斗樽を送ってよこしたものよ。種馬じゃあるめえし。おうめも、浅草のならず者とくっついちゃったのよ」

六十七歳の元男女ノ川は、そういって大笑いした。

そのとき「村山砦」の男女ノ川の離れの窓に、小学生らしい子供の顔が二つ、室内をのぞいて叫んだ。窓の外は広い駐車場だった。

「やッ。お相撲さんがいるゾ！」

「でっけえなあ。パパ、早く来てごらんよ」

晩秋の休日の「村山砦」はマイカー族でにぎわっていた。子供二人は、窓に取っついたまま、はしゃぎまわって叫んでいた。

元横綱男女ノ川は、このとき心底いやーな顔つきをしていった。

「馬じゃあるめえしよ……」

この怪物のこの世への「あばよ」は、おそらくその一句であったに間違いない。

師匠佐渡ケ嶽の永井高一郎は、男女ノ川の往生を見て安堵したかのように、その翌四十七年十月、この世を去った。七十五歳だった。

豪傑

小説

前田山英五郎

1

「喜木山」

坊主頭の十五歳の分際で、名門高砂部屋本家に入門し、相撲の世界には四股名というものがあることを知るや、自分でそう名のった。別に親方に頭をさげたわけではない。その名の由来は、むろん郷里、愛媛県西宇和郡喜須木村字喜木（現在、保内町喜木）からとった。

昭和四年春場所（一月）のことである。

ついで一年半後、昭和五年夏場所（五月）十六歳の誕生日、また自分勝手にその四股名を変えた。

「佐田岬」

坊主頭がやっと髷の結えるざんばら髪にのびた序二段二十九枚目の〝虫眼鏡〟、力士の卵でしかない。

それが、自分勝手に生れた村の字からなんと伊予（愛媛）の国が、海をはさんで対岸の九州佐賀ノ関に向って、ツルツルと馬のシッポのように細長く伸びている佐田岬半島（現在、宇和海県立自然公園）へと四股名を大きくした。ちっぽけな在「喜木」は、その「佐田岬」半島のつけ根にあった。

そう勝手に改名して、親方に届けでた。封建的な相撲世界の仕来たりを、最初から踏みつけて行く乱暴狼藉ぶりである。

しかし、力士がごろごろいる大部屋高砂一門の年寄衆、先輩関取衆たちの目から見て、この一人の力士の卵が自分勝手に「喜木山」を名のろうが、「佐田岬」と改名しようが、べつにどうでもいいことだった。

背丈も一六〇センチちょっと、体重も七〇キロがやっと。

すべてに豪放磊落な三代目高砂浦五郎親方（大正期の荒武者、二代目大関朝潮太郎）からのいいつけで、「そら食え、そら食え!!」と兄弟子からハッパをかけられ、新弟子検査で力士採用基準の十九貫（七〇・二キロ）をやっとパスした貧相な体。それも全部ガラ（骨）ばかりといった感じである。

「どうじゃい。若松親方がおらが郷里の八幡浜から拾ってきたあの小僧は？」

「ヘエ。まだ体中骨ばっかり。肉なんぞありゃしません。それにどうも柄が感心しませんな。モ

ノになるかどうか」

三代目高砂は、大正九年一月、実に足かけ六年十一場所の長期にわたって張った大関を引退、いらい五十の歳をきくこのときもなお、身の丈一八二センチ、一二〇キロの巨体で堂々高砂一門に君臨する、ときの協会取締でもある。気質が澄みわたった空のようにカラッとして、情にもろいという、いかにも大部屋の親分肌の人物だ。

――どうにも始末におえない餓鬼。十五、六という自分の歳をどこかへ置き忘れたかのような不貞腐れた顔つきで、莨はぷかぷかふかす、部屋へ連れてきてすぐ二、三日姿をくらましたと思ったら、両国界隈のバクチ場にもぐり込み、その末、ドスを持ったヤクザ相手に派手な喧嘩を演じてケロリとした顔つきで引きあげてきた、とは、一門の若松親方（初代小結射水川、昭和二年一月現役引退）から聞いている。

（体こそ小さいが、なかなか天晴れな度胸よなあ）

三代高砂浦五郎親方、腹の中でこの同郷の小僧にそう感心している。後年まさかこの男が――とは、さすがの苦労人もまだ見抜けなかった。

しかし高砂一門は、いまやこの小僧にかまってはいられない。お家騒動の真最中だったのだ。それがこの男に幸した。終生、この男の生涯に、こうした幸運が不思議とついてまわる。本人は悠々そこを歩いて通った。遠慮会釈なく――。

この昭和四年、五年、高砂一門にとっての〝ドル箱〟怪物男女ノ川がのっしのっし幕内上位に

のしあがってきたのである。妖怪然とした巨漢、これほどの〝お米〟はまず類がない。昭和四年夏場所（五月）、高砂親方は協会取締という権力を笠に、その直接の師匠佐渡ケ嶽親方に無断で四股名男女ノ川を「三代朝潮太郎」と改名、番付を発行してしまったのだ。

さんざん揉めに揉めたあげく、男女ノ川改め三代朝潮太郎をめぐる高砂お家騒動は、結局昭和七年の天龍事件を契機に解決、怪物は本来の男女ノ川登三の鞘におさまった。

さて、佐田岬――。

昭和六年春場所（一月）、三段目。

骨ばかりだった体にも、やっと筋肉がつきはじめ、背丈も伸びて、一端のお相撲さんらしくなってきている。だけではない。

「この馬鹿野郎、出てケッ!!　破門だッ」

乱暴狼藉ぶりも、常人とは桁はずれの無茶苦茶で、何回高砂親方の癇癪玉が破裂したか数えきれない。そのたびに、

「ヘイッ」

浴衣をパッと風になびかせながら、勢いよくすっ飛んでは、また裏口からニュッと入ってくる。

「しょうのねえ餓鬼よ。貴様、この次こそはよ、破門じゃねえ、閉門ぞよ」

「親方、それ、どう違うんでエ」

「おうよ。裏口も閉まってらあな。中に二度と入れねえぞナ」

しかし、喧嘩好き、女郎買い好きの佐田岬は、親方のそんな威しで参る神経はもっていない。

春場所番付発行後のある日のこと。

稽古あがりの風呂場で、三段目の褌かつぎ佐田岬、いきなり兄弟子をぶん殴った。思いざま、拳骨で横面をぶん殴られ、湯殿に転がされたその兄弟子は、六尺褌一本まいたまま、青くなって親方に泣きついた。

「兄弟子とは、ムリヘンに拳骨と書く」

このしごき、制裁でもって敵愾心を起こさせ、力士を鍛えあげる世界にあって、逆に兄弟子をぶん殴った男は、相撲開闢いらい、あとにも先にも、この男しかいない。

しかし、佐田岬としてはカーッと腹が立ったから相手をぶん殴っただけにすぎない。「背中流せエ」というから背中を流してやっている最中、「なまくら野郎！　もっと気合いを入れてやれえッ」といわれ、なにをふざけた野郎とばかり、いきなり拳骨を一発振りまわしただけである。

「親方、あの野郎、生意気を通りこして、キ印だあ」

「なにイッ。弟子にぶん殴られたあ？　ぶん殴られる貴様の方こそ、だらしのねえ野郎よ。とっとと、消えてうせろッ」

褌かつぎからぶん殴られる、親方からは馬鹿にされて呶鳴りちらされる、その関取は泣面に蜂でコソコソと退散した。

その一件を耳にして、ニタリと会心の笑を浮かべた男が一人いた。

友綱部屋力士、宝川だった。

この年すでに三十一歳。前年昭和五年、山口組三代親分、田岡一雄のドスで額を割られ、右手小指と薬指の二本を斬り落とされている。そのうえ、首から胸にかけ月の輪熊のそれに似た、ゾーッと息をのむような大きな三日月の古痣があった。

「十両の貧乏神」

そう渾名されるほど、くる場所くる場所十両筆頭に名をとどめる珍記録をのこし、昭和二年夏場所（五月）やっと入幕、この頃前頭十一枚目まで躍進してきた怪力士だった。

四国、土佐の高知出身。

佐田岬は、高砂部屋に入門したその年、宝川の凄まじい剛力ぶりを目の当りに見ていた。

その頃、友綱部屋は稽古場を持たない部屋だった。宝川にとって、同系の錣山部屋出の阿久津川は大先輩にあたる。その阿久津川が愛弟子男女ノ川を預けた高砂部屋に、宝川も稽古にきていたのだ。

その宝川が、もう稽古が終って帰ろうとする男女ノ川を呼びとめた。

「何だこの野郎、もう帰るかッ。さあ、いっちょこい」

「もう関取、わしは稽古、ごっつァんです」

と、男女ノ川、耳まで裂けた大きな口でニタッと笑って浴衣がけで、ひょいと部屋をでた。

その途端だった。

宝川の形相がかわった。

「逃げるかッ、貴様！」

いうなり、高砂部屋裏の細道づたいにあとを追っ駆けて行き、有無をいわせず一五〇キロの怪物を磐石の腕力一本で高砂稽古土俵に再び引摺ってきたのである。そのあげく、衆人環視の中、宝川はこの弟子をおのれの一〇〇キロの体にぶつからせ、しごきにしごいた。

壮絶な剛力の前に、朝から稽古を十分あげている男女ノ川の巨体は、堅い稽古土俵に地響きをたててごろごろ投げ飛ばされた。躊躇するところのない凄惨なまでのしごき——。

その硬骨漢、宝川が会心の笑で、

「佐田岬いう坊や、一体どれじゃな？」

と、高砂部屋関取をつかまえ、聞いたのである。

佐田岬、稽古土俵をぐるりと取りまいた取的たちの中から一人、土俵上の宝川に呼びあげられた。

この昭和六年、高砂一門には、関脇三代朝潮太郎（男女ノ川改め）を筆頭に、「信州雷電」といわれた高登以下十両陣に、太刀若峰五郎、男女ノ川と同じ初土俵の柳関（のち二代目射水川）などの怪物、異色関取衆が轡を並べていた。

しかし、そのだれもかれもが、兄弟子をぶん殴るようなキ印に近い乱暴狼藉者の三段目褌かつぎに、胸を貸そうともしなかった。

そのとき、高砂一門ではない宝川が、佐田岬の前に稽古土俵の上で立ちはだかったのである。

その臆するところのない図太い神経——。周囲が何を思おうが、先輩年寄衆が何をいおうが、おのれの思うとおりに後輩を指導した宝川。

その大胆不敵な宝川の剛力で、佐田岬は息の根がとまるほどに、くる日もくる日も稽古土俵に叩きつけられた。

泡を吹いて気絶寸前、ふらふらと土俵下に転げ落ち這つくばるや、桶の水をぶっかけられ、また土俵上に引摺りあげられた。

「よう、お兄ちゃんよ。これぐらいで這つくばるとは、同じ四国も裏と表の差よなあ」

「……」

佐田岬、息が切れ、声がでない。首から胸へかけての月の輪熊の大痣を見ながら、むらむらと怒りがこみあげてきた。

「……兄弟子をぶん殴る元気はあるが、相撲はまるで去勢されたへのこよなあ、お兄ちゃん」

宝川、相手が泡を吹くまでに何十回と怪力で投げつけながら、呼吸一つ乱さず、悪態をついている。四つ相撲に組んだとき、相手の脇下に腕がスポッとはまったまま、肱をぐいッと反さないことを、「へのこ差し」ともいう。

「……へのこよなあ、お兄ちゃん」

と、いわれた途端、佐田岬、立ちあがるや、相手に飛びつくような勢いで、いきなり渾身の力を振りしぼって、バーンと宝川の横面を張りつけていた。

平手打ちの喧嘩だ。

張られて宝川は、ニヤリと笑ったその形相、はじめて胸の痞がとれたように晴々としていた。

佐田岬がその宝川の気魄のこもった怪力張り手一発で吹っ飛んだのは、次の瞬間だった。

この男にとって、まるで闘争精神の固まりのような宝川という怪力士にしごき鍛えあげられたことが、後年この男ならではの猛烈な「本場所一番相撲」完成の一つの基礎となったといえる。

その宝川自身は、最高位前頭三枚目、昭和九年五月場所限り、相撲界から廃業していった。

昭和七年春場所、佐田岬、幕下十七枚目である。この場所、相撲協会を揺り動かす大騒動「天龍事件」。西方（出羽海部屋力士で独占）、東方（男女ノ川の三代朝潮太郎を大将とする各部屋連合軍）を問わず、十両以上の関取衆はあげて、協会を脱走してしまった。

しかし幕下力士、佐田岬は関取衆の待遇改善要求の大騒動にはまだ無縁な存在だった。それどころか、この関脇天龍三郎を表面に立てての大騒動の真の陰の役者、共産党から転向した怪物、水野成夫（国策パルプ社長、のちサンケイ新聞社長、昭和四十七年五月、七十二歳で歿）と、後年、義兄弟の盃を交すに至るとは、このときまだ夢想だにしなかった。

春場所は二月二十二日初日、八日間の変則場所で挙行された。

その場所中、五日目の真夜中だった。

高砂部屋の近所で火事がでた。

佐田岬、二日目に白星一つを出しただけ、連日黒星つづきで、この夜も負けて自棄酒を呷り、部屋近くの一杯飲み屋で酒乱の一歩手前。目が血走っている。そこへ、

「火事だッ!!」

半鐘のけたたましい音とともに、野次馬が次から次へ駆けて行く騒ぎ。「火事」と聞いて、自棄

酒を打遣るや、佐田岬、野次馬の先頭になって走りだした。

（ほう感心な奴よ。あの手におえねえ不良取的も、火事と聞いて水運びに駆けよったわ）

と、酒屋の親父が感心したのもつかの間。

酔った足で火事場に駆けつけるや、消防のポンプに引っかけられ、見事引っくり返えった。体は水でずぶ濡れになるわ、みんなの前で不細工な格好ででんぐり返るわ、佐田岬、いきなり消防夫に向って、

「やりやがったな、この人足奴ッ」

一人をぶん殴ると、それを見た消防夫数人が一度にワアーッとかかってきた。

火事そっちのけ、火事場での派手な喧嘩。

一人をぶん殴り、あいた片手で一人を投げ飛ばし、次から次へ殺気立って向ってくる消防夫の荒くれ相手に、佐田岬一人派手な立ちまわり。

喧嘩が飯より好きな幕下相撲だ。

ぶん殴り、張り倒し、投げ飛ばし、急を聞いて警察官数人が現場に駆けつけたときには、佐田岬意気揚々と引きあげたあとだった。

この火事場での喧嘩騒ぎのため、火事は火元一軒ですむところ、近所数軒にまで類焼。

あくる朝、被災した近所の旦那衆にねじこまれた高砂浦五郎親方は、大きな体で頭を畳にすりつけ詫びたあと、真赤に怒った顔に湯気さえたてながら、ズカズカと大部屋に入ってきた。中は、布団の海だ。関取衆が全員脱走してしまった本場所中、取的連は夜があけてもまだ全員不貞寝し

ていたのだ。

「佐田の野郎、どこだあッ！　貴様、破門だあッ、出てケッ!!」

親方のポンポン飛ぶ癇癪玉の破裂音を、もぐり込んだ布団の中で聞きながら、佐田岬は（一体何事が起きたんだろう？）と、寝呆けまなこをこすっていた。

しかし、佐田岬は結局破門を許された。肝心の関取衆がいないことが、またもやこの男に幸したのだ。

春場所がすむと、すぐ三月名古屋で変則本場所が開催された。なにしろ人気関取の大半が天龍の「新興力士団」、朝潮（男女ノ川）の「革新力士団」に走ってしまい、大鉄傘下の春場所は閑古鳥の鳴くありさま。相撲協会は滅亡するのではないか、とまでいわれたほど収入も皆無に近かった。その春場所につづく悲壮な名古屋落ちの本場所十日間興行だった。

惨澹たる名古屋場所を打ちあげ、高砂部屋はすぐ地方巡業に旅立った。

その巡業先でのある朝――。

高砂浦五郎親方の旅館に、土地の安旅籠屋から出てきた佐田岬が一人、玄関に立った。玄関の開け放った戸口に浴衣がけの体をあずけ、ゴールデンバットの煙をぷかぷかさせながら、取次に出た旅館の女中に、「親方に話がある。親方、呼んでくれエ」と奥に走らせた。

朝早くからお客が来たという女中の取次であわてて紋付姿に改め、玄関先に現れた高砂浦五郎親方、ぷかぷか莨を吹かせる佐田岬一人を見て呆気にとられた。

「お客様てエのは、お前エか。親方のわしに、話があると？」

「おうよ。ゆうべの宿、ありゃ、宿じゃねえ、人足置場だ」

火傷するほど、指先ぎりぎりまで吸いつくした莨の端を道先に投げるや、佐田岬そういい放ったのである。

兄弟子、師匠に対して絶対服従のこの世界にあって、思ったことをそのまま面と向っていうこの男、尋常ではない。

しかし、高砂親分の太ッ腹をもってしても、幕下力士、まだ一人前の「関取」でない身のほどもわきまえず、「ゆうべの宿、ありゃ悪い」と直々、因縁をつけて来るに至って、ほとほとこの乱暴狼藉者に堪忍袋の緒が切れた。部屋に飼っておく限り、このあとどんな災難がまた降ってくるかしれたものじゃない。

高砂浦五郎、紋付の懐からずしりと重い財布をそのまま無造作にポイと玄関先の石の土間に投げるや、ドスのきいた声でゆるりといった。

「なあ、坊や。お前エは、親方を親方とも思わねえ餓鬼よな。わしもお前エを、もう弟子とは思わん。その財布持って、いまこっから立ち去れえイ。閉門じゃ。二度とその面、見せるなよ。タタッ斬るぞい」

「なにふざけてやンでエ。こんな人足置場、こっちからあばよだ」

佐田岬は、ぷいと玄関を出るや、自分から消えた。このとき、まだ十七歳の小僧だった。

玄関の土間に、財布がそのまま転がっていた。

2

伊予（愛媛）の国、八幡浜（現在、八幡浜市）は草相撲の盛んな土地柄である。それもそのはず、この八幡浜から明治の大関初代朝汐太郎が出た。いらい、大相撲といえば高砂、当代の高砂浦五郎親方も、その初代朝汐太郎に憧れて同じ伊予の国、西条町（現在、西条市）から出て高砂部屋に入門、朝嵐と名のって、やがて二代目朝潮太郎を継ぎ、大関となってついに三代高砂浦五郎を襲名した。

その「大相撲といえば高砂」の草相撲の盛んな八幡浜に、高砂を破門された佐田岬が、筋肉質の引締ったごッつい体になって、ふらり舞い戻ってきた。

「そら、御本家から破門された不逞者よ。みんな寄ってたかって痛めつけてやれい」

草相撲の勧進元がそう命令したからたまらない。

豊後水道、宇和海に面した八幡浜、その潮風の吹く八幡浜の砂浜の草相撲――。

「どれ、本職のお相撲さんの腕はどんなもンかな」

と、草相撲の大関、関脇どころの三役衆はじめ、幕内格が我も我もと佐田岬一人めがけ勝負を挑んできたのだ。最初の頃は、草相撲大関といえども、幕下力士佐田岬の敵ではなかった。

太い腕一本、ドンと一発相手の胸元を押せば、みんな吹っ飛んだ。

ところが――。

草相撲を取った褒美に、芋ばかりの御飯にありついても、まる三年チャンコを腹一杯食ってきた腹がいうことをきかない。

腹がへって、腹がへって、もう立つ気力もなくなっても、草相撲の面々、黙っていない。

「なんだ、金松の野郎。人の倍も飯を食いおって」

佐田岬こと萩森金松は、一人ふらふらになって八幡浜から名坂峠の山道を越え、喜須木村の実家に辿着いた。ところが大工職人の父親円太郎は仕事に出て留守、子供一人を連れてその父親と再婚したあと、男四人、女三人の計七人の子供を産んだ大女の母親つゆは、三年ぶりにふらり舞い込んできた末ッ子の金松を見て目をむいた。

「なんじゃ、金松かね。お前エさんは東京のお相撲さんになったのじゃないのかね。相撲取りに食べさす御飯なんぞ、この家にはありゃしませんぞな」

ピシャリと頭ごなしに叱り飛ばされたのだ。

また八幡浜の草相撲に戻るより他に仕方なかった。草相撲さえ取れば、御褒美の芋の御飯にありつける。ぷかぷか吹かす莨などの小遣銭はもとよりない無一文。

実の親からも余計者扱いにされ見放された。いまや完全な裸一貫、野良犬同然だった。

佐田岬こと少年金松は、また八幡浜の草相撲に出た。痛めに痛めつけられた。

「ふんどし担ぎの破門野郎なんぞ、徹底的にのしちゃえ！」

すきっ腹の野良犬の身で、必死に草相撲を取った。ごろごろ砂浜に転がされ、投げ捨てられ、気を失って何時間かのち、ハッと目が覚めたら、月夜に照らされた浜辺にいつの間にか満潮の波

が迫って、体が首一つ残してとっぷりと海の水につかっていた。
その頭の向うに砂まみれになったおむすびが二つ。
野良犬はずぶ濡れのまま、這い起きて、ガリガリと砂を嚙み砕きながら、おむすび二つにむしゃぶりついていた。
こうしておよそ半年、この男は草相撲で己れを鍛えあげたのである。こんな例は、またしても、あとにも先にもこの男一人にとどめをさす。と、同時に生来の闘争精神に加え、むくむくと一つの信念の固まりができあがっていた。
「世は、俺一人」――。
十月上旬、土地の世話役に連れられ上京、ひとまず郷里出身の警視庁警務課長増原氏宅の官舎に預けられた。
「どうだ、高砂師匠に頭をさげ、詫を入れるか、貴様」
「いいや、頭をさげるぐれえなら、俺、相撲やめるよ」
その夜だった。
食事も女中が食べたあと、風呂も女中が入ったあとの落し湯。
あくる朝は、五時に叩き起こされ、カマドにくべる薪割りを命じられた。
それが何日も何日もつづいた。
「相撲やめるよ」と、一言いっただけで、女中の入ったあとの風呂に入れられる屈辱。どんなに草相撲で痛めつけられても悲鳴一つあげなかった男も、このときはじめて、ちょん髷のありがた

さを思い知らされたのだ。

こうして増原警視庁警務課長に連れられ、肝心の本人ではなく、増原氏が高砂浦五郎親方の前に頭をついて復帰を願いでた。高砂親方は、ごつごつと筋肉が全身に盛上がり、不敵な面構えになって久し振りにあらわれた佐田岬を睨みすえながら豪快に笑い飛ばした。

「チト薬が効きすぎたかのお？　……それにしても、詫びひとついわぬ強情な男よ。さあ、あがれ、あがれエ」

昭和七年十月場所（京都）、晴れて幕下の土俵にのぼった。

昭和八年一月、協会脱走力士もぞろぞろ復帰し、幕内格別席で勤めた三代朝潮太郎改め男女ノ川が十一日間全勝で初優勝を遂げた。場所後、男女ノ川は関脇に復帰。

高砂一門に久し振りに、春が甦ってきた。

昭和九年春場所（一月）番付が発行された。佐田岬、ついに新十両九枚目である。十五歳の新弟子から数えて五年目で「関取」の地位にのぼったのだ。

しかし、佐田岬――。

この晴れの番付が発行された頃、慶応病院整形外科の手術ベッドの上に両脚をベルトで縛られていた。泣きたいような厄病だった。

その前、八年冬になって、右腕の肩のつけ根あたりが化膿し、ひどく痛みだした。日頃お世話になる先生の紹介で、慶応病院レントゲン科藤波剛一教授の門をたたき診察を受けた。

すると、そのレントゲン写真を見ながら、白衣の藤波教授、本人を前に坐らせて、
「ふむ。……これは完全なる骨髄炎だよ。エピフィーゼがすっかり化膿菌で腐っとる。二の腕の骨がだんだん腐ってきとるな」
「先生、そのエピフィーゼいうのを取れば、なおりますか？」
「君、君、エピフィーゼというのは、二の腕の骨の骨頭といってな、骨頭の下のまわりの毛細血管の部分だぞ。そして骨頭が肩の関節のお皿に入っとる。そんなもの取れるかね」
「……？」
この藤波剛一教授は、患者にズケズケとはっきり病気の正体を宣告したことで有名な人。
「この骨髄炎という奴、いまの医学では非常に全治がむずかしい。たとえ、なおったとしても骨そのものが脆くなる。ましてや君はお相撲さんだ。それにまだ若い。まあ、諦めて郷里へでも帰ることだなあ」
十九歳の恐いもの知らずの乱暴者が、生れてはじめて青くなったのは、このときだった。すでに相撲に欲が出てきている。その相撲を諦めろ！　――話に聞けば、八幡浜から出た初代朝汐太郎だって、たった五尺九寸（一七八センチ）、二十七貫（一〇一キロ）という小さな体でものすごい大関だったというじゃねえか。この俺は、もう五尺九寸五分（一八〇センチ）、二十六貫（九七・五キロ）という体よ。それで相撲をもう諦めろ！　郷里へ帰れ――。
「無茶苦茶だあ、先生」
半泣き同然の顔つきで、青くなってそうわめいた。この男の生涯をつうじて、べそをかいたの

は、このとき一回限り。それほどこの藤波剛一教授の宣告はこたえた。

「無茶苦茶だあといったって、君、わしは無茶をいったわけじゃない。骨髄炎を説明してあげたまでだよ。しかし、一度前田先生を紹介してあげよう。あるいは？　という望みだけはある」

藤波教授から、整形外科部長、前田和三郎教授（のち横綱審議会委員）の所にまわされてきたのである。のちの整形外科学界の大御所である。このとき、もしこの人がいなければ、この男も哀れ、名もなく消えたであろうし、むろんこの物語も存在しえないことだけは間違いもない。

骨髄炎――。ペニシリンを筆頭にさまざまな化膿どめの薬がある現在、骨のまだ固まらない未成年者によく起こりがちな骨髄炎は、いまでは、化学療法で難病ではなくなった。その骨髄炎は、体のどこかにオデキができて、その化膿菌が血液の中に入り、体中をまわりはじめて一番最初に引っかかる部分が毛細血管が網の目のように集中した二の腕の肩のつけ根、丸い骨頭の下の部分。そこに化膿菌が引っかかっているときに、稽古で打撃を受け、血管が切れて、上腕骨（二の腕）の骨髄にまで菌がひろがってきていた急性化膿性骨髄炎だったのだ。手術は急を要した。

しかし前田和三郎教授自身、骨髄炎の全治には即答できかねた。整形外科医として、手術に賭けたのである。

ベッドに両脚を縛りつけ、局部麻酔の注射を打った。右腕の化膿部分を切開すると、どっと膿がでた。同時に骨髄内の菌がひろがるのを防ぐため、まだ菌の巣喰っていない骨に二ヵ所、錐で穿孔した。

ついで深い杓子に似た鋭匙で化膿部分の腐った肉片を取り去ると、問題の骨が露になった。

これからがいよいよ手術の本番である。

手術道具はノミと木の槌。

さながら彫刻家がノミと槌で丹精こめて芸術品に立ち向う様に酷似している。いや、それとまったく同様の骨を削って行く骨の彫刻だった。

ただ、この彫刻、相手は木ではない。生きた人間、それも局部麻酔だけで、目をぱちくりあけて、腐った右腕の骨が、「コツン、コツン」と、鈍い時計の振子のような音をたてて、ノミで削り取られて行く音を聞いている。

あまり力を入れて槌でノミを打つと、肝心の骨にヒビが入る。少しずつ、少しずつ、腐った骨を削り、彫刻していくのだ。

「コツン。コツン。コツン」

実に幅二センチ、縦に五センチに及んで、芸術家前田和三郎は、すっかり腐った骨を削り取ったのである。

しびれを切らした本人、たまりかねてベッドの上で大きな声をだした。

「先生、そんなに骨、削られると、相撲が取れません!!」

「いいや、削り取らないと駄目なんだ。君は黙って、コツンコツンを聞いていなさい」

男女ノ川の関節炎、大関清水川の脱臼整復をはじめ、関取衆の怪我を一手に引きうけている大先生の鶴の一声である。

最初の大手術が終って、肉が中にめり込むまで四ヵ月入院。ところがその入院中、右腕に包帯

を巻いたまま、ある夜、病院を脱走、朝帰りした。その現場を運悪く看護婦長に見られた。
「ゆうべ、あなたはどこへ行ったのですか」
「はあ、ちょっくら、そこまで」
「そこまでとは、どこまでです？　白状なさい」
「はあ、ちょっくらお酒で消毒に」
「お酒で消毒!?」
「それから、ちょいと首投げ」
「首投げ!?」看護婦長、呆気にとられている。
「はあ、ちょちょちょ、と女と寝て」
パチン、と白い手でいきなり横面を張り飛ばされていた。女に面を張り飛ばされたのは、あとにも先にもこのとき一回。女に張られて、むしろ逆立ちするほどに吃驚仰天してしまった。
おそるおそる目をあけると、白い顔を朱に染めた看護婦長は肩で息をしながら、
「よろしい。よくわかりました。すぐ前田先生に報告いたします。この大変なときに、悪い病気でももらえば、どうなると思うのですか？」
「婦長さん、堪忍。それだけは許してくれエ」
思わず看護婦長の両手を摑んだ。その途端、
「まあ、きたならしい！」
そう吐くようにいい捨てるや、白衣姿の看護婦長は長い廊下を逃げるように急ぎ足で向うに

去っていった。

全治まで実に一年半近くかかった。その間、手術をすること三回。そのたびに切開し、膿を出し、鋭匙で悪い肉を取り去り、再び骨髄内に蔓延していた腐った骨を彫刻。

こうしてせっかく新十両に名をのせた昭和九年春場所（一月）夏場所（五月）を休場。

手術が終り、右腕の削り取られた骨にいい肉がギューッとのめり込むような窪みになって退院するやいなや、酒をあびるほど飲んではまた両国界隈のヤクザと喧嘩。

「ええイ。破門じゃい。出てケッ！」

高砂親分が呶鳴りあげる。

そのたびに、前田博士の奥さんが高砂部屋まで出むいて、詫を申しでるのだった。

ついに前田和三郎教授さえ、最初「全治は即答できぬ」といっていたその骨髄炎が全治する日がきた。

さあ、いよいよ退院というときになって、この男、こんなことをいいだした。

「実は先生、ボクは、左利なんです。右腕、そう使わなくとも、左一本で十分相撲やれます」

「ほう、そうだったか」

この乱暴狼藉、無茶苦茶、粗暴の限りをやりつくしてきた男が、自分の第一人称を「ボク」と呼ぶ変化に、前田博士さえ驚いている。骨を「コツン、コツン」と削り取られる音を聞いていた間に、人間そのものはいささかも変らないとはいえ、何かがこの男の中で芽生えたに違いないのだ。

「ボク、四股名を変えたいと思う。……先生のお名前ください」

「君、大学教授は金なんぞありゃせんのだ。そんなものをつけても経済的になんの得にもならんぞ」

そのまま頭一つさげるでなく、浴衣着のまま、男はぶらりと慶応病院の門を出ていった。

翌昭和十年春場所（一月）番付が発行された。見ると「佐田岬」の名前はどこにもない。かわって、十両から一気に三段目五枚に陥落した〝虫眼鏡〟の中にそれがあった。

「前田山」

またしても自分勝手に四股名を改名したのである。しかも「前田山金松」じゃしまらねえとばかり、堂々こう名のっていた。

「前田山英五郎」――。

ときに二十歳に成長していた。

3

「前田山英五郎」

そう改名して、まるで人間が変ったようにかつての「なまくら相撲」は影をひそめ、仕切りに入ったときから凄まじい気魄で相手を圧倒する精悍そのものの「本場所一番相撲」に大きく前進していた。

同年夏場所、幕下優勝。

翌昭和十一年春場所、十両に帰り咲き。この場所後、一門の兄弟子、巨漢男女ノ川がついに三十四歳で第三十四代横綱を張った。

一方、前田山、十両二場所を踏んだだけで、翌昭和十二年春場所、ついに入幕。

前頭十二枚目である。

同時入幕した者に、名寄岩、鯱ノ里がいた。

すでに双葉山全盛時代が幕をあけている。

昭和十一年夏、双葉山（関脇）十一日間全勝優勝。十二年春、双葉山（大関）十一日間全勝、二回目の優勝。同年夏、双葉山（大関）十三日間全勝、三回目の優勝を飾るとともに、場所後二十六歳の若さで第三十五代横綱を張った。

一方、前田山――。

昭和十二年春場所（一月）入幕を果すや、次の夏場所（五月）東前頭五枚目に躍進。

翌昭和十三年春場所（一月）、幕内二場所のみで一気に東小結、三役陣内に斬り込んだのである。猪突猛進の勢いだった。

ときに身長五尺九寸五分（一八〇センチ）、体重二十八貫（一〇五キロ）。二十三歳。

全身、腕から肩、胸、腰、脚にかけ、すべて鋼鉄のような筋肉の盛上がりだった。それもただの筋肉ではない。八幡浜の草相撲で半年、痛めに痛めつけられ、雑食で鍛えあげた筋肉である。

はじめて土俵上対戦する相手は、前田山の右腕、幅二センチ、長さ一〇センチに及ぶ、まるで

肉を刳り取ったような疵痕を見るだけで寒気がした。気の弱い者は、目にするだけで足が竦んだ。

いよいよ仕切に入るや、闘志を剝きだしに、両眼の吊りあがった赤鬼さながらの物凄い形相で、手をついて嚙みつきそうに相手を睨みつけるのだ。気の弱い者はそれで、もう一度萎縮してしまうのだった。ガクガク脚が震えるのが見えた。

「毒蜘蛛だぞ、毒蜘蛛だぞ！」

その気魄のこもった仕切、対戦相手はだれもがそう思った。まるで喧嘩をそのまま土俵上に持ち込んできたかのような不敵な面構え。

立ちあがるや、いきなり敵の肩口めがけ、ダーンと鉄砲玉の勢いで、左腕一本で突き放した。その強引な一突きで、立ちあがる前から萎縮して戦闘意欲の萎えた相手は、すっ飛んだ。向ってくる敵には、さらにその肩口めがけ、凄まじい気力で、右左とダーン、ダーンと音たてて突張りの連打。

自然、相手はその物凄い気魄にのまれ、首を竦めるところを、張手を浴びて突き出された。あるいは、その攪乱戦法の末、上手まわしを引かれ、差されて、怪力で土俵上に叩きつけられた。

この場所七日目——。

新小結前田山は、「不敗」の新横綱双葉山に対した。前年夏場所三日目、幕内二場所目ではじめて対戦したときは、相手にされず惨敗している。二度目の顔合せである。

このとき前田山、二日目五ツ島に黒星を喫したのみ、五勝一敗の驀進ぶりでこの対戦を迎えた。

一方の双葉山はこの日まで四十六連勝の破竹の進撃中である。

すでに出羽海部屋勢は部屋をあげて対双葉山戦の作戦をねり、横綱武蔵山を筆頭に、出羽湊、笠置山、両国の三関脇、綾昇、新海、和歌島等々、一癖も二癖もある一騎当千ぞろいが初日から連日、ある者は奇襲、ある者は内掛けとさまざまに当っては砕けている。

力士の意地に賭けても、一人双葉山の常勝を許すことは我慢がならない。

このとき、精悍前田山、立つなりいきなり双葉山の顔面めがけ、張ってでた。得意の肩口めがけダーンと突進する上突張りではない。

前田山の張手――。それは手の掌に渾身の力をこめての完全なビンタだ。それをボクシングのフック同様、大きく腕を振りまわして右から左から、パンパンパン音を立てて、敵の顔面を凄まじい勢いで張りつけていくのである。

一発、横面を張って敵が顔をそむけた一瞬、右か左を差すのは、差すことを目的とした「張差し」という。

しかし前田山の張手は、差すことが目的ではない。徹頭徹尾、相手の顔面を張って張って張りまくり、敵が脳震盪を起こして、でんぐり返るのを目的とする。張手は禁手ではない。しかし、これほどまでに徹底した張手は、四つ身に組む以上の気魄、気力、体力がない限り、自分にとってもこれ以上危険な荒技はない。両腕を大きく振りまわしていくため、両脇はがらあきなのだ。敵に下からもぐり込まれ、がらあきの体に吸盤のように密着されたら、もう張手は通じない。

しかし、いかに出来た関取とはいえ、生身の人間である。思いざま張手をくうと、「この野郎、やりやがったナ！」と、腹が立つ。勢い張り返す。カーッと血が逆上して昂奮しているだけに、

もうそのときは負けである。

関取の耳はつぶれ、鼻がまるでオデコの線と同じぐらいにペシャンと凹んでいるのは、稽古の激しさを如実に物語る以外の何物でもない。張手を堪えるぐらいの強靭さは、相撲取りには実は日常茶飯事なのだ。

このとき——。

「不敗双葉」に、立ちあがるや、真赤な形相を剝きだしに前田山が猛烈なビンタを右、左と振りまわしていった刹那、大鉄傘下の国技館内から、さながら羽交締めにされてまさに犯されんとする生娘の悲鳴にも似た「ヒーッ」といった叫びがあがったのである。

双葉山、さすがは大横綱であった。

物凄い音を立てて張られながら、動揺せず、ぐいぐい前に出てきたのである。顔面をもろに張られながら、完全に脇のあいた前田山の右をぐいと差した。前田山は差され、摑えられたら、それっきり。万歳の姿勢にされると、あっさりと下手投げに敗れていた。

この春場所、小結前田山の奮闘ぶりは、ファンを熱狂させた。十一勝二敗で準優勝を遂げていたのだ。

しかもこの白星の中には、横綱玉錦を倒した一番がある。十一日目の土俵、双差しで土俵際まで押しまくり、打棄られ、行司式守伊之助の軍配がサッと玉錦にあげられた一瞬、物言いをつけたのが西方控え力士、双葉山だった。

土俵上紛糾十分の末、取直しと決まったとき、勝ちを信じて疑わぬ前田山、再度土俵にのぼる

のを承知しない。このとき、自分がこうと思ったら梃子でも動かぬこの男を動かしたのが双葉山だった。双葉に一言、二言諭され、憤然といきり立って再び土俵上にのぼった前田山、いきなり豪快きわまる櫓投げで横綱玉錦を土俵上に叩きつけたのだ。

大胆不敵な一番――。

大鉄傘下の観客は、この大相撲に、常勝双葉山の土俵以上に沸きに沸いた。西の控えでは双葉山、眉一つ動かさず、東の控えでは兄弟子横綱男女ノ川がニタリと赤い舌をだして笑えば、正面桟敷高砂浦五郎取締の説明で御観戦の賀陽宮、美智子王女の両若宮様のお二人、手を叩いて大喜び。

この場所の優勝は、十三日間全勝の横綱双葉山定次。四回目。五十三連勝の土つかずだった。場所後、恒例の番付編成会議で、満場一致新小結前田山の関脇を飛び越えての大関昇進が決定した。入幕後、幕内二場所、小結一場所、たった一年で大関の座をがっちりと奪い取ったのである。

その朝、大関決定を伝える協会使者が帰ったあと、高砂部屋二階大広間にどっかり納まった新大関前田山は、大変な御機嫌ぶり。

「おッ、ビールだ、ビールだ。一ダースばかりどっと持ってこいや」

とふんどしかつぎ連に命じた所へ、ニュッと兄弟子横綱男女ノ川。この場所、男女ノ川は七勝六敗、十一日目から千秋楽まで三黒星。武蔵山とともに大鉄傘下を沸かせた怪物は〝無敵〟双葉

山の人気のかげに、すっかり忘れられている。「さあ、乾杯」という段になって男女ノ川がモグモグボソボソいいだした。

「俺アなあ、こんどの場所はあんまりいまいましいんで、酒はやめようと思ってンだい」

まるで子供のような駄々のこねようだ。

「男女ノ川よ、何をぬかすか。お前エが胸を貸してやった弟弟子のお祝いだぞ」

師匠佐渡ケ嶽協会在京理事の言葉だ。

男女ノ川はニヤッと笑うと、やっと手にしたコップのビールをグイッと一気に干した。干してまたニヤリと笑った。

高砂本家は久し振りの大関誕生で、御贔屓衆が次から次へつめかけ、お祝いの挨拶。

そこへ二人の社会部記者があらわれた。日ごろ記者を記者とも思わないだけに、相撲記者倶楽部の面々は、大関に昇進しても相手にしない。

朝日と同盟通信の社会部記者二人があらわれた。

「前田関、大関になったね」

「おウッ。どうもありがとうござい」

「今日はね、君の大関になった喜びを聞きたいと思うが、ひとつ頼むよ」

「ボクは、毎日毎日初日のつもりで髭も剃らず顔も洗わず、やったヨ。それにボクア、固くなるッてことアまるでなかったな。毎日花道の中程まで、莨ぷかぷか、鼻唄まじりよ」

早口のテノールで前田山、陽気にペラペラ喋りまくる。はじめは張手でぶっ飛ばされるんじゃ

ないかと、おっかな吃驚の若い同盟通信の記者も、ついその調子にのせられた。
「ところで前田関、酒はいくつぐらいから飲んだね」
「酒？　……十三ぐらいか」
「莨は？」
「やっぱり同じ頃ですよ、君」
「不良だな？」
「そうなんだ。不良なんだ」
まるで開けっぴろげ。
「道楽はもっぱらキューだけですか」
「道楽か？　道楽は多いぞ。まず酒、その次がダンス、その次が野球」
「酒を飲みすぎると体をこわしませんか？」
「こわすどころか、モロに元気が出るんだよ。土俵へ出るときに仕度部屋で薬缶に一杯」
「道理で、真ッ赤な顔で出てくるわけだ」
「そうだよ。ボウといい気持ちになった所で、遮二無二突ッかかるんだ」
「しかし、関取。ちょん髷つけてダンス踊っちゃ、まわりの空気と不調和でしょう」
「そりゃア、もちろん不調和だと思いますさ。だがボクがちょん髷つけて踊るから、モダンだと君はそんな質問をするんだろう。ちょん髷切っちゃえば、ただの青年。だれが見向くものですかね」

「参った、参った」

見事に新聞記者の方が、この弱冠二十三歳の相撲取りに一本ずばりと、喝破されたのである。

「ねえ、もういいじゃないスか。それより、キャッチボールしようよ」

すぐふんどしかつぎに命じてグローブとキャッチャーミット。球は硬球。「突指でもされちゃかなわねえ」とまわりが騒いだが、前田山は「スポンジボールなんてのは、野球じゃねえ」と突っぱねた。

御贔屓衆、部屋の後援会のお歴々がつめかけ、大関誕生の祝い酒に「乾杯、乾杯」を次々やっている最中、肝心の本人前田山はそんなお付合そっちのけで、部屋の裏の路地で、新聞記者とキャッチボールだ。

なにしろあるレコード会社が贔屓筋をつうじて相撲甚句の吹き込みを懇願にきたところ、

「力士は芸人じゃありませんぞ。たとえ御贔屓のお話でもそれは御免こうむらしてもらいます」

と、きっぱりはねつけた男である。

前年、入幕を果すや、大正三年寅歳生れ同士の高砂一門若松部屋のポン友鯱ノ里（のち年寄若松親方）と意気投合、野球チーム「前鯱チーム」をつくりあげた、大の阪神タイガースファン。

深川洲崎球場のプロ野球公式戦、タイガースが出る試合は、必ず二人で見に行った。

ときの大阪タイガース（十五年九月、阪神タイガースから改称）は、背番号9番主将松木謙治郎以下、ピッチャーに若林忠志、西村幸生、セカンドに藤村富美男、同じく内野に皆川定之、外野に立教大卒の景浦将等々の荒武者をそろえながら、どうしても東京巨人軍に優勝をさらわれて

しまう。巨人のピッチャーはスタルヒン、同じく熊本工出の十九歳川上哲治、キャッチャー楠(くすのき)安夫、内野に三原脩（早大）、水原茂（慶大）、岩本章、千葉茂といったそうそうたるメンバー。

同じトラでも五月生れ、三ヵ月だけ兄貴の前田山は、鯱ノ里をつれ、タイガース対巨人の試合を見に行っては、勝った巨人に悪態(あくたい)をついた。

「やりやがったな、スタルヒン、川上の野郎奴！」

部屋に藤村、景浦、それにダンス仲間の慶応ボーイなどが姿を見せるや、もう御贔屓(ひいき)そっちのけ、自分から立って行ってチャンコの御馳走攻めだ。

「藤村さん、なんとかそのバットで巨人を叩きのめしてくださいよ」

土俵上の精悍前田山とはがらりと違って、このときばかりは、いかつい顔も、まるで陽気な青年になりきっている。

この時代、相撲取りで「おう、野球チームつくろうじゃねえか。相撲のトレーニングにもいいぜ」といい出した関取前田山のアイデアは、時代の先端を行っていた。あとで「前田関、昔明治の大常陸山(ひたちやま)がやっぱり出羽海部屋に野球チームをつくったことがあるんだぜ」という話を聞いて、「前鯱チーム」の監督兼捕手前田山は一層気をよくした。

一門先輩関取衆、男女ノ川、高登の面々は野球などには横を向いている。

いまや本家の新大関前田山は、だれに遠慮することなく「前鯱チーム」のメンバーを固めた。監督兼キャプテン兼捕手は前田山自身。三番を打った。四番の鯱ノ里は一塁。二塁は前田山の弟分、宝ケ浦。三塁は信州山。ショート銚子山。外野は日和山ほか若手の面々。肝心のピッチャー

はこれまた前田山の弟分、幕下の佐田岬。

この布陣で、地方巡業の行く先々、高砂一門一行は相撲興行打ちあげのあと、土地の野球チームと必ず野球試合をこころみた。相撲より先に、「前鯱チーム」と町の野球チームの親善野球大会を行うということで、土地の勧進元と相撲興行開催を取り決めたことさえあった。

町の若い衆は、本職のお相撲さんと野球試合ができる——と、喜び勇んで我も我もと出場してきた。しかし全国各地歴戦の「前鯱チーム」は前田山の監督術よろしく、大概、見事勝利をおさめたのだ。

大相撲地方巡業と一緒に、野球チームが行く。まさに型破りな地方巡業の一行だった。

しかし、モダンの最先端、ダンスは、鯱ノ里の方が先輩だった。

なにしろ、

「角界一の色男」

そう異名をとったポチャポチャと丸顔色白のかわいい男前。最初「太閤山」の四股名で前田山より三ヵ月早く新弟子に入った頃から、いかにも名古屋という都会出身らしいこの美少年は、女にチヤホヤされるより前に、まず慶応ボーイ、いい所の商店の息子連中と仲がよくなった。そんな連中とつきあっているうち自然大流行のダンスをおぼえた。

ダンスホールは東京中、いたる所に我が世の春を謳歌した時代である。なかでも人形町の「ユニオン」、八丁堀の「国華ダンスホール」、京橋角の「銀座ダンスホール」、八重洲口の「日米ダン

スホール」、新宿の「帝都ダンスホール」などは美人ぞろいのダンサーをあつめて有名だった。

前田山は、一人前の関取になるやいなや、ポン友鯱ノ里の粋な道楽が癪の種でもう我慢がならない。ついにある日、鯱ノ里をつかまえ、

「おい、鯱よ。お前エ、ダンス、教えてくれや」

「お安い御用よ」

稽古があがって、チャンコをすませたあと、二人で部屋の二階大広間でダンスの稽古。二人とも浴衣がけの姿である。

先輩鯱ノ里は女がわりになって、まずステップの踏み方から教えた。大きな男二人、手を取りあって、

「ほら。スロースロー、クイック、クイック」

前田山、年季の入った名教師鯱ノ里の巧妙な指導で、たちまち「トロット」「ブルース」「タンゴ」「ワルツ」と見事にステップの踏み方を身につけてしまった。

この男の旺盛きわまりない競争心は、本職の土俵上だけではない。道楽にかけても、徹底して人の上に立たないと気がおさまらない。たちまちそのダンスの軽妙なステップぶりも、ポン友鯱ノ里を追い抜き、ついにはダンス教師の免状まで手にしてしまったのだ。

パートナーになった専門のダンサーさえ舌をまいた。

「関取、あなた、いっそお相撲さんなんかよして、ダンス教師になったら、どう?」

「ボクア、もうダンス教師の免状、持ってますよ」

「あら、まあ道理で。……じゃもう一曲」

ちょん髷、浴衣がけ姿の前田山、ちいちゃなダンサーの手をちょいとつまむや、ブルースの一曲を見事に踊り終えた。

戦後、相撲界にゴルフが入った。するとまたまたこの男、ゴルフに血眼。大概の年寄衆が、「ウン、いい運動になる。もうこれぐらいでいいだろ」とやめる所を一人やめない。徹底して人よりうまくなるまでやめない。ついにはハンディ8にまでのぼりつめた。

4

「不敗双葉山」時代がつづく。

昭和十三年夏場所（五月）、横綱双葉山、十三日間全勝、五回目の優勝。この年十二月、横綱玉錦三右衛門、盲腸炎で摘出した己れの盲腸を摑みながら、急逝。

「双葉山を破る者、精悍前田山」

新聞はこぞって荒武者大関前田山にそう期待したが、最初に双葉山に土をつけたのは出羽海部屋の新鋭、前頭三枚目安芸ノ海だった。

昭和十四年春場所四日目、安芸ノ海のはなった左外掛けの奇襲で七十戦目に陥落したのだ。

この年夏場所を限りに、元関脇高登も引退、年寄大山親方を襲名した。高砂一門に三十七歳の横綱男女ノ川がまだ現役で番付に名をとどめているとはいえ、男女ノ川は佐渡ケ嶽部屋力士であ

る。

本家高砂にいまや現役で君臨する者は大関前田山英五郎だった。

このとき、二十五歳である。

九月、西宮球場で関西準本場所が開催された。

その八日目、九月二十九日のことである。

大阪南区日本橋北詰「富久屋旅館」へ午後五時ごろ、その日肥州山と取組んだ鯱ノ里が浴衣の着流しのまま汗だくで飛び込んできた。玄関から息をはずませ中に入るや、女中数人を呼びよせ、大急ぎで祝言の式場設備の指図。

その数時間前、宿舎で、

「実は親方……」

と、前田山の報告を受け、吃驚仰天した高砂浦五郎親方もすでに「富久屋旅館」奥の間に駆けつけ、御贔屓衆ともども驚き入っている。呆れはてていた。

なんとこの関西準本場所前、前田山は単身郷里の八幡浜に帰り、かつての草相撲の勧進元、土地の醤油会社専務氏の介添で、二十歳になる旧家の令嬢とお見合い。すっかり一目惚れしてしまった。だけではない。すぐこの場所中に祝言をあげるというのだ。相手の都合も、お家の事情も、天下の大関前田山英五郎の知ったことではない。

「大関の奥様」――

に、この芋ばかり食って育った大工の伜、本名萩森金松が、郷里の旧家の令嬢を頂いてさしあ

げるのである。

その「大関の奥様」たる条件は三つ。

一、健康で身長五尺四寸（一六二センチ）、体重十六貫（六〇キロ）の女丈夫であること。

二、接客業の家庭に育った娘でないこと。

三、学歴は高女卒程度であること。

前田山の出したこの三条件を手に、その醤油会社専務氏は、郷里でそれらしき令嬢を物色していた。その結果、今夜「大関の奥様」となる、いまでいう八頭身美人に白羽の矢が立てられたのだ。

立てられた方こそたまらない。有無をいわさず、伊予の国八幡浜から船に乗せられ、この「富久屋旅館」に連れられてきたのだ。

小学校もろくすっぽ出ていない土俵の荒武者が、いまや郷里の名門川之石高女卒の令嬢をわが物にするのである。

「そら不逞者よ。みんな寄ってたかって痛めつけてやれい」

と少年時代足蹴にされた郷里の人びとに、これほど見事なしっぺ返しはない。

このあと、現未亡人も含め、たった一人例外を除いて前田山は計四人の令嬢を嫁にとっている。そのだれもが、愛媛県西宇和郡出身、しかも四人が四人とも川之石高女卒の郷里の令嬢だったのだ。

あの十八歳の少年時代、親方から破門され、郷里八幡浜の草相撲で野良犬同然に痛めつけられ

たことがいかに骨身にしみたか、またその雑食ゆえに相撲が強くなったか、なにが人間の生涯、吉と出るかわからない、その一典型がこの男にみられる。

さて、ポン友鯱ノ里一人、女中さんを総動員して式場設営、御贔屓衆への接待などにテンテコ舞いを演じている間、御大前田山は西宮球場の土俵、この日の相手の磐石を叩き出して悠々六時すぎ「富久屋旅館」に到着。風呂に入り、髪も大銀杏に結いなおさせたあと、紋付姿になるや、ズイと大股に奥座敷に入ってきた。

「いや、親方、わざわざ御苦労」

「うむ。まずは目出度い」

まるで前田山英五郎、部屋におのれが君臨しているかのように鷹揚な態度で親方の横にどっかり大胡座をかいた。すでにその体中から発散する凄味だけでも、貫禄十分、ふんどしかつぎ連はそばにいるだけでもその威圧に恐れおののいて、手がぶるぶる、ぶるぶる震えるのだ。

その凄味あふるる男の許に、「大関の奥様」として差しだされるこの郷里の自慢、旧家の令嬢こそは、全国各地の巡業先々で有無をいわさず白い股開かせて、スポッとへのこ差しをするや、チョチョチョチョと用をたしてきた女郎や芸者衆たちのそれとはさぞや雲泥の差であろうことよ——と、二十五歳の金松は、一人ひそかに舌なめずりしていたのだ。

やがてポン友鯱ノ里手配ずみの内祝言の場も一切ととのい、次の間から盛装をこらした一目惚れの「珍味」がぶるぶる青ざめて出てきた。

かくして、内祝言は目出度く打上げ。

土俵上、いきなりパンパン音を立てて敵を真向から張って行く猪突猛進型、うじゃうじゃした取口の大嫌いな突進相撲そのまま、豪傑は強引に二十歳になったばかりの最極上の生娘をわが物にしたのだった。

関西準本場所を打上げ、相撲協会は各部屋大同合併ですぐ台湾巡業に出発。キールン（基隆）、タイペイ（台北）、タイチョン（台中）、タイナン（台南）、カオシュン（高雄）と台湾各都市を北から南へ興行を打ち、高雄で二組合にわかれて、また暮れの東京へ帰り着く。

その台湾巡業がそのまま大関前田山の新婚旅行に化けた。行く先々の旅館、食事の給仕一切、ふんどしかつぎ衆の役目である。

生れてはじめて心底から惚れて頂いたお嫁様である。それも川之石高女時代、バスケットボール、バレー、庭球の選手をしたというだけあって、ふんどしかつぎ衆でさえ指をくわえて、「ほーッ」と息をのむような近代的な容姿端麗そのもののお嬢さん。

土俵の赤鬼も、ふんどしかつぎ衆の目には、まるで「はあ、それでは頂かせていただきます」と挨拶してから、床入りするかのような下にもおかぬもてなしぶり。朝から夜、夜から朝まであてられっぱなしだった。

「こらッ、奥様に、あれ……」

「あれ？　……」

「ええ、わからぬ餓鬼じゃな。団扇、団扇で風をうんとこさ起こすンじゃい」

食事中、付人衆二、三人がかりで給仕しながら、一人が大きな団扇で「大関の奥様」のうしろ

で、パタパタパタまるでお祭りの御輿を扇ぐような格好で、風を送るのだった。

前田山、御機嫌である。

その年の暮れ、台湾巡業を終え、新婚前田山は、浅草・今戸の通称「橋場」に新居を構えた。いまの江戸通り、松屋に入る東武電車の下をくぐって真直ぐ隅田川沿いに北上すると、やがて言問橋。それをもう一丁真直ぐ行くと隅田川にそそぐ山谷堀にかかった今戸橋。その今戸橋を渡った左手に二階建ての新居があった。

大関前田山の「これこそ男！」という相撲にぞっこん惚れ込んだ大スポンサー、ハチブドウ酒社長、近藤利兵衛夫妻があわてて建ててくれた新居だった。

その新居に、この年七十歳になる前田山のお袋さんが、一緒に住みついたのだ。

前田山そっくりの大女。そのゴツゴツといかつい鬼瓦同然の前田山の実の母が、さながら御目付役のようなにがーい顔で、石のように居坐っていた。

「鬼ババア」――。

ふんどしかつぎの大関付人連は、陰でみんなそう呼んでいた。ところが、洋装のよく似合う八頭身美人の令嬢にうつつを抜かしている前田山本人は、そんなことには気がつかない。

高砂本家の大関が部屋住みの身から、新居を構えるにいたって、付人たちの仕事は大変なことになった。名門高砂部屋に新弟子に入ったばかりのふんどしかつぎ衆が大関前田山英五郎のその新居に、〝当番兵〟となって交替で泊り込みに行くのだ。

なにしろ「大関の奥様」は相撲の世界をまるで知らない箱入り娘。着物のたたみ方さえ知らなければ、御飯のオソウザイづくりもできない。「お母さん、肩もみましょうか」という姑への配慮すら持ちあわしていない。

付人たちは大変だった。

部屋の掃除、食事の面倒、大関の着物の世話、風呂での背中流し、そのうえ飼い犬のお守り。

道路をはさんで家の向うが、隅田川沿いにずーっと南北に長く緑一面の隅田公園である。

その隅田公園を犬三匹を連れて散歩から帰ると、こんどは犬の手入れ。

やがて、大関前田山が御贔屓衆のお座敷から御帰館。

すぐ風呂である。

「おうッ。森よ。背中、流せエ」

ドスのきいた親分のお声だ。

「ヘエッ」

この年昭和十五年春場所、初土俵を踏んだばかりの森ノ里である。後年十両まで行き、三十二年引退、年寄尾上を襲名したが、のち廃業、いまは社会人として成功している。

取的森ノ里は風呂場で必死に汗だくになりながら大関前田山の背中流し。これがあの神様双葉山に真向から張っていった豪傑の背中か、とそう思うだけでもう手がぶるぶる震え、自然力が抜けてくる。

その途端——。

バーン！

と有無をいわさぬ張り手が吹っ飛んで、小さな森ノ里、流しの端に吹っ飛んだ。

前田山、まるでギャングの親分みたいなきつい面構えで、張り手一発で吹っ飛んだ取的をぎょろりと睨んでいる。

ややあって、お叱りの声――。

「背中流しはな、森よ、相撲の仕切りとおなじ、下ッ腹に力入れてやるんじゃい！」

「ヘエッ」

小さな森ノ里はまた大関の背中流しに取りかかる。常識はずれの荒っぽさ。自分が、かつて兄弟子の背中流しで、物言いがつくや、いきなり兄弟子の横面を拳骨でぶん殴ったことなど、そ知らぬ顔つきである。

この取的森ノ里、どんな星の下の生れか、よほど前田山の張り手と相性があったようだ。交替交替の出張泊り込み〝当番兵〟とはいえ、みな昼間は稽古、稽古で体は疲れきっている。

ある夜――。

取的森ノ里は、くたくたに疲れはて、とうとう寝こんでしまった。ふっと首筋に寒気をおぼえて目がさめると、いつの間に畳の上にあがったのか、セパードの野郎、片足ひょいとあげて、自分の坊主頭めがけてオシッコの最中。

「この野郎、親父も親父なら、犬も犬だ。人の頭めがけ、小便ひっかけるとは!!」

いきなりセパードをぶん殴った。犬はキャンと悲鳴をあげる。もう一匹はジステンパーにか

かって、「ウエー、ウエー」の絶叫最中。

森ノ里は、はじめて目がさめ「しまった！」と腰をあげかけたときは、もう遅かった。二階の居間から階段をまるで雷が落ちるような凄まじい音で前田山が駆け落ちてくるや、

「どうしたッ、森」と、六尺褌一本のすっ裸。

「ヘッ」

説明しなくとも一目瞭然。セパードは頭にコブをつくったうえに、畳は小便でびしょ濡れ。

「この馬鹿野郎！　……寝てやがってッ」

物凄い癇癪玉が破裂するやいなや、森ノ里のちいちゃい体は思いざま振りまわされた拳骨一発をくらって、ズデーンと音たてて二間も吹っ飛ばされていた。

やがて夏場所（五月）——。

二階居間から親分の声があがる。

「おうッ。今日は、あれッ、着ていくぞい」

下でその声いまや遅しと待ちかまえていた付人二人、用意万端整った着物一式、座布団の上にのせて、階段を駆けあがる。

前田山本人は、窓を開けはなった隅田公園の鮮かな緑を見ながら、六尺褌一本のすっ裸、ぬっとつっ立ったままである。

そのそばへ、「あれッ」と名指しの着物一式をのせた座布団を置く。上から肌襦袢、長襦袢、

紹の着物、細紐、帯、袴、一番下に羽織――と一枚一枚、身につけて行く順番にそろえあげた着物一式。

ぬっとすっ裸のまま仁王立ちの親分に、兄弟子がうしろへまわり、一枚一枚、衣擦の音も小気味よく、弟弟子が取って兄弟子に渡す。それをスッと軽く手に受け、悠々外の景色を楽しむ仁王立ちの親分に兄弟子が一糸乱れず軽快なリズムで着せていく。

呼吸が合わず、ちょっとでも手をぶるぶる震わせモタモタするやいなや、上から黙ったまま拳骨がゴツン。

凄味のきいた睨みのまま、いきなり拳骨がゴツンと、ハンマーのように容赦なく落ちてくるから、たまらない。

いざ部屋に入って、場所入りの刻が迫り、床山がその大銀杏を結いあげているうちから、両眼の端がもう吊りあがってくるのだ。

「本場所一番相撲」だけに徹した豪傑である。

大のお気に入りは、左肩に三度笠がパッと鮮かについて、裾には赤短青短の花札をズラリと散りばめ、一方に十手が一本スッと粋に染めぬかれた紹の着流し姿。腰には無造作に締めた博多帯。

その姿でステッキを片手に部屋を一歩でるや、両肩をいからせ、足の運び方からして普段と違っている。素足につっかけた雪駄をさらさら鳴らし、肩で風を切るかのように威風堂々、ステッキをついた大関前田山英五郎が行く。

両眼がカーッと吊りあがり、全身みなぎる闘志満々とした威圧感。その三メートルもあとに、

座布団、明荷を担いだ付人二人。

丸い国技館（旧日大講堂）、東と西にわかれて、細長く丸くひろがる支度部屋。

ステッキをついて、戦闘の前からもう真ッ赤な形相でズイと大股に入ってきた前田山英五郎の姿が目に入るや、自然と群れていた他の部屋の関取衆たちもこそこそとさがり、行く所さーッと道があけられるのだ。

単に大関に対して敬意を表してあいた道ではない。付人のみならず、他の部屋の関取衆たちも、前田山の自ずと発散する威圧感、その貫禄の前に内心震えおののいていたのだ。

「ほう、俺らたちも偉くなったぜ」

いつもぶん殴られっぱなしの付人衆たちも、このときばかりはすっかり嬉しくなるのだった。

この夏場所五日目の土俵――。

大関前田山、前頭十枚目大浪（高島部屋）と対した。支度部屋の座布団にどっかと大胡座をかいたときから、一人真ッ赤に怒っている。

「あの野郎、相撲取りの風上にも置けねえ！　ふてエ野郎だ」

かつて自分が風上にも置けぬ相撲取りだったことなどはケロリと忘れている。

噂が立っていた。大浪が浜町の十も歳上の待合の女将にずるずるはまりこみ、あげくの果ては待合の亭主面して、肝心の自分の女房子供も忘れはてている。その女房が子供連れで協会に泣き込んできた。

前田山一人、この日の土俵上でその義憤を晴らす腹である。

しかし、この男――。

なにも大浪一人に悪態をつくだけではない。対戦する相手関取すべて、たった二人、双葉山と大の仲よし羽黒山（このとき大関）を例外にして、本人に聞こえよがしにありとあらゆる悪態罵声の限りをつくして、相手を罵り散らすのだ。

「名寄岩のドン百姓奴。取的時代、わしが酒を教えてやったのよ。酒ちゅうモノは甘くてうめエもンだぜといったら、はあ、あンたさ偉えなあとぬかしおって、一口飲んでみてポーとした顔つきしてやがった、あの馬鹿が」

そういう調子である。

それが名寄岩一人ではない。対戦相手すべての関取、ことに自分より後輩でぐんぐん上位にのしてくる関取衆は、まるでトン（馬鹿のこと）同様に嚙みつかれ、悪態を吐き散らされた。

当然馬鹿呼ばわりされた相手関取すべてが、対前田山戦となるや、その反感を持ち込んで、必死になってかかってくる。それを真向からうけて戦う大関前田山。現代のお上品ぞろいの土俵上ではとうてい見られない、男と男のさながら喧嘩同然の凄まじい熱戦が、前田山の「本場所一番相撲」に展開された。

さて、この対大浪との一番――。

大浪はすでに三十二歳の下り坂。一方大関前田山は脂ののり切った二十六歳。

ドンと一発の突きっ放しで楽々勝てることは目に見えている。

ところが前田山は、立ちあがるやいなや、六尺（一八〇センチ）以上ののっぺりした大男の顔

面めがけて、猛烈な往復ビンタを四つ五つ。思いざま渾身の力をこめた張手を、もろに顔面所かまわず叩きつけられ、大浪はのけぞったまま吹っ飛ばされたのだ。そのうえ「この野郎！」と吐き捨てられていた。

支度部屋に引きあげてきて、前田山、

「ふン。やっと胸がすっとしたわ」

一方、顔面滅茶苦茶に張り飛ばされて、顔つきが変るほどに腫れあがってしまった大浪は、十六年一月場所を限りに大相撲廃業だった。

5

大相撲史上に残る大関前田山の快進撃の本場所がきた。

昭和十六年春場所である。

大盛況の大相撲は、すでに二年前の夏場所から十五日間興行になっている。

十二日目の土俵を迎えるまで、東張出大関前田山九勝二敗の好成績。二敗の相手は、三日目の松浦潟、九日目の玉ノ海（梅吉。のち相撲解説者。当時玉錦三右衛門の急逝後、年寄二所ノ関の二枚鑑札。終戦後廃業）の二人。

このとき大関陣に安芸ノ海、前田山、五ツ島そして羽黒山の四人。前田山よりはるかに後輩の安芸、羽黒の二人が正大関の地位をしめている。しかも関脇にはさらに後輩の肥州山と照国、小

結に出羽湊、名寄岩、旭川。横綱こそ双葉山とすでに三十九歳の化物、男女ノ川の二人だが、負けん気一本の前田山にとって、四年六場所目にして、はじめて正大関の座を後輩二人に明け渡した春場所だったのだ。

「張出大関」――。

この男の意地が、なんとしてもそれを許さない。神様双葉山と化物男女ノ川だけならばまだいい。ところが「張出」。おのれ自身にまずそれが我慢ならない。腹が立って腹が立って、煮えくり返る。

こうして迎えた十二日目からの土俵、対するは羽黒山、双葉山、名寄岩――。

「立浪三羽烏」と我が世の春を誇る大関、横綱、関脇の立浪三人衆である。相手にとって不足はない。

「張出大関」前田山英五郎、十二日目からの土俵を迎え燃えに燃えた。九日目対玉ノ海戦の黒星のさい痛めた右足首の骨を嚙じられるような疼痛も、「横綱」の声のかかった正大関羽黒山の面を、土俵上で睨みつけた一瞬吹っ飛んでいた。

立ちあがるや、羽黒山の顔面めがけて猛然と張手を連発。羽黒、目を開くこともできず土俵を割っていた。

まず立浪三羽烏の一角を一蹴、と同時に十勝二敗の星。

十三日目、いよいよ双葉山である。

ひとたび土俵上にあがるや、一回「力水」をつけたきり二度と水をつけない双葉、相手がどん

な奇襲をかけても自分では決して「待った」もしない「押さば押せ」の不動双葉山である。過去六回の対戦、前田山はどうしても勝てない。前田山だけではなかった。過去、この「不敗」の代名詞双葉山に土をつけた者は六十九連勝でストップをかけた安芸ノ海と、そのあと勢いにのってつづいた両国、鹿島洋、玉ノ海の計四人だけである。

両者悠々土俵にのぼった。

双葉山は右四つが得意。一方精悍前田山、組めば左四つ得意。喧嘩四つである。

両者同時に立つや、一気に双差しを狙った前田山、それを突っぱね前にでる双葉山。次の一瞬だった。前田山は土俵上仁王立ちとなるや、得意中の得意、猛烈な張手を双葉山の顔面に炸裂させたのだ。かつての奇襲戦法として張った往復ビンタとは雲泥の差がある。捨て鉢ではなつ張手ほど、卑怯な手はない。しかし、このときの前田山は最強の武器として、徹頭徹尾気魄の張手を連発したのだ。

尋常な神経でできる芸ではない。

その力の限界まで張りまくったはてに、双差しとなり、頭をつけて、半身となっていた。そのまま強引に双葉を吊上げながら、体を左に低く落とした一瞬、双葉山の右足が俵の外へ出ていたのだ。堂々、捨身の吊出しだった。

一閃、伊之助の軍配はさっと東、前田山にあげられていた。国技館内、水を打ったような静けさにのまれていた。

このあと前田山対双葉山戦は、次の夏場所（五月）双葉山の白星を最後に打切られている。

十四日目の土俵、羽黒、双葉を連破した前田山の前に、関脇名寄岩は敵ではなかった。白星一つを重ね十二勝二敗。

「横綱目ざす前田山」

立浪三羽烏を総崩れさせた大関前田山を、新聞は一斉にそう書き立てた。

しかし、千秋楽（十五日）、関脇照国に取りこぼし、そのたった黒星一つの差で目の前にぶらさがっていた横綱の夢は飛び散っていた。

この場所、優勝は横綱双葉山定次、八回目、十四勝一敗だった。その一敗は、むろん前田山戦の黒星である。

その場所後である。

春場所十五日間の土俵上暴れに暴れまくって日本中の相撲ファンの度胆を抜いた荒武者前田山の隠れた悲劇が明らかになったのだった。

「大関前田山夫人、自殺をはかる」

朝日新聞一紙がすっぱ抜いた。

野獣さながらの前田山のもとに「大関の奥様」として有無をいわさず引っぱってこられてまる一年、前田山実母の監視つきでただひたすら恐ろしさに一人耐えぬいたあげく、精根つきはて、場所前の稽古で前田山の留守中、カルモチンを呷ったのだった。幸いに未遂に終った。そして春場所を告げる触太鼓が街々に響く初日、媒酌人に付添われそのまま郷里に帰ってしまったのであ

る。

「あの鬼ババアの監視つきじゃ、いくらなんでもいたたまれねえやな。無理もねえぜ」

部屋の若い者は、陰でそういいあった。

運悪くその陰口が、当の前田山本人の耳に入ったからたまらない。

陰口を叩いた本人が、部屋の大広間、長火鉢のわきに、待ち構え真赤な形相で怒り狂う前田山の前に呼びだされた。

信州山由金である。

のち昭和二十年十一月入幕、前頭四枚目まで進み、二十四年一月廃業した。一時プラスチックの魚の餌を考案し東京・大森で大成功したが、商社資本に乗っ取られ、事業不振のうちに、昭和五十一年八月二十日、肺ガンで死ぬ。

前田山は信州山の不貞腐れた面を見るやいなや、その面めがけ拳骨で殴りに殴った。

信州山、悲鳴一つあげない。

千秋楽の夜、大奮戦の前田山を祝う御贔屓衆、後援会お歴々、一門年寄衆みなそろった最中である。前田山は、信州山の面がどす黒く内出血で脹れあがり、気絶してぶっ倒れるまで、徹底的にこの弟子をぶちのめしたのだ。

おのれが惚れ抜いてモノにした嫁がカルモチンを呷った末、無断で郷里へ逃げ帰った。別の気にいった娘を金松にあてがってやる一心で、その好いた女を、地方巡業の留守中、勝手にいびりぬき、ついには自殺未遂にまで追いやったおのれの実母——。その実母を、鬼ババア呼ばわりさ

れた。

その三つの怒りが爆発した前田山だったが、同時にまた二つのことを身にしみて教えられたのだった。徹底して不幸な信念だった。

「女房不信。親不信」――。

その年、昭和十六年夏場所を打ちあげ、高砂組合地方巡業一行は東北路へ旅立った。連日連夜自棄酒二升を軽く飲み干し、そのあげく土地の女郎衆を抱いて、とうとう花柳病を頂戴した。

「ヨコネ」

と、この世界ではいう。

世間一般では恥ずべき花柳病だが、相撲世界にあってはあたりまえの病気。

明治の大横綱常陸山谷右衛門を大の御贔屓にした日本細菌学生みの親、男爵北里柴三郎博士（昭和六年、八十歳で没）創立になる芝白金の北里研究所がこの大相撲力士連中の花柳病、軟性下疳、つまり「横痃」を一手に引き受けていた。ここで北里柴三郎医学博士のお弟子で、秦博士の発見になる「サルバルサン」がつくられているのだ。

地方巡業がはねるや、力士連中はぞろぞろ北里研究所の一角、診療所性病科部長小松経雄博士の診療所に通うのだった。

「先生、またヨコネ。606、一本たのンます」

泣面で頼みこむ。

なにしろ、このヨコネを切る手術は痛くてさすがの力士連中も悲鳴をあげる。淋病、梅毒の菌が血液に入るや、荒っぽい稽古で体を鍛えあげる力士の場合、それが一物の両脇の股へ腫物になって出てくる。当然ヨコネも「横根」と書いて不思議はないが、それを「横痃」と命名した人物もまた粋である。

そのヨコネを切られる手術、あんまり痛くて両手両足をベルトで手術台に縛りつけられたまま、鋼鉄の寝台を背負って駆けだした男までいるというほど痛い。

そのヨコネを切って、あと「606」と呼ばれるサルバルサンの注射一本を打って無事卒業となるのだ。

ところが、このときはヨコネよりなお質が悪かった。

高熱でキンタマ二つがまるで夏ミカンのようにプーッと大きく脹れあがる睾丸炎である。子種、つまり精虫がその高熱で死滅してしまう。

その睾丸炎を運悪く、豪傑は地方巡業の最中にやってしまった。

看板役者が「606」を求めて東京の小松先生のもとへ走ってしまっては、高砂組合地方巡業は勧進元からも見放される。しかもこのとき、東京では郷里出身の大の後援者、黒沢茂雄氏が一門年寄衆には内緒でひそかに金集めに奔走している。

この年、六十三歳になった三代高砂浦五郎親方が、前田山の御贔屓黒沢氏にこういったのがきっかけだった。

「わしもこの齢になってな、つくづく疲れたよ。ついては、ごくわずかな金で高砂の財産一切を

だれかに譲ってな、隠居したいと思うよ」
「すると親方、そのだれかとは、大関？」
「ふむ。あの佐田岬といった乱暴狼藉者も、よくぞ大関にまでなったものよなあ。地獄の沙汰も金次第じゃ、のう」
「親方、その高砂襲名のごくわずかな金とは？」
「それよのう。わしの弟子、部屋はもちろん電話にいたるまで一切すべて、高砂浦五郎の株とともに、八万でどうじゃな」
「八万？」
渋谷・道玄坂に大邸宅を構え、自動車会社社長、日産油脂にも関係する一代で財をなした黒沢氏も「八万円」と聞いて腕を組んだ。
十本入りの莨「金鵄」（敵性語禁止で改名されたゴールデンバット）一箱が十銭、二十円の家賃で六畳三畳二間の借家に住めた時代の八万円である。
ついには高砂部屋後援会長に祭りあげられている前田和三郎博士まで、金集め役の黒沢氏に連れだされ、大物口説きのときには、顔をつきあわされている。
ハチブドウ酒の実権者、近藤利兵衛氏の奥さんは黙ってポンと二万円を出した。養子の利兵衛氏も「まあお祝いじゃい」と五千円を包んだ。
しかし、当の本人前田山は御贔屓衆がおのれのために金を出しあってくれていることを百も承知のうえで知らぬ顔。

いまや、豪傑はそれどころではない。

地方巡業、高砂組合の行く先々、旅館の奥座敷に着くや、浴衣がけのまま、布団に仰むけに寝ると、麻布の六尺褌で巻いただけの夏ミカンさながらに脹れあがったキンタマ二つに、付人に命じて氷で湿布。氷枕を、両足開いた股座に据えつけ、ネルの袋に氷を一杯つめさせ、高熱のタマ二つの上にのっけて、大の字になるのだ。

隣りに当番の付人が疲れて寝込んでいる。

夜、氷が溶けると、ステッキで寝込んだ付人の頭を一つコツンと叩く。

「おウッ、朝見、はようやれ。氷がすっかり水じゃ」

「ヘッ」

前年五月初土俵を踏んだばかりの朝見山は眠い目をこすりこすり、廊下に出ては、大きな桶の中の氷を割って袋の中に入れるのだ。

「親方、これでよろしやすか」

「朝見よ。こんど氷を割るときはな、もっと廊下の向うへ桶持ってってやれッ」

「ヘッ」

「ちょっとでも寝ないことには、明日の相撲が取れん」

「ヘッ」

付人朝見山が、濡れた六尺褌を新しいのと取り替えながら見ると、へのこは大きな夏ミカン二つの間にしょぼッと萎えてちいちゃく見える。氷枕を股座にまた据えつけおわるや、また横に

なってごろり。すると横からステッキで横腹を突つかれ、豪傑の声。
「なあ、朝見よ。お前エも男なら、このヨコネぐらいやらにゃ、一人前エの関取にはなれンぞい」
「へッ」
「双葉関だってな、ヨコネ、片一方やっとるンじゃい。わしは両方よ。えッ、どうじゃ」
こうしてあくる日の巡業興行、豪傑前田山を一目、見ようと土俵のまわりは朝からお客さんで一杯。両国・国技館で本場所を見ることは、田舎へ帰ってからの大変な自慢話という時代である。いよいよ最後の一番、大関前田山の登場。旅館の座敷で脹れあがった股間を大事にガーゼで巻いて、その上に柔らかい締込をそっと巻きつけるや、ステッキをついて威風堂々群衆の前にその鋼鉄のような胸ぐらを見せ、土俵に登場。群衆は締込の下のありさまには気もつかない。
相手は親分の一突きで、ズデンと派手に吹っ飛び、土俵の下に転がり落ちる。
その勇猛果敢な一突きを目の当りにするだけで、土地の人びとは大喊声をあげるのだった。

その年の暮れ、東北路の地方巡業を打ちあげ部屋に帰りついた一門年寄衆、三代高砂親方に全員呼ばれ、こう申し渡されたのだ。
「もうわしも歳をとった。ついては四代高砂浦五郎を大関前田山に継がせるから、いままでの気持ちを変えず、この高砂部屋をもり立てて行ってくれよなあ」
一門年寄衆みな、呆然とした。寝耳に水とは、このことと、呆気にとられていた。

年があけ、昭和十七年一月一日、協会に正式に四代高砂浦五郎襲名の届けをすませ、大関前田山英五郎の名とともに二枚鑑札となって、大部屋高砂一門総帥として君臨することになった前田山。一門年寄衆を大座敷にずらりと集めるや、喧嘩を売るような形相で、大先輩たちの面を一人一人睨みまわした。やがて、ドスのきいた声で一言――。

「今日からわしが二枚鑑札、四代高砂浦五郎として、部屋をみる。わしについてきてくれぬ者は、そのむね表明してもらいたい」

眼前の大先輩、年寄衆みな、おのれに反感を持つ敵ばかり。それを百も承知のうえだ。

このとき「ふざけた餓鬼よ」とばかり去っていった中に、鳴戸親方（元大関太刀光電右衛門）がいた。

ときに前田山英五郎は弱冠二十七歳にすぎなかった。

のちの話になるが、三代高砂浦五郎は、昭和三十六年四月まで生き、本名坪井長吉として、老衰のため八十二歳の高齢で歿した。

6

「物凄く強いが優勝できぬ」前田山に、たった一回優勝がある。

昭和十九年十一月、空襲激化の中で翌春場所を繰りあげ強行した、後楽園球場での変則晴天十日間場所のことだった。

九勝一敗である。一敗の相手は大関名寄岩だった。

「万年大関前田山」

いつしかそう渾名された豪傑が、第三十九代横綱にのぼりつめる日が、ついにきた。

終戦直後の昭和二十二年夏場所（六月一日初日）、明治神宮外苑で開催された晴天十日間興行の場所後、延々二時間に及んで揉めに揉めぬいた末、誕生した第三十九代横綱前田山英五郎だった。

それも横綱推薦仮免許に相撲開闢いらい、前例のない次の一札が入っていたのである。

「別に粗暴の振舞ある節この免許を取消す」

ときに豪傑は、三十二歳になっていた。

この明治神宮場所、場所入りする関取衆の姿はだれもかれも見るも無慙なものだった。汚れた国民服に開襟シャツ姿の者、作業ズボンに下駄履き姿の者、ことにかつての「文ちゃん」年寄田子ノ浦の色あせた袷に細帯一本のわびしい格好は、見るも寒々としたものだった。

その中でただ一人、紋服姿で整然と威儀を正し悠々場所入りする一人の関取がいた。

実に九年十八場所に及んで勝率六割九分八厘と堂々名大関を勤めあげてきた四代高砂浦五郎こと前田山英五郎の姿だった。

身長一七九センチ、体重一一二キロ。

戦災で両国界隈すべての相撲部屋が焼失し、湘南方面、あるいは大宮から場所入りする他の関取衆とは違い、前田山は神宮外苑の目と鼻の先、渋谷・道玄坂の黒沢邸から場所入りしていたの

だった。

この夏場所、大関前田山は八日目の土俵、おのれを追い越して昭和十七年一月第三十六代横綱を張った大の仲よし羽黒山政司と対した。

八日目まで前田山は前日、対神風戦で黒星一つ喫したのみで六勝一敗。一方優勝経験を過去四回持つ横綱羽黒山はきれいに白星を七つ並べている。羽黒山は土俵の先輩前田山を追い越したとはいえ、同じ寅年である。

おのれの兄弟子双葉山に一回土をつけた前田山を「偉い男だ」と常に畏怖さえしていた。その畏怖感が土俵上にのぼったとき、どっと堰をきったように溢れ出てきたのだ。

仕切に入って、手がおろせない。

前田山、悠然と仕切って、土俵に手をつけても、羽黒山は手をつけず浮かせている。おろすと見せて、ひょいと手をあげる。

制限時間いっぱい、最後の塩をつけるや、前田山は闘志満々手をおろした。

しかし、羽黒山は手をおろさない。

(この野郎！　スタンドプレーだッ)

前田山、顔面真ッ赤にして心から怒ってしまったのだ。立って、ひょいと塩をとりに行こうとした。驚いたのは行司木村庄之助である。

「前田関。いけません。時間ですぞ」

そう声をかけられ、怒りにさらに火がついた。全身でいきりたったのだ。

立ちあがるやいなや、グイと磐石の構えで腰を割ったまま、向ってくる羽黒山の横面を思いざま、伸び切った弓の弦が弾き切れるような音をたて引っ叩いたのである。いきりたったそのまま、無茶苦茶に羽黒山の顔面に張手をぶっぱなした。こんな相撲一番、いまのテレビ中継の画面にのせたら、猛然と「反前田」の抗議投書の山が殺到することは疑いもない。

羽黒山は目の前が見えなくなった。そのまま体を預け、四つに組んだまま水入り。勝負再開後、前田山は引き落としに羽黒山を下していた。

こうして千秋楽、前田、羽黒ともに九勝一敗同士で優勝決定戦にもつれ込んだのである。

夏場所十日間、二度迎える顔合せ。

もうこのときは横綱羽黒山、本来の自分を取戻していた。前田山の怒濤の突進を受けとめるや、あとは見事料理していた。

優勝横綱羽黒山、九勝一敗。五回目。

準優勝大関前田山、九勝一敗。

場所後揉めに揉めぬいた番付編成会議の席上、満場一致の中、最後まで横綱推薦反対の強硬論を唱えぬいたのは、高砂部屋利益代表である佐渡ケ嶽高一郎理事だった。一同呆然とした。

「横綱としての人格識見に欠く！」

その正論を二時間かかって、長老出羽海相談役（元両国梶之助）が説き伏せたのである。

前田山はついにおのれの力一つで第三十九代横綱の最高位をもぎとったのだった。

その年、大晦日のことである。

前田山の代理で会いにきた現役引退直前の鯱ノ里を「角界一の色男とはどんな男？」と、見物したあと、「相撲社会の一番忙しいときを一回見てくれまいか」という誘いにまんまと乗せられ、三日前喜須木村の隣り愛媛県西宇和郡保内町から高砂部屋見学に上京したばかりの二十六歳になる娘がいた。ところが見学どころか、娘は、横綱前田山英五郎と強引に祝言をあげさせられていた。

否も応もなかった。

高砂部屋に見物にきたはずのお客さんに向って、稽古あがりの髷だけは結って真ッ赤な形相でドテラつっかけた豪傑が十畳の座敷にズカズカと入ってくるや、テーブルの向うにふんぞり返えって胡座をかき、

「きたなくてびっくりしたでしょう」

「いいえ」

と、娘は、人の家がきたなかろうが関係ないとばかり突っぱねたはずだった。

それが大晦日の昼すぎ、稽古があがって別室で前田山の声がする。

「おうッ、那智。紋付を出せエ」

ははあ、大晦日のこと、どこやらの御贔屓へでも挨拶に出かけるのだな？　——と思った途端、近くの回向院横の若松部屋から着流し姿の鯱ノ里が泡を食って娘の座敷へ飛び込んできた。

「えッ？　……もう盃するんだって!?」

「だれがですか」

娘はきょとんとしている。

「いや、俺は、若エ者が盃するからいますぐこいという命令で、泡食って飛んできたのよ」

「そんな話、知りませんよ」

伊予の国、西宇和郡保内町日土村で柑橘類などの大果樹園を経営する大地主の女ばかり七人姉妹の末娘。すでに戦時中貿易商と結婚、それを御破算にした経験をもっている。やはり郷里の名門川之石高女卒だった。

別室では、那智錦以下の付人衆が、掛声も勇ましく、衣擦の音をさらさら立てながら、

「ヘイ、帯。ヘイ、羽織」

そのとき、鯱ノ里は正座するや畳に頭をすりつけて、心底から声をしぼりあげた。

「頼む。お返事、いただきたい。……横綱の顔がたたなくなる」

「どうする、好ちゃん。あんたの心一つだ」

郷里の実家を継いだ義兄、清水芳保氏がぽつりいった。心配のあまり一緒に上京してきていたのだ。

「わかりました。鯱ノ里さん。したければ、盃いたしましょう。私も生娘じゃありません。ただし、いやになったら、いつでも飛びだしますよ」

娘は覚悟をきめて、そういいきったのだ。

前田山はまた相手に有無をいわさず、郷里の旧家の令嬢を四度、わが物としたのである。

この娘こそ、まるで野獣のような、人を人とも思わぬ男の後半生を二十数年に及んで調教しきった高砂部屋女将、現好美未亡人である。

「なんか好ちゃんがかわいそうだ。まるで鬼ケ島へ流したようなもんだ。俺アうしろ髪が引かれる思いだよ」

義兄はそういい残して、この盃のあと、一人郷里へ帰って行った。事実、旧家清水家の叔父叔母はその結婚を知って「あんなどこの馬の骨とも知れぬ素姓の男の許へ嫁いだ娘なんぞ金輪際家の敷居をまたがしてくれるな」と母親に申し入れている。しかし後年、その叔父叔母は姪の前に手をついてあやまった。

その初夜のこと、奥座敷でドテラ姿の四代高砂浦五郎こと前田山、神妙に正座しなおすや、腕組みしたままいいだした。

「一言、いっておくことがある。……一に弟子、二に後援会、三に母親。わしは四でも五でもいいから、若い者を頼む」

そういって、この稀代の豪傑は畳に両手をついて娘の前に頭をさげたのである。

あとになって、実は「一に俺、二に俺、三に俺、四も五も俺」だったと思い知らされ、五年間苦しみに苦しみ抜いたが、そのときばかりは、娘もほっと感心した。裸の男を見た気がした。

そのあと、

「疲れたでしょう。明日は正月。また朝が早い。もう休みましょうか」

いうなり、豪傑はバサリとドテラを脱ぎ捨てた。まるで強姦さながらの勢いで白い肌の上にの

しかかっていた。

そして用だけすますや、女を満足させることなぞついぞ知らず、ごうごうと鼾を立ててねむっていた。

「わしはな、女をいちゃいちゃ口説いて、それからのっかるなンて手間、でエ嫌いよ。へのこをスポッとつっ込む。それが女じゃい」

それが十八番。それがために、戦時下名古屋の軍需工場で「相撲勤労報国隊」として興行中、嫁としてモノにしたはずの女に、部屋の若い者と一緒に夜逃げされている。

徹底した女不信、女蔑視だった。

結婚して四日目の夜、好美夫人にこう豪語したのだ。——

「おウッ。いっとくけどな、抱いて寝てるときだけが女房じゃい。あとは他人だから、それだけは承知しとけよッ」

商売女ならいざしらず、嫁を嫁とも思わぬこの無茶苦茶ぶり。土俵の上も敵ばかりなら、一門年寄衆もみな敵ばかり。なおそのうえ私生活に至るまで女房を敵にしている。

事実、過去どの嫁も、萩森籍には入れていなかった。好美夫人が萩森姓になったのは、実に十年後のことだった。

まだ松の内のある午後——。

二所ノ関部屋の大関佐賀ノ花が、碁を打ちにやってきた。戦時中大の野球好きが敵性語使用禁止で、ストライクが「よし一本」、アウトが「退けエ」となるに至って、野球は諦め、教師免状を

持つ得意のダンスも昭和十五年十一月一日を期してホールが閉鎖され、前田山は碁をおぼえた。暇さえあれば、小さな碁盤を前に、胡座をかいて本を片手に独り碁を打つ習慣だった。

付人は用さえすませば恐れてそばにも寄りつかない。

豪傑は、孤独だった。

しかし、そんな感情はおくびにも表にはださない。両目玉をぎょろつかせて、一門に君臨している。

前田山と佐賀ノ花の二人、碁盤を中に十畳の居室で対峙した。二人とも早打ちの争い碁だ。

中盤の戦いに入ったときだった。

部屋のどこか遠くから、そばで聞けば胸が張り裂けそうな女の泣く声が聞こえてきた。

（なんだろうなあ？）——。

佐賀ノ花、そう思いながら、眉一つ動かさず碁を打つ。一方、前田山は盤上を睨めつけたまま、悠然と石を置く。女の絶叫を耳にしながら、二人の男は悠々碁を打ち終った。

佐賀ノ花は、このとき前田山の高砂親方に新しい嫁がきたことを知らなかった。あとになって、それを知り、それを耳にしながら平然と顔つき一つ変えなかった前田山という男の図太さに舌をまいたのだった。

（結婚まもない新妻を絶叫させるほど叩きのめして、平然と碁。あの男は、たしかに野獣だ）

佐賀ノ花は、あらためてそう思い知らされたのだった。

7

「別に粗暴の振舞ある節……」

そう前代未聞の一札入りで型破りの横綱を張った前田山英五郎は、その横綱をやめるときも天下の人びとを驚かせた。

昭和二十四年秋場所（十月）最中だった。

大阪で前年から開催された秋場所十五日間興行である。

このとき横綱前田山は、初日対力道山戦に白星を一つ、あとはきれいに黒星五つを並べ、七日目対三根山戦から休場してしまった。休場理由はタイヤー氏病（腸カタル）。その診断書をポン友、年寄西岩（元鯱ノ里）に預けたまま、宿舎から出ると呼びよせておいたタクシーに乗った。

「おや？　どうしたんや？　医者か？」

一門年寄常盤山峰五郎（元前頭六枚目太刀若）が、そう声をかけた。

「いやあ。もう休場したからには、大阪におっても用はないわ。東京へ行って養生してくるぜ」

「お、そうか。ま、気つけていきなさい」

その夜、大阪梅田発の特急夜行列車に一人飛び乗るや、あくる十月十五日、小雨のぱらつく後楽園球場に午後一時すぎあらわれたのである。

勝手知った後楽園球場の正面通路をくぐり抜けて、ネット裏、右端の役員席に坐った。

戦後はじめて迎えるアメリカのサンフランシスコ「シールス」軍と巨人軍の初の日米親善野球。後楽園球場は、オドール監督率いるシールス軍を見ようと集まった大観衆でふくれあがっている。おりしもシールス軍、巨人軍ともに全選手がグラウンド上に並び、場内放送が選手紹介中だった。

「巨人軍総監督三原脩。ピッチャー背番号29番、別所毅彦。同じく背番号17番、藤本英雄」

場内放送のたび観衆総立ちで拍手の嵐——。

「ファースト、背番号16番、川上哲治」

一段と拍手、歓声が高まる。

前田山は、もうれしくて役員席に坐ったままじっとしていられない。不入りの大相撲大阪本場所にくらべ、戦後早くも見事復活をとげたプロ野球に集まったこの大観衆の喜びようはどうだ！——そう思うと、我慢がならない。

役員席の顔見知り、日本野球連盟副会長、鈴木惣太郎氏をつかまえるや呼びかけた。

「鈴木さんよ、プロ野球にくらべ、どうして相撲には人気が集まらんのでしょうなあ」

「やあ、前田関か。……よく、きてくれた」

GHQ科学経済局長ビル・マーカット少将の舞台まわしで実った戦後初の日米野球。その交渉、また三日前来日以来総勢三十一名の受入れ仕事に忙殺されている鈴木会長は、横綱前田山が本職の本場所をすっぽかして、一人ひょこっと後楽園球場にあらわれたことなぞ、ついぞ知らない。

場内放送はまだ続いている。

「……センター、背番号23番、青田昇」

球場は割れかえるようなどよめきだ。

「鈴木さん、オドール監督に紹介してくれエ」

「ああ、よろしい」

前田山はもう立ちあがっている。

選手紹介が終るやいなや、背広姿の横綱前田山は役員席からグラウンドに出て、スタスタ歩きだした。

その予想もしなかった役者の姿を見て、大観衆がドッとどよめくより先に、新聞社のカメラマン連中が吃驚仰天した。喜び勇んでカメラを持ちなおすや、そばに走り寄って、まるで大相撲を代表して晴れ舞台に登場してきたかのように悠然と構えた横綱前田山英五郎とオドール監督の握手に、次々とフラッシュをたいた。

二人の間に立った鈴木氏、

「コレハ、スモウ・チャンピオン、マエダヤマ。タイヘン、ベースボール、スキ」

オドール監督は、思いもかけず日本大相撲チャンピオンを紹介され大喜びだ。一方、前田山も連日の新聞で人気絶頂のオドール監督に紹介されて、うれしくてたまらない。

両者、何回も何回も握手を繰り返した。

このシールス対巨人戦、一回先攻のシールスはいきなり五点をあげ、ピッチャー川崎徳次をマウンドから引きずりおろした。三原監督はつづいて別所、藤本を投入したが、ときの巨人軍の力をもってしてもマイナーリーグ、シールスの前に歯が立たなかった。十三対四の惨敗だった。

ところで、大阪――。

ラジオの中継放送で、病気休場したはずの横綱前田山が、後楽園球場の大観衆の前に悠々現れ、オドール監督と握手、物凄い拍手で迎えられるその情景を知るや、協会役員一同愕然となった。あんまり驚き呆れはてて、怒りだすまで時間がかかったほどだった。

「まずいことを、やってのけてくれたのう。前田関は……」

ときの協会大黒柱、出羽海相談役がまずぽつりそういった。

それから間もなくだった。

大阪国技館内の協会役員室に東京から電送写真で送られてきたオドール監督と握手する前田山のニコニコ顔の写真を手に、地元の相撲記者団がいきりたって飛び込んできたのだ。

「何だこのざまは！　……前田山は大阪を馬鹿にしよんのかッ」

「いや、相撲ファンに対して、まことに遺憾に思います」

時津風理事（元双葉山）だ。

「遺憾ぐらいや、あきまへんで。どないしてくれんのや、えッ」

「横綱の最高位にある者として、実に角道の上からも恥ずべきだ」

秀ノ山検査役（元笠置山）も、大阪の相撲記者衆の前におろおろしている。

「無茶苦茶やないかッ。えッ!?　横綱がやね、相撲さばりおって、オドールと握手なんて、アホかいな」

大阪の相撲記者団はさんざんに前田山をこきおろして引きあげた。

この勢いに、協会も前代未聞の横綱追放を決意。千秋楽の前日、また大阪にふらりと舞い戻ってきて、千秋楽出場を申し入れた前田山に、「その行動、不謹慎」と出場停止処分。千秋楽、一門年寄西岩親方に引退届を出させ、ついに「別に粗暴の振舞ある節」の一文をタテに、第三十九代横綱前田山英五郎に詰腹を切らせたのである。

しかし、前田山本人は、自分でやめた、と信じていた。

相撲博物館に残る横綱前田山英五郎伝正史には、千秋楽大腸炎のため引退を声明とある。

ときに、三十五歳だった。

同時に四代高砂浦五郎親方の看板一枚になった。

むしろ、晴々とした。

好きなプロ野球も見て、そのうえオドール監督とも握手し、その知らせにオロオロとうろたえた協会お歴々を腹の中で一人笑い飛ばしていた。

「横綱の最高位にある者として角道の上からも恥ずべき」などという勿体ぶった仰々しさに至っては、実際笑止千万きわまりなかった。

「なにが角道の上じゃい。角道とはな、必死に相撲を取ることじゃい。わしは、体の調子が悪くてそれができんから、休んで野球を見に行っただけよ」

豪傑は、また独り碁を打ちながら、独り苦笑していた。そして、二年後相撲界はじまって以来初の囲碁初段免状を日本棋院から授与されたのである。のち、四段までなっている。

「モノいえば唇さむし」

古い因習だけが取柄のちょん髷世界にあって、ちょん髷のなくなった年寄高砂浦五郎には、そんな馬鹿馬鹿しい因習は最初から糞食えだった。自分のやりたいことをやる――。

年寄になって二年目、昭和二十六年夏場所（五月）打ちあげ後である。

この夏場所から、勝負検査役に就任している。

その勝負検査役の高砂親方が、なんとアメリカ行きをいいだしたのである。ひとたびいいだしたら、あとには退かない男だ。腹が立つと理事長にさえ噛みつきかねない。

「アメリカへ大相撲を紹介に行く。ついては力士を三人貸してもらいたい」

「大相撲をアメリカへ紹介？」

ときの協会を牛耳る理事長出羽海（元横綱常ノ花）、伊勢ケ浜（元清瀬川）、楯山（元幡瀬川）、時津風（元双葉山）、武蔵川（元出羽ノ花）、それに佐渡ケ嶽（元阿久津川）、この大先輩衆も、突飛な申しでに一同呆然とした。協会内の爆裂弾みたいな男に、ごろりと一個爆裂弾を前に突きだされたかのようにギョッとした。

しかし、「大相撲を紹介」という大義名分の前にぐうの音もでない。ついに許可を与えた。ただし、条件つきである。

「次の秋場所には必ず帰ること」

その条件つきで、高砂団長は幕内関取三人を自ら選んだ。二所ノ関の大ノ海（のち花籠親方）、出羽海の八方山（のち不知火親方）、高砂の藤田山の三力士に白羽の矢を立てたのだ。

六月三十日、横浜出帆のＡＰＬ客船プレジデント・ウイルソン号でまずハワイに渡った。ハワイの日系一世の人びとは、故国日本からきた大相撲興行を迎え大歓迎、日系二世の４４２部隊の勇士たちも手放しで喜こんだ。

三週間に及んだハワイでの大人気ぶりをプロモーターのアル・リチャードソンがアメリカ本国へ向け派手な宣伝を次々と飛ばす。やがて、ちょん髷をつけた世にも珍しいレスリングを大群衆が待ち構えるアメリカ本土、カリフォルニアへ飛行機で乗りつけた一行は、まるで国賓待遇ぶりだ。

団長高砂一人洋服姿、あと三人は羽織袴、頭にちょん髷をなびかせている。飛行機のタラップを降りるや、待ち構えた車に乗り、パトカーの先導でホテルまでノンストップ。ホテルの廊下にも護衛の警官つきだ。

こうしてカリフォルニアを振りだしに、全米各都市を一巡。その行く先々、満員の盛況ぶりで、ついにはホワイトハウスで、ときのバークレー副大統領にも謁見。テレビにも出演、さらには講和会議で沸き立つサンフランシスコでは、チャンピオン前田山は颯爽と土俵入りを披露。

ＥＰＳ特約のアメリカ・スポーツ通信記事が朝日紙上に掲載された。

「一日に四人は百ドルも食べる。毎食事にめいめいビフテキを二人前、玉子一ダース、野菜サラダ二人前、そのうえビール五、六本、サンドウィッチ二人前も注文する。それにアメリカ式ハンバーグステーキが気に入り、一日に二十も三十も食べるときがある。藤田山のショーマンシップは一番成功だった。大ノ海はアメリカでも将来有望である。彼がアメリカ滞留を望めば、レスリ

ングで世界一になれよう」

大歓迎攻めで、九月の秋場所に帰るどころでなかった。高砂団長率いる一行はあっさり協会との約束を蹴飛ばし、毎日ビフテキ二枚、玉子一ダースで腹を一杯にして悠々全米各地をまわり歩いた。

協会は火のついたように騒ぎだした。それより前に高砂一門年寄衆がこの好機に、不埒きわまる高砂を一門から引きずりおろせと暗躍をはじめたのだ。

お家騒動の勃発である。

たった一人留守を守る好美夫人が後援者黒沢氏に泣きついた。黒沢氏は協会理事の要職にある佐渡ケ嶽親方に相談を持ちかけた。

「高砂一門の恥を天下にさらしてはならぬ」

佐渡ケ嶽理事は、ただそのことのためにのみ、朝日新聞客員で常陸山谷右衛門の遠戚にあたる盟友の河合政に話を持ちかけた。

この男三人が高砂の居室に集まって、泣きはらした顔つきの好美夫人に事情を聞いた。

「……これが、一体、亭主というものでしょうか」

と、いって出された手紙を見ると、畳んだ大きな外国郵便の中に、たった一行——、

「ただ今、ハリウッドにおります。お体、大切に。高砂浦五郎」

一門年寄衆が大騒ぎ、それ以上に協会幹部が烈火のごとくいきり立って、どう処分してやろうか——と、日本での騒動ぶりを百も承知で、海の向うアメリカから留守居の女房へあてた手紙が

たった一度、たった一行――。

さすが剛の者ぞろいの男三人も、呆れはてた。

そのころ、十二月五日――。

親分高砂と大ノ海の二人が、ニューヨークのホテルの一室で夜を徹して喧嘩腰で話し合っていた。

大ノ海は相撲こそは前田山よりはるかに後輩。昭和十一年、ときの玉錦三右衛門二枚鑑札の二所ノ関に入門したとはいえ、それまで軍隊をあこがれ志願兵で入隊、二年間みっちりと人殺しの経験をつんでからこの世界に入った男である。年齢も前田山が寅なら、大ノ海は二つ違いだけの辰だ。

虎と竜の喧嘩である。

このとき、一行の責任者高砂団長は一人いよいよ明日、日本へ向け飛行機で出発。一方大ノ海は世界プロレスラー会長に惚れ込まれ、どうしても全米をもう一回プロレス試合で藤田山と一緒にまわらねばならない。このあと大ノ海は翌年春場所（一月）初日の前日に、「協会がうるさく文句いえば、すぐアメリカへ舞いもどる」覚悟でやっと日本に帰ってくる。まかり間違えば、いまの花籠部屋もなければ、〝土俵の鬼〟若乃花はおろか横綱輪島もむろん出ていなかったに違いない。

「高砂さんよ、協会がこうと出たら、おうッ、すまンかったと頭をさげることだよ」

「頭をさげる必要、どこにある！　えッ。国技大相撲を毛唐の奴らに、堂々紹介してまわったんじゃねえかッ」

「そこよ。その気性、その気性で行ったら、絶対に負けるでよ」
「一場所の欠場ぐらいが、なんじゃい」
「人間、頭さげるときはよ、さげにゃいかん。さげる者に、敵も殺しはせんで」
人をぶん殴ったことは数え切れないが、人を殺したことのないこの男は、大ノ海のその説得には参った。
「わかった。そうするわい」といったときは、ニューヨークの夜も明けていた。
高砂浦五郎が一人空路羽田に帰ってきたのはその年十二月七日だった。協会に姿をあらわすや、待ち構えていた協会お歴々一同の前に、神妙に頭をさげたのである。
（よもやこの男が？）――とばかり思っていた一同、ほっと驚いた。二の句がつげなかった。
（この無茶苦茶な男、アメリカに行って人間が変ったのじゃないか？）
みんな、そんな気がした。
翌昭和二十七年一月、年寄高砂から出されていた勝負検査役辞表撤回が決定した。
その年九月、現役を引退した大ノ海は、年寄株がなく路頭に迷う廃業寸前だった。このとき高砂は一門の空株「芝田山」を大ノ海に貸し、借りを返している。
のちに――。三十七年六月、高砂団長率いる大相撲一行三十二人の大集団が、年寄二子山（元横綱若乃花）、大鵬、柏戸の両横綱、佐田の山、北葉山、栃光、栃ノ海の四大関の豪華メンバーをそろえ、はじめて日航機でハワイへと海外巡業の旅に立ったのである。
「ハワイはすばらしいところだ。水上スキーもやった。それに日本より暑くない」

と、横綱大鵬などは大喜びだった。

国技大相撲がその長い伝統の〝鎖国〟ぶりを解いたきっかけこそは、協会幹部衆がオドール監督との握手につづいて、二度驚き呆れた中を、たった一人敢然と力士三人だけを引きつれ、ハワイはもとより全米各地を半年も歩きまわった豪傑ならではの先鞭があってはじめて実った海外巡業だった。

さらに二年後、二回目のハワイ巡業のとき、マウイ島からジェシー高見山がとれてきた。

このとき昭和三十九年、高砂浦五郎親方は五十歳である。時津風理事長のもと、常務取締、協会国際部長の肩書きがあった。

もうどこを見渡しても敵はなくなっていた。一門年寄を見ても、先輩はほとんどいない。高登の大山年寄も三十七年に五十三歳で歿し、おのれに一番たてついた鯱ノ里の親父（義父）年寄若松も三十一年歿し、いまその年寄若松を鯱ノ里が継いでいる。高砂一門のお目付役として凄味のあった佐渡ケ嶽理事は、とうの昔二十九年に廃業、去っていた。

おのれと同じ協会取締にのぼりつめた者は、いまや理事長時津風取締（双葉山）、出羽海取締（出羽ノ花）、立浪取締（羽黒山）、二所ノ関取締（佐賀ノ花）の四人。

双葉山さんの時津風理事長は別格として、切れ者武蔵川の出羽海だけを除けば、あとは二人みな後輩よ。

敵があってこそ闘志がかきたてられ、喧嘩もしたい放題できた。ところがその敵もいない。

豪傑は、頭に白髪がポツリポツリまざりはじめながら、まるで駄々っ児同然になってしまった。どうも頭が重い。

ゆうべは三時か四時に部屋に辿り着いた。廊下にひっくり返ったまま、「腹、へったあ。ヤキメシ、つくれエ」と口をあけていると、ヤキメシを一口二口、そのあけた口に入れられたまでは知っている。そのあと、女将の野郎、怒って不貞寝してしまったわ。

どうも頭が重い。

「おい、体温計」

計ると六度四分の平熱だ。

「だめじゃい。この体温計、こわれとる」

「あらそう。じゃ違うの持ってきたげましょう」

トントン、トントンと下に階段を降りる音がして、部屋にいくつも用意してある体温計の中から一本取りだし、女将がまた別の体温計を持ってくる。

計ると、また六度四分。それを見ながら、

「ああ、親方、この体温計もこわれてるわ」

女将もしまいに面倒見きれなくなって、階段をトントン、音をさせながら自分の口の中に体温計を入れる。風邪で熱のあるのは、四時までヤキメシづくりでつきあわされたこちらの方だ。

口からポイと取りだすと、なんと目出度く七度五分。それを着物の袂でぬぐって、親父の脇にはさんでやる。

「もう時間ですよ」

と、声をかけるまで、体温計をはさんだ肩に力を入れて、目玉をぎょろりさせながら、長火鉢のわきに胡座をかいたまま。

「ああ、七度五分。やっとあったわ」

「なあ、そうだろう」

まるで、アイスキャンデーをやっと買ってもらった子供のようにうれしそうな目つきで、ニヤリと笑うのだった。

「さあ、大変。ひやさなくちゃ」

その掛声とともに、平熱の豪傑が、まるで重病人のようなトローンと眠った目つきになって、ドタドタと布団の中に丸くなってもぐり込むのだった。

その豪傑が本当に眠る日がついにきた。

癌だった。

肝臓——胆嚢と続いて、そこから分泌される胆汁が途中十二指腸へ入る個所がある。その部分に癌ができたのだ。そのため体全体が腐った夏ミカンさながら真ッ黄色い黄疸症状になってしまった。真ッ赤な酒焼けの顔が真ッ黄色に変色してしまったのである。

「この男に死に恥だけはかかせたくない」

女将さんは、そう覚悟をきめた。

豪傑本人は、最期まで俺は黄疸だ、そのうち全快すると思っていた。事実、大関、横綱時代をつうじて身長一七九センチ、体重一一二キロ——鋼鉄さながらの引締った筋肉質の体で相撲を取ってきたあと、年寄になって酒は飲み放題、飯は好きなだけ食って体重一三〇キロとなっても、血圧は平常、どこもすべて正常だったのだ。

「養生に温泉に行ってくるわい」

そういって、体中腫れあがり抑えていないと爪の間からも血が溢れ出てくる体を、弟子の年寄湊信太郎（元十両八枚目、大達）に預け、静岡県田方郡の畑毛温泉「大仙家族館」まで自動車で運ばせた。そこには幕下で廃業し、沼津でちゃんこ料理「やぐら」の主人になっている響矢といったかつての弟子が、三島市で贔屓の斎藤医院長先生同伴で、親父を待っていた。

それから四日目の朝、畑毛の温泉旅館から両国の部屋に電話が入った。年寄湊だった。

「女将さんはこちらにくるなという親方の命令です。そのかわり、巡業先から弟子みんなが帰ってくる十六日から稽古をはじめさせろ、その稽古土俵を女将さんの指揮でつくっておけという親方の命令です」

それから二時間後また電話が入った。こんどは響矢だった。声が震えている。

「女将さん、親方の様子がおかしい」

好美夫人は取る物も取りあえず畑毛に飛んだ。変に勘ぐられはしないだろうか——？　と、旅館に着いて、そっと座敷の襖を開けてみた。

「……親方」

「おお、きたか」
「うん、ちょっと、顔、見にね……」
その途端だった。瀕死の床に臥したまま、まだ弟子二人の目の前で「わしはな、八十まで生きることになっとるんじゃい」と、ぎょろぎょろいかつい目玉で天井を睨んでいた豪傑の顔つきが、まるで十年ぶりに再会するお袋を見て安心したかのように、ほうーっとゆるんだのだ。
「そうかあ。俺はな、お前エを頼って生きてきたぜ」
あの大昔、「おうッ。那智、紋付」といって自分勝手に祝言をしたときから指折り数えて二十五年目にはじめて吐いた言葉がそれだった。
それから二晩目の夜、眠りがどこか深い。
電話を聞いて三島から斎藤先生が飛んできたのは夜十一時——。あわてて胸を開き、聴診器をあてていると、眠っているはずの男がぎょろりと物凄い目玉を剝いたのだ。
「なんだ、先生か。なにコセコセ、コセコセ診察してんだい。医者という者はな、もう少し落着いて診察するもんだよ、先生」
そう、ゆるり、説教をして豪傑はまた眠りに入った。二度とぎょろ目をあかない眠りだった。
昭和四十六年八月十七日午前十時三十分、息をとめていた。享年五十七歳——。
豪傑本人はいまもただ眠ったつもりでいるはずである。
いま、この男の別の名をこういう。これだけは人様がつけた。
「高雲院英豪角道居士」

それから一年たった、また夏の盛りだった。

高砂部屋の電話が、夜、鳴りだした。

好美未亡人が、受話器をとって耳にあてた。

一九四センチ、一六三キロの大男が名古屋から独り淋しくかけてきたのだった。

「ワタシ、ジェシー、ココロボソーイ。ボス、イナイ、オカミサン、キテクレル？」

「ああ、行くよ。すぐ行ってあげるよ」

すぐ自動車を走らせ名古屋の高砂部屋宿舎、大法寺に駆けつけた。着いたときは深夜午前二時半だった。

その日――。

昭和四十七年七月十六日、大相撲名古屋場所（愛知県体育館）千秋楽の土俵、その朝宿舎でたった一人異国日本で「ママ」と呼べるボスのオカミサンの顔を見たジェシー高見山は、「ドントコイノキモチネ」と心の拠りどころを見つけた。「オカミサン」が高砂部屋本家にいまも住む限り、自分の生みの親、先代高砂浦五郎ボスは生きているのだ。そう思うと、ココロボソイ気持ちが吹っ飛んだ。そして「ドントコイ」とばかり、千秋楽の土俵上、小さな旭国を破って、十三勝二敗の成績で優勝を決めたのだった。

相撲開闢いらいはじめて外人力士の手に渡される賜杯、それを手にした瞬間からもう目に涙をいっぱいに浮かべ、ジェシー高見山はうれしさを素直にあらわして、泣いた泣いた。

時速三十キロのパレードで「ボスノオカミサン」が待つ宿舎大法寺に着いたときは、無茶苦茶に泣いた。

大男が顔中、涙でクシャクシャずぶ濡れにしながら、

「オサケ、オイシイ。……コノスガタ、ボスニ、ミテホシカッタ」

好美未亡人も、この大男の親方思いの純情さを目にするだけで、白いハンカチを目にあてていた。

もしこのとき、前田山の高砂親分がこの場にいたら、必ずこうぶっぱなしたはずである。

「この馬鹿野郎！　ジェシー。……男って奴はな、泣くときは稽古土俵の上か便所へ入って泣けイッ。お前エは、まだ股割れが完全になっとらん。そいつにもっと泣けいッ」

いきなり、拳骨がゴツンとその大きな横面に落ちていた——であろう。

孤児

小説　東富士謹

国技館内満員鈴なりの人垣のなか、花道を巨きな白い達磨のような力士がくる。幕内ならぶ者ない一六八キロ（四十五貫）という雄大な巨体を波打たせ、ボクシングのグラブのような両手を前後に振りながら、ぶうーらりぶうーらり白い達磨がくる。

熱気をはらむ本場所一番の土俵へと姿をみせながら、勝負師の気負いは微塵もない。まるで絵のように花道をくる。

館内、沸きあがる拍手の渦。やがて、ときの名アナウンサー山本照の名調子がはじまる。

「東富士、登場しました。東富士、登場しました。ゆーらり、ゆーらりと歩いてまいりました」

絵のように花道をゆーらり行く千両役者の登場に、拍手の渦のなかから次々と声が飛ぶのだった。

「キンちゃーん！」

「キンちゃーん。頑張れッ！」

横綱という最高位にまで登りつめながら、そんな愛称で声援を受けた土俵上の力士は、キン坊第四十代横綱東富士謹一ただ一人である。

それほど江戸ッ子キン坊は、天性人間がまるかった。

東富士時代――。

そういわれた全盛時、歴代横綱中最大という目方の前に、対戦相手はほとんど技をほどこす猶予さえなかった。物凄い勢いで押し潰されていた。

相撲博物館公式の記録は、身長一七九センチ、体重一七〇キロ（四十五貫余）とあるが、東富士自身の語ったところ、実際には体重一七六キロ（四十七貫）まであったという。

仕切って立ちあがる刹那、左足をグラッと動かす癖があった。次の瞬間、小山のような巨体が太鼓腹を突きつけ、怒濤のうねりにも似たがぶりで、ドドドドッと相手を運んでいくのだ。当ったときすでに相手のまわしを左差し無双の力で引きつけている。達磨のような巨大な太鼓腹を腰低く突きつけられ、相手はまわしに手も届かず打棄りのすべもない。

そのまま息もつかせず一気に寄り進み、寄切り、寄倒しで勝負は片がついた。土俵際それでも残った相手には、潰すような上手投げで豪快なとどめを刺す。

無敵双葉山の再来――。

だれもが、そう思った。

しかし、江戸ッ子キン坊は、ときどきあっさりと負けた。まるで自分から退くような負けぶりだった。

優勝通算六回。しかし、「怒濤の寄り身」と謳われ、恐れられた無敵の雄大な取り口からは信じられないことに、そのなかには全勝優勝も連続優勝もない。必ず黒星一つ、あるいは二つを喫している。

体だけは、まるで相撲とりの申し子のようなねばり腰と歴代横綱第一の巨体を持ちながら、気持ちは勝負師として生れつき失格者だった。ゆーらり花道を行く大きな達磨と同じほど人間がまるかった。

そのうえに、江戸ッ子特有の「てやンでエ」精神が一枚加わってもいた。

裸一貫を張っての闘争の世界——。

最後まで勝負に執着する者だけがそこでは勝って、笑う。

まるい人間がこの修羅場に投げだされるとどんな目にあうか、その見事な一典型をみせるのが江戸ッ子キン坊の生涯だ。

1

「おッ、坊や、そこな大きい坊や……お前エや。こっちきな」

高砂部屋の大広間である。

稽古があがり掃き浄められた稽古土俵を背に、大座敷では関取衆のチャンコがはじまっている。

その一角から遠く離れ、稽古場に面した長火鉢の前に、一人どっかと大きな太鼓腹を沈めて胡座

を組み、親方然と構えた浅黒い男。

稽古場の入口あたりに群がっていた坊主頭やざんばら髪の新弟子五、六人のなかに、一人ちょん髷を結った餓鬼を目にするや、ぎょろりと目玉を剝いて濁声をあげたのだ。

「おうッ。早ようきな、坊や。……お前エ、キン坊ゆうた坊や、やな」

薄気味悪い蛸入道さながらのぬるッとした不気味さが漂っている。剝いた丸い目玉をすえながら、口の端で汚い歯を見せてニタッと笑った。

キン坊はまだ怖いもの知らずの少年にすぎなかった。持ち前の茶目ッ気そのままに、大声で啖呵を切ったのだ。

「はばかりながら十五でござんす。……コーベエのおっさん」

振り向きざま一目散に往来へ逃げようとした背中に、摑みかかるような濁声が割れた。

「おっかさん、呼びつけるぞい、キン坊！」

おっかさん——市電（のちの都電）に両国から乗って岩本町で乗りかえ御徒町一丁目で降りれば、もう下谷区二長町（現、台東区台東二丁目）。おっかさんはその家にいる。

はっと足が竦んだ途端、ばらばらと駆けつけた兄弟子たち四、五人に力ずくで押さえつけられ、男の目の前に担ぎ込まれたのだ。絣の浴衣は暴れたはずみに破りちぎられ、首根っ子を息のとまるほど土間に押さえつけられている。

「コーベエのおっさん」

十五のキン坊が怖いもの知らずでそう呼んだ浅黒い蛸入道こそは、大部屋高砂の主だったのだ。

大林清市――。

大林、が四股名の最古参幕下力士である。神戸の出身、最初出身地をとって貝ケ崎といった。十両入り確実といわれながら、膝を痛めて以来、力士としての出世を捨て、師匠高砂浦五郎につかえ、いつの間にか大部屋高砂の隠然たる主になった男である。依然現役の幕下力士でいながら、一度も稽古したこともない。稽古するかわりに、座敷の火鉢の前に座を構え、人の稽古をみて、親方がわりになにやら帳面をつけている。

「前田山、こんだア、新入幕や。もっと稽古せエー」

協会取締の要職にある高砂親方も、己れの女房役を勤め大部屋の隅々まで知りつくした主大林には頭もあがらないのだ。

なにしろ自分の思ったことに横槍が入ろうものなら、目玉をぎょろッと上目にしたまま頑として口もきかない。

「大林の奴、また北向きやがったぞい」

反抗して、いいつけたことを何もしないことを相撲社会では「北向く」という。「野郎、このごろ口も聞かねエ。俺に北向いとるわ」という。転じて、変わり者の隠語だ。

元大関朝潮太郎（二代目）の高砂浦五郎も部屋の主に反抗されると、巡業の旅先ではどの鞄に紋付が入っているのやら皆目わからない。ぶつぶつ「北向きやがったぞい」と文句をいいながら、最後には「参った、参った」と、親方があやまった。

そういう男である。相撲部屋特有の存在だ。

そのとき、衆人環視のなか面と向ってはだれも口にせぬ「コーベエ」を大声でわめかれ、長火鉢の前に太鼓腹を抱えとぐろを巻いていた蛸入道が、稽古土間に降り立ったのだ。

「やい、キン坊。貴様、坊やや思うてええ気なもんや」

土間で兄弟子四、五人に寄ってたかって押さえつけられたキン坊、首根っ子を締めつけられ息ができない。両目をあけると、鼻の先に草履（ぞうり）さながらの足がある。

「なりばっかり大きて、この寸足らずの餓鬼ァ、相撲取りでもねえのに、ちょん髷をつけとるわ」

「大将、切りやすか」

十五のキン坊は滅茶苦茶に手足をバタバタ暴れもがいて「おりゃ東富士てンだあ」と泣き叫んだが、一人の助けもない。高砂の分家、力士たった五人だけの小部屋富士ケ根の新弟子にすぎないのだ。

「まあ、大林の大将、かんべんしてやれや」

そう声をかけてくれる直接の兄弟子もこの場にはいなかった。

そのうえ入門したとはいえ、実際相撲取りではなかった。東富士という名は、まだ協会に登録もされていないのだ。力士採用基準の十九貫（七一キロ）以上をはるかに上まわる二十五貫五百（九六キロ）もの体重があったが、身長五尺五寸（一六五センチ）以上の基準にどうしても一寸足りない。検査は落ちてばかりいた。

ちょん髷は見事にザクザク鋏（はさみ）で切り落とされていた。

一人前の相撲取りにまだならない前から、キン坊は相撲世界の無法だけはたっぷりと嘗めさせられたのだった。

東富士の名がやっと番付の尻ッポにのったのは昭和十三年春場所（一月）。序ノ口二十三枚目だった。昭和十年の富士ケ根部屋入門からなんと三年もかかっていた。身長「五尺五寸一分」と記載されたが、実は依然寸足らず、在京木戸部長を勤める協会の金庫番、師匠の富士ケ根親方の顔を立てててのお情のパスだった。

世は、第三十五代新横綱双葉山全盛時代。両国界隈は異常な相撲景気に沸き立ち、あこがれの新弟子志望者があふれ、この春の新弟子検査合格者は八十一人を数えた。

「一番。一番。一番でござあーい」

午前一時、相撲部屋の前を飛んでまわる呼出し奴の一番木で叩き起こされ、午前二時の取組開始に場所入りした坊主頭が前場所からの前相撲力士を加えて百人近く、土俵のまわりに坐りきれず、花道にまであふれた。延々、前相撲が三時間もかかって夜があけた。

そんななか、キン坊はぶくぶく肥ったアンコの体でころころ負けた。

「お、明日はな、東富士だい。もう星はごっつァんよ」

「おりゃ竜ケ崎だあ。おれも、もらったぜ」

陽がのぼると、よその部屋の取的たちのそんな会話がいつもキン坊の耳に飛び込んできた。竜ケ崎、同じ高砂一門の芝田山部屋（元横綱宮城山福松）力士。茨城県竜ケ崎出身で、のち十両まで

いったキン坊の仲間だ。

東富士と竜ケ崎の二人、どの部屋の取的連にとっても顔があえば、「ごっつァん」の星だったのだ。

序二段にあがった十七歳の夏、二十五貫五百（九六キロ）もあった体が、十八貫（六七キロ）にまで減った。稽古でごろごろ転がされ痛めつけられ肉がそげ落ちたのだ。

そんなある午後――。

富士ケ根部屋の奥の茶の間で、親方の女将さんをはさんで、たった一人の幕内力士富士ケ嶽ら兄弟子たちの声がする。キン坊、足が立ちすくんだ。おれの話ではないか――。

「東京育ちはどうも相撲にゃ向かねえ。へらず口ばっかり達者でよ」

「ンだ。飯を十七杯もかっこむのだけは、一人前エよ。まだ十六杯だあ、わめいちょる」

「稽古して大飯を食って、それで十八貫にまで体がおっこった。ありゃもう駄目だ、女将さん」

「そうかエ？　……親方に相談して、両親呼んでみるかねえ」

キン坊は悔しいのを通り越して、ぼろぼろ涙がでてきた。「東富士、ごっつァんだ」という取的連の評判には、「畜生、この野郎」とぶち当る元気はまだあった。しかし、兄弟子たちから「相撲にゃ向かねえ、ありゃ駄目だ」こうもはっきり念を押されると、心底おりゃ駄目だ――キン坊はそう観念した。

もともと好きでなった相撲ではない。大人たちが勝手に決めこんで騙して連れられてきた相撲部屋だった。翌る朝の検査に見事落ちたものの、「キンちゃん、映画行きたいんでしょ」「キン坊、

いい腰しとるね」なんだかんだ、いいように可愛がられてきた。

今になって気がついてみると、おれの後の新弟子がいねえ。上から、富士錦、富士ケ嶽、富士光、富士登、そしてドン尻東富士のおれ。たった四人の兄弟子だが、部屋にいる限り万年新弟子だあ。

――よしッ、おっかさんにはすまねえが、親父を部屋に呼びつけられる前に、こっちから今すぐ出ていってやるぜ。こんどこそは二度と戻らねえや！

十七歳のキン坊、腹を決めたのだ。

家は七銭の市電で乗りかえてすぐ、歩いても十五分とかからないすぐ目と鼻の先だ。これまでも、相撲に負けるたびにもういやだと、両国から一人歩いて二長町までくるや家の前に何回立ったか数しれない。

井上機械製作所。――ダンボール会社に納める箱の角を平留めするワイヤー専門メーカーの鉄工場、父親金松は「旦那」「御主人」と呼ばれて、いまでいう町工場の社長。キン坊こと井上謹一はその長男だった。

下谷二長町に帰れば、浅草の名門柳北高等小学校を出て、神田の東京工業学校に通いはじめていた「井上さんちの坊っちゃん」なのだ。

後年そんなキン坊がこのしごきの世界で大成したこと自体、奇蹟といえた。

ひっくるんだ荷物一つ、肩からぶらさげて奥の茶の間の襖を、キン坊がそろそろと開けたときだった。

部屋の表玄関に人影が立ったのだ。堅い米俵一つ、それに手足をくっつけたかのような背の低いころころの体。

師匠富士ケ根義正だった。

現役時、高砂部屋力士として、四股名を弥高山―稲ノ穂―弥高山―若湊とつぎつぎ改名して、大関朝潮太郎のもと、無双の力持ちで小結まで勤めた。大正十一年一月引退、一門の年寄富士ケ根を襲名した。かたわらＮＨＫが常連で出入りする相撲茶屋「竪川」を経営している。

協会取締高砂浦五郎とは兄弟弟子の仲だ。それでいて自らは年寄の末席木戸部長に甘んじながら、おのれが育て面倒をみた後輩すべてを勝負検査役、理事の要職につかせ、高砂一門の統制を下から締めあげている。いかにも朴訥なこの人らしい芸である。

富士ケ根親方は、回向院をはさんで向うの国技館協会から帰ったところだった。

ずかずか奥に入り、弟子一同の言分を聞くやいなや、火鉢のわきにどすんと腰を落として、いきなり怒鳴りあげたのだ。

「この大馬鹿野郎ども奴！　そういう貴様らこそ、今この場からとっとと出てけッ！」

「へッ？」

富士ケ嶽、狐につままれている。

「この部屋ではな、……おれは、キン坊一人だけが頼りなんじゃ。貴様らの目、どこについとるぞい。えッ、雑魚が！」

四人の兄弟子一同、青くなって声もない。恐る恐る廊下に一人立ったキン坊のポチャポチャと

サクラ色に染まった童顔を盗み見していた。キン坊は必死に奥歯をかみしめ、体のなかから沸きあがってくる熱い固まりを懸命に堪えていた。

さすが大正期戦国時代の土俵で、小結まで勤めた師匠富士ケ根の目だった。

師匠のこの一言が、ころころ負けてばかりいるキン坊のなまくらな脳天を叩き潰したのだった。

2

昭和十六年春場所（一月）がきた。

この場所、高砂本家の大関前田山、凶暴そのものの本性を剝きだしに、本場所十五日間の土俵上暴れに暴れまくった。殺気立った張り手旋風が、次々と立浪三羽烏の双葉山、羽黒山、名寄岩の顔面をぶっぱなし、国技館大鉄傘下、観衆はあまりの凄まじさに震えあがった。

「ざまあみやがれッ。なにが神様だ。張りッ飛ばしゃ、ヒエーッみんなが泣きやがる。ありゃただの人間よ」

仕度部屋に引きあげてまで、まだ両眼逆さにツーンと吊りあげた真赤な形相で、あらん限りの悪口雑言を吐き捨てる。関取衆すらその威圧に恐れ、近づかなかった。

しかし、優勝は依然横綱双葉山、十四勝一敗八回目を記録した。

東富士は見違えるような成長を遂げ、この場所幕下十三枚目、六勝二敗の好成績。

二十歳になっていた。

身長一八〇センチ（五尺九寸）、体重一〇五キロ（二十八貫）。堂々たるアンコだ。

幕下三羽烏――。

そう声がかかった。東富士、駿河海、汐ノ海の三人組である。

なにしろ番付こそ幕下でありながら、三段目から幕下へと進んだこの一年あまり、この三人の実力にはだれもが目を見張った。

高砂の稽古土俵、申し合いで、幕下力士東富士が横綱男女ノ川に目をだすのだ。だけではない。鯱ノ里、兄弟子富士ケ嶽――幕内関取が幕下のキン坊に一番も勝てなくなったのだ。

部屋の総大将、前田山はふてぶてしく腕を組んで、そんな稽古を横目で睨んでいる。

「キン坊、やってみイ」

最初、座敷からそうしぶい声をかけた高砂親方でさえ内心驚きはてていた。

「番付一枚違えば虫けら」のこの世界にあって、十両以上の関取衆の申し合いを、幕下以下の力士は普通見ていなければいけない。それが稽古土俵の不文律である。ところが、幕下の同僚力士はまるで相手にもならず、十両もばたばた倒したあげく、幕内関取衆に一〇五キロの堂々たるアンコ、キン坊が向っていく。

「キン坊、やってみイ」

と、親方直々のお声で、いつの間にかキン坊だけに許された天下御免だったのだ。

もはや小部屋富士ケ根の東富士ではない。高砂一門が両国のお膝もと、目と鼻の先の下谷二長町から掘り当てた少年が、稀代のドル箱にふくれあがる期待があった。

翌夏場所（五月）は幕下二枚目で八勝一敗、堂々幕下優勝を遂げた。来場所は晴れて関取、十両へ昇進である。

その千秋楽あけのある夜、幕下三羽烏の面々に「溜会」最長老で「出羽海会」会長も勤める小沢孝吉老人から声がかかった。土俵溜りで相撲をみることが人生なによりも好きな温顔の老人だった。

宵の口、部屋の前の路地で哎声のぼそっと呼ぶ声――、

「キン、ちゃーん」

「おーッ。ボルネオかッ」

「なにッ、キンの野郎！　……酒、飲ませねえぞ」

ボルネオが渾名の汐ノ海、ぶつぶつ一人文句だ。便所のなかのキン坊は、嬉しくてたまらない。出羽海部屋の「赤鬼青鬼」と取的連に恐れられる大の仲よし、「赤鬼」の汐ノ海と、「青鬼」の駿河海の二人が、路地で待っている。

汐ノ海、兵庫県出身、のち大関、引退後は年寄出来山親方となり、昭和五十八年七月、六十五歳で逝く。人間が底ぬけにいいかわりに、味もそっけもない男で、コップ酒を五、六杯並べガーッ、ガーッと音立てて飲み干すや、「おうッ、女。俺ン所へこい」というなり引攫ってきて乗っかってしまう、そんな男である。

二歳年上の駿河海は静岡県出身。昭和十一年に天龍三郎の大相撲脱退一派「関西角力協会」に入門、駿府（静岡）ゆかりの徳川家御紋をとって「葵龍」と名乗り相撲をとった。やがて天龍

一派の解散のあと、復帰力士にまじって昭和十三年春場所（一月）幕下付出しで大相撲に顔をみせた変り種だった。

「ほう、拾い物じゃわい」

梶之助の出羽海親方が一目見て、天龍の目のよさに感嘆した長軀だ。仕切るとき、長い右手の拳が、対戦相手にはまるでハンマーのような凶器にみえた。

その夜、お座敷の席上、小沢老人は膳がそろうと、こういいだした。

「さあて、出羽海部屋の赤鬼青鬼、高砂のキンちゃんを入れて三人三羽烏。わたしも長いこと相撲をみてきたが、こんな力の入るこたあない。みていて命の精がつく」

キン坊、畏まったまま、どたンと横の汐ノ海の膝を叩いた。

膳の上でいい匂いをくゆらせる徳利。汐ノ海はもう痺れをきらして、ついと手をだし一人勝手に茶碗に酒をあけだした。

「おッ、ボルネオ」と、キン坊は面喰っている。

小沢老人は嬉しそうに、

「いや、いや、キンちゃん。それがキンちゃんのいいところだ。だけどね、そういう気を使うの、お相撲取りに、それが一番毒だよ。遠慮はいらない、どんどんやりなさい」

「へッ、ごっつァん」

汐ノ海、喉の焼けそうな熱い酒を一息にグイ。ニヤッと笑って唇を嘗めている。

「お米のお酒、これが力士の体をつくる。だが、それだけじゃいけません、一段飛びの稽古……」

駿河海がきょとんと、東富士の顔を覗き込んだ。謎をかけられ、

「一段飛びの稽古？」

「光っちゃん、神様双葉山に当ろうぜ」

途端に汐ノ海が、ゲゲゲゲッと気管に酒を飲み込んで徳利を手ではらいながら真赤になった。

「キンの馬鹿野郎！　……おらあ、あの顔、拝むだけで体が縮まらあ」

「そうだ、キンちゃん。おれたち、次は十両だ。絶対謝ったなしで、いこうじゃねえか」

駿河海、ごつい右手の拳で熱燗の徳利を握りしめている。

「向うがくたびれるまで、絶対ありがとうございます、いわねえ。この手だ、なあボルネオ！　これだよ、一段飛びの稽古」

「殺されたって、おらあ知らねえやい」

「そいじゃあ、光っちゃん、お前エ謝るな。向うが何人こようが、おれも向うに、もういいよ、いわせてみせるぜ」

小沢老人は猪口を口に運びながら、サクラ色になってニコニコ、ニコニコ威勢のいい若い三人の相談をみていた。

夏場所を打ちあげ、大相撲一行は大合併で恒例の朝鮮、満州巡業の旅へと海を渡った。

横綱双葉山、男女ノ川。大関前田山、羽黒山、安芸ノ海、五ツ島。関脇名寄岩、照国。豪華きわまる各部屋大合併の大相撲一行である。

釜山、馬山、群山、京城、次いで満州へ渡り大連、奉天、撫順、新京、ハルピン——各地で五日から一週間の興行を打ちながら、延々と慰問大相撲が大陸を行くのだ。

行く所、「大歓迎、大相撲一行」「横綱双葉山」「大関安芸ノ海」——はなやかな幟がぎっしり立ち並び、町あげて相撲景気一色に沸き立っている。相撲期間中、土地の料理屋、旅館は大相撲大世帯の受け入れに総出、旦那のいる芸者衆もその間は天下御免で力士たちを待ち構えている意気のいい満州花柳界だ。

京城場所の初日だった。

広場にヤマ稽古の稽古土俵が飛び飛びに四つ。

どの稽古土俵でもすでに大関、横綱があがり、三役、幕内関取衆を相手に激しい申し合いがはじまっている。あちらの土俵では男女ノ川、前田山、こちらの土俵では羽黒山、名寄岩、もう一角では安芸ノ海。どの稽古土俵にも力士たちが群れ、円陣ができている。大合併巡業ならではの壮観だ。

幕下以下の稽古はすでにあがっている。

東富士、駿河海らは朝から幕下同僚との稽古、次に三段目力士たちにたて続けに胸を貸し、体は泥まみれだ。それを切りあげ、大関、横綱の登場をいまや遅しと待ち構えていたのだ。円陣の最前列に陣取っていた。

申し合い、幕内衆の顔ぶれがひとわたり一巡した。

「今だ、光っちゃん！」

東富士、そういうなり、大関安芸ノ海が一人立ちはだかる稽古土俵上に飛びだした。

稽古まわしの色からして違った。十両以上の関取、安芸ノ海の白に対して、幕下以下は白を染めた黒である。

大関に対し、頭を大きくさげるや、

「関取、一丁たのんまーす」

安芸ノ海は目を剝いた。二年前の春場所四日目、無敵双葉山に土をつけて以来、横綱へと驀進する絶頂期の安芸ノ海である。

「おい、アンコ。貴様らの出る幕じゃあないぞ」

稽古に漲る緊張を邪魔され、そう吐き棄てた。東富士にかわって、同じ出羽海部屋の駿河海が飛び出した。

「生意気な野郎どもだ。うせろ、うせろ」

三人は次の羽黒山の稽古場に飛んだ。呶鳴り散らされた。それでもまた、別の稽古場に走った。簡単にあしらわれ、最後にはとうとう土俵下を動かなくなった。

青くなって、土俵下に突っ立っていた。

そのときである。

円陣に道があき、目の前の稽古土俵上に横綱双葉山があらわれたのだ。

このとき、双葉山三十歳。

昭和十三年春場所（一月）、満天下の熱狂のなか第三十五代横綱を張ってからすでに四年、優勝記録を重ねること八回（うち全勝六回）、前人未踏の「双葉山時代」を築きあげている。幕内関取

衆にとっては、その胸を一番でも借りることが憧れ、若い取的連にとっては「とびつき」でその体にちょっと触っただけでも、不思議に相撲が強くなったような気になるのだ。

「双葉関、やってるぞウー」

遠くから声があがるやいなや、十四年春（一月）初土俵の三段目力士、栃錦はチャンコ番をうっちゃって、魚くさい手のまま飛んで行き、神様の体めがけとびついた。群がる取的、ばらばら投げ飛ばされ、足の踏み場もない。

「くせエな、まむし」

双葉山、しぶい顔である。そのまま、小さなまむしの栃錦をつまむや、放り投げた。後年名横綱となる栃錦は、とびつきで二番双葉山の体に触っている。

まむし栃錦、むろん現相撲協会理事長である。

その双葉山が土俵まわりの関取衆面々に、普段の静かな口調で呼びかけたのだ。

「みんな、この土俵、わしが、借りたぞう。……さあキン坊、お前だッ。汗かくぞッ」

驚きのざわめきが土俵下を流れた。羨望の目が、東富士に集中した。

キン坊は土俵にあがり、「お願いします」、ピョコンと頭をさげた。もう無我夢中で目の前の胸ぐらめがけ、ぶつかっていった。

東富士の生涯を通じての、最高に感激の一瞬である。

「貴様らの出る幕じゃない。うせろ、うせろ」そう吐き棄てられた悔しさ、なにもかも吹っ飛んでいた。

ダーンッ、弾丸の勢いさながら体ごとぶち当った。ふわっと柔らかな分厚いマットに当って、弾んだような感覚。瞬間、自然に身につけた得意の左を力まかせに差している。一気にそのまま寄り立てた。土俵際、「やった！」――。

そう思った刹那、一〇五キロの体が宙に浮いていた。地響きを立てて、大きく転げ落ちていた。――いつ、どうして投げられたのか、まるで見当もつかない、魔法にかけられたような驚きだった。

実にそのまま小一時間、東富士はたて続けに双葉山直々のアンマを受けたのである。

もう翌る日から安芸ノ海も羽黒山も、泥まみれになったこの幕下三羽烏が、申し合いの稽古土俵にあらわれ、

「お願いしまーす」そう声をそろえるや、

「一番。来るかッ！」

だれもがそう応じた。双葉山のお墨つきの若い者三人である。

立浪三羽烏の一人、関脇名寄岩は、相手が幕下であろうが一向頓着せず、稽古土俵、自分から猛然突進してくるのだ。

赤鬼汐ノ海が速射砲のようにバンバン突っ張り、青鬼駿河海がダニのようにくっついたまま吊り出すや、幕下力士に負けた悔しさ、名寄岩は仇名の「怒りの金時」そのまま真赤になってブルブル両手を震わせ怒りだしている。

一本気な人間そのままにムキになって突っかかる名寄岩熊五郎は、どんな相手でも適当にあし

らうことができず、大概の若い者を駄目にした。しかし、東富士ら三人にとって、これほど格好の稽古相手はまたとなかった。

こうしてこの朝鮮・満州巡業場所、大相撲の行く所、東富士は双葉山に、

「キン坊、こいッ」

稽古土俵に呼びあげられた。ごろごろ叩きつけられ、転がされた。

くる日もくる日も続けられた。

双葉山は、キン坊東富士のなかに、おそらく自分を見つけたのに違いない。いまのうち何かを、この若者に伝えておきたい。——常陸山のあと常陸山がないように、双葉山のあとに双葉山はない。現役引退によって、「カタチ」はその力士とともに土俵上から消えてしまう。あとに記録だけが残る。力士の宿命というものだ。ただ、相撲取りに生まれついたような天性のねばり腰を持ったこの若者は、何かおのれの「カタチ」を受け継いでくれるはずだ。

双葉山のその執念を、やがて協会映画部が「双葉山物語」に撮影しはじめた。

しかし、そのことが東富士の生涯を決定づけた。

双葉山はそこに気がつかなかった。

とびつきでしか体に触れられない双葉山、その双葉山に目をかけられた東富士。——そいつを徹底的に痛めつけてやれいッ！　それでこそ鼻があかせられる。闘争の世界ならではのありとあらゆる羨望の目が、やがて徐々に特別な者への妬みにかわりはじめていたのだった。

その年の暮れ十一月、師匠富士ケ根親方が死亡した。五十四歳だった。

富士ケ根部屋は、このときから唯一の幕内力士、平幕の富士ケ嶽孝一郎（最高位、前頭三枚目）二枚鑑札の部屋にかわった。小部屋とはいえ、高砂一門に下から睨みをきかした先代師匠の威光は、もはやどこにも消えうせていた。

「牛の糞」――。

甲州人をそういう。踏んでみなければ、固いか柔らかいかわからぬの意である。その「牛の糞」同然、摑みどころのない典型的な甲州人富士ケ嶽親方だった。

「東京育ちはどうも相撲にゃ向かねえ。ありゃ駄目だ」

としかキン坊を見ることができなかった。力士の群がる角界にあって双葉山に目をかけられる若い者、東富士にとって、稽古土俵では自分に一番も勝てぬ兄弟子だった。

3

あけて昭和十七年一月――。

大関前田山英五郎が、四代高砂浦五郎を襲名した。四国、伊予（愛媛）の生まれ、萩森金松。反抗する者は徹底的に叩きのめす気概を剝きだしにした直情径行の男が、その腕っぷし一本で名門高砂部屋親方の座に登りつめたのである。

「キン坊、よう稽古した。ほうびや」

取的時代、腹をすかしたキン坊は、何回台所でおにぎりにありつけたか数知れない。その高砂の主、大林は数年前廃業し、姿を消していた。

先代高砂の隠居と二十七歳の二枚鑑札前田山高砂の登場は、相撲部屋に生きる一門年寄衆の栄枯盛衰を浮き彫りにした。

横綱男女ノ川は、この一月場所を皆勤して引退、いまや一門百人を擁する現役力士のうえに君臨する総大将前田山の天下だった。

その春場所（一月）、東富士は予想通り十両へと昇進したのである。東十両九枚目。

十二勝三敗の好成績で、翌夏場所（五月）は東十両筆頭に躍進。

重量もさらに増し、一二〇キロ（三十二貫）である。

「次代の大物」東富士――。

もはやだれの目にも、そう見えた。

しかし、期待の十両二場所目を迎えて、左足首を怪我した。ドウッと立ちあがる一瞬、左足首踏張りがきかないのだ。

十一日目の土俵を終って、七勝四敗の星。

あと一つで、勝ち越しである。勝ち越しは、当然来場所の幕内昇進へとつながる。残る土俵は四日、多いにこしたことはないが、白星一つでもいい。――しかし、次第に怪我が悪化してきた。

左足首関節の捻挫、無理に無理を重ねこれまで十一日間の土俵を勤めた結果、高熱をともなって青脹れに腫れあがったのだ。踏張ると突き刺すような痛みに襲われた。膏薬を貼りつけ、ほと

んど右足一本で腰を支え、それで白星をあげてきたのだ。

このとき、東正大関、前田山の高砂本家親分から一門力士東富士に、はじめてお声がかかったのである。

夜になって、使者が富士ケ根部屋にきた。まるで太鼓持ち、そんな感じの男だ。

兄弟子、二枚鑑札の富士ケ嶽親方は所用でいない。浴衣をひっかけ、東富士一人が茶の間にでた。茶の間が客間でもある。

顔を突きあわすや、挨拶ぬきで切りだしてきた。

「今場所の勝ち越し、どんな意味か、わかっておるわな、お前エさん」

勿体振ったいい方をする奴だ——江戸ッ子キン坊は、内心ムッとなった。

「幕内にあがる、東にとっても光栄じゃし、部屋一門にとってもこんな目出度いことはねえ」

さながらカメラのレンズが被写体の動きを注視するように、東富士の目の動きをじっと覗き込んでいる。

「……よもや負け越しは、あるめえが」

「親方、冗談いっちゃいけねえや。まだあと四日もありだ。そうはいかねえ」

「これからも先、長い土俵だ。怪我の大事をとって、ここはひとつ星を借りることじゃ。お前エさんのためだ」

「……」言葉につまった。

「残る四人、だれでもいい、好きな奴に、ちょいと頼みにいきゃ、すぐ聞いてくれる世の中だ。

それで、万事は万々歳じゃ。前田関は、そう笑い飛ばしておった」

八百長の強制だった。

それも一門総大将、天下の高砂親分お声がかりの八百長の命令――。

一門に幕内関取一人がふえるかいなかで、部屋の威勢が違ってくる。後援会お歴々にご披露するなによりの御馳走だ。当然部屋の実入りも目にみえてふえる。

しかも、並の幕ノ内ではない。天下の双葉山に可愛いがられた大物東富士の幕内への晴姿だ。金銭に執着する相撲部屋の当然の計算だった。

八百長は、普通星を借りることで成立する。金で買いとる白星ではない。当然次場所に借りた星を返さなければならない。一回の八百長は、二回の八百長となり、味をしめた者は次に相手力士から頼まれたときに、断われない立場になる。一対一の勝負の世界つきものの、人情が絡んで、土俵に命を張った力士を土台から蝕むなれあいが、この星の借り合いの八百長だ。

このとき、江戸ッ子東富士は前田山高砂親分のせっかくのお声がかりを、あっさり撥ねつけたのである。

「いやあ親方、そりゃ御免だ。馬鹿馬鹿しいやい。まだ土俵は四日もあるんだい」

「おッ、そうか。馬鹿馬鹿しいか。……東、お前エがそういうなら、わしは知らねえぜ」

事実、どんなに左足首踏張りがきかなくとも、上体に漲る馬力で、敵の突進にドスンと一発打っ放してかちあげるや、相手は跳ねっ飛ぶのだ。

しかし――。

翌十二日目からの土俵は三日間連続の惨敗だった。ついに七勝七敗の剣ケ峰で、千秋楽、出羽海部屋武ノ里と対したのだ。

武ノ里武三――。

青森県五所川原町（現在・市）出身、明治四十二年生れ、この年三十三歳である。

かつて天龍事件のさい大相撲脱退天龍一派の総大将に祭りあげられた元大関大ノ里万助が、大勢の脱走力士たちが協会へと復帰帰参したあと、昭和十三年一月遠く大連の赤十字病院の一室で淋しく客死したとき、たった一人、この元名大関に最後まで付き添った力士がいた。

それが、武ノ里武三だった。

その後一人悄然と協会に復帰、昭和十五年夏入幕を果したが、このとき十両。

年代的に擦れ違っているのだが、こんな伝説がある。

二所ノ関部屋に入門した若ノ花（現、二子山親方）が、相撲に入ってはじめて支度部屋にいた幕内関取武ノ里のもとに挨拶にきた。

叔父である。

武ノ里は明荷の前にうずくまり、組んだ両腕を明荷の上に預け、首をのっけている。広い支度部屋の向うにあらわれた若ノ花を見ながら、そのままの格好で微動もせず、こちらに近づく相手の顔にじいッと目をすえたまま。

若ノ花も、久し振りに目にする、この叔父が相撲にいることを誇りにしてきたその武ノ里の明荷の前に近づくや、黙ってその前に坐ったままである。

「お久し振りです、叔父さん」

世間一般の並の挨拶は、若ノ花、口が曲がってもいえない。叔父武ノ里の顔を見たまま、武ノ里も明荷にのっけた首で相手に目をすえうずくまったまま。周囲がこの両者の対面に呆れ果ててしまった。やがて、頭一つペコンとさげるや、のち第四十五代横綱となる男は、そのまま引きあげたという。

おそろしく無口、骨董(こっとう)いじりだけを唯一の趣味にした無骨な武ノ里だった。

そんな筋金入りの古武士武ノ里、まかり間違っても八百長芝居の相談にのってくれる相手ではない。どころか、東富士が新十両として登場した前場所の十二勝三敗、その三敗のうち一人が他ならぬ武ノ里だったのだ。

このときは、評判の「次代の大物」とはどれどんな若い衆よ、とばかり、ばっさり東富士を切りすてた。

千秋楽の土俵、剣ケ峰の東富士は三日連続負け続けてきた動揺から、土俵にあがって仕切るとき、すでに相手にのまれていた。勝負は立ち合いで決まっていた。

ついに七勝八敗、負け越しに終ったのだ。

その夜、楽(らく)祝いの高砂大広間——。

酒で真赤に火照(ほて)った両眼をぎらぎら剝きながら、酒乱の前田山高砂が、衆人環視のなか呶鳴りつけた。

東富士の前に、持ち込まれた便所掃除用のバケツ、そこになみなみとあけた酒——。

「飲めエッ！　……この酒、飲みやがれッ」

ぐいぐい飲み干したあげく、親分のいうことに逆らって負け越した一門の不埒者、その大きな図体のどてっ腹を、横から兄弟子に思いざま蹴りあげられた。

親方お声がかりの八百長話を断った異分子、そういう存在を許したら、兄弟子たちは自身の顔がたたないのだ。

座敷をごろごろ転がった一二〇キロの巨体の上に、数人が飢えた禿鷹のように群がった。寄って集って、馬乗りになるや打擲る者、わきから体を蹴飛ばす者――。

「この野郎。まだ謝らねえかッ」

惨い制裁だった。

古今大相撲にあって、八百長を断ってこれほどの制裁を受けた力士は東富士にとどめを刺す。本家の兄弟子前田山、高砂一門の総帥前田山に反発する二長町生れの江戸ッ子生粋の意地が、このときからむくむくと二十一歳のキン坊東富士のなかに植えつけられ、芽をだしてきたのである。

その夏場所、十両優勝は、十四勝一敗の西筆頭駿河海。春に続く連続優勝で、足踏みした東富士を追い越し、一足早く新入幕を果したのだった。

東富士が入幕を果したのは、あけて昭和十八年夏場所――。

春場所に東十両二枚目で、十四勝一敗初の十両優勝を決め、夏場所前頭八枚目へと、一気に横綱と顔が合う幕内上位に躍進したのである。

十八年夏、二十二歳、新入幕前頭八枚目、十勝五敗。
十九年春、二十三歳、西前頭筆頭、七勝四敗四休。
時代は急速度で戦時下非常時に突入していた。十九年春場所（一月）を最後に、国技大相撲はそのメッカ国技館を軍に接収されていた。
前年五月、相撲協会勤労報国隊が結成され、カーキ色一色の戦闘帽、ゲートル、国民服のおそろい着一式が協会から支給された。場所後は軍の命令で、補充兵教育の軍事教練が巨人集団に強制された。
寒中、粉雪の降りしきるなか、泥んこの浴衣一枚のうえに、薄い国民服を着込んだだけで、全員が広場に整列。その前で在郷軍人のお偉ら方の訓辞が、延々二時間、三時間も続いた。ついにはちょん髷につもった雪が融け、素肌にしみこみ、その寒さで心臓麻痺を起こして死ぬ肥大漢まででた。
長い戦争に突入してからも数年、わが世の春を謳歌していた国技大相撲は、急激に襲ってきた戦時非常体制から身をかわすすべもなかった。

その年の夏八月の末、東富士はついに高砂一門を飛びだし、敵方出羽海部屋の預り弟子の身となった。
前田山との不仲、それが些細な事件で爆発したのだ。
七月八月、「前田山、東富士一行」の看板で東富士の後援者、名古屋の軍需成金平野製鑵所を

根城に、高砂部屋は愛知県下の大軍需工場地帯を勤労奉仕して歩いた。一門年寄衆はそれぞれが食うのに精いっぱい、この一行にだれ一人加わっていない。前田山高砂親方一人が率いる力士だけの集団だった。

愛知県下の軍需工場地帯――。勤労奉仕をしながら、慰問興行を打って力士大世帯の食い扶持をつなぐには、絶好の穴場だった。

そんなある日――。

東富士は、自分の付け人衆、幕下の国登（のち小結。現年寄佐ノ山）、柏農山、朝見山ら三人を連れて、長良川の鮎釣りにでたのだ。

招待者は他ならぬ東富士個人の後援者平野氏だった。

親分前田山には平野氏の知恵でうまい嘘をついてでた。

岐阜市内の国民学校で行なわれる土俵開き、その相撲指導に招かれた――。

「岐阜の日帰り仕事、行ってきやす」

と、国登らは仰山な格好で稽古まわしを肩に担いで、宿舎中村観音前の芝居小屋をでた。

その足で汽車に飛び乗り、長良川に行き、褌一丁姿になるや川で水浴び。漁師にまじって、水を叩くと張った網に面白いほど鮎がとれた。

川原で火を焚いて食う鮎の旨さ――。

意気揚々、腹を満腹にして帰り着くや、嘘がばれていた。前田山、顔を見る前から烈火のごとくいきり立っている。

「貴様ら三人、何が土俵開きじゃいッ！　クビだ、出てケッ」

しかし、肝心の主役東富士にはもう怒らない。わずか二年前とは打って変り、噛みつきそうな形相で、真赤に逆さに吊りあがった両眼、ぎろりと憎々しげに睨みつけたまま、だんまりである。いつまでもそのまま、うずくまって、ぎろりぎろり睨みつけている。

爆発するよりこわい前田山の張りつめた威圧感があった。

もはやおのれ以上の人気役者、東富士――。

腹のなか煮えくり返るような敵対心、「この野郎、どう食ってやろうか」といいたそうな逆上が渦巻いているのが、そのだんまりのぎろりぎろりから感じられた。

しかし、さすがは腕っぷし一本で高砂親方に登りつめた前田山だった。

「おうッ。東よ。貴様の世話にはならんわい」

そう吐き捨てるかのように、その日のうちに全力士の尻を叩いて、高砂部屋力士の一団は、平野製鑵所を引き上げてしまったのだ。おりから九州太宰府へ行く双葉山一行に加わっていた。

東富士ただ一人は、声一つかけられず、捨子のように置き去りにされたのだった。

東富士は、南へ行く高砂一行とは逆に、一人東京の出羽海部屋へと飛んでいった。

「おい、こっちへこいや。こっちで居候すりゃ、いいやないか」

一緒に酒を飲むたび、そう声をかけてくれた出羽海部屋の幕内相棒たち、駿河海、汐ノ海、増位山（現三保ケ関親方）――。

「おお、キン坊。お前エ、とうとうきよったか」

もともと高砂出の梶之助出羽海親方は、喜んで出羽海部屋預り弟子に迎え入れてくれた。

このときから、番付上高砂一門富士ケ根部屋関取東富士謹一は、本場所の土俵、東方西方と常に対峙（たいじ）するその敵方の出羽海部屋食客となったのである。

長良川の鮎が、アマかったのかカラかったのか、東富士本人は判断がつきかねた。

その年（十九年）十一月、後楽園球場での変則晴天十日間場所、東富士は、新関脇である。

ついに、くるべき時がきた。

六日目結びの一番、東方張出横綱双葉山定次と対したのだ。東富士にとって、この本場所一番が、生涯たった一度の対双葉山戦になろうとは、もちろん夢にも思っていない。

孤高の大横綱双葉山は、前年十八年春夏と十五日間全勝をさらに重ね、優勝実に十二回と前人未踏の記録を樹（た）てていた。

昭和十一年夏、関脇で十一日間全勝の初優勝を遂げて以来、あしかけ八年十五場所にわたって、優勝を明け渡したのがたった三場所。文字通り無双の「双葉山時代」だった。

このとき、双葉山は三十三歳、東富士は二十三歳――。身長体重とも、両者申し合せたようにまったく同じだった。

一七九センチ、一二七キロである。

行司木村庄之助の軍配サッと引かれた一瞬、新関脇東富士の、左を浅く入れ、腰をグイッと落とした巨体が、怒濤のようにがぶり寄っていた。双葉山が正面土俵際、からくも残して、まわり

込もうとしたその一瞬だった。右から放った東富士の豪快な上手投げが決まっていたのだ。大横綱の巨体は崩れるように土俵下音たてて落ちていた。

勝った東富士は、呆然と立ったままだった。

やがて、東方支度部屋に挨拶にあらわれた東富士が頭を深々とさげるのを見ながら、双葉山は、

「キン坊、お前エ強くなったぞ。……俺あ、もう安心して引退できるよ」

静かに、しかし晴々と、そう声をかけていた。そのとき、孤独の影は双葉山の顔面から嘘のように消えていた。

東富士はついに豪快な決め技で、本場所の土俵上でこの大恩人を破ることができたのだった。

双葉山が土俵から訣別したのは、あけて二十年夏場所（六月）初日、相模川との一戦が最後だった。

さて、この場所――

新関脇東富士、初日から快進撃を続けていた。

○柏戸　○十勝岩　○松浦潟　○三根山　○神風　○双葉山　●名寄岩　○双見山　○羽黒山　○二瀬川

千秋楽を終って九勝一敗――。

横綱双葉山、羽黒山を破る二金星が燦然と輝いている。初日柏戸は現伊勢ノ海監事、第四十七代横綱柏戸の師匠。四日目三根山は現高島部屋親方、大受の師匠。五日目神風はのち関脇までいって廃業した現相撲解説者神風正一氏である。

ところが――、

東富士が、この男の鼻をあかしてやる――と、江戸ッ子の向意気一つで向っている兄弟子、宿敵の大関前田山もまた初日から物凄い土俵を続けていたのだ。前田山にしてみれば、七歳も年下の後輩に負けては、それこそ男がすたる。

○十勝岩　○柏戸　○三根山　○松浦潟　○名寄岩　○神風　○双見山　○二瀬川　○立田野　○羽黒山

五日目の黒星一つ、あとはきれいに白星を並べていた。

千秋楽を終って九勝一敗――。

高砂一門の兄弟弟子同士、前田山と東富士二人にそろって黒星をつけたのが、名寄岩（この時関脇）だった。昭和七年の初土俵から、このあと昭和二十九年、四十歳まで、実に二十三年間も糞真面目に相撲だけを取った。

「アンマになるとこだったんだい。あの野郎、アンマの方が向いてンだ」

前田山がそうひやかした男である。

前田山、東富士ともに九勝一敗同士の同点――。

しかしこの時代、いまの優勝決定戦制度はなかった。同点の場合、優勝は番付上位の者のうえに輝いたのだった。

大関前田山は、初の優勝そしてたった一回きりの優勝を掻攫（かっさら）っていった。

「畜生!!」

と、東富士は地団駄を踏んだが、いくら踏んでも、忿懣のやり場はどこにもなかった。

出羽海の飯を食う出羽海部屋の人間、預り弟子とはいえ、協会の身分は歴として高砂一門。本場所の土俵、兄弟子前田山と直接顔が合わない以上、どうにも泣くに泣けなかった。

生れも肌合いも、正反対に違う二人の男を、運命の神が両天秤にかけてもてあそぶかのようだった。

4

昭和二十年がきた。

日本は米軍の空襲で、この年を迎えた。

B29の巨体は編隊をなして悠々東京上空を舞い、やがて市街地に無差別攻撃をかけてきた。

二月二十四日の夕刻——。

大型爆弾がふいに下町、下谷界隈に炸裂。

「どこ行ってきたイ?」

「二長町行ったよ」——。

そんな会話だけで江戸ッ子には市村座（昭和七年焼失）とわかったかつての「市村座の二長町」は、大型爆弾の炸裂する地響きとともに、最も下町的な雰囲気もろとも完全に崩壊していった。

町一帯に、スリバチ状の巨大な穴がいくつもあいていた。

三味線堀といった現在の清洲橋通り、その大通りをはさんで昭和通りに至る秋葉原寄りである。凸版印刷、赤レンガの衛生試験所、すべてが瓦礫と化した。大通りの向う浅草側の名物鳥越神社一帯だけが爆撃から免がれた。

そのとき、東富士の母と小学生の末弟の二人は、直撃弾の爆風で圧死したのだ。鉄工場（自宅）の屋根の物干しで、「空襲。空襲」と呶鳴っていた父金松は、吹っ飛ばされただけで奇跡的に助かっていた。

日曜日のその日、東富士は、相撲講習で顔見知りの霞が関・海軍省から「パンを取りにこい。白いパンだぞ」という電話で呼びだされ、家を出たちょうどその留守だった。

偶然、助かった命だった。

三月十七日。硫黄島では日本軍玉砕。そのなかに、弟の三男泰三もいた。

キン坊東富士は、五人きょうだい（男四人、女一人）の長男だったのだ。

相撲のメッカ、両国一帯が焼野原になったのは、三月十日の東京大空襲のなかだった。高砂部屋、回向院裏の富士ケ根部屋、すべてが灰となった。

大鉄傘の国技館にも焼夷弾の雨が降った。

この夜、元関脇豊島、松浦潟――東富士の幕内相棒二人が死んだ。豊島は酒に酔ったまま、言問橋近くの隅田川の中で、松浦潟は火の輪のなか、大八車に荷物を積み込んで、夫婦で家をでた。

「こっちだ。こっちだ」と逃げて行く姿が最後だった。死体はわからない。

増位山（現三保ケ関親方）は、いまの両国橋近くの春日野部屋一角の借家にいた。消防ポンプを持ちだし、一晩中消火作業に走りまわっていた。夜が明けると、奇跡的にその一角だけが焼け残っている。

大通りを大きな手袋をぶらぶらさせた人たちが一杯こちらに歩いてきた。よく見ると、焼けただれた手がぶらさがっているのだった。

そんな生地獄のまっただなかに、増位山は命を拾っていた。

出羽海部屋力士たちは、各地の勤労奉仕で食いつないでいた。田圃の土運び、松の根っ子掘り、防火水槽用の用水堀づくり——。土俵の人気力士、一騎当千の猛者ぞろいが、次々とそんな現場に駆りだされた。

弁当持ちで一日働いたその勤労奉仕代が、十五銭。十五銭のたばこ金鵄（ゴールデンバット）をむやみに吹かすより他に仕方なかった。

やがて弁当にする米すらなくなった。

大きなアルミの盥、そのなかに芋の蔓が入った重湯。あるときは大豆が丼に一杯。それに塩をかけて食った。

出羽海部屋も焼け落ち、わずかに焼け残った一角、その隅田川に面した家を借りて部屋住みの東富士、駿河海、汐ノ海、八方山、千代の山——若い者たちがゲートルを巻いて、国民服をひっかけ、ごろごろたむろしていた。

部屋住みでは、預り弟子東富士が関脇で、番付が一番上だった。

うろつきまわる力士たちを見つけるや、梶之助出羽海親方がいってまわった。

「あんまり動くんじゃねえぞう。動くと腹が減る。……静かにしてろ、静かにしてろ」

なるほど師匠は、うまいことをいう——と、みんな変なところで感心した。

けたたましく空襲警報が鳴り響くや、防空壕にとびこむ町の人たちとは逆に、力士たちは晒の褌一丁で外にぞろぞろ出て行った。

「あッ、きたぞ、きたぞ」

「何機じゃい？」

「向う行ってしまいよるが」

仲間の力士二人が死に、目の前で大空襲の生地獄を見ているだれもが、「どうせ、死ぬんじゃい」と平気で、東京上空を舞うB29の大編隊を見あげていたのだ。

なかでも、わずか一ヵ月に母と弟二人を失った東富士の肚の中には自棄糞めいたものが、とぐろを巻いていた。

そんななか、大相撲は夏場所を敢行したのである。明治神宮相撲場は焼夷弾で滅茶滅茶、焼夷弾の雨が降りそそいだ跡の両国・国技館で、六月七日初日。空襲と同時に中止の変則七日間、非公開土俵だった。

この場所こそは、平和ないま、大相撲史に燦然と残る記録である。全国に散らばっていた力士たちが、知らせを聞いて焼野に立つ国技館に馳せ参じてきたのだ。

屋根は焼夷弾の弾痕も生々しく穴だらけ、天井から飛び散ったガラスの破片は、足の踏み場もないほど。土俵にのぼる力士たちは、両足に靴をつっかけて歩き、溜りで脱いだ。

勝負検査役は、汚れた国民服姿、肩に防空頭巾、足にはゲートルを巻いた殺伐とした格好で、土俵のうしろの方、腕を組んで立っている。

打棄り相撲は、ガラスの破片のため禁手になった。

かつて大観衆をのんだ大鉄傘下に観客がいない。相撲を取りながら、いつ空襲で死ぬかもわからない——そんな冷たい緊迫した空気が張りつめていた。

そんな寒々とした土俵上、東富士の絶好調ぶりには、だれもが度胆を抜かれた。

初日から白星をきれいに並べている。五日目、横綱羽黒山には堂々の白星だった。

その夜——。

出羽海部屋の幕内衆、東富士、駿河海、汐ノ海、増位山、八方山、羽島山、千代の山ら猛者ぞろい一同は、楽祝いに向島まで繰りだした。だれもが相撲は終った、と思っていた。

一日取っては雨で中止、また一日取っては空襲空襲——一体、自分が何番取り、今日は何日目だったのかもわからなかった。東富士自身、横綱羽黒山に勝った以上もう終った、優勝だと思っていた。

料理屋にあがり込むと、どぶろく、すまし、ビール。灯火管制のなか、暗闇のなかで、防空頭巾を肩にぶらさげ、手さぐりで、浴びるほど飲んだ。夜を徹して、なにやら正体不明の酒をチャンポンに飲んだあげく、翌朝川を通りかかった舟に乗せてもらい、両国橋近くまでくると、相撲

太鼓の音がする。

「トン、ストトン、トン。トントン、ストン、トントンストン」

「おい、今日はなんか花相撲あったかあ？」

「花相撲？　なかったなあ」

「おッ、こりゃ、おわい舟じゃねえか。くせエぞ」

「ちゃんと見ろや。荷物舟だい、なあ、船頭さん、すまねえ」

全員悪酔いで赤い目をチラチラさせながら、半分眠っている。

やっと部屋に辿り着くや、若い者が総出で一同を捜しまわっている始末。今日が六日目の土俵だという。

「なにイッ、まだ相撲あったんかあ？」

と、また眠り込んでしまったときは、もう遅かった。

この日、出羽海部屋猛者衆は、汐ノ海、八方山、千代の山を除いて黒星の討死だった。

土俵にあがっても二日酔いで足がふらふら四股が踏めない。土俵溜りに坐ったまま、腕を組んで眠り込んだ末、ゴーッゴーッ大鼾をあげる者もいた。

東富士のこの日の相手は、十勝岩。この日まで全敗である。一方東富士は全勝。

全敗と全勝力士が土俵に上がった。

ところが東富士、酔眼朦朧として十勝岩が三人に見える。一人が四股を踏むと、もう二人も四股を踏む。

一気にダーッと寄ってでた途端、土俵際でふらふらと腰が抜け、十勝岩にほふられた。十勝岩はこの場所、東富士から拾った星が唯一の勝星だった。

東富士は千秋楽（七日目）、名寄岩に勝ち六勝一敗。目の前にぶらさがっていた優勝をまたもや取り逃がしたのである。

この非公開夏場所の優勝は、大番狂わせの続出で、七日間全勝の前頭筆頭備州山大八郎に輝いたのだった。

この夏場所を打ちあげ、空襲の被害が全東京に及ぶさなか、二十三歳の東富士は、二十歳になったばかりの富美子さんと結婚していた。

日本橋高女出の目のさめるような別嬪（べっぴん）ぶりに東富士が一目惚れしたあげく、

「わかりました。親戚家中みんな大反対だが、空襲で大勢の人がバタバタ死んでいく。どうせ死ぬなら、娘もヒトにして死なせましょ」

と、娘の母親もほとんどまともには生きられまい、と諦（あきら）めたのだった。

空襲で全滅した二長町の清洲橋通りの向い、鳥越神社の近くが娘の家だった。小学校も同じ浅草の柳北小学校――。

七月十三日、空襲のサイレンが不気味に鳴り響くなか、立川市内に逃れていた井上一家の疎開先で祝言。

新婦は頭巾を持ったモンペ姿。一一二キロ（三十貫）を割っていた新郎東富士は、ゲートルを

巻いて鉄カブトを背中に背負っていた。

その格好でメザシの尾頭、きゅうりもみ、ふかしたジャガイモで大急ぎで三々九度をすませるや、

「防空壕、入れえッ」

近所から呶鳴られながら、防空壕に飛び込んでいた。立川基地の上を低空で米軍艦載機が数機旋回していた。

力士たちはそれぞれが散り散りになり、仲間のだれも東富士の結婚を知らなかった。

若い二人だけで御徒町にささやかな新居を持った。

三日目にはもう空襲で焼けだされていた。

焼夷弾がまだ降りそそぐ一面の火のなか、夫婦は水浸しの蒲団を頭からかぶって逃げまどい、やっと上野松坂屋の前で助かった。その夜は、松坂屋の往来に面したコンクリートの上で一夜を明かした。

後援会長山下清さんは、井上鉄工場の得意先、ダンボール会社の社長さんだった。その山下さんの出身地に近い八ケ岳山麓、山梨県北巨摩郡武川村にやっと疎開して、息をついた。

後年、この近くの村から小結富士錦（現年寄尾上親方）が出る。

ほっとする間もなく、村の人たちがやがて白い目で見はじめたのだ。

「ダンボール会社の社長は、この非常時にあのデカイのを飼っとくのか。もう闇米は、あそこには売るな」

東富士夫婦は農家の離れ十畳の座敷で声もださず、小さくなっていた。夜になると大きな蚊屋をつった。蚊屋のなかで、富美子さんの兄、東富士の叔父——全部で男五人、女一人が小さくなってやっと仮眠をとった。

他に寝る所もなかった。

そして八月十五日——この山奥のなかで終戦を迎えたのである。

さながら戦争と一緒に育ったような年代だった。なかでも東富士は、戦争の拡大にあわせたように成長してきた。

日中戦争の昭和十二年、前相撲を取り、大東亜戦争突入の昭和十六年幕下で双葉山に見いだされて相撲開眼し、大東亜共栄圏が発展した昭和十八年入幕を果した。そして相撲どころではなくなっていた終戦直前、相撲仲間や大衆の目から隠れるように、ささやかな世帯を持っていたのである。

青春は吹っ飛んでいた。

この終戦の年の暮れ十一月、国技館の廃墟の秋場所（晴天十日間興行）、大関にのぼった。前場所優勝は逃したとはいえ、六勝一敗の好成績を受けての堂々たる新大関だった。

しかし、終戦の現実にただ呆然自失していた一般国民は、だれもそんなことは知らなかった。「大関誕生」に沸く大観衆もいなかった。後援会お歴々の御祝儀などは、むろん舞いあがりさえしなかった。

史上、これほどツキから見放された力士は類がない。大正生れで昭和とともに成人した東富士

は戦争の申し子でもあった。

5

戦争が終ってみると、東富士は唯一無二の親友を失なっていた。駿河海が幕内十七枚目を最後に大相撲を去っていったのだ。

国技館は進駐軍に接収されて「メモリアル・ホール」と改称され、やがて日本人立ち入り禁止になった。

双葉山の時津風年寄は、過度の神経衰弱の末に正気を失なっていた。新興宗教の鼈光尊のもとに走り、明治天皇の再来といわれ一人悦に入っていた。

「大相撲は死に絶えるのではないか」

二十世紀の世にちょん髷を結った大相撲は、占領軍を迎え足もとから土台が揺らいでいた。見限って廃業する者、消息不明のまま姿を晦ます者があいつぎ、番付には白紙部分ができ、呼出し奴名まで加えて体裁をとるほど、力士がいなかった。

しかし、屋台骨を支える者たちはいたのである。

昭和二十二年六月、明治神宮外苑に夏場所晴天十日間興行が開かれた。

横綱羽黒山、照国。大関前田山、佐賀ノ花、張出大関名寄岩、東富士、汐ノ海。関脇神風、千代の山。小結増位山、輝昇。張出小結三根山。

幕内に鏡里、栃錦、岩平（のち若葉山）、穂波山（のち大起）、力道山。――

やがて戦後の大相撲を支えるそうそうたるメンバーだった。

『同成績（同点）の場合、優勝決定戦』

この制度は、この場所からだった。かつて関脇時代、同点で優勝を大関前田山にさらわれて地団駄を踏んだ末に、東富士が力士会に提案して実った制度だった。

この場所ついに、西方で前田山正大関、東富士張出大関と、高砂兄弟弟子二人が一線にならんだのである。

しかし、すでに過去九年十八場所にわたって不動の大関相撲を取ってきた最古参大関前田山には、だれも期待しなかった。戦争とともに「双葉山時代」は終り、だれの目にも、二十六歳、一六八キロ（四十五貫）と堂々たるアンコ「東富士時代」の到来が明らかだった。

予想通り大関東富士は白星街道を突き進んだ。

前田山は七日目に黒星。八日目には羽黒山、平幕力道山がともに破れ、ついに東富士八勝でただ一人全勝。

残り二日、優勝へ星一つの差をつけた。

ところが翌九日、東富士は、その羽黒山に敗れ、十日目千秋楽全取組を終了して、なんと四人が九勝一敗――。入り乱れて、初の優勝決定戦制度に優勝を持ち越したのである。

横綱羽黒山、大関前田山、東富士、東前頭八枚目力道山。

羽黒山の一敗は前田山。前田山の一敗は神風。東富士の一敗は羽黒山。力道山の一敗は羽黒山。

まさに星一つ潰しあいの乱戦だった。

千秋楽、初の優勝決定戦の土俵を迎え、高砂一門の事情を知るだれもが胸の高なりをおさえきれなかった。

四人の優勝決定戦。

二組にわかれ、まず準決勝戦。それに勝ち抜いた者二人が優勝決定戦にのぞむ。

相撲史はじまって以来、見ることのできなかった兄弟弟子同士の本場所土俵上での対決。しかも並の者ならいざ知らず、かたや高砂一門に君臨する強情無類の二枚鑑札、かたや高砂一門を追っ払われて出羽で飯を食う人気絶頂の新進大関。犬猿の仲の二人の対決が見られるかもしれないのだ。

「くそッ！　参ったなあ。前田山とだけは、当ってくれるなよ、なあ」

と、東富士は目をあけた。

しかし、準決勝戦の顔合わせは、

前田山―東富士。

羽黒山―力道山。

またもや東富士は、おのれの蒔いた種による制度の前に、自ら首を締められる羽目に陥ちこんだのである。

土俵下東西にわかれ、溜りに入るや向う前田山はもう両眼カーッと吊りあげている。

「この餓鬼アッ!!」

血ののぼった真赤なその形相を見た途端、東富士はもう相撲を取る気がしなくなった。馬鹿馬鹿しい、糞真面目に喧嘩して勝ったあげくに、あとどんな目にあわされるかわからない。向きになった相手のその形相を見ただけで、江戸ッ子キン坊は、もう興醒めしていたのだった。勝負師として最大の欠点——そう自分で知りながら、興醒めしてしまう気性だけはどうにもならなかった。

一六八キロの白い大アンコが、一一二キロの浅黒い鋼鉄のような筋肉質の男に、下手捻りでごろりと負けていた。

こうして優勝決定戦は前田山と、力道山を打棄りに破った羽黒山で争われ、結局初の優勝決定戦のこの夏場所、優勝は横綱羽黒山のうえに輝いていた。

場所後、前田山英五郎は第三十九代横綱に昇進する。

万年大関前田山にとって、目の前に躍りでてきた東富士のむやみに大きな大アンコさえ目に入らなければ、名門高砂の二枚鑑札におさまっている身、本場所の土俵上これほど奮戦しなかったに違いない。従って横綱を張ってもいなかったに違いない。

東富士は一体、前田山の何だったのだろうか？

前田山、この晩年になって、横綱のぼた餅を拾いあげ御機嫌である。

その顔を見れば見るほど、余計、東富士は癪にさわるのだった。

一方前田山は、横綱仮免許のもと、明治神宮で初の手数入り、雲竜型の土俵入りを行う段になってはたと困った。横綱の俺様は文句はない。しかし、太刀持、露払いにひきつれる立派な役

者が高砂部屋のどこを見渡してもいないのだ。一門ならば、いる。日の出の勢いの大関、東富士謹一である。

しかし――、

「ふむ、あの餓鬼ア、どこまでもわしを困らせよる餓鬼じゃわい」

第三十九代横綱前田山は、にがーい顔を一層にがくして太刀持に平幕信州山（のち廃業）、露払いに同じく平幕前ノ山（秋田出身。のち廃業）の二人を引連れ、さっさと急テンポで土俵入りをすませてしまった。

雨の降りしきる中だった。

6

場所が終ってやがて稽古がはじまれば、稽古土俵にゆらゆら太鼓腹を波立たせ降り立つ食客東富士は、いまや出羽海部屋の大将だった。

第三十七代横綱安芸ノ海は前年十一月限り引退、年寄不知火（のち藤島）を襲名している。

あとは、ポン友大関汐ノ海一人。

十七年初土俵を踏み、もう関脇にまでのしあがった大器千代の山（先代九重親方）、出羽ケ嶽文ちゃんの弟さながらの男ちゃんこと穂波山男次郎（のち小結大起）。引退後年寄境川。四十五年四十七歳で歿）。

出羽海部屋のこれら稀代の巨漢弟子たちの前に、東富士はドンと太鼓腹を突きだしてやる。稽古場でも千代の山は十八番の突張り。物凄い勢いで両手をパンパン、パンパン張手まじりに相手に叩きつけるのだ。胸を貸す稽古相手は、顔を三つ四つひっぱたかれる。当然だれも胸をまともに貸す者はいなかった。

男ちゃん穂波山も同様だった。なにしろ梶之助出羽海師匠が中学校も部屋から通わせ大きくした巨漢山本男次郎——まともな稽古相手がいなかった。

居候東富士だけが、出羽海部屋にきて以来この二人の巨漢の格好の稽古台だったのだ。

東富士がいなければ、のちの横綱千代の山も、小結大起も、あるいは生涯目が出ないで終ったかもしれない。

居候は、ただ飯を食っていたのではなかった。出羽で三度の食事をいただく価値はちゃんとあったのだ。

東富士の胸を借りたのは、出羽海部屋だけではなかった。

居候の気楽な一人身、ちょいと浴衣をひっかけると、高砂以外はどこの部屋へもぶらりと稽古にでる。東富士自身は他流試合のつもりでいたかもしれない。しかし向うは違った。

「こんどは恩返しの番だい」

双葉山の時津風部屋には、なかでも一番にそういって顔をだした。ここにはアンコの鏡里（第四十二代横綱。現立田川親方）、身長二〇一センチの怪物大内山（のち大関）がいた。

二所ノ関部屋にも扱いかねる力士がいた。若ノ花、それに十五年に初土俵を踏んだそれこそ前

田山をさらに凶暴にしたような男、力道山。

どの大部屋でも、いまや角界一の実力を持つ大関東富士の到来は大歓迎だった。こうして後年テレビ放映開始（二十八年二月、ＮＨＫ）とともにはじまる戦後の大相撲全盛期の人気役者たちは育ってきたのだった。

しかし、本場所土俵が近づくと、東富士の憂鬱がはじまる。

番付が発行され、本場所がはじまるや、高砂一門東富士にくるりと変わる。同じチャンコをつついている出羽海関取上位の相棒たちと、敵味方にわかれて星争いにしのぎをけずらなければならないのだ。

こちらは横綱を狙う天下の大関――、一番も負けられない。胸を貸した者、あるいはかつて土方作業を一緒にやり、芋の蔓の重湯をすすって、ドブロク、すましをチャンポンに飲んだ仲間――それが四、五人ずらりと顔があう。桜錦、千代の山、増位山、汐ノ海らである。

どうにもやりきれない。

一人、孤独だった。酒に憂さを晴らしても、このいやーな心持ちだけはわかってくれる者はどこにもいなかった。

どうして俺一人だけがこんないやーな目にあうのか、それが不思議でたまらなかった。

二十二年十一月（神宮、十一日間興行）、六勝五敗。五黒星のうちに、千代の山、汐ノ海がいた。やっとの思いで初優勝を手にしたのは、翌二十三年夏場所（六月神宮、十一日間興行）だった。十勝一敗である。

一敗は二所ノ関部屋の力道山。出羽海一門関取衆で顔があった羽島山、増位山、桜錦、八方山、千代の山は全滅させていた。

揺るぎない実力ナンバーワン、「東富士時代」到来と声がかかってから五場所目でやっと手にした優勝だった。

横綱問題は、前場所の六勝五敗で、当然のように見送られていた。

しかし東富士自身は優勝賜杯で、スッと気が晴れた。咽喉のどこかに刺さってとれない小骨が、大きなにがい物を呑み込んで、やっととれたような思いだった。

この夏場所後、高砂・出羽海一行の北海道巡業がはじまった。

興行の看板は、もちろん横綱の土俵入り。高砂の総帥、前田山英五郎だった。

すでに出発前に、前田山高砂親方の裏工作が成功していた。欲しいとなったら、なにがなんでもとらなければ我慢のならない前田山である。それも騙したり、横から盗んだりの姑息なやり方ではない。真直ぐ手を伸ばして、正々堂々摑みとる。

いまや優勝を遂げ大相撲大看板にまでなった東富士は、その前田山高砂親分の手にギュッととりかえされていたのである。

東富士としては、どうにも仕方がなかった。

出羽の居候東富士の身柄を高砂のもとの鞘におさめるぐらいは、前田山には簡単なことだった。

往来で摑まえて、ぶん殴って部屋に引摺ってきて括りつけておけば、実際はそれで用はたりた。

一門から破門を申し渡したおぼえはない。勝手に逃げ出して、出羽に居候をきめこんだ力士にすぎないのだ。

居候とはいうものの、野良犬にすぎない。なにも前田山自身がのこのこ出向いて、梶之助出羽海親方に挨拶して、話をむずかしくする筋は毛頭ない。野良犬を断って貰いさげる馬鹿はどこにもいないのだ。

ただ、出羽の飯を食っているうちに、その高砂生れの野良犬が大関に出世しただけである。血統はまさしく高砂。

しかし、そこは大関——。前田山も人の子である。たった一人頭をさげてもおかしくない人物がいた。

双葉山の時津風親方である。

時津風に、東富士は一言いわれただけだった。

「キン坊や。あの前田山がわしに頭までさげた。高砂に帰ってやれい。それが本筋だよ」

どうにも仕方なかった。恩人双葉山の言葉にだけは従わざるを得ない。

昭和十九年十一月の新関脇のときから、大関で初優勝を勝ち取った昭和二十三年まで、足かけ五年に及んだ東富士の相撲生活中、最も幸福だった時期は、こうして終ったのだった。

しかし、東富士が高砂に舞い戻る——そのことを北海道巡業中、出羽海一門は全くだれ一人知らなかった。

「長々とありがとうございました。実は、このたび、高砂に……」

東富士は出羽一門衆に、このときそう一言挨拶すべきだった。しかし、現代的に割切ったそんな挨拶は、東富士にはとてもできなかった。

どうにもやりきれなかった。

このことがまた東富士自身を一層窮地に追いやったのである。悲劇の種を蒔いた張本人は東富士自身だった。

北海道巡業は惨憺たる不成績に終った。

長雨にたたられ、契約の興行は破談になり、欠損に欠損を重ねた。

この有様をみて、高砂一行だけはさっさと北海道を引きあげたのである。あとに残された横綱の土俵入りのない出羽海力士一団は、憎悪に煮えくりかえる空っ腹だけを抱えながらやっと東京に辿り着いていた。

昭和二十三年——闇米の買出し、カツギ屋が日本全国に横行し、駅にはダフ屋やショバ屋が氾濫していた。前年帝銀事件が起き、焼跡にはニコヨン、引揚者があふれ、世情も混沌としていた。役者のいない食い詰め者集団の相撲などを、のんびり見るゆとりは全国どこにもなかったのだった。

「東の野郎、なんで高砂なんぞ行った。一言の挨拶もなしに。……えッ、野郎。裏切りやがったな」出羽海部屋の猛者たちが、歯軋りをして、優勝するなり高砂に走った東富士をそう罵りあったのだ。東富士はせっかくつくりあげた親友をも失っていた。

こうしてこの年十月、大阪・福島公園で初の大阪秋場所（十一日間興行）が開催された。

東富士、絶好調である。

体重一七〇キロ、その重量を最大限に生かした象のような巨体が、初日から文字通り怒濤の勢いで土俵上相手を次々と押し潰していた。

夏に続く連続優勝街道である。

しかし、その前に立ちふさがった男がいた。

○千代の山　○神風　○出羽錦　○力道山　○吉葉山　○桜錦　○汐ノ海　●増位山　○不動岩　○佐賀ノ花　○三根山

八日目の相手、増位山だった。

このとき、関脇。本来三保ケ関部屋力士でありながら、出羽海部屋力士として相撲をとっている。三保ケ関部屋は二十一年五月、師匠八代三保ケ関（元十両滝ノ海）が死に、いらい親方がいなかった。たった一人の弟子増位山が二枚鑑札を申しでたところ、「師匠のいない者は相撲はとらせられん」とはねつけられた。やむをえず出羽海の名を借りて、出羽の勢力に組入れられて、相撲を取っている。いつの日か三保ケ関部屋を再興してみせる、という望みのもとに、尋常ならざる意地だけで相撲をとっている増位山だった。

これもまた小部屋の悲しみだった。

今日の三保ケ関部屋はこの増位山九代親方のもと、史上初の増位山親子二代大関を実現させ、横綱北の湖、大関北天祐を擁する一大勢力になっている。油絵の趣味がこうじてその絵が二科展に入選した。自宅に油絵の道具が山ほどある。

その増位山が東富士の前に、立ちふさがったのだ。

三保ケ関の名を失った出羽一門の男、富士ケ根の名をだれも相手にはせぬ高砂一門の男――これほど似通った者同士はまたとない。

千秋楽終って、互いに十勝一敗――。

ついに大関、関脇の対決で優勝決定戦にもつれ込んだのだ。

大アンコ東富士の一七〇キロに対して、増位山は一〇八キロ。

体重では、闘う前に勝負はみえている。しかし八日目の土俵、両者顔あって、このとき同時に立つや、東富士ダーッと出足鋭く押し寄せた一瞬に、増位山はサッと左にまわっていた。そのまま送出しに増位山が貴重な白星をあげていたのだ。

しかし、本場所の土俵二度迎える優勝決定戦――増位山の変化が二度通じないことは、百も承知だ。あと増位山の攻めといえば、押しと突張りしかない。

増位山は支度部屋で一人つくねんと腕組みしながら、一服していた。

「こうなったら絶対負けんという型はわしにはない。いつのときにも自信はない。自信はないが、相手も恐い。なにやられるやら、わからん。なにやるか自分でもわからん。……仕切ってて、相手にその自信のない心、そいつを見抜かれんようにガッと仕切る。相手を倒す、それだけを考える、それだけじゃな」

そのとき、ポンと肩を叩く者がいた。

一門、笠置山の秀ノ山親方だった。

「もう一番、ひとつ頑張らにゃ駄目だぞ」
「いやあ、とてもとても勝てんです」
実際どう考えても勝てる道理がなかった。八日目の白星は練りに練った作戦がまんまと当っただけのこと。二度と通じない奇襲戦法だ。相手は自分の倍ほどもある巨漢。押して駄目、突張って駄目、どう考えても勝てる計算がでなかった。
「……そんなこといってちゃいかん。やってみにゃわからんのだ」
「なるほど。……やってみましょう」
このときの増位山の思いは、相撲一瞬の機微をついていて妙である。
確たる自信がなくて、相手を倒すことだけを考えるとき、実は不動の自信が生れているのだ。仕切るとき、奥歯を嚙みしめ、息をつめ、ギューッと相手を睨むうち、相手の心まで見透かすという。相撲とは、こわいものだ。
さて、東富士―増位山。
両者、同時に立ってまともに当っていた。東富士は悠然増位山の右上手を取った。左四つの体勢。東富士、絶対の有利。――そのまま小さな増位山をグイッと力まかせに引きつけにいった出鼻を、増位山が左内掛けを飛ばし、強引に東富士の巨体を引きつけながら、土俵際まわり込んだのだ。引きつけられながら、猛然と太鼓腹をあおって、寄倒そうと東富士がでた一瞬、腰を低く入れた増位山は、弓なりにそって打棄った。鮮やかに決まっていた。
その瞬間、喝采を叫んだ一団がいた。

「ざまあみろッ。罰当たり！」

恨み骨髄の出羽関取衆だった。千代の山、出羽錦、桜錦、汐ノ海――みな、その思い一つで次々と当って砕けた憂さを、増位山が晴らしてくれた一瞬だったのだ。

負けて「ざまあみろッ」とこれほどまでに恨まれた力士は、古来まれである。

東富士一人が悪者になっていた。

優勝、増位山大四郎。十勝一敗――。

東富士は、おのれが提案して実ったせっかくの優勝決定戦二回を経験しながら、ついに自分では二回とも優勝を逃がしていた。

場所後、協会番付編成会議満場一致で、東富士は第四十代横綱を許されていた。同時にその東富士を二回も破って初優勝を挙げた関脇増位山も大関に登ったのである。

江戸ッ子のボンボン、キン坊が「相撲にゃ向かねえ」といわれたその大相撲の世界で、とうとう最高位の横綱になっていた。

もう二十八歳。

7

横綱東富士は、期待通り大看板だった。

「キンちゃーん」

大向こうから、そんな声援がかかって少しも不思議がないほど大衆の人気役者たるありあまる条件が自然身についていた。

ゆーらり、ゆーらり歩く大きな体にちょんと乗っかった喜劇俳優岸井明そっくりの可愛い童顔。

「キンちゃん、目線、目線だよ。仕切るとき、キンちゃんの目線はいつも相手の目の下を見てる。いけないいな」

義兄弟の歌手、灰田勝彦が、岸井明に向ってそういうと、

「おい、お前エ。おれ、キンちゃんじゃねえぜ」

と、岸井明はプリプリ怒った。それほど、顔も大きな体も、人のいいところ、気の弱いところ、子供のいないところまでも、二人はそっくりだった。

飲んでいると、義兄弟でも錯覚した。しまいには、天下の横綱を摑まえて、映画やジャズの話をしている。すると、今度は東富士が文句をいう。

「困るな、兄貴。わし、アーちゃんじゃないですよ」

新聞も「岸井明そっくり」と書いていた形容を、いつか「横綱東富士そっくり」と岸井明の形容詞に変っていた。

雄大なアンコの東富士が、小さな相手が死物狂いになって勝負を挑むや、まるで「もうやめようぜ」といわんばかりにあっさり負けるところが、インテリの都会人には堪えられない魅力だった。

「ふむ。わかるなあ、あの気持ち」

勝負に負けて、不思議なところで感嘆された。

激しい相撲で相手が怪我をすると、東富士は勝負を忘れて怪我の心配をした。

二十四年春場所（一月、日本橋浜町公園）は、新横綱東富士の初の土俵だった。優勝に挑むその場所、一つの星もおろそかにできない。

その六日目の土俵、関脇神風との一戦、大相撲を演じた末、左四つから右差しに食いついた神風の額から突然、血が噴きだした。流れる血が目に入り、とまらない。

あわてた行司が割って入り、土俵上勝負検査役衆の協議となった。

そのとき、東富士があわてて割って入った。

「このままで痛み分け、わしはかまわんです」

続行か、痛み分けか——その判定を協議中の検査役衆も、横綱のこの一言で決断が「痛み分け」に決まったのだ。

そのあと、東富士は支度部屋に飛んで行った。

「おッ、大丈夫か」

まるで自分の責任で、人が怪我をしたような顔つきだった。

この場所、十勝二敗一痛み分けで二回目の優勝を記録していた。

「痛み分け」はもう一度ある。二十六年秋場所（九月、大阪）、四回目の優勝を飾った十二日目、対吉葉山戦だった。

東富士の地方巡業行く所、「横綱だ、横綱だ」と遠くから見ているのが普通の人びとは、その気

さくさに吃驚した。

先乗りして興行地の準備万端をすませた「先発」がすっ飛んでくるや、人だかりのなか、

「大将。あの家は、床が抜けてる。便所へ落っこちたら大変だい」

「いや、気をつけてしゃがむから大丈夫だ、心配すんねえ」

そばで人びとは、どっと転げあって笑った。

宿泊先の土地の名家には、もう嫁にいった娘まで帰って、一家総出の横綱歓迎だ。大物大臣の視察さながらの座敷、床の間を背に坐らされ、ぞろぞろ家内一同を引きつれ名家の主人があらわれるや、

「いらっしゃいませ」

下にも置かぬ丁重ぶりで手をついて挨拶されると、もう東富士はいやーになる。陰で付人を呼んで、

「おい、どんなちっちゃな所でもいい、旅館にしてくれよな」

頭をさげて頼み込むのだった。

大阪・道頓堀の宿で新聞記者と二人で風呂に入ったことがある。大阪場所の秋の寒い夜だった。東富士が湯舟につかると、湯がざあざあ溢れでた。「お先に」と出たあと、湯は半分ほどもない。そのあとに新聞記者氏が入ると、湯は胸の下あたり、上半身がすっかり出てしまっている。

「おッ、先生に風邪引かせちゃ、すまねえや」

もうサクラ色にのぼせているのに、東富士はまた風呂に入るや、水位をあげていつまでも湯舟

につかっているのだった。

東富士が横綱を張った一年後、二十四年秋場所（十月、大阪）である。

東富士は新番付を見て吃驚した。いつの間にか、高砂本家に移籍されていたのだった。

種を明かすと、こうだった。

前田山は、花形役者東富士を高砂一門に組み入れたとはいえ、やっぱりまだおもしろくなかった。番付上「高砂部屋所属力士」東富士であってこそ、ことごとにおのれの反対を行こう行こうとするいい気な横綱も、完全におのれに屈服したといえるのだ。井上金松の倅が、萩森金松のわしの子分になるのだ。

「どうもうまくねえや、親父が金松同士じゃな」

東富士が癪なことに、出羽関取衆にそうこぼしていたのを耳にしている。

親方富士ケ根、兄弟子の処遇、そいつが問題である。

幕内関取富士ケ嶽は、二十年十一月現役引退して二枚鑑札がとれ、富士ケ根親方になっていた。なんの力もない平年寄とはいえ、横綱東富士がいる限り、東富士の親方であり、江戸・天明の世から続く富士ケ根部屋親方に違いないのだ。

「勝負検査役」

その就任を条件に、東富士を高砂部屋関取とする。

平年寄富士ケ根親方は、咽喉から手がでるうまい話にまんまと乗ってきた。東富士の兄弟子富

士ケ根は、ついに自分の栄達の代価として、富士ケ根部屋を売り渡したのだった。

東富士は呆れはてていた。

後年の話であるが、東富士が相撲界を廃業したあと、年寄富士ケ根はあっさり検査役の座を落ちていた。行き場に困りはてた末、双葉山の時津風親方に泣きついて安住の地を見いだした。現在年寄富士ケ根は、高砂一門ではなく、時津風部屋の株になっている。

前田山の高砂親分は、所有欲のあまり、結局は年寄株一つを損した計算ではないだろうか——。

ある日突然、高砂部屋に横綱がもう一人生れていたその大阪秋場所、前田山本人は悠揚せまらず単身大阪をあとにした。そのまま本場所はサボって、後楽園球場での戦後初の日米野球巨人—シールス戦のプロ野球を観戦するや、横綱の方はやめていた。

「横綱は、お前エの方が似合うぜ、キン坊」

前田山はそう声にだして東富士にいうや、ひとり苦笑していた。格式ばった横綱ちゅうものは、なんとも窮屈なものだ、と——。

御機嫌の前田山は、こわーい前田山と違って周囲が吃驚するようなブロークン英語を連発しては、ちゃんと外人と話が通じていた。

アメリカ人がそれでニコニコしているのをみると、「おッ、前田山てえ奴は偉えな。一人で英語を話してるぜ」とまわりがおろおろしていた。横紙破りの近代青年、四代高砂浦五郎の面目躍如である。

東富士は横綱になるや、たちまち力士会長に祭りあげられた。

やっかいな役目だった。

力士の生活をよくする会――十両以上の関取で構成する力士会では勝手な要求ばかりが集るのは当然だった。交渉相手は親方衆、それも取締の要職にのぼりつめた絶大な権力を握る協会幹部である。

「歩方金、もっと寄越せえ。相撲はもう取らんぞうッ」

番付発表の翌日午後一時、東京では協会（国技館）がすぐ目の前の回向院本堂の大広間に集っては気勢をあげた。

労組とまではいかない社内組合に近い、力士と行司たちからなる一種の生活権要求団体だった。他の横綱たちは、そのやっかいな会長役を敬遠して東富士を会長に祭りあげた。大関のときから、事実上、親方のいないみなし子東富士は力士会幹事に推されていたのだ。

この時代、いまの月給制ではない。給金はすべて「歩方金」、それに巡業の「収益（あがり）」で生活がなり立っていた丼勘定の時代である。一体この給金は多いのか少ないのか、土俵上の相撲に見合った収入なのかどうか、皆目（かいもく）本人でさえも判断ができなかった。

それだけに力士たちの要求は切実だった。

力士会はいまもりっぱに存在している。しかし、ガラス張りの月給制で恵まれたいまの力士会は有名無実化して存在価値すらないほどだ。現在のお相撲さんは、大企業の寄らば大樹のかげでぬくぬくとする一般サラリーマンなみに、高給をもらってすっかりお利口さんになっている。

しかし、かつての一騎当千の力士たちは違った。生活権を前面にだして大騒動を演じた天龍事

件（昭和七年）の力士たち、そして東富士力士会長は違っていた。

ところが――。

「歩方金もっと寄越せえ。相撲取らんぞ」

ストライキまがいに気勢をあげていた力士たちも、いざそれぞれの部屋に帰ってみると、みな親方たちが待っている。

いきなり呼びつけられるのだ。

「この野郎、お前エら一緒になってやってんのかッ」

「へッ。みな行くもんで、わしもちょいと回向院、行ってんのです」

「エエ？　協会の予算もわからんとって、なんてこというんだ。お前エらのために、わしらも一所懸命やってんだ。お前エら、親方を疑ってんのかッ！」

「いえ、そんなことは、ありゃしません」

頭ごなしに叱鳴りつけられ、おさえつけるように納得させられていた。だれも反論するだけの証拠も持っていない。回向院本堂での力士会決議はそれぞれの部屋に帰れば、一斉に空文に帰していたのだった。

しかし力士会長東富士には、その親方がいない。すべてが土台から白紙還元になり、団結が崩れ去っているのも知らない。

同僚の副会長、あるいは幹事を引連れ、協会最高幹部に直々面談すると、堂々と力士会一同の決議事項を伝えるのだった。

いうべきことをいって、どこが不思議という姿勢である。ところが、そのモノをいう力士がそもそもからいけなかった。協会側の取締は、かつては、「キン坊。ゼニか、貸さんでもやるわい、持ってけ」と居候東富士を可愛いがった身である。自然腹が立ってくる。

「じゃ、この帳簿、みてみい」

「いや、これじゃねえ。親方、もうひとつの、裏帳簿……」

「なにイッ、この小僧が！　裏だとッ!!」

「親方。わしは、小僧じゃない。力士会みんなの決議を代表して、伝えているだけだあ」

「いやあ、そんなこたあねえ。暴力団だ」

東富士は自分が孤立無援になっているのを知らなかった。

そのたびに、協会からますます睨まれ、憎まれ役になっていたのだった。

それから六年たった二十九年秋場所（九月）。

ついに大相撲の夜明けがきた。

蔵前に完成なった新国技館こけら落しが、秋場所初日を明日に控え、華やかに開催されたのである。

すでに旧時代の代表、照国、羽黒山の両横綱は前年相次いで引退し、それぞれ年寄荒磯（現伊勢ケ浜）、年寄立浪を襲名していた。かわって、千代の山（第四十一代）、鏡里（第四十二代）、吉葉山（第四十三代）が横綱に顔を並べた。みな三十四歳東富士の後輩ばかりである。

大関にはすでに優勝三回の記録をもつ栃錦、三根山、関脇には巨漢大内山、若ノ花、松登、そして前頭筆頭に高砂一門次代の看板朝潮太郎――新時代のスターたちが、ぞくぞく名乗りをあげてきていた。

「あの野郎、いいかげんにやめりゃいいのに。……そういわれたかアねえなあ。男は、引際が肝心だあ」

横綱六年、優勝通算六回の東富士はただそのことばかりを考えていた。

この秋場所、大関栃錦がもし夏につぐ四回目の優勝をなし遂げれば横綱昇進は必至だった。しかもその暁には、開闢(かいびゃく)以来空前の五横綱という番付になるのだ。

「年寄の空株、どっかねえかあ！」

高砂の孤児、そして協会の孤児、東富士は一人必死になって、このときはじめて年寄株捜しに駆けずりまわったのだ。

引退しようにも、東富士には年寄株がない。

救いの手を差しだす者は、協会内にだれ一人いなかった。

横綱まで勤めた東富士が引退し年寄になると、困る人たちがいたのだ。年寄東富士がすぐ協会理事（十五名）の要職につくことは、だれの目にも明らかだった。高砂一門の面子(めんつ)からいっても、当然のコースだった。

しかしそれでは困る人たちが、実は他ならぬその高砂一門にいた。現に自ら理事を勤める年寄衆だった。はるか後輩の東富士が、年寄になるや、こんどは自分が理事の座から引摺りおろされ

る恐れがあったのだ。

必死になって、前田山の耳もとに、あらぬことまで囁き込んだ。

――大将、力士会長でひどい人気取りをやった東富士は、選挙で理事の次に、取締まで狙ってるかもしれませんぜ。そうなりゃ、大将が困る。

東富士追い出し工作だった。陰険なお家騒動だった。

東富士は藁にも縋る思いで、双見山の持っていた年寄株・錦戸を買い求めた。

年寄錦戸――。

元立浪部屋関取、前頭筆頭双見山。二十一年十一月引退、年寄錦戸を襲名したが、その前に先代立浪親方の二番目の娘を嫁にもらうにあたって、結婚の引出物として年寄名跡「錦戸」を親の立浪師匠から贈られていたのだった。その後キャバレー経営などに手をだし、立浪の娘を離縁、そのときすでに年寄錦戸株は証文までそえて借金の担保に立浪部屋に返上していた。本来、もぬけの殻の年寄錦戸――。

しかし、東富士はそんな立浪のお家の事情は知らなかった。大金を出して架空の錦戸株を双見山から手にしたのだった。

一方、「満員御礼」の垂れ幕がかかるこけら落しの秋場所、蔵前国技館――。

割れるような大歓声が巻き起こっていた。

横綱鏡里、関脇若ノ花を破り十四日目で四回目の優勝、夏に次ぐ連続優勝を決めた大関栃錦は

千秋楽の土俵も横綱吉葉山を破って、第四十四代新横綱昇進を決めていたのである。

相撲の新しい殿堂蔵前国技館、そのこけら落しの記念の秋場所に花道へと登場した小兵栃錦――。満天下の大歓声は、新時代にふさわしいスターを迎え沸きに沸いていた。

そんな「満員御礼」の蔵前国技館のなかから、十四日目、十月二日ついに引退声明をだした東富士は一人悄然と出てきたのだった。

年寄錦戸を名乗っていた。

新国技館の華やかなこけら落しとともに、大空襲のなか焼夷弾の雨で廃墟と化した往年の大鉄傘がいまや過去の遺物となりはて時代に取り残される邪魔物のように、夜明け前ドン底時代の大相撲を支えた大アンコは照明の照り映える花道から無惨に蹴落とされていた。

「キンちゃーん」

そんな声援はどこからも、もう飛ばなかった。

年寄錦戸の命は、その年いっぱいも続かなかった。

はたして立浪部屋から表面あくまでも丁重な語調のなかに、底冷えするような冷たさを湛えて声がかかったのである。

「年寄錦戸名跡、それは立浪一門株ですから、東関がお買いになった額で買い戻したい。ひとつ戻してくれまいか」

「おお、そうか、わかった」

とは、そのとき、東富士はいえなかった。しかし、はっきりそういうべきであった。いって元

双見山にかけられた見事なペテンを説明し、錦戸にかわる別の名跡を求めるべきであった。

立浪一門を相手にした東富士は、高砂一門総帥前田山に応援を求めたのである。

途端に前田山高砂は喜色満面の体だった。

「なんだ、こっちへ入った株じゃねえか。こっちへ入った株を敵に回すことねえじゃねえか。いやだよ。返さねえ、俺が買う」

いかにも前田山らしくさっさと錦戸株を東富士から買いあげてしまったのである。現在、年寄錦戸は、元弓取力士の高砂部屋大田山（三十四年引退、最高位前頭二十枚目）が襲名している。このときから高砂一門勢力株になったのだ。

東富士は立場がなかった。立浪一門衆にはあわせる顔もなかった。

もはや断崖絶壁に立たされていた。

横綱から身を退いて舞台裏の一年寄になるやいなや、どっと一身に降りそそいできた年寄世界の悪辣さ、どす黒い権力欲の破廉恥さ、じめじめした因習――キン坊は体中の肉を掻毟りたいほど腹立たしかった。

それでもまだ、この世界にしがみついて、土俵際頑張ろうと思えばできた。しかし、「もうやめようぜ」という江戸ッ子気質がここでひょいと顔をだしてきたのである。

そのとき、すっと救いの手を出してくれた人がいた。東富士は、もうなにもかも身柄まで一任してしまった。

新田組社長新田新作氏だった。

明治座社長、そして日本プロ・レスリング協会会長である。
明治座重役として同社の株五万株が譲られ、同時に新年早々プロレス修業にハワイへ行くことが発表された。
「相撲にはもう未練はないよ」
東富士は吐き捨てるように、同じ一言だけを繰り返していた。
「東京育ちは、どうも相撲にゃ向かねえ」といった兄弟子は、やはり正しかったのかもしれない。
断髪式も引退相撲もやる暇もなく、その年十二月十五日大相撲を廃業していた。

8

――殴る、蹴る、踏んづける、割れた額から鮮血が飛び散り、それを見て興奮して喜ぶ観衆。
その殺伐としたプロレスのリング上に、よもや自分が人気レスラーとして登場しようとは、東富士自身思ってもみなかったに違いない。
一瞬の駆け引き、一瞬の技、巨体を押しあげての怒濤の寄り身――その力の爆発と緊張のぶつかり合い、絡み合いに勝負の美しさがきらめく土俵上と違い、そこにあるのはただ観客を興奮させ喜ばすためだけのピエロの滅茶滅茶な泥仕合、格闘、そして血だった。
しかし、もうあとには退けない。
「男一匹、いったん覚悟した以上、どこまで行けるか、とことんまで自分の力をためしてみた

い」

そう啖呵を切ってしまっていた。

お世話になった「親父さん」新田親分の顔だけは潰せなかった。ただ、それだけ。

三十年三月末、ときのプロレス界王者力道山（二十六年一月、関脇で大相撲廃業）にともなわれ、日本をあとにした。

ハワイに着いてみると、もうリングが待っている。

贅肉でブヨブヨした相撲型のアンコを、筋肉の盛上がるプロレス型に改造する必要があった。しかもその巨体のなかに、どうにも厄介な邪魔物があった。

前に大きく突きでた太鼓腹である。

俯くと下が見えず、仰むけに転がされるとまるでひっくり返った海亀同然、手足をバタバタするだけで起上がるのに手間がかかる。

常識の物差では計れぬ激烈なトレーニングがはじまった。

まず食事制限。いきなり米、パン一切厳禁である。

朝九時、練習の前にミルク、チーズと野菜、それに肉か魚が少し。昼一時半にジュース一杯。夜は缶ビール二本。

たったそれだけである。食事制限とはいうものの、餓死しない程度の最低ギリギリの一口、二口でしかなかった。

トレーニングはワイキキの砂浜のうえをひたすらマラソン。へとへとに疲れ切ったところで、

滑り台のような板に仰むけに寝るや両足首をベルトに引掛け、両手を頭のうしろに組んでぐらッと体を起上がらせる。

自らの巨体がそのまま重量になってのしかかり、太鼓腹に邪魔され、ひどい苦痛だ。やっと起上がったかと思うと、「もう一回」「もう一回」が、何回となく続くのだ。

それが終ると、こんどは車輪のような鉄棒を両手で支えて、しゃがんだり立ったりが三百回。おまけに、一日に何回となく腹を力まかせに押さえられる。

飢えと死ぬような渇き。

そのうえで強制労働にも似た単調なロードワーク。

「痩せる手術はないのかッ」

苦しさに耐えかねて、そんな悲鳴が口から漏れてでた。

なんでこれほどの苦痛に自分だけがあわなければいけない！　——と、ふと漏れてくるそんな考えを追い払うように、また巨体を猛トレーニングに追いやるのだった。

なんと二ヵ月目には、一六〇キロの体が一二五キロに痩せていた。三五キロ、小さな大人一人分がごっそり二ヵ月でなくなった計算である。

これほどまでに減量の苦しさに苦しみ抜いたプロレス稼業も、驚いたことには家庭へは一銭の送金もできない。まわす金がなかった。

王者力道山の独裁下、若い選手たちはビタ一文リングマネーを支払われていなかったのだ。やむなく、東富士が全部自分の金を立替えてやっていたのだった。

三十一年十月、新田新作氏が五十一歳で急逝した。

世の中を知らない大相撲育ちの大きな可愛い坊や、東富士の前にポッカリあいた穴だった。

それにちょん髷がなくなるや、ガラリと態度を一変させた力道山の横暴ぶりにも、東富士の神経は耐えられなかった。身震いするほど厭な格闘、血で染まるリング上にもゾッとした。

翌三十二年六月、きっぱりと人気絶頂のプロレスから足を洗っていた。

観衆の前から姿を消して、完全な無収入浪人の身になりはてていた。大相撲、プロレスと長い年月、外の世界、外の人気ばかりに我を忘れていた間に、女将さんがアパートを一軒建ててくれていた。自宅はその一階片隅。食うだけのアパート収入はあった。

それでも、大衆料亭、ゴルフ練習場——さまざまに手を変え品を変えてやってきた。最後の勝負と、流行のサラリーマン金融会社に手をだした。

家に帰ると、子供のいない夫婦だけの家庭。まるで新婚のような気分がする。

「富美ちゃーん」

「なーに、キンちゃーん」

二人の呼びあいを、そばで聞いた人は笑いだした。

「……俺な、もしかすると、癌じゃねえかな」

そう気がついたときはもう遅かった。癌は間違いなく肝臓、胃、腸——内臓ほとんどに蔓延していたのだ。父金松さんは食道癌、爆死した母も実は子宮癌、母の弟妹、それに父の弟、みな癌

で死んでいた。癌が出なくてむしろ不思議なほどの血統だった。

それだけに死ぬというより先に癌の恐怖に駆られていた。やがて便さえ出れば回復する、そう信じきっていた。

そんなある日、ある男が入院見舞いにやって来た。

病室に来るなり、大きな声で、

「やあ、キンちゃーん、癌だってなあ」

元東富士はその一言で青ざめてがっくりベッドに項垂れていた。最後まで哀れに不幸な男だった。

昭和四十八年七月三十一日死去。五十一歳だった。

あとがき

この文庫本の原本である「相撲畸人列伝」は、昭和四十九年十一月六日、講談社から刊行された。著作第一冊、まさしく記念碑であった。この本が孤独な作家活動をつづける私を支えてくれた。そして十年――新春に、文庫本になる。恐る恐る読んでみた。

恥しい。

処女作の書きだしなど「押し相撲」を説明しようとのたうちまわり、結局何のことかさっぱり判らない。作者が判っていない。

荒っぽい修辞、おそまつな形容詞の羅列、語彙不足の露呈――こんな稚拙な文章力しかない身で、よくもまあ小説に挑戦したものだ。

三十三歳から夢中になって書いた。いま私は、「押し相撲」を一行で書ける。しかしそうすれば、けなげな「過去」を自ら否定する。記念碑を冒瀆することだ。

文章は、我慢ならぬ個所のみ手を入れた。

この数年の間、大相撲史への造詣が深い武者成一、小沼盛一のお二人を知った。武者さんは、この作品集にも出てくる大日本相撲協会初代理事長、広瀬正徳陸軍主計中将のお孫さん。小沼さんは相撲史跡研究家。原本にある誤謬を剔抉していただき、訂正した。

ただ事実優先主義で直すと、小説の楽しみ（構成）が崩れてしまう個所が「豪傑」にある。小説

とは、作者のそんな逃げ場の意だとすれば、卑怯だと悩んだ。しかし「かまわん。わしらしい」と豪傑笑いが聞えるような気がし、結局そのままにした。

「畸人」という称は、「彼」を小説主人公として捉えた「私」そのものであった。異端児、叛逆児に近いが、意味はもっと深い。ところが単に「変人奇人」と誤解される恐れがある。「列伝」群像に申し訳ない。よって改題した。

表紙の田代光（現・田代素魁）画伯の原画は、額入りでわが家宝である。このすばらしい装幀は「相撲畸人列伝」のみではもったいない。そのまま使わせていただいた。

三保ケ関親方（元大関増位山―父）の声が甦る。

「白紙か。そやからええ。わしらが埋めたるわい」

鬼籍入りした多くの方々をはじめ、二子山親方（処女作につづく第二作目「腹がいっぱい」で取材）、春日野親方（現理事長）、武蔵川相談役（現相撲博物館館長市川国一氏）など名前をあげればキリがない。実に多くの方々が私を助け守りたててくれていた。心から御礼を述べます。

「朝日」が生んだ稀有な相撲記者河合政。相撲オンチの私を旧きよきこの世界へと案内してくれた恩人は、昭和五十六年八月二十七日、天寿八十歳で逝去された。天なる河合さんに、最後の行を書き終え、黙禱する。

昭和五十八年十一月

石井代蔵

解説

阿部　宏

はなから私事で恐縮――

相撲放送を担当することが決って私はあわてた。相撲についてほとんどズブの素人だったからである。あわをくって相撲の手引書を買い、にわか勉強をはじめた。昭和四十一年秋場所、後に大関となった魁傑の初土俵の場所だった。

尾崎士郎の「相撲を見る眼」、舟橋聖一の「相撲記」なども古書店に頼んでとり寄せた。相撲については何でも知りたかった。

それからしばらくして、出張のつれづれに求めた雑誌で私は「押しの一手」に出会い、一読、一驚した。この相撲小説は話の運びがスピーディで、新聞の社会面ふうのエピソードに富み、元大関若羽黒の奇矯にみちた生涯が活写されていた。とにかくおもしろい。

作者は石井代蔵。初めて見た名前だ。

よほどの相撲通か、事情に通じたライターか、作者の素姓について知ることもないまま、以後、私は新聞や電車の吊り広告で代蔵の新作を知ると本屋に駆けつける熱心な愛読者となっていた。

昭和五十一年夏場所、国技館の記者クラブで「こちらが石井代蔵さんです」と同僚が紹介して

くれた。私が代蔵ファンであることを知っていた同僚が、それなら……と面晤の機を作ってくれたのである。

挨拶をしようとして驚いた。

「なんだい、君かい」

名刺をかわすまでもない。

早稲田大学での四年間、同じ速記研究会に属し駄弁り仲間だった石井三郎が石井代蔵氏だったのである。卒業以来十七年、互いに消息がつかめぬまま、知らないところで二人とも相撲につながる仕事をしていたとは——

偶然ッておもしろいものだなア、と肩を叩き合いその日は別れた。

その年の九州場所、福岡のガード下の飲み屋でじっくり飲んだ。六人で一杯になるカウンターだけ、森ノ里直伝という相撲甚句をきかせてくれるおばちゃんの店。

ふだんでもしゃべり好きの石井は、酒が入ると一段と饒舌になる。

「学生時代からもの書きに憧れていた。書きたい気持いっぱいだった。だけどテーマがしぼり切れなかった」

大学を出てサンケイの記者をしていた石井が若羽黒のピストル不法所持事件で取材を命じられたのが相撲にふれるきっかけとなった。実刑判決がおりた若羽黒を訪ねたのが四十五年五月、時に若羽黒は角界を逐われるように廃業し東京田端でおにぎり屋を開いていた。石井が名刺を出し

た途端、「この野郎ッ、帰れ！」と若羽黒は一喝し、塩をつかんで投げつけ、石井はえり首をつかまれる格好で店からつまみ出されたという。

あくる日、こんどは横浜の実家に行き裏の台所からのぞくと、いる、いる。若羽黒、いるにはいたが、挨拶がわりにコカ・コーラのびんがバラバラ飛んできたそうだ。

相撲や力士にそれまでふれることがなかった石井にとって、これは強烈な印象を与えた体験だった。

「きまった。これだ。若羽黒だ」

以後、若羽黒について調べた。データが集まった。小説の主人公として若羽黒のイメージがどんどんふくらんできた。書きたい。

しかし、会社の仕事がいそがしくて書く時間がない。そして四年。夕刊に若羽黒の死亡記事

「若のやつ……」とつぶやいて、石井は泣いた。「お前を書いてやるぞ」

それからは、泣きながら、本当に原稿用紙に涙の粒を幾つも落しながら半年かかって書きあげたのが、処女作「押しの一手」だったという。

さて——

「押しの一手」は栃若時代が柏鵬時代に変ろうという時期、押し相撲一本で土俵を席捲し一度は幕内最高優勝までした大関若羽黒の異端、無頼の生涯を描いた作品である。

性格、行動、相撲ぶりから容貌、体格に至るまですべてに若羽黒とは対照的な同じ立浪部屋の安念山を対置させ、片や悪太郎、片や優等生のライバルが、番付の上位をめぐってせめぎ合う様子を若羽黒のサイドに立って書いている。二人の熾烈な争いは、安念山が師匠羽黒山の名を継ぎのち相撲協会理事立浪となり、一方、逐われるように角界を去った若羽黒が落魄の生涯を人に知られること少なく岡山の地で果てることで結着した。

「押しの一手」は、光と影がめまぐるしく交錯する土俵人生の哀歓を描いた佳品として世評も高く、小説現代新人賞候補作となった。

華やかにデビューしたあと、相撲をテーマに石井の筆が進む。

相撲界の奇人、変人、風雲児らを題材に綿密な資料をもとに書きこまれた。

「巨人」は出羽ケ嶽の一代記。

角界に〝体負け〟ということばがある。体の大きなものには敵わないということだ。体が大きければ相手に押しこまれない。押されないということだけで初手から優位に立てる。自分より大きな者に威圧感を覚える力士心理は格別なものであるらしい。

たとえば、元大関の旭国。小柄だが名人ともいえる技を駆使した人だ。この旭国が立浪部屋に入門すべく訪ねた時、おいでおいでをした人の手だけが見えて顔は鴨居にかくれて見えず、なんという大男、ここはバケモノ屋敷かと肝をつぶしたという話がある。

この大男が元十両能登ノ山。一九四センチもあった。初代若乃花の二子山が新弟子検査の時に、

この男の後にならび能登ノ山ははかりにのることもなく一目で合格、若乃花は一七四センチ、めしをつめこんではかって七五・八キロで検査基準ギリギリで検査を通った。

「こんなデカいのと相撲をとるなんてとてもじゃない」

巨体に気圧されて不安に駆られたと、後に鬼の異名をとった若乃花にして述懐する。

出羽ケ嶽は二〇四センチ、二〇四キロ。相撲史上、誰とぶつけようと体負けしない巨大漢だ。

「ボク、お相撲さんは嫌だよ、絶対嫌だ」と駄々をこねていた子どもが、なだめすかされての相撲界入り。並外れた体軀が話題を呼び、文ちゃんの愛称で昭和初期、国技館の人気者となった。最高位、関脇。さば折りの荒技で何人かの力士生命を絶たせたりもしたが、膝のけががもとで番付は次第に降下する。

人気ゆえに休みたい時にも休ませてもらえず、やめたい時もやめさせてもらえず、商業政策の犠牲となって、三段目に落ちてなお土俵に上らざるを得なかった栄光と屈辱の記録が「巨人」である。

どうしてこんな体に生れてきたんだろう、出羽ケ嶽の苦渋にみちたつぶやきがきこえてくる作品だ。

「馬じゃあるめえし」

茅葺屋根職人となるべきはずの青年が、体が大きいばっかりに誘われての角界入り、後の男女ノ川である。横綱、最高位まで昇りつめたが、けたはずれの奇行が多かった。

この当時、郵便貯金通帳を持っているというだけで錦華山という力士は変り者扱いされたとは玉の海梅吉氏の話だが、この横綱男女ノ川は入る金、入る金を銀行預金にまわして利息をたのしむ藤介（トウスケ）（各尚）ぶり。

角界を去ってからも私立探偵になったり、選挙に打って出たり何かと話題が多かった。世話になっていた寄宿先の「村山砦」で不遇な後半生の幕を閉じたが、火葬場のカマにはこの巨漢の棺がおさまり切れず、止むなく棺をはがして遺体をはこび入れるくだりはかなしい。

「馬じゃあるめえし」という題名は、この奇人が常々口にしたセリフからとっている。

「豪傑」は、奇行蛮行が多く土俵では、羽黒山を張りまくり、あの双葉山までも張り手一発でぶっ飛ばし左四つに持ちこんで勝った前田山を描く。喧嘩ッ早いこと無類。相撲もさしずめ喧嘩相撲で、張り手、突張り、左四つで吊り寄り、上手投げ、足技と、精悍な取り口が多かった。

豪快極りないエピソードがふんだんに盛りこまれたこの作品について、荒正人氏は「相撲をほとんど見たこともない者も興味をかきたてられる。作者の相撲への愛情が全篇を通じて素朴な形で生きている」と評価した。

前田山、のちに協会理事、高砂。

ハワイの青年を入門させ、関脇にまで仕立てあげた。高見山である。

高見山はまた、ハワイの怪童に相撲界入りをさせた。いま注目の小錦である。

してみると、豪傑の吊り上った眼は喧嘩相手を睨みすえたばかりでなく、土俵の国際化という

遠い先まで見通していたことになる。

「孤児」では東富士。

相撲の申し子そのものといった体を持ちながら、気持は勝負師としては生れついての失格者だった。因習の金縛りにあって、自己主張ができぬまませぬまま、怒濤の寄り身さながらに、人生という土俵を駆け抜けた悲劇を描いている。

以上四篇、いずれも石井代蔵の初期の作品だ。昭和初期の相撲界については映像資料は量も限定されるから、多くの文献や関係者の間をきき歩いて資料あつめをしたと思われる。世にも稀な男だけの生活集団が角界であり、異端、奇矯の徒の存在は増幅されて外に洩れやすい。それを描いて石井代蔵は成功した。

ところで近年、相撲界のありようも力士気質も少しずつ変って来た。総じて均質化、等質化が進んで異端が生れにくい土壌になっている。みんなお利口になったのだ。

こうした状況の中で相撲小説を書き続けるとして、どの角度から、相撲に、力士に切りこんでいくのか。

石井代蔵、四十七歳、書き盛り。これからどう書く、何を書く。

注目したい。

（ＮＨＫアナウンサー）

相撲風雲児列伝

石井代蔵

定価420円

い
32
1

組織からはみでたヤツ——風雲児には常に異端のイメージがまつわりつく。当の本人が意識しようとしまいと、それは彼らの身体に貼りついて離れない宿命なのだ。相撲界の風雲児は巨体を震わせて単純明快な勝負の世界に全てを賭ける。そこはごまかしようもない裸の闘争の場、喜びもデッカければ、涙までも大粒だ。

ISBN4-06-183148-8 C0193 ¥420E (0)